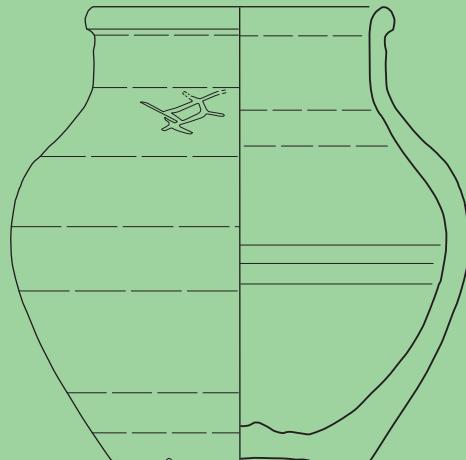
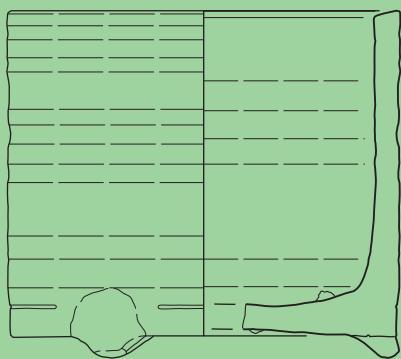
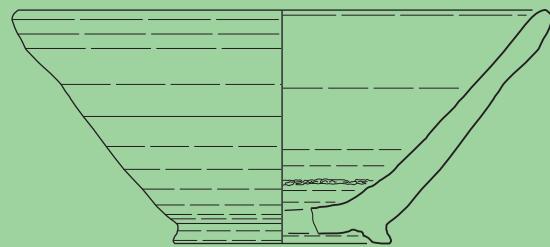
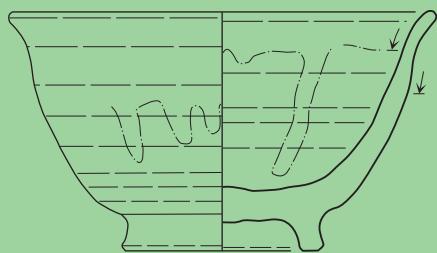


首里城跡

— 淑順門東地区発掘調査報告書 —



平成26(2014)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

首里城跡

－淑順門東地区発掘調査報告書－

平成26（2014）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、沖縄県立埋蔵文化財センターが国営沖縄記念公園事務所より委託を受けて平成23年度に実施した、首里城跡淑順門東地区の発掘調査の成果をまとめたものです。

本調査においては、15世紀に構築され戦前まで存在していた内郭城壁と関連する石積、近世に存在した外郭の東西を区切る石積などを検出しました。遺物としては、近年資料が増加し始めている17世紀前半に生産された沖縄産初期無釉陶器、類例が少ない九州南部で造られた可能性がある土師皿、るつぼ・鉄滓などの金属を生産加工した可能性がある資料などが出土しました。

この成果を元に、首里城はもちろん沖縄県の歴史・文化を理解する資料として活用されるとともに、地域における文化財の保存活用のために役立てば幸いです。

最後に、様々な御指導・御助言・御協力を戴きました諸機関及び関係各位に心から感謝申し上げます。

平成26（2014）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 下地 英輝

例　言

1. 本報告書は、沖縄県那覇市首里当蔵町に所在する「史跡　首里城跡」における国営沖縄記念公園首里城地区の整備に際して、淑順門東地区の遺構確認発掘調査及び資料整理の成果をまとめたものである。
2. 本発掘調査及び資料整理業務は、内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所が沖縄県と委託契約を交わし、沖縄県教育委員会の指導のもと、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、発掘作業を平成23年10月31日より平成24年3月27日まで実施し、資料整理作業・発掘調査報告作成を平成25年度に実施した。
4. 本書に掲載した遺構図の座標軸は国土座標軸（第XVI座標系）を使用し、その座標値は日本測地系である。ちなみに、報告書抄録の緯度経度については世界測地系で算出している。
5. 現地調査及び資料整理に際して、下記の諸氏・機関に協力・指導・助言を戴いた（敬称略、団体五十音順）。
上原 靜（沖縄国際大学）
島弘・内間靖・仲宗根啓・樋口麻子・當銘由嗣・玉城安明・知念政樹（那覇市教育委員会）
6. 本書の編集は、当センター職員の協力を得て、瀬戸哲也が行った。執筆は、下記以外は瀬戸が行った。
大堀皓平…第3章第4節 本土産陶磁器・その他の製品
宮城淳一…第3章第4節 中国産陶磁器・ベトナム産陶磁器
新垣有一郎…第3章第4節 瓦・埴
7. 土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」2009年度版を使用している。土質は肉眼で粒径を観察し、地質学によるウェント・ワース法（文化庁2010）で表現している。
8. 本書に掲載した写真は、発掘調査状況を瀬戸哲也、遺物を矢船章浩が撮影した。
9. 発掘調査で得られた遺物及び実測図・写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目 次

序	
例言	
第1章 経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過	2
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3節 調査区の概況	8
第3章 調査の方法と成果	13
第1節 調査の方法	13
第2節 層序	14
第3節 遺構	20
1. 旧琉球大学石垣	20
2. 内郭城壁(石積1～4)	20
3. 区画石積(石積7～10、石敷1、集石2)	25
4. その他の石積・集石(石積5・6・11、集石1)	29
5. 焼土面(焼土面1・2)	30
第4節 遺物	32
1. 遺物の概要・分類	32
①中国産陶磁器	32
②ベトナム産陶磁器	38
③タイ産陶磁器	38
④高麗青磁	38
⑤産地不明陶器	38
⑥本土産陶磁器	40
⑦沖縄産陶器・土器	42
⑧金属製品・鍛冶関連製品	47
⑨銭貨	48
⑩その他の製品	49
2. 南区出土遺物	52
3. 北区出土遺物	67
①1層出土遺物	67
②2 ^丁 ・2層出土遺物	67
③3 ^丁 ・3層出土遺物	70
④4～6層出土遺物	70
4. 瓦	84
5. 塚	96
6. 貝類遺体	102
7. 脊椎動物遺体	106
第4章 総括	113
参考・引用文献	114
図版	119
報告書抄録	151

図 目 次

第1図	沖縄本島の位置図	5	第22図	南区 1層出土遺物(5)	57
第2図	首里城跡の位置及び周辺の遺跡	7	第23図	南区 1層出土遺物(6)	58
第3図	横内家資料平面図	9	第24図	南区 1層出土遺物(7)	59
第4図	平成23年度調査区域図	9	第25図	南区 1層出土遺物(8)	60
第5図	首里古地図	11	第26図	南区 1層出土遺物(9)	61
第6図	「旧首里城図」	11	第27図	南区 1層出土遺物(10)	62
第7図	「旧琉球大学校舎配置図」	12	第28図	南区 1層出土遺物(11)	63
第8図	首里城公園現状図	12	第29図	南区 1層出土遺物(12)	64
第9図	淑順門東地区グリッド設定図	14	第30図	南区 1層出土遺物(13)	65
第10図	淑順門東地区層序対応図	17	第31図	北区 1層出土遺物(1)	66
第11図	淑順門東地区全体平面図	19	第32図	北区 1層出土遺物(2)	67
第12図	旧琉球大学石垣位置図	21	第33図	北区 2層出土遺物	68
第13図	南区内郭城壁平面図	22	第34図	北区 3層出土遺物(1)	69
第14図	南区内郭城壁立面・断面図	23	第35図	北区 3層出土遺物(2)	70
第15図	北区 区画石積(石積7~10) 平面・断面・立面図	27	第36図	北区 4~6層出土遺物	71
第16図	石積5・6平面・立面図	31	第37図	瓦(1)	90
第17図	羅宇煙管の分類	51	第38図	瓦(2)	91
第18図	南区 1層出土遺物(1)	53	第39図	瓦(3)	92
第19図	南区 1層出土遺物(2)	54	第40図	瓦(4)	93
第20図	南区 1層出土遺物(3)	55	第41図	埴(1)	98
第21図	南区 1層出土遺物(4)	56	第42図	埴(2)	99
			第43図	淑順門東地区周辺遺構平面合成図	115

写 真 目 次

写真1	重機掘削状況	3	写真19	平成21年度旧琉球大学石垣検出状況	21
写真2	磁気探査状況	3	写真20	旧琉球大学石垣断ち割り状況	21
写真3	人力掘削状況	3	写真21	南区内郭城壁検出状況	24
写真4	写真測量状況	3	写真22	南区東側遺構検出状況	24
写真5	平成16年度調査淑順門地区	10	写真23	石積2	24
写真6	平成21年度調査御内原北地区	10	写真24	石積3(左)、石積4(右)	24
写真7	平成11年度調査御内原北地区	10	写真25	石積4	24
写真8	調査前遠景(北より)	13	写真26	北区遺構検出状況	25
写真9	調査後全景	13	写真27	集石2検出状況	26
写真10	トレンチ1北側2層木材出土状況	15	写真28	平成16年度調査石積み20 (本調査石積9)	26
写真11	トレンチ1南側3~5層堆積状況	15	写真29	平成16年度調査石積み19・20 (本調査石積9・10)	26
写真12	トレンチ1南端堆積状況	18	写真30	石積10	29
写真13	G E 3南北畦断面	18	写真31	石積7(奥)、石積8(手前)	29
写真14	南区西側遺構状況	19	写真32	石積6	30
写真15	北区遺構検出状況	19	写真33	石積11	30
写真16	南区東側遺構検出状況	19	写真34	貝類遺体	105
写真17	南区調査前状況	21			
写真18	旧琉球大学石垣検出状況	21			

写真35	脊椎動物遺体 1	110
写真36	脊椎動物遺体 2	111

写真37	脊椎動物遺体 3	112
------	----------	-----

表 目 次

第1表	トレンチ 1・2 断面図土色一覧	26
第2表	中国産青磁集計表	33
第3表	中国産白磁集計表	34
第4表	中国産青花集計表	36
第5表	中国産褐釉陶器集計表	37
第6表	中国産その他の陶磁器集計表	39
第7表	産地不明陶磁器集計表	39
第8表	タイ・ベトナム・ミャンマー産 陶磁器集計表	39
第9表	高麗青磁集計表	39
第10表	本土産陶磁器集計表	41
第11表	本土産近代陶磁器集計表	41
第12表	沖縄産施釉陶器集計表	43
第13表	沖縄産無釉陶器集計表	44
第14表	土器集計表	46
第15表	陶質土器集計表	46
第16表	瓦質土器集計表	46
第17表	金属製品集計表	48
第18表	るっぽ集計表	48
第19表	銭貨集計表	49
第20表	骨製品集計表	50
第21表	貝製品集計表	50
第22表	硯・碁石・石球集計表	50
第23表	煙管集計表	52
第24表	ボタン集計表	52
第25表	円盤状製品集計表	52
第26表	ガラス玉集計表	52
第27表	陶磁器・各種製品観察表(1)	72
第28表	陶磁器・各種製品観察表(2)	73
第29表	陶磁器・各種製品観察表(3)	74
第30表	陶磁器・各種製品観察表(4)	75
第31表	陶磁器・各種製品観察表(5)	76
第32表	陶磁器・各種製品観察表(6)	77
第33表	陶磁器・各種製品観察表(7)	78
第34表	陶磁器・各種製品観察表(8)	79
第35表	陶磁器・各種製品観察表(9)	80
第36表	陶磁器・各種製品観察表(10)	81
第37表	陶磁器・各種製品観察表(11)	82
第38表	陶磁器・各種製品観察表(12)	83
第39表	陶磁器・各種製品観察表(13)	84
第40表	高麗系瓦集計表	84
第41表	大和系瓦集計表	84
第42表	大和系平瓦厚さ集計表	85
第43表	明朝系軒丸・軒平瓦集計表	87
第44表	明朝系瓦全体集計表	88
第45表	明朝系丸瓦集計表	88
第46表	明朝系丸瓦ヘラ記号集計表	88
第47表	明朝系丸瓦玉縁集計表	89
第48表	明朝系平瓦集計表	89
第49表	高麗系・大和系瓦観察表	94
第50表	明朝系軒丸・軒平瓦観察表	94
第51表	明朝系丸・平瓦観察表	95
第52表	埠集計表	96
第53表	埠ヘラ記号集計表	97
第54表	埠観察表	97
第55表	円盤状製品	100
第56表	ガラス玉観察表	100
第57表	淑順門東地区出土遺物総合集計表	101
第58表	出土貝類遺体種別一覧	102
第59表	貝生息地類型	102
第60表	巻貝集計表	103
第61表	二枚貝集計表	104
第62表	出土脊椎動物遺体種別一覧	106
第63表	脊椎動物遺体集計表(1)	107
第64表	脊椎動物遺体集計表(2)	108
第65表	脊椎動物遺体集計表(3)	109

図 版 目 次

図版 1	首里城跡周辺空中写真	119
図版 2	調査地周辺・遠景	120
	1. 調査地より南側	
	2. 調査地より北側	

図版 3	3. 調査地より西側	
	調査前状況	121
	1. 北より	2. 東より
	3. 旧琉球大学石垣断ち割り状況	

図版 4	調査区全景(1)	122	1. 北区全景 (南より)	
図版 5	調査区全景(2)	123	2. 石積5 (東より)	
	1. 南より 2. 北より		3. 石積5 (北より)	
図版 6	遺構(1)	124	4. 石積6 (西より)	
	1. 内郭城壁 (石積1・2) 全景 (西より)		5. 集石1 (北より)	
	2. 内郭城壁 (石積1・2) 全景 (北より)			
図版 7	遺構(2)	125	図版11 南区1層出土遺物(1)	129
	1. 内郭城壁 (石積1・2)		図版12 南区1層出土遺物(2)	130
	裏込め内 (東より)		図版13 南区1層出土遺物(3)	131
	2. 焼土面2 (東より)		図版14 南区1層出土遺物(4)	132
	3. GE3南北アゼ断面		図版15 南区1層出土遺物(5)	133
図版 8	遺構(3)	126	図版16 南区1層出土遺物(6)	134
	1. 区画石積 (石積7~10)		図版17 南区1層出土遺物(7)	135
	全景 (東より)		図版18 南区1層出土遺物(8)	136
	2. 石積7 (奥)、8 (手前)		図版19 南区1層出土遺物(9)	137
	3. 石積9 (奥) 10 (手前)		図版20 南区1層出土遺物(10)	138
	4. 区画石積北側		図版21 南区1層出土遺物(11)	139
	5. 石積7・8 (奥)、		図版22 南区1層出土遺物(12)	140
	石積9・10 (手前)		図版23 北区1層出土遺物(1)	141
図版 9	遺構(4)	127	図版24 北区1層(2)・2層出土遺物	142
	1. トレンチ1北側堆積状況 (西より)		図版25 北区3層出土遺物(1)	143
	2. トレンチ1南側E1付近堆積状況		図版26 北区3層(2)・4~6層出土遺物	144
	(西より)		図版27 瓦(1)	145
	3. トレンチ1南側F1付近東壁		図版28 瓦(2)	146
	4. トレンチ1焼土面1 (左)		図版29 塚(1)	147
	・クチャ層 (右)		図版30 塚(2)	148
図版10	遺構(5)	128	図版31 円盤状製品(1)	149
			図版32 円盤状製品(2)・ガラス玉	150



発掘調査に携わった方々

第1章 経緯と経過

第1節 調査の経緯

首里城跡内郭地区は、昭和 61（1986）年度に「国営沖縄記念公園首里城地区」として整備されることが閣議決定されたことにより、遺構確認のための発掘調査が沖縄県教育委員会（以下、県教委）により行われている。

本報告の対象となる首里城跡淑順門東地区の発掘調査も、上記の整備の一環として遺構確認を目的として実施されたもので、平成 23 年 4 月 1 日付、内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所（以下、公園事務所）所長と沖縄県知事の間で交わされた「平成 23 年度首里城地区（北城郭エリア）発掘調査及び資料整理業務」委託契約によるものである。発掘調査は、沖縄県教育庁文化財課（以下、文化財課）を主管課として事務調整及び調査指導を行い、沖縄県立埋蔵文化財センター（以下、当センター）が担当した。

なお、平成 23 年度の調査範囲は淑順門東地区以外に、銭蔵東地区、御内原東地区も含まれており、これらはまた次年度以降に調査報告を行う予定である。

首里城跡における発掘調査は、史跡範囲に該当するため、文化財保護法第 125 条第 1 項に基づく申請が必要となっている。今回の調査についても、平成 23 年 5 月 23 日付にて現状変更申請を県教委経由により文化庁長官へ提出し、県教委の指示を受けることを条件として、同年 7 月 1 日付にて許可された。

平成 23 年度の調査は、7 月 1 日より銭蔵東地区、御内原東地区の順に行い、これらと並行しながら淑順門東地区は 10 月 31 日より開始することになった。調査状況は、常時、公園事務所及び文化財課に現地説明を行い、那覇市文化財課職員にも現地確認をしていただいた。

調査後はブルーシート・土嚢・砂等で保護し埋戻しを行い、3 月 27 日で終了した。

調査終了後の出土品は、遺物収納コンテナ 20 箱（23 年度総数 168 箱）に昇り、当センターから文化財課へ発見報告を行い、文化財課は平成 24 年 4 月 2 日付にて那覇警察署へ埋蔵文化財発見通知を行い、遺失物法の手続きを経た。

第2節 調査体制

首里城跡淑順門西地区・奉神門埋甕地区の発掘調査は、当センターが県教委の指導の下に平成 23 年度に発掘作業、平成 25 年度に資料整理・報告書作成を実施した。実施体制は以下のとおりである。

平成 23 年度 発掘調査

事業主体 沖縄県教育委員会 大城浩（教育長）

事業主管 沖縄県教育庁文化財課 長堂嘉一郎（課長）、島袋洋（副参事）、盛本勲（記念物班長）、上地博（主任専門員）、田場直樹（指導主事）

調査所管 沖縄県立埋蔵文化財センター 大城慧（所長）

総務班 萩堂治邦（班長）、恩河朝子（主査）

調査班 総括…金城亀信（班長）

調査担当…瀬戸哲也（主任） 調査補助…當山奈央・宮城明恵・宮里知恵・山口こずえ（文化財調査嘱託員）

発掘作業員 浦崎京子・大嶺愛子・喜瀬彰・呉我フジ子・島仲恵子・砂辺光義・知花智子・當眞哲・比嘉洋子・安村重保・與那嶺勢津子

磁気探査委託 有限会社琉興建技コンサルタント

写真測量委託 有限会社ティガナー

機械掘削・埋戻 有限会社松竹重機

現場事務所用仮設ユニットハウスリース 株式会社南建

高所作業車リース 有限会社金功重機

平成 25 年度 資料整理・報告書作成

事業主体 沖縄県教育委員会 諸見里明（教育長）

事業主管 沖縄県教育庁文化課 新垣悦男（課長）、盛本勲（記念物班長）、山本正昭（主任専門員）

調査所管 沖縄県立埋蔵文化財センター 下地英輝（所長）、島袋洋（副参事）

総務班 新垣勝弘（班長）、西島康二（主査）

調査班 総括…金城亀信（班長）

資料整理担当…瀬戸哲也（主任専門員）、大堀皓平（主任）、宮城淳一（専門員）

資料整理補助…新垣有一郎（文化財調査嘱託員）

埋蔵文化財資料整理嘱託員 赤嶺恵子・伊藝由希・伊佐えりな・上原園子・上原美穂子・大村由美子・小渡直子・嘉数渚・久保田有美・幸地麻美・崎原美智子・後多田昌代・島袋久美子・城間千鶴子・高良三千代・玉寄智恵子・津多恵・仲里由利・野村知子・比嘉なおみ・譜久村泰子・又吉志麻子・又吉純子・宮里絵里・屋我尚子・矢船章浩・吉村綾子

印刷製本 株式会社金城印刷

第3節 調査の経過

現地調査

先述したように、淑順門東地区の調査は、銭蔵東地区と御内原東地区と並行させて行っている。本地区の現地調査は 11 月 2 日より重機掘削を開始させ、併せて 11 月 7 日より人力掘削を行った。11・12 月は雨天が多く、度々現地作業が中断したが、12 月 27 日で掘削作業を終了させた。1 月は、調査区の清掃と写真撮影を行い、3 月 26 日に実測作業を終え、3 月 27 日に遺構保護・埋戻しを完了した。以下、調査日誌抄の形で述べる。

10 月 31 日 重機による表土掘削を開始（写真 1）

11 月 7 日 重機掘削と並行し、人力による遺構面清掃を開始

11 月 14 日 重機による表土掘削が終了

11 月 15 日 グリッド設定のための測量実施

11 月 17 日 表土掘削後の不発弾等危険物確認のための磁気探査を実施し、異常がないことを確認（写真 2）

11 月 22 日 人力掘削により南区東部において内郭城壁の根石（石積 1～4）及び裏込みが検出（写真 3）

11 月 25 日 南区中央部において内郭城壁外側で集石を検出

12 月 5 日 南区西部において内郭城壁に接する石積み 5 を検出

12 月 8 日 北区において平成 16 年度の調査で確認された南北方向の石積みを検出し、南側の石積 7・8 と北側の石積 9・10 が途切れていることを確認

12 月 9 日 北区において、内郭城壁に並行してカーブを描く石積 6 を検出

12 月 19 日 北区の石積 8・10 に並行するトレント 1、石積 7・9 に並行するトレント 2 を設定

12 月 26 日 北区のトレント 1 では、15・16 世紀代の遺物包含層・造成土、南側ではクチャ層を確認

12 月 27 日 掘削作業終了

- 1月13日 調査区全体の清掃終了
- 1月18日 調査区全体の高所作業車による写真撮影
- 1月19日 調査区平面及び石積7～10立面のデジタル写真測量実施（写真4）
- 2月9日 人力による測量・実測作業開始
- 3月26日 実測作業終了、将来の検証資料としての土壌採取
- 3月27日 遺構保護・埋戻し終了させ、現場調査完了

資料整理作業

発掘作業で出土した遺物は、現地調査中の雨天時に遺物洗浄作業を行うことで終了させた。遺構図面・写真的整理については、調査終了後速やかに実施するよう努めた。

遺物・記録類の本格的な資料整理作業は、平成25年度に埋蔵文化財センターにて実施した。整理作業において、遺構の様相を考慮して、内郭城壁の裏込が確認された南区、南北方向の石積7～10に沿ってトレンチ掘削を行った北区として分けて、遺物報告を行うこととした。また、北区のトレンチ1・2では、層序ごとに遺物報告を行った。その結果、2'・2層が近世、3'・3・4層が近世でも17世紀代、5～9層が15世紀代の堆積層であることが考えられた。

整理作業を経て作成した実測図は当センターでパソコン上により作図ソフト（イラストレーター）を用いてデジタルトレース及びレイアウトを行った。その後、写真や文字原稿も含めて編集ソフト（インデザイン）を用いてDPT印刷用の編集を行い、最終的には全てPDFファイルとして作成し、印刷製本業者へ入稿した。

印刷製本業務は、当センターにおいて県内印刷業者の割り振りを行ったうえで、7社による指名競争入札を行い決定した株式会社金城印刷が担当した。



写真1 重機掘削状況



写真2 磁気探査状況



写真3 人力掘削状況



写真4 写真測量状況

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

首里城跡は、那覇市首里当蔵町3丁目1番地に位置しており、平成4（1992）年度に開園した国営沖縄記念公園事務所首里城地区として、観光客等で賑わっている。最高所は、東端の東のアザナにおいて現地表で標高136m、復元した城壁では標高141mを測る。那覇市内では、標高165.6mを測る東端1.5kmにある弁ヶ岳に次ぐ高所に位置するかつての琉球国の王城である。

この首里城の基盤は、地質区分による琉球石灰岩（30万～1万年前）であるが、その北東側の円覚寺側では島尻層群（2300万～500万年前）であるクチャ（泥岩）、南側では同層群のニービ（砂岩）となっている。この島尻層群は不透水層であるので、琉球石灰岩との境界には井泉が多く見られ、今日もこんこんと水が湧き出ている。

これまでの発掘調査では、首里城跡の東側である正殿から御内原の標高125～130mにかけて、琉球石灰岩の岩盤及びその風化土である島尻マージ（赤土）が地山として確認されている。一方、島尻層群のクチャは、今回の調査区を含む外郭北側の調査において、標高120m以下のレベルで確認されている。

首里城周辺は、往時には円覚寺等の寺院や、御細工所などの王府の関連施設、王族・士族の屋敷跡が林立し、城下町的な景観を誇っていたとされる。昭和20（1945）年の沖縄戦の戦禍により首里城を始め寺院等はほとんど消失してしまい、現在ではマンション等の高層建物も並ぶ景観となっている。それでも往時の道・区画は残されており、平成12（2000）年の世界文化遺産登録も契機となって、歴史的景観の保全にも配慮した町並み作りが求められている。

第2節 歴史的環境

首里城跡についての概況と、周辺遺跡の様相について概略する。

首里城の歴史

首里城の創建については明確に記載されている史料はないが、『中山世鑑（1650年）』などに、洪武25（1392）年に察度王が高ヨサウリ（高世層理殿）という数十丈の高楼を建てたとする記述があり、これを首里城内にあったと考える説である。一方より信頼性が高い史料としては、現存する最古の記年銘である宣徳2（1427）年に建立された石造物である「安国山樹花木樹碑」に、尚巴志王が首里城の北西側の安国山に龍潭と称する人工池を掘ったとするものである。つまり、周辺の整備がこのころ既に行われていることから、城内の建設は完成されないと推測されるのである。尚真・尚清王代（1477～1555年）には外郭の拡張などが進み、往時の首里城になったものと考えられている。

そして、明治12（1879）年の首里城明け渡しまで、琉球国の王城として栄華を誇ることになった。その後は、明治29（1896）年までは熊本鎮台沖縄分遣隊が駐屯し、首里市立女子工芸学校、沖縄県立工業徒弟学校、首里第一尋常高等小学校などの校舎として利用され、各所がそのつど改変された。その間に、中心的な建造物群は大正14（1925）年に特別保護建物に指定、昭和2（1927）年の解体修理を経て、昭和4（1929）年に正殿や主要な城門が国宝となった。

しかしながら、アジア・太平洋戦争に伴い日本軍第32軍司令部壕、師範学校の生徒による留魂壕が首里城地下に構築され、昭和20（1945）年4月の艦砲射撃、5月以降の日本軍南部撤退に伴う米軍戦線の南下により、



第1図 沖縄本島の位置図

首里周辺も壊滅した。

終戦後は、昭和 25（1950）年の琉球大学の創設により、首里城には数々の校舎が建てられることで、その状況が様変わりする。昭和 47（1972）年の日本復帰と同時に国の史跡と指定され、平成 12（2000）年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の構成遺産として世界文化遺産に登録された。また、日本復帰と同時に首里城の復元整備も進み、平成 4（1992）年に国営沖縄記念公園首里城地区として開園し、その入園者は平成 21（2009）年には1億人を突破、現在も年間約 219 万人（平成 24 年度）と、一大観光地となっている。

首里城跡の発掘調査

首里城の復元整備に伴う発掘調査が今も続けられているが、往時の首里城の遺構を確認するための調査でもあり、その創建についての情報は多くはない。

現時点で最も古い遺構としては、右掖門地区の城壁の内側で確認された岩陰墓で、屈葬人骨にグスク土器 3 様式（宮城・具志堅 2009）を伴っており、13世紀後半に遡る可能性がある（県埋文 2003b）。また、淑順門西地区の調査でも、同様の土器も共伴する 13世紀後半～14世紀初頭の包含層が確認されており、建物跡はまだ検出されていないが、創建が当該期に遡る可能性も出てきた（県埋文 2013 a）。

次に古い遺構としては、正殿第 I 期遺構として 14 世紀の包含層が確認され、大和系瓦を葺いた建物が想定されている（当真・上原 1987）。また、京の内地区の土坑 SK 03 で、グスク土器・青磁IV類、白磁C 2 群、天目などが出土しており、14世紀前半の可能性が指摘される（県埋文 2012）。

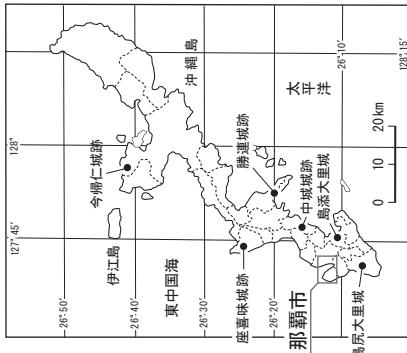
建物跡で古いものは、正殿 II 期の石積基壇上の礎石建物で、その基盤の北殿地区の造成層より 14 世紀後半～15世紀前半と考えられる（県教委 1995）。この段階には、北殿地区（県教委 1995）や御内原北地区（県埋文 2010・2013 b）、外郭に当たる歛会門・久慶門地区（県教委 1988）など首里城の中央部やや北よりの多くの地区で造成層が見られることで、全体の 7 割程度の約 3 万 m² はこの時期には造成されていたものと思われる。

15世紀中葉の遺構としては、大量の火を受けた陶磁器や金属製品、玉が出土した京の内地区 SK 01 で、倉庫跡と考えられている壁面に石積がなされた土坑で、1453 年の志魯・布里の乱による「府庫焚焼」（『中山世譜蔡温本（1723 年）』）、1459 年の「失火延焼倉庫銅錢貨物」（『明実録』）のどちらかで火災にあった資料とされる（県教委 1998）。出土した陶磁器は、青磁の壺・瓶・盤などの大型品、元様式・明代青花の盤や壺などの優品が多く見られる。二階殿地区落ち込みでも、やはり火を受けた大量の同種の陶磁器に加え、ベトナム産青花が多く出土する一方、元青花や、青磁龍文盤など 14 世紀代の陶磁器も見られる（県埋文 2005 b）。

15～16世紀には、石積・石敷など多くの遺構が存在したと思われるが、調査の制約により具体的な構造は未だ不明な点が多い。史料では尚真王が 1477 年には北側、尚清王が 1546 年には東側の外郭城壁を拡張したとされる。当該期の遺構としては、詰所地区のヒレジャコを敷き詰めた貝殻敷きがあり、庭園的な場であった可能性が想定される（県埋文 2005 a）。西のアザナ地区で無文銭の枝銭（鋳型）が、銅滓・鉄滓・羽口・溶解炉・梵鐘鋳型等と共に出土しており、様々な製品と併せて鋳造された工房跡と考えられている（上原 2009）。

17世紀前半の遺構としては、正殿裏側で女官居室があったとされる御内原北地区のシリ（方言で、ゴミ捨て場の意）遺構がある。これは、径 1 m 程度の円形で拳大から人頭大の礎を敷き詰めた丸底の石組としており、獸魚骨の大量の食糧残滓、糞石などが廃棄されている。これらと共に 17 世紀前半代と限定できる本土産・中国産陶磁器が出土しており、「初期無釉陶器」とされる湧田窯で生産されたと考えられる沖縄産陶器が共伴して見られ、沖縄での陶器生産を考えるうえでも重要な資料である（県埋文 2010）。

近代の考古資料として、スナイドル銃の小銃弾と薬莢が御内原北地区で出土しており、使用痕が残り、実射された可能性が指摘されている。熊本鎮台沖縄分遣隊が残したものと考えられている（県埋文 2013 b）。



1 首里城跡	2 崎山御廻遺跡	3 今帰仁城跡	4 玉陵南側遺跡	5 中城南側遺跡	6 天界寺跡	7 龍潭跡	8 ハンターン山	9 御細工所跡	10 中門寺跡	11 縦門大道跡	12 玉陵	13 首里日金城跡	14 首里西森遺物散布地	15 シーマ御城跡	16 誠名原遺跡	17 石田遺跡	18 石田グスク	19 銀町古臺群南地区	20 ヒマジヨ毛遺跡	21 銀町原南遺跡	22 銀町原北遺跡	23 安謝車原南遺跡	24 安謝車原南遺跡	25 安謝前原南遺跡	26 安謝前原北遺跡	27 銀町名護松原北遺跡	28 名護松原南遺跡	29 天久グスク	30 索元寺跡	31 比志願東方遺跡	32 游日古窯跡	33 ハナグスク(波上宮)	34 渡地村跡	35 術物グスク	36 三重グスク	37 屋良座森ビラ丘	38 ガシヤンビラ丘	39 ハニマーン海城遺物散布地	40 房川原城跡	41 瑞見城跡	42 根差部グスクチージ遺跡	43 長崎グスク	44 クニードー城跡(中間グスク)	45 津幕山クボ一遺跡	46 宮平ノロ殿内遺跡	47 宮平遺跡	48 清添城跡
--------	----------	---------	----------	----------	--------	-------	----------	---------	---------	----------	-------	-----------	--------------	-----------	----------	---------	----------	-------------	------------	-----------	-----------	------------	------------	------------	------------	--------------	------------	----------	---------	------------	----------	---------------	---------	----------	----------	------------	------------	-----------------	----------	---------	----------------	----------	-------------------	-------------	-------------	---------	---------

第2図 首里城跡の位置及び周辺の遺跡(濃いトーンは概ね近世の海岸線 新島2005参考)

首里城跡周辺の遺跡

首里城跡では、下之御庭地区（県埋文 2001 b）、外郭外側の南側下地区（県埋文 2004）で、縄文時代後期の面縄東洞式や嘉徳Ⅱ式などが出土しており、この丘陵一帯が当該期には生活域であったことが窺われる。また、淑順門西地区（県埋文 2013 a）でも出土したが、弥生～平安並行時代（沖縄後期）の土器も見られている。

グスク時代になると、首里城周辺でも多くの遺跡が見られるようになる。識名シーマ御嶽遺跡（那覇市 1997）や識名原遺跡（那覇市 2001）は、徳之島産カムイヤキ須恵器、長崎産石鍋、玉縁白磁碗などが出土し、11～12世紀のグスク時代初期の遺跡である。特に、前者では植栽痕とする列状ピット群が確認され、耕作地と考えられる。首里城跡に近接する崎山御嶽遺跡（那覇市 2005）や御茶屋御殿跡（県埋文 2003 c・2006 b）は13世紀後半～14世紀初頭に形成され、後者は首里城跡と共に大和系瓦が大量に出土する遺跡として著名である。

首里城跡の整備が本格化する14世紀後半には、さらに多くの遺跡が見られ、天界寺跡（那覇市 1999 b・2000 a、県埋文 2001 a・2002 a）では寺院造営前の大規模な集落跡が展開する。15世紀中葉には、天界寺跡では基壇造成、円覚寺（県埋文 2002 b）の造営などが発掘調査でも確認され、多くの寺院が造営されたようである。

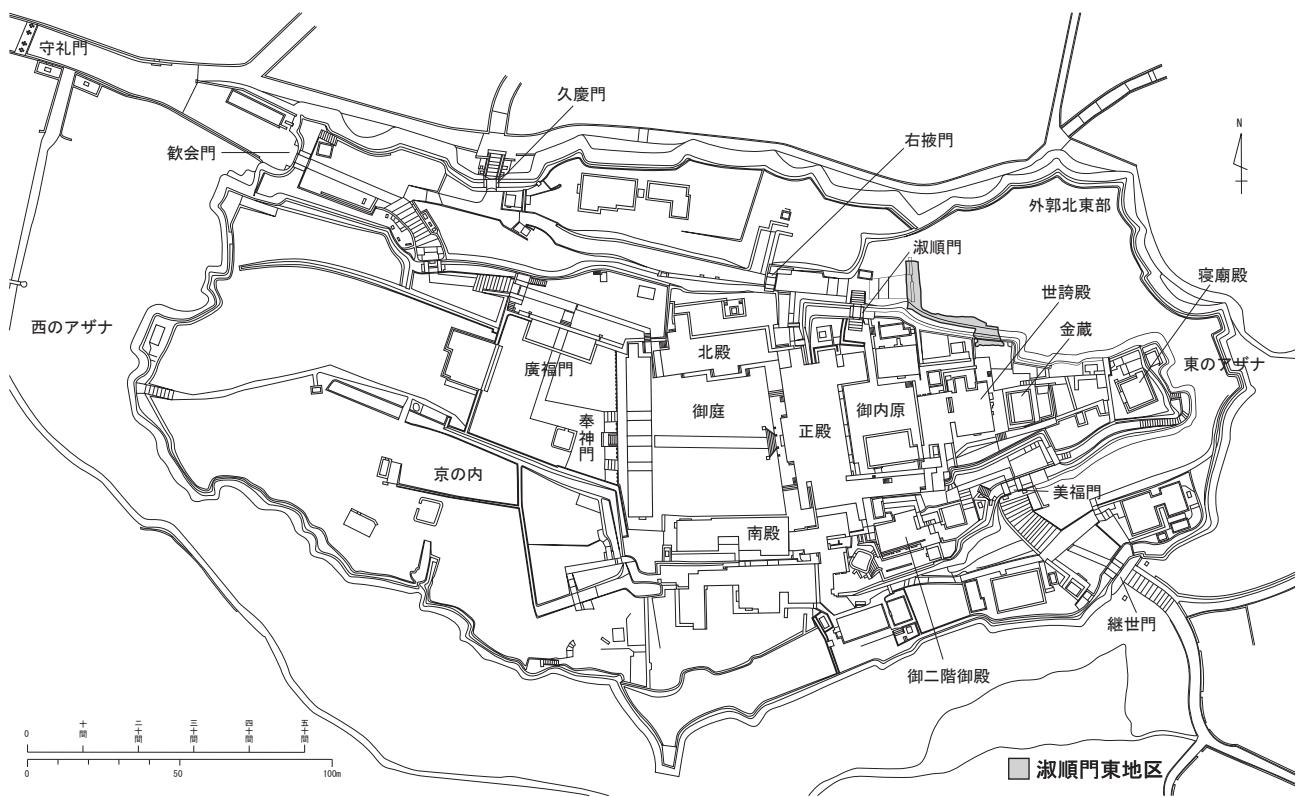
第2図は、那覇・首里城周辺のグスク時代の遺跡分布図に、1451年ごろと推定される海岸線復元ライン（新島 2005）を入れた図である。これによれば、那覇は幾つもの大小の島が浮かぶような状況となっており、『おもろさうし』などに呼称されるまさに浮島である。首里城と那覇を結ぶ道は大きく2つあったと考えられている。

一つは、首里城の西側に位置する守礼門を抜け約500m先にあった中山門までの綾門大道を通り、1452年に尚金福王が湿地に築いた海中道路である長虹堤を通る道である。綾門大道では、発掘調査により礫混じり層を基礎にして版築状に土をつき固めて造成し、石列で両端を区画していたことが分かり、15世紀前半には敷設されていたようである（県埋文 2003 b）。綾門大道跡より西方は、現在の県道につながり、長虹堤の起点とされている崇元寺に至る。この崇元寺は戦前まで残存しており現在は3つのアーチ門が発掘調査をもとに復元されている。『琉球国由来記』によると、創建年代には幾つかの説があり、最も古いのは尚巴志代（1422～1439年）、新しいものは尚真王代（1478～1526年）とする説があるが、発掘調査で得られた遺物では青磁V類、青花B1群、永楽通寶も多く出土しており、15世紀代の創建である可能性は高い（那覇市 1983）。この崇元寺跡の西側は元来すぐには海であったとされ、その北側は那覇以前の港と言われている泊港となる。一方、この南対岸には、その性格は不明だがIII～IV期を中心とした牧志御願東方遺跡が位置しており、13世紀後半には形成されていたようである（那覇市 1995）。長虹堤をわたると、那覇の浮島で最も広い陸地部の東端につながり、13世紀後半には形成されたハナグスク（波上宮）などの遺跡が位置している（那覇市 1999 a）。そして、現在も機能している那覇港北岸の渡地村跡の発掘調査により、14世紀後半から多くの陶磁器が出土し、生産地からそのままもってきたことを示すような焼き台、墨書き陶器、本州との交流を示す瓦質土器などの陶器など、多くの成果が得られている（県埋文 2007、那覇市 2012）。

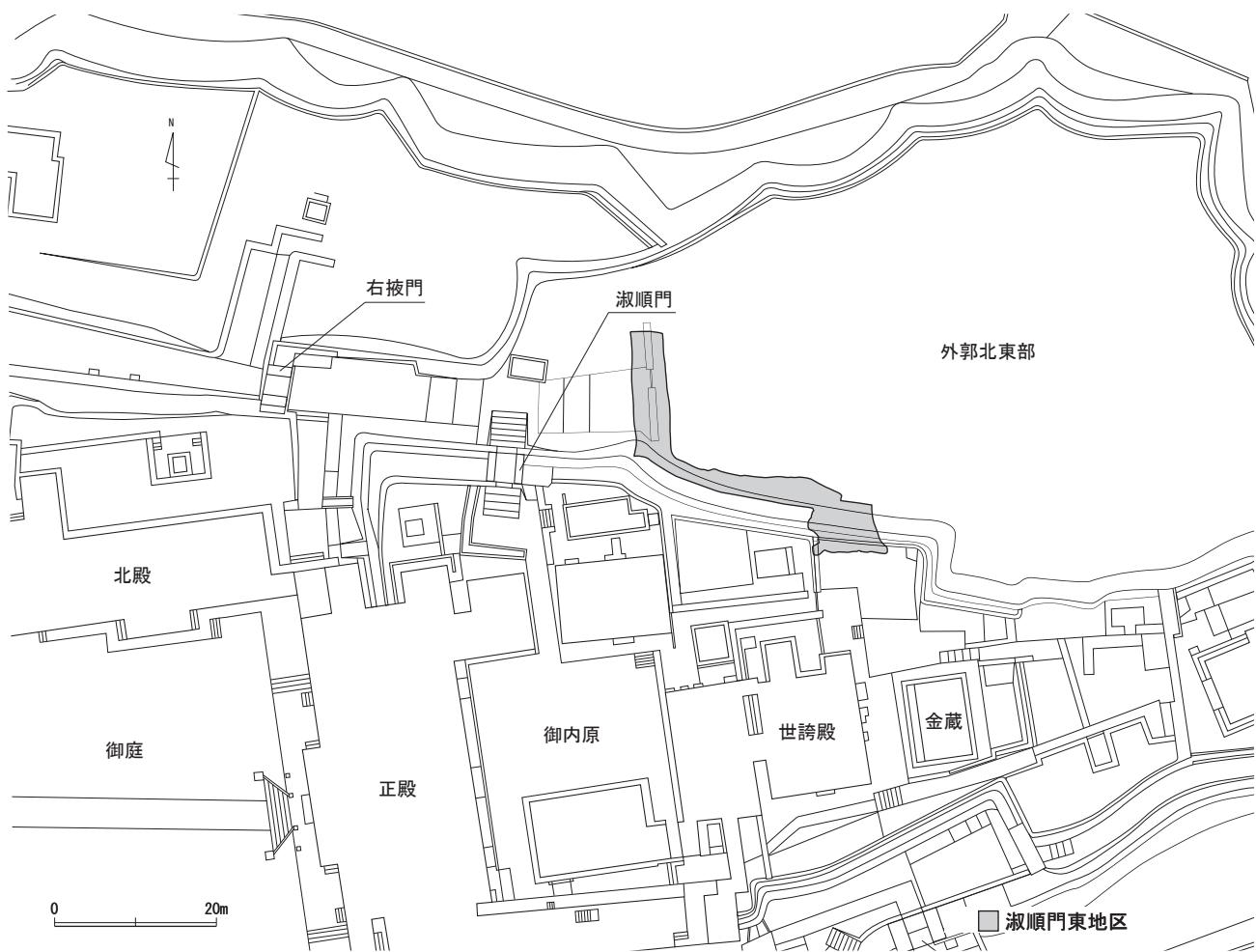
もう一つは、1522年に尚真王が軍事用道路として造った真珠道で、首里城から南下し漫湖に至り、その南岸を伝っていき、那覇港の南側に至る道である。この真珠道跡は、首里城周辺では発掘調査により岩盤を平らに成形している部分は確認されている。15世紀後半～17世紀以降の遺物が多く見つかっており、綾門大道跡より新しい敷設もしくは利用と見られる。この道を下っていくと、現在も残っている金城町の石畳につながっていき、往時を髣髴とさせる。さらに南下していくと、先述したグスク時代の集落跡や、河口に望む大型グスクである豊見城城跡などがあり、こちらも重要なルートであった（県埋文 2008）。

第3節 調査区の概況

本報告書の対象である淑順門東地区に関する歴史背景や変遷について略述する。なお、調査区の位置を、明治



第3図 横内家資料平面図



第4図 平成 23 年度調査区域図（横内家資料平面図）

期以前とされる横内家資料平面図（以下「横内図」、第3・4図）、昭和6（1931）年頃とされる阪谷良之進作図の旧首里城図（以下「阪谷図」、第6図）、昭和25（1950）～59（1984）年までにあった旧琉球大学校校舎配置図（第7図）にプロットしている。現状図は平成22年時のものに位置を示している（第8図）。

今回の調査区は、淑順門東側の内郭城壁の外側で、外郭北東部に当たっている。この淑順門周辺は、既に平成16年度の淑順門地区（県埋文2006a）、平成11・19・21年度の御内原北地区（県埋文2010・2013b）、平成22年度の淑順門西地区（県埋文2013a）として発掘調査がなされており、その成果を元に復元整備がなされ、平成22（2010）年度に供用が開始されている。今回の調査区と同一の遺構が部分的に既に検出されており、石積7～10と同一の区画石積（平成16年度）、石積1・2とした内郭城壁（平成11・21年度）が該当する。

淑順門は、外郭の北側にある久慶門をくぐり、東側に向かうと右掖門を通り、御内原へ至る直前の門である。「みもの御門」や「うなか御門」と呼ばれることがある。門の構造は、木造平屋建・入母屋造・本瓦葺の櫓門とされる。平成22年度の調査で、淑順門に接続する城壁は、15世紀後半には構築された可能性が高いと考えられる（県埋文2013a）。

外郭北東部は、戦前の写真などによると、木々が生い茂っている状況である。首里古地図では、淑順門東側に外郭を区切るような南北方向の石垣が描かれ、その中央にはアーチ状の門が表現がなされ、その東側は木々が生い茂っている（第5図）。また、明治期以前の横内図では、内郭城壁に沿って淑順門より東側にストロークが長い階段状の表現がなされており、先述の石垣と門も描かれる（第3・4図）。今回の調査では、この石垣とみられる石積7～10が検出されており、この石垣は中央部が途切れしており門及び石畳があったものと推定され、ほぼこの表現どおりと考えられる。一方、昭和6年ごろの阪谷図では、この石垣は描かれておらず、外郭も特に顕著な表現はなされていない（第6図）。

なお、本章の記述は、（首里城研究グループ1997・県教委2010）を参考にした。



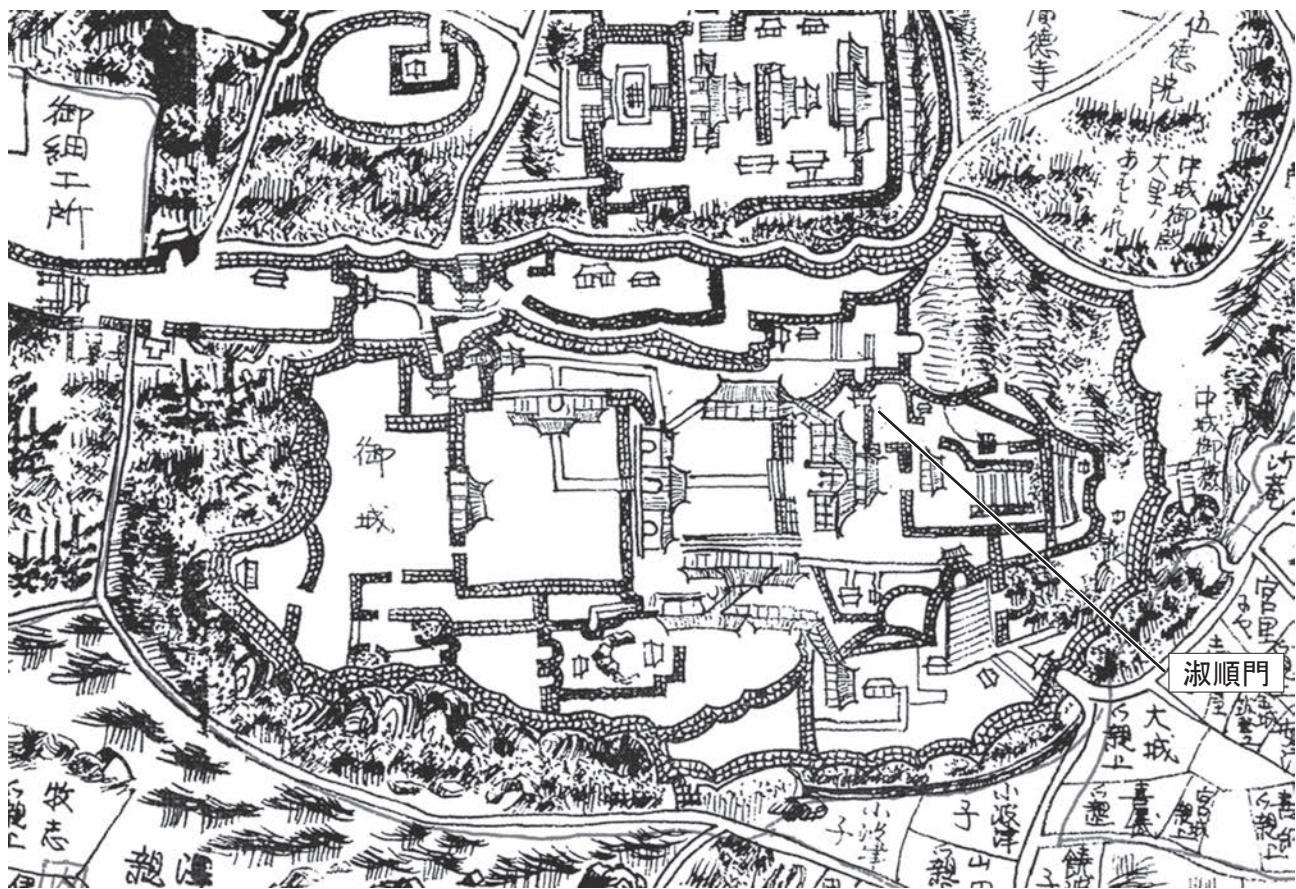
写真5 平成16年度調査淑順門地区



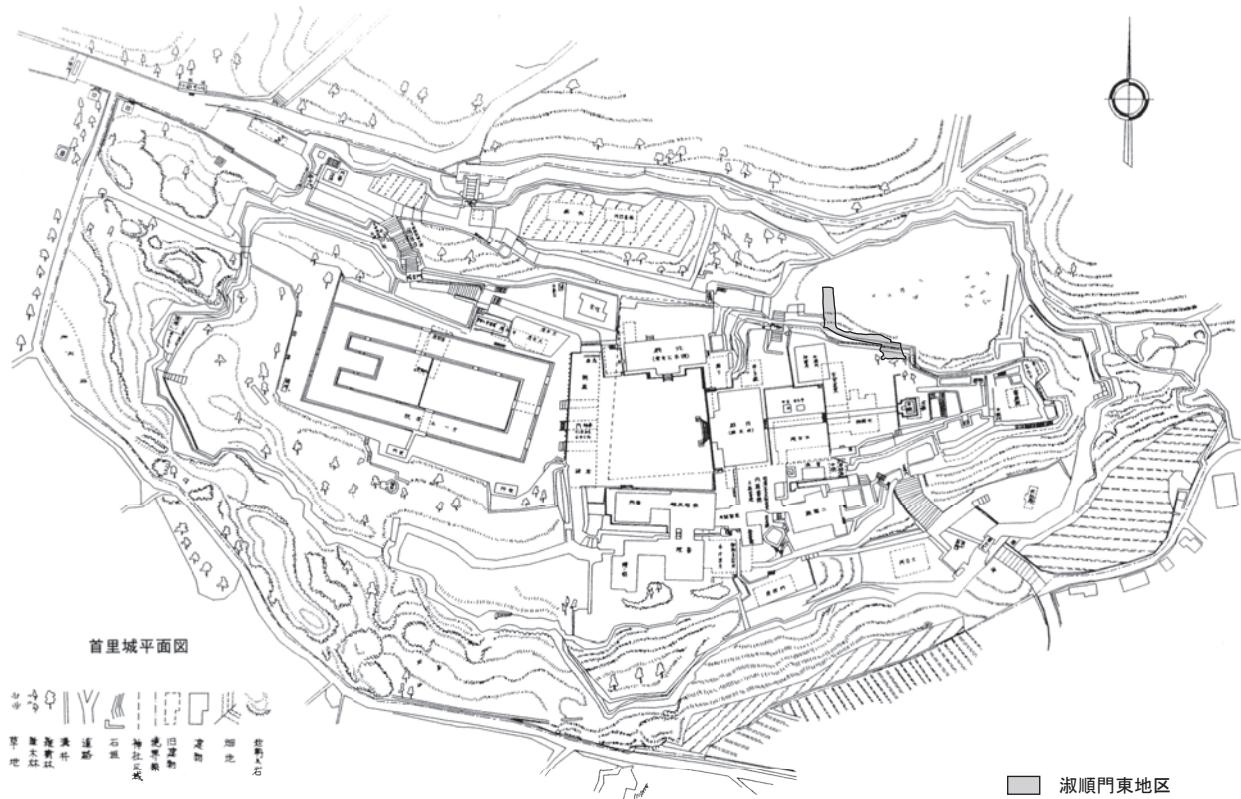
写真7 平成11年度調査御内原北地区



写真6 平成21年度調査御内原北地区



第5図 首里古地図(18世紀初頭 県立図書館所蔵)



第6図 「旧首里城図」(昭和6年頃 阪谷良之進原図 県立図書館所蔵)



第7図 「旧琉球大学校舎配置図」（昭和25（1950）～昭和59（1984年））



第8図 首里城公園現状図（平成22年 国営沖縄記念公園事務所作成）

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

今回の調査は、公園整備計画に合わせて淑順門東側の内郭城壁の根石の確認を目的とし、その調査面積は188m²となった。

グリッド設定は、過去の調査区において本地区に近接する平成16年度に行われた淑順門地区（県埋文2006a）の記号を基準とした5mグリッドを採用した。このグリッドは、X=23695、Y=22150をA1グリッドとして、西側にA2、A3…、南側にB1、C1…として呼称している。そのため、1より東側のグリッドについては、E1、E2…として呼称することとした（第9図）。

遺物の取り上げにはこの5mグリッドによったが、遺構検出面の下層をトレンチにより掘削したD～F1・2グリッド（以下、グリッド省略）と、その南側では資料整理作業の結果、大きく様相が異なることが判明した。そこで、先述のグリッドを北区、その南側のG1～IE5を南区に分けて遺物の整理・報告をすることとした。

本地区は、西側を平成16年度の淑順門地区（県埋文2006a）、南側を平成11・21年度の御内原北地区（県埋文2010・県埋文2013b）の各調査区と一部重複しているため、既往調査時の埋戻し土が大半であったため、出土遺物は全体としては少なかった。ただ、IE3～5の範囲については、旧琉球大学の石垣が残されていたため、それに覆われていた範囲の堆積土からは多くの遺物が出土した。

首里城跡の発掘調査では、戦前以前の首里城を復元整備するために実施されている。そのため、それより以前の土層についてはサブトレンチによる部分的な調査しか行うことができない。今回の調査では、全ての遺構は、戦後以降の堆積土を除去した段階で検出した。北区において遺構面の下層を確認するために、石積が確認されていない範囲においてトレンチ1・2を設定することにより層序を確認した。

遺構の名称は、既往の調査区と同じものも確認されたが、これまでの調査と同様で、本地区のみの遺構番号を付すことになっている。今回付した遺構名は、その形状より石積、集石、焼土面と称し、それぞれ1から番号を付していった。また、石積は面を持っている石の列を指し、その裏込め部分については、どの部分か示す必要がある場合は、適宜示した。

現地での写真は、35mmのフィルムカメラ、または適宜6×7サイズの中判フィルムカメラを用いて白黒とリバーサルフィルムで撮影・現像した。なお、デジタルカメラ（ニコンD70s）でも撮影を行い、報告書時の写真はDTP印刷に対応するために、デジタル画像を使用することとした。

遺物のナンバリングは、「H23 首淑東（グリッド）（トレンチ・遺構・層序）」と注記している。



写真8 調査前遠景(北より)



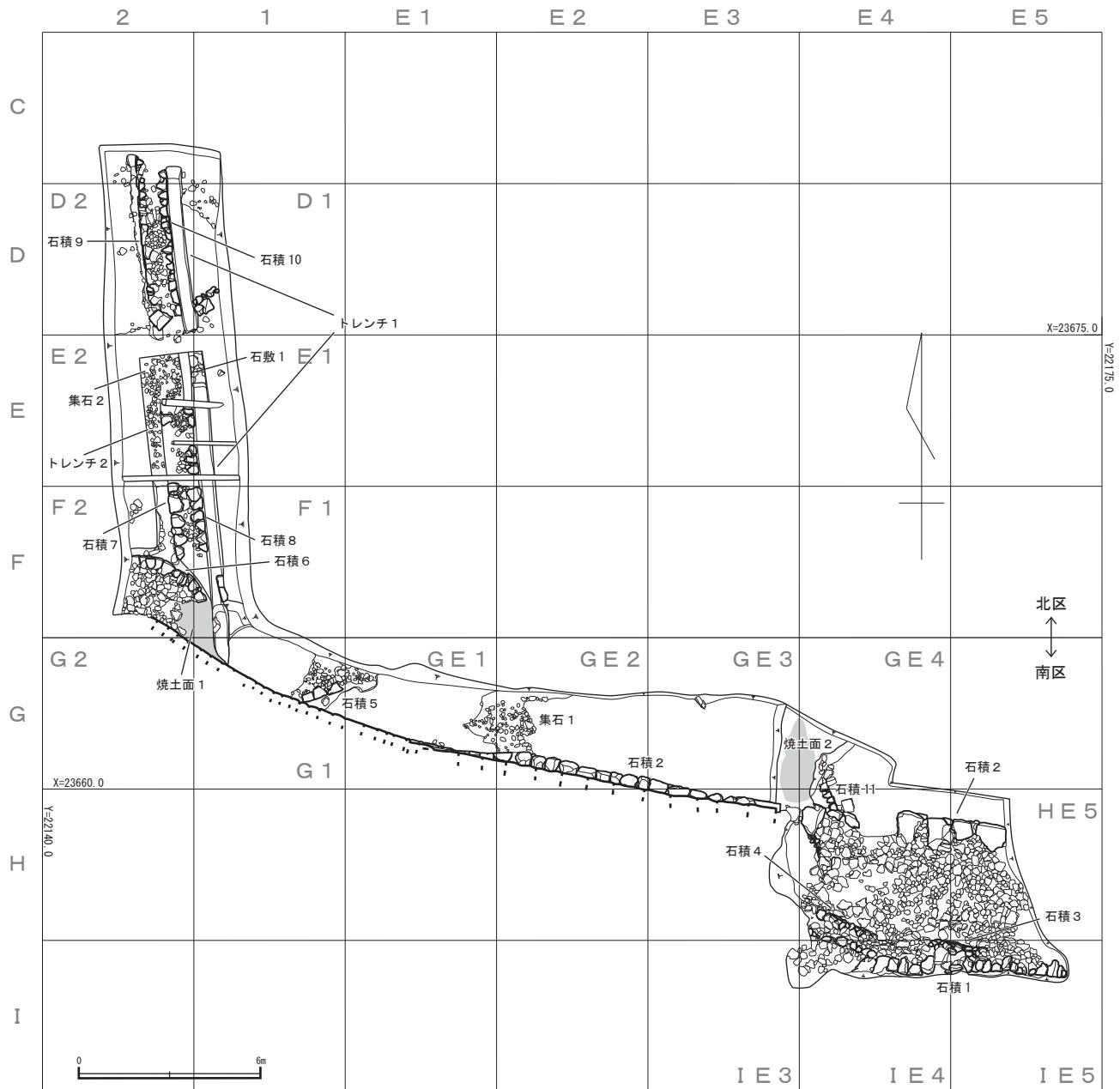
写真9 調査後全景

第2節 層序

前述したように、既往調査での埋戻し土を含めた戦後以降の堆積土（後述の1層）を除去した段階で遺構が検出されたため、それより下層の堆積状況は北区トレンチ1・2、南区G E 3南北断面で確認されている。以下、北区と南区にわけて、個別に説明する。なお、層序の時期は第3章及び第4章でも詳述し、出土遺物の集計表も掲載している（第57表）。本節の記述は、北区と南区の層序を対応させた第10図を参照していただきたい。

北区（第10・15図、図版9）

トレンチ1・2を設定し、1層を除去した下層の状況を確認した。トレンチ1は、D～F 1で確認された石積8・10の外側に沿って、その下層の堆積状況を確認するために設定したトレンチである。トレンチ南端で地山であるクチャ（10層、図版9-4）を確認したが、全体的には遺構の保護、作業の安全を考慮したこと及び時間が不足したことから、全てを掘削していない。層序は、大きく1～10層にまとめることができた。ただ、2



層と3層は土色や堆積状況の違いから細分している。以下、各層の概要を記す。なお、本本調査区で確認された礫は基本的に琉球石灰岩であるが、今回は岩盤としては確認できなかった。本調査区の南側にあたるより標高が高い正殿周辺の調査区では琉球石灰岩の岩盤、その風化土の明褐色土であるマージ層が確認されている。

1層 戦後以降の堆積土

ほぼ既往調査の埋戻し土であり、それを除去すると既に検出されていた石積み6・8～10、集石の上面が確認された。そのため、出土遺物は多くなかった。部分的に、琉球大学時代と想定される埋設管の埋土が残存していた。

2'・2層 近世の遺物包含層

2'層は、トレンチ1北側で確認された中～大礫が混じる褐色土。2層は、その下層にあたり、トレンチ1中央部で確認されたより暗色が強い黒褐色土。層厚は両者を合わせて0.2～0.4m。共に、石積7～10の根石より後に堆積しており、出土遺物は貝類・グスク～近世の陶磁器、明朝系瓦が見られる。また、炭化した木材もしくは倒木が随所に見られた（写真10）。以上より、2'・2層は石積7～10より後に堆積した包含層であり、その下限は近世と考えられる。ただ、本層が石積7～10全体を覆っていたかどうかは、既に1層により削平された状況であるので、不明である。

3'層 近世の造成土1（図版9-1）

3'層は、トレンチ1北側のみで確認した褐色～黄褐色礫混土で、1.2m以上の厚さが確認できたが、全て掘りきれず、実際の厚さ及びその下層は不明である。さらに細分しており、上方は3'A層として水平堆積をとり、下方は3'B層として北より流れ込むような堆積となっている。全体的に礫が多く混じり、短期間で堆積したものと思われ、北側より流し込まれた造成土と考えられる。出土遺物は、陶磁器は15世紀代のものも多いが、明朝系瓦が一定見られるため、下限を近世と考えておきたい。石積9・10、石敷1は本層より上に位置しており、本層以降に構築されたと考えられる。

後述する3層以下は、全て掘削していない現時点であるが、3'層が厚く堆積するトレンチ1北側では確認されておらず、トレンチ1の南北で大きく堆積状況が異なる点は指摘できる。

3・4層 近世の造成土2（写真11、図版9-2・3）

3層は、トレンチ1・2南側で確認された明褐色土で、層厚は0.6mを測る。全体的に水平堆積で、小さなマウンド状の単位で分層でき、他の層に比べると硬質な印象を受けた。正殿周辺などの本調査区南側で見られるマージ層を母体として、幾つかの工程を分け固く敷き詰めていったものと思われ、平坦面を作るための造成土と考えられる。出土遺物は、3'層と同様に15世紀代の陶磁器が主体だが、明朝系瓦が出土する。石積6は3層に覆われているので、本層よりは古い遺構である。石積7・8、集石2は、本層より上に構築されている。

4層は、トレンチ1・2南側で確認された黄褐色細砂で、層厚は0.05mと薄い。コーラルと言われる石灰質



写真10 トレンチ1北側2層木材出土状況



写真11 トレンチ1南側3～5層堆積状況

細砂が敷かれたような状況である。下層である5層が軟質の炭化物層のため、整地のために敷かれたものと考えられる。層厚が薄いため、出土遺物は5層と区別せずに取り上げたが、多くは5層に起因するものと思われる。

両層は、水平に堆積し固く締まっているので、平坦面を作るための一連の造成土と捉えられる。時期的には、明朝系瓦が出土するので下限は近世と考えざるを得ないが、灰色系瓦が大半であることから概ね17世紀代ではないかと考えたい。また、3[～]層との時間差であるが、堆積状況は大きく異なるが、石積7・8と9・10が一連のものと考えると、ほぼ同時期の造成土の可能性が高い。

5層 15世紀の炭化物層（写真11、図版9-2・3）

トレンチ1南側で確認された炭化物が粉状になった黒色シルトで、大～巨礫も多く含まれ、非常に軟質である。トレンチ1南端までは及んでおらず、層厚は0.2mである。この下面に焼土面を現時点では確認できておらず、この土層がどのように形成されたかは不明と言わざるを得ない。出土遺物は、金属製品と中国産褐釉陶器が見られ、概ね15世紀代のものと思われる。また、獸魚骨・貝類がかなり多く見られ、本層の性格を検討する必要がある。

6層以下は、トレンチ1南端でしか掘り下げていないため、その北側の状況については不明である。

6層 15世紀の造成土1

トレンチ1の南端で確認されている礫・粘土混黄褐色土で、層厚は0.3mを測る。礫が多く、造成土の一環と考えられる。遺物は少なく、5層で見られたような鉄釘・陶磁器等が得られているので、概ね15世紀と考えたい。

7～9層 15世紀の造成土2（写真12）

7層は、トレンチ1の南端で6層の下に見られる巨礫混オリーブ褐色土で、部分的に10層（クチャ）に由来する灰オリーブシルトがブロック状で混じる。このことから、短期間で一度に礫やクチャブロックを流し込んだような造成土と考えられる。層厚は0.3mを測る。その上面が赤変、部分的に黒変しており火を受けたものと考えられ、平面的な広がりが見られ、焼土面1として遺構と捉えた。標高は121.9mの地点である。

8層は、トレンチ1南端でわずかに見られる炭化物が粉状になった黒色シルトで、層厚0.05mである。この炭化物層の由来も現時点では不明である。

9層は、明黄褐色砂で、層厚0.1mを測る。地山である10層に水平で堆積している。

7～9層は遺物がないが、内郭城壁の根石に接するように堆積している。現時点では、14世紀より古い戦前まで続く内郭城壁は確認されていないので、上層と同様に概ね15世紀と考えたい。8層が炭化物層であるが、全体的に広がっていない可能性もあり、全体としては造成土の一環と考えられる。

10層 島尻泥岩（クチャ）層（写真12、図版9-4）

10層は、灰オリーブシルトで、島尻泥岩層いわゆるクチャで、本地区の地山である。トレンチ1南端で内郭城壁6の根石に接して検出され、その検出面は南側がやや高く標高121.6m、北側が低くなり標高121.4mとなる。内郭城壁の根石は、クチャ層を部分的に掘り込み、その直上に置かれているものと思われる。

南区（第10・14図、図版7-3、写真13）

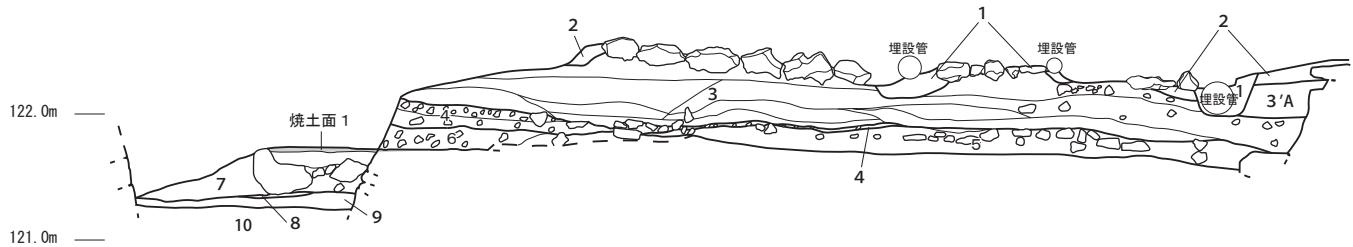
1層が全域に及んでおり、これを除去することにより内郭城壁等の遺構を確認した。その下層については、GE3南北アゼ断面により2～5層を確認した。このGE3南北アゼ断面を挟んだ東西側は、既往調査の埋戻し土が堆積しており大半は地山であるクチャ層（5層）を確認している。つまり、このGE3南北アゼは、その際に掘り残された部分と考えられ、下層の堆積状況は、本来は内郭城壁北側には見られた可能性がある。以下、1・5層は南区全体、2～4層はGE3南北断面の状況を記す。

1層 戦後以降の堆積土

先述したように、北区と同様既往調査の埋戻し土が大半であった。ただ、HE4・5の中央あたりに東西方向の琉球大学時の石垣があり、これより南のIE3～5においては、巨礫が多く混じる裏込め土が残されていた。

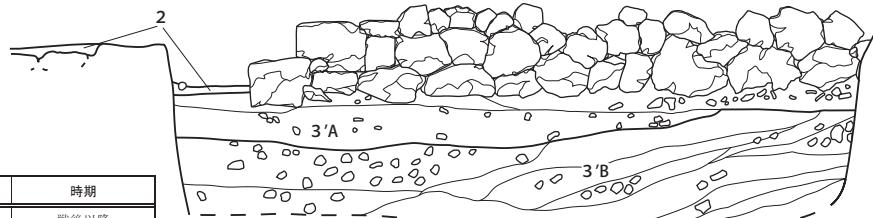
123.0m A

北区トレント1層序

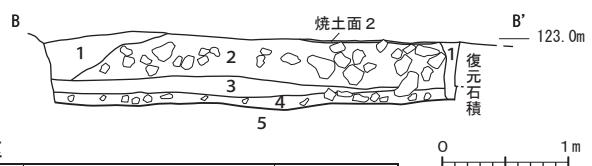


北区

層序	性格	時期
1層	堆積土（琉球大学時の埋土も含む）	戦後以降
2層	遺物包含層	近世
3'A層		
3'B層	造成土 （※土質により3'A・B層と3・4層で分けられる）	近世 (17世紀の可能性)
3層		
4層		
5層	炭化物層	
6層		
7層	造成土 （※7層上面は焼土面であることから、6層と7～9層で分けられる） （※8層は部分的に炭化物層の可能性）	15世紀
8層		
9層		
10層	クチャ層	地山

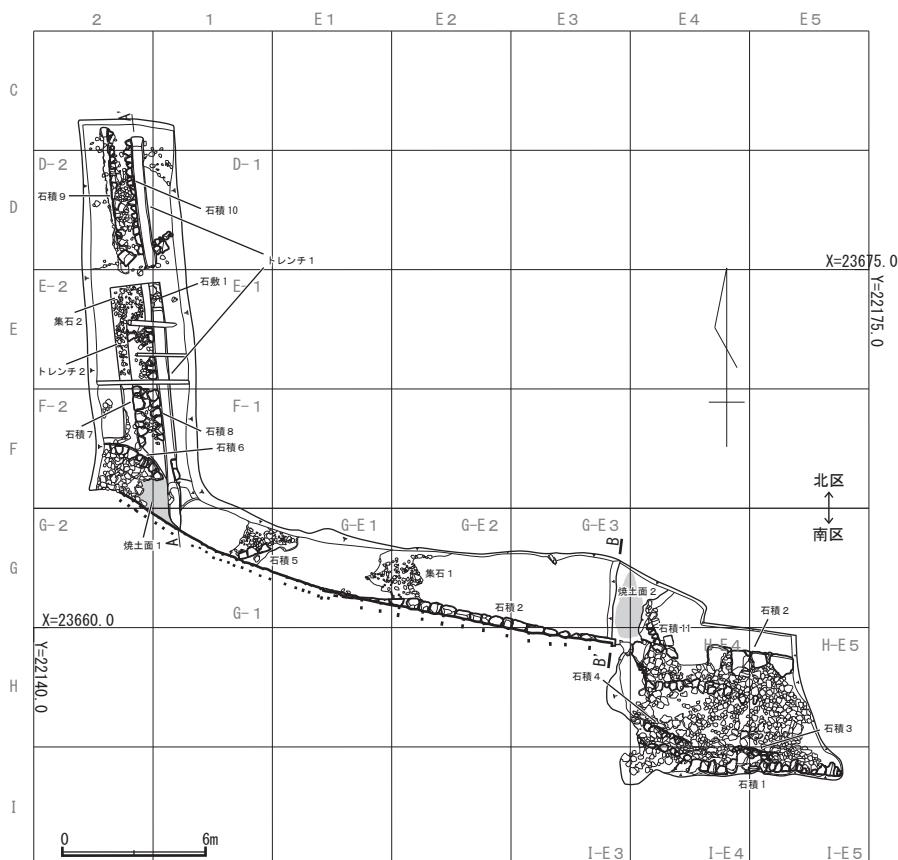


南区G-E3南北畦層序



南区

層序	性格	時期
1層	堆積土（既往調査の埋戻し土）	戦後以降
2～4層	造成土	推定15世紀
5層	クチャ層	地山



第10図 淑順門東地区層序対応図

この土層より多くのグスク～近代の遺物が出土しており、旧琉球大学石垣裏込め土と称した。

2～4層 推定15世紀の造成土

全体としては、クチャに由来する灰オリーブシルトブロック、礫が多く混じる。2層は巨礫が多くしまりも弱く、一度に流し込んだような状況で、層厚0.4mである。下層である3・4層は灰オリーブシルトブロックが主体で固く締まり、層厚は合わせて0.1mである。これらから、地山である5層に3・4層を薄く敷き詰め、2層を一度に堆積させたような状況と考えられ、性格としては造成土と思われる。今回検出した内郭城壁と接する部分は、既に調査されていたが、おそらく根石部分はこれらの土層が覆っていたものと考えられる。

なお、2層上面は赤変、部分的に黒変しており火を受けたものと考えられ、平面的な広がりが見られ、焼土面2として遺構と捉えた。標高は123.0mを測り、北区の焼土1より約1m高い地点である。

2～4層は、先述したGE3南北アゼで確認できたもので、今回の調査ではこの部分を掘削していないため、遺物は得られていない。ただ、土層の特徴では、北区の7～9層と同様にクチャのブロック、礫が多く混じる点、上面に焼土が見られる点で共通しており、後述するが北区の層序との比較により、概ね15世紀と推定される。

5層 島尻泥岩（クチャ）層

5層は、灰オリーブシルトで、島尻泥岩層いわゆるクチャで、北区と同様で地山である。北区でも確認された内郭城壁（石積み1～4）、石積5・11、集石1は本層上面で置かれるような状況であった。

小結

以上、本地区の層序を北区と南区に分けて説明してきたので、対応関係等について記す。

1層は、北区と南区共に堆積しており、基本的には既往調査の埋戻し土である。ただ、北区の埋設管の埋土、南区の南端であるIE3～5の石垣裏込め土は、旧琉球大学建設時の堆積土と考えられる。

時期的には、北区2'・2層は近世、3'・3・4層は近世のうちでも17世紀、5～9層が15世紀と考えられる。なお、南区2～4層は出土遺物はないが、北区との比較により推定15世紀と考えている。

北区3'層以下の土層は、炭化物層である5層を除くと、その堆積状況より造成土と考えられる。つまり、近世のうち17世紀の可能性が高い3'・3・4層と、遺物は少ないが概ね15世紀の6～9層という大きく二時期の造成があったと考えられるのである。

また、先述したように、北区7～9層と南区2～4層は、土質及び上面に焼土面を有する点が共通しており、同時期で15世紀と考えられる可能性が高い。ただ、焼土面の標高が1mも異なることから、南区のものが例えば昭和20（1945）年の沖縄戦時による被災状況を示すという見解も提示することは出来よう。今後の隣接地区的調査状況を考慮し、判断すべき問題であろう。



写真12 トレンチ1南端堆積状況



写真13 GE3南北畦断面

X=22140.0
Y=22360.0

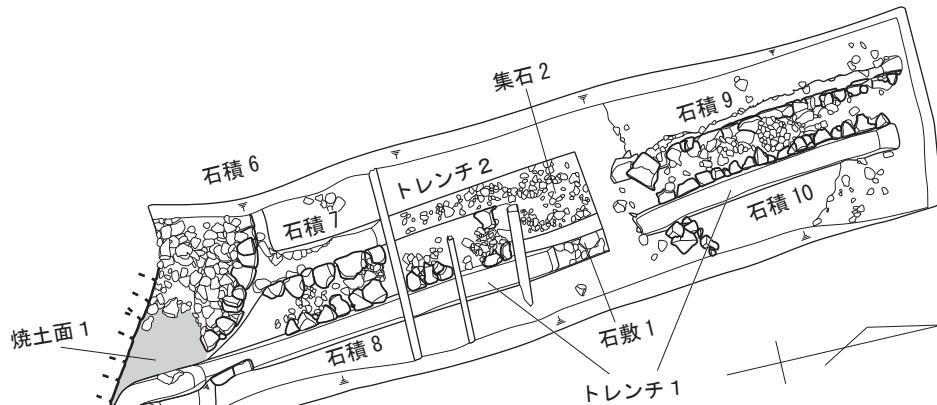


写真 14 南区西側
遺構跡状況



写真 15 北区遺構検出状況

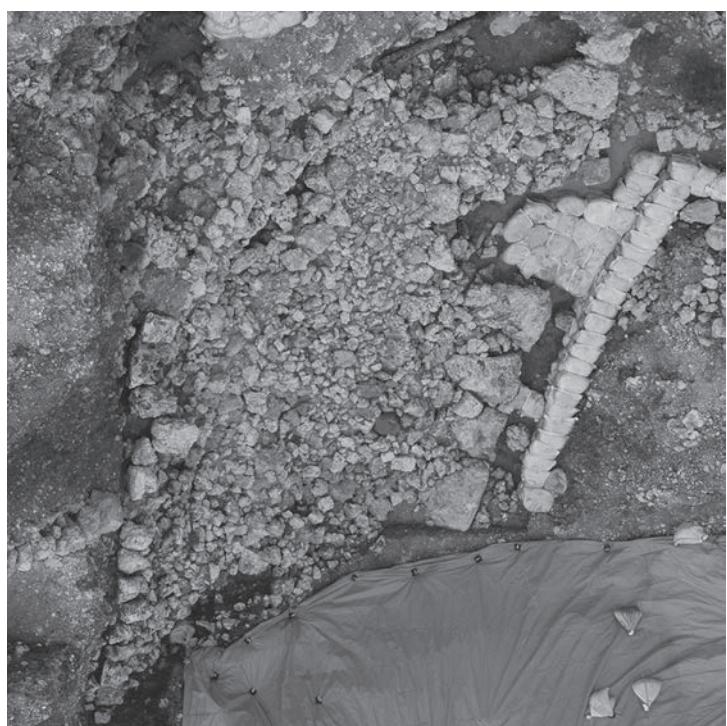
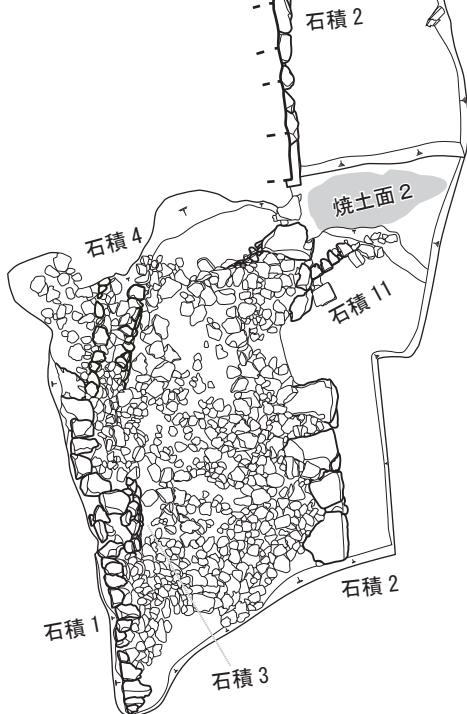


写真 16 南区東側遺構検出状況

X=22175.0
Y=22365.0



第11図 淑順門東地区全体平面図

第3節 遺構

今回確認された遺構は、石積 12 基、石敷 1 基、集石 2 基、焼土 2 基である（第 11 図）。

石積については、面を持っている列状のまとまりに対して遺構番号を付している。裏込めを介して両側に面を持つものに対しては、遺構番号が別となっているが、これらはセットとして捉えることとする。なお、遺構を構成している石は全て琉球石灰岩である。

これらの遺構は、その性格・位置関係により、旧琉球大学石垣、内郭城壁、区画石積み、その他の石積みと集石、焼土面に分けて説明する。

1. 旧琉球大学石垣（第 12 図、写真 17～20、図版 3-3）

南区 H E 4・5において、調査以前に露出していた東西方向の石積みで、旧琉球大学の石垣である。現状では、高さ約 2～3 m、10 段程度の石垣であった。長さ 40～50 cm、高さ 30 cm 程度の切石で構成されている。平成 11 年度の調査でも確認されているように（県埋文 2010）、この石垣は内郭城壁（石積み 1・2）の残存部分に直接積み上げる形で造られている。

2. 内郭城壁（石積み 1～4）（第 13・14 図、写真 21～24、図版 6・7-1）

調査区の東西方向を横断する両面積みの石積みで、第 4 章（第 43 図）でも後述するが昭和初期の阪谷図（第 6 図）に描かれるものに相当し、戦前まで存在していた内郭城壁である。今回の調査では、石積 1 が南面するもので城郭内側、石積 2 が北面するもので城郭外側に向っており、その間には全て礫で充填された裏込めが見られる。裏込め内には、不整然な北面する石積みである石積 3・4 も見られる。

今回確認された内郭城壁は、平成 11 年度調査で検出（県埋文 2010）、既に平成 22 年度に復元工事がなされた部分の東側にあたる。そのうち南面する石積 1 は、平成 21 年度調査で検出された石積 3 と同一のものである（県埋文 2013 b）。城壁の長さは、新規に検出した 7.5 m を含めて、調査区内では 31.0 m を測る。城壁の幅は、南区の東端では 5.2 m を測る。

根石の構築方法 内郭城壁の外側である石積 2 は、基本的にクチャ層の直上に置いているものと思われる。西側の G 1 付近では、標高 121.2 m のレベルで、クチャ層を 0.1 m 前後を掘り込むような形となっている（第 15 図トレンチ 1 断面図）。一方、東側の H E 4・5 付近では、標高 122.5 m のレベルでクチャ層の直上もしくは 0.1 m 上方に位置する（第 14 図 G E 3 南北アゼ断面図）。この部分では小礫もしくは土がその下方に見られているため、クチャ層の上面及び根石の外側に造成土を薄く敷いた可能性も考えられる。

一方、内郭城壁の外側である石積 1 は、一番低いレベルで標高 125.0 m と、石積 2 の根石よりも 2.5 m 高く、平成 21 年度調査でも南側が造成土で埋もれていることが確認され、現状では根石の状況は不明である。

構築時期 本章第 2 節で先述したように、内郭城壁に接する土層のうちの下層は概ね 15 世紀と推定されており、この城壁の構築年代の一端と考えたい。また、石積 1 と同一の平成 21 年度調査の石積 3 は、層序の関係からはやはり 15 世紀と推定されている。

石積 1 南区 I E 3～5 で確認された、内郭城壁の内側にあたる南面する石積みである。今回検出した石積みの長さ 7.0 m を測るが、その西側は既に平成 11 年度の調査で確認され現在は復元された石積みとなっており、東側は調査時は管理道路となっており、平成 24 年度の調査でその続きが確認されている。既に平成 21 年度の調査区で検出された石積み 3 と同一のものである。

石積 2 南区で確認された内郭城壁の外側にあたる北面する石積である。今回、新規に H E 3～5 で確認した石積みの長さは 7.5 m を測り、その西側に伸びる平成 11 年度調査分のものを併せると 31.0 m を測る。検出した石



第12図 旧琉球大学石垣位置図（濃いトーンの範囲、県埋文2010との合成図）



写真17 南区調査前状況



写真18 旧琉球大学石垣検出状況



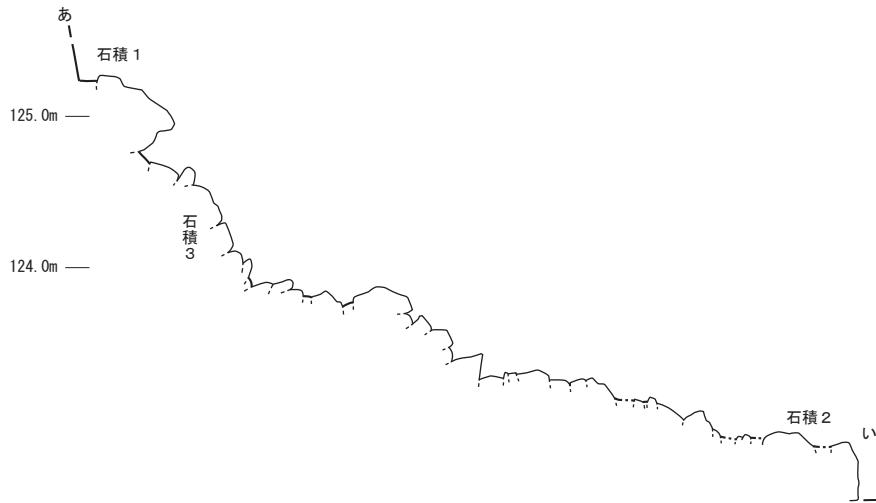
写真19 平成21年度旧琉球大学石垣検出状況



写真20 旧琉球大学石垣断ち割り状況

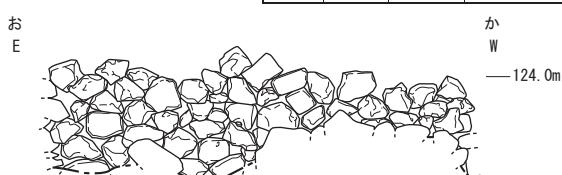


第13図 南区内郭城壁平面図



G-E3 ライン 南北畦・東壁断面図

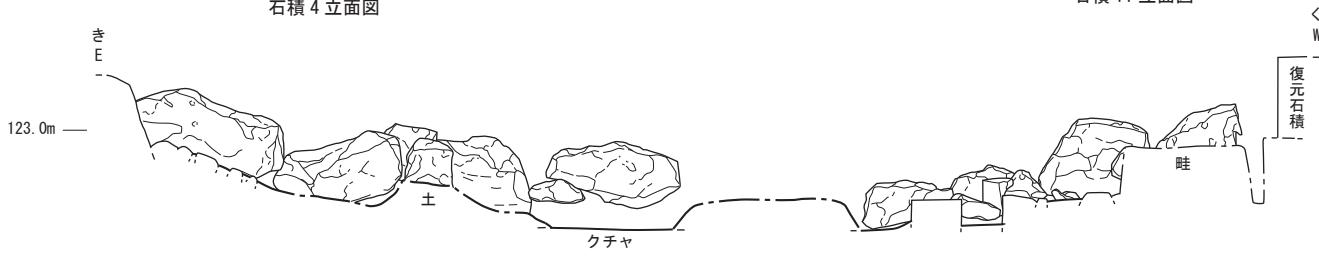
層序	土層No.	土色	土質	混入物など
1層	1	10YR5/4	にぶい黄褐	極細～細砂 中～大礫混、瓦・ビニール・ガラス等含（既往調査の埋戻し土か？）
2層	2	10YR5/6	黄褐	5Y5/3灰オリーブシルトブロック・細～巨礫混 (礫には赤変するものもあり)
3層	3	5Y5/3	灰オリーブ	シルトブロック
4層	4	2.5Y4/3	オリーブ褐	粘土～シルト
5層	5	5Y5/2	灰オリーブ	クチャ層（地山）



石積4立面図



石積11立面図



第14図 南区内郭城壁立面・断面図



写真 21 南区内郭城壁検出状況



写真 22 南区東側遺構検出状況



写真 23 石積 2



写真 24 石積 3(左)、石積 4(右)



写真 25 石積 4

積みは根石のみで、長さ 60～80 cm、高さ 40～50 cm の切石を平積みされている。

裏込め 南面する石積 1 と北面する石積 2 の間、幅約 5 m の範囲に一辺 20～40 cm 前後の礫が充填されており、隣接する石の間を埋めていく状況で土は見られない。この裏込め内に、後述する石積 3・4 が南面して見られ、内郭城壁とは別の古い石積みであるのか、それを積み上げる作業の一単位であるかが考えられる。

石積 3 I E 4・5 で確認された石積 1 の北側に位置する東西方向の北面する石積みで、長さは現状で 1.5 m を測る。一辺 40～50 cm の比較的整った礫を積み上げており、2 段程度確認できる。

石積 4 石積 3 より西に 1.5 m 離れた地点に位置する東西方向の北面する石積みで、長さは 3 m を測る。石積 3 とはやや方向が異なって東に約 20° 傾いており、その角度は食い違っている。一辺 20～40 cm の明確に面をもたない礫で乱雑に積み上げており、現状では 5 段確認できる。

この石積 3・4 は先述したように、内郭城壁よりは古いのは確かであるが、例えば石積 1 を積み上げるための支えの役割を果たしたようなものか、全く別の石積なのかは、今回の調査では判断できなかった。

3. 区画石積（石積 7～10、石敷 1、集石 2）（第 15 図、写真 26～31、図版 8・10－1）

北区において縦断するように確認された南北方向の両面積みの石積である。第 4 章（第 43 図）でも後述するが、明治期以前の横内図（第 3・4 図）に描かれているものに相当し、外郭内を東西に区画する石積と考えられる。南側が石積 7・8、北側が石積 9・10 で、各々がセットとなる両面積みの石積である。既に平成 16 年度調査で検出されており、西面する石積 8・10 が石積 19、東面する石積 7・9 が石積 20 となる（写真 28・29、第 43 図）。石積 7・8 の北端、石積 9・10 の南端は破壊されており、その間は 2.0 m 離れている。この空間の東側に石敷 1、西側に集石 2 が見られる。

石積 7・8 現状では長さ 4.8 m、幅 1.1 m となる。現状では 1 段のみしか検出されず、特に北側の残存状況が悪く、旧琉球大学の埋設管などにより破壊を受けているものと思われる。南端には石積 6 が見られ、現状では完全に接続していないが、石積 6 が乱れるなどの影響は見られず、その下層である 3 層が石積 6 に覆っていることから、石積 7・8 より新しいものと考えられる。また根石が横位に配置される点は共通するが、石積 7 は一辺 20～40 cm のやや不整な長方形、石積 8 は長さ 50～80 cm、高さ 40 cm のより整形され大きめの切石が主に見られるなど、その状況がやや異なっている。

石積 9・10 今回検出された部分では長さ 6.2 m だが、平成 16 年度調査分を合わせると、長さ 9.5 m となる（第 43 図）。石積 9 では 1 段検出しており、一辺 30～50 cm のややばらつきのある石を乱雑なあいかた積みで置く。一方、石積 10 では 3 段確認され、全体的には同様な置かれ方であるが、南端については一辺 50 cm ほどの方形に近い切石を配置しており、根石については原位置を保っているように思える。その状況より、後述するように門が存在した根拠の一つと考えている。

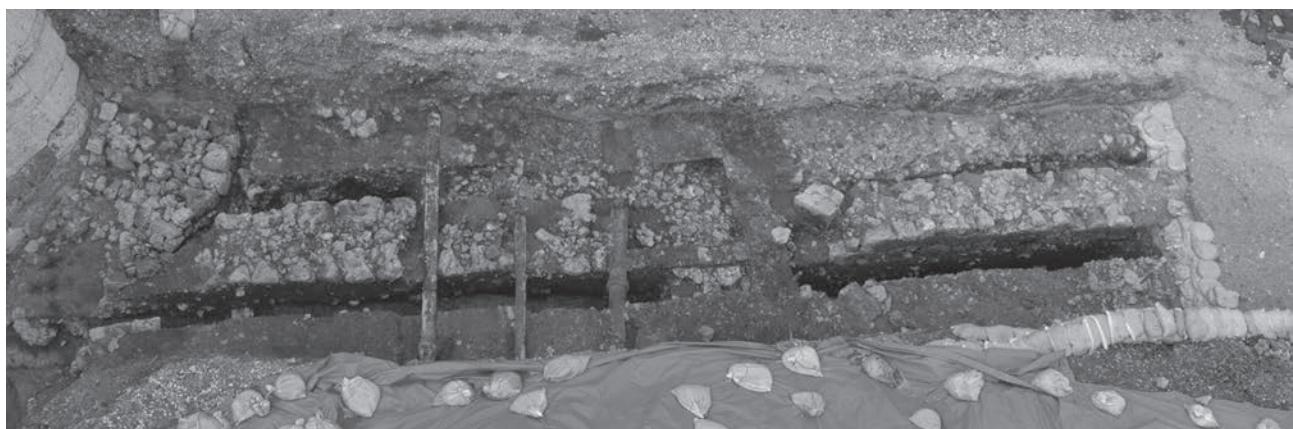


写真 26 北区遺構検出状況



写真 27 集石 2 検出状況



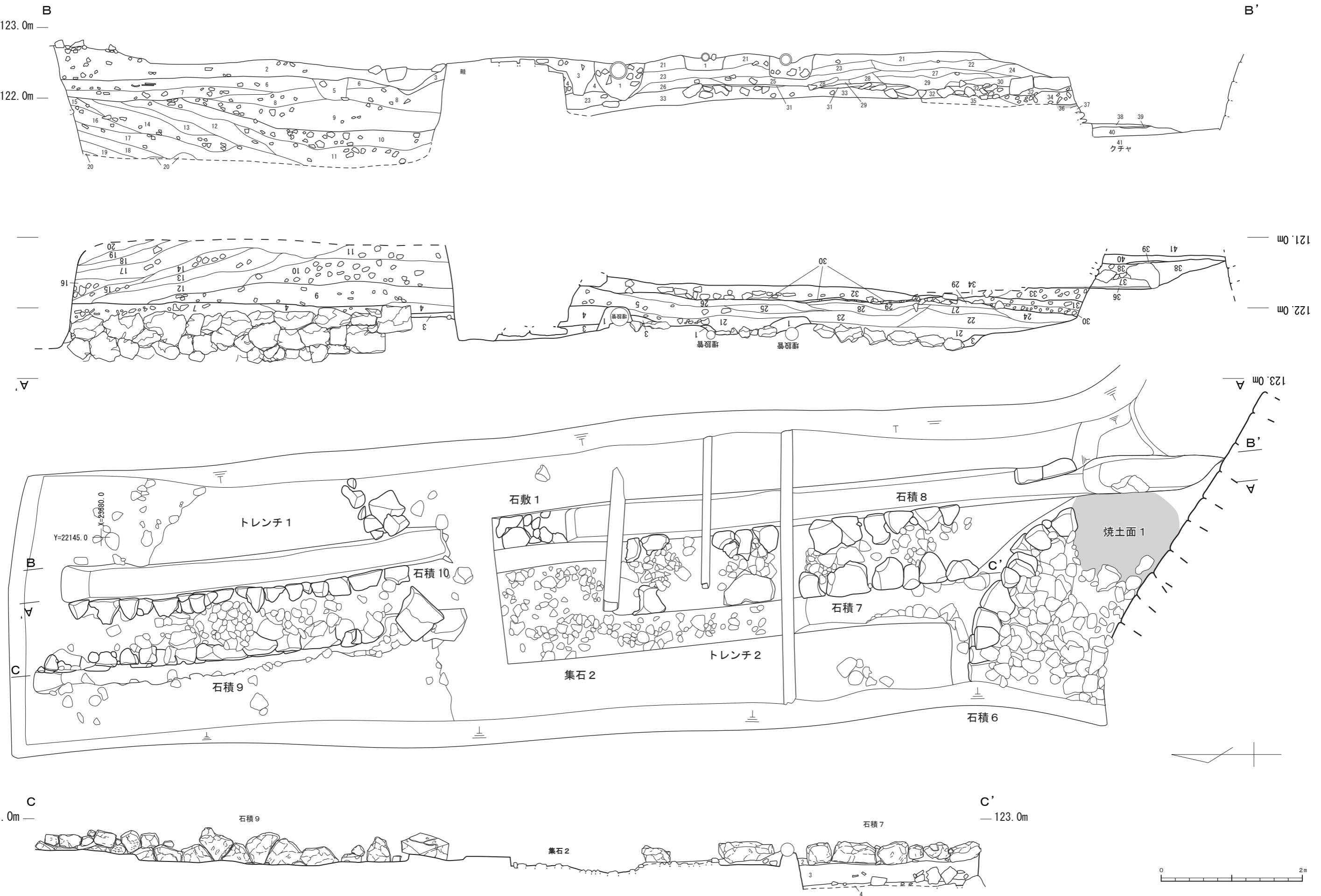
写真 28 平成 16 年度調査石積み 20
(本調査石積み 9)



写真 29 平成 16 年度調査石積み 19・20
(本調査石積み 9・10)

第1表 トレンチ 1・2 断面図土色一覧

層序	土層No.	土色	土質	混入物など	層序	土層No.	土色	土質	混入物など
1層	1 2.5Y4/4	オリーブ褐	シルト～細砂	中～大繊混(琉球大学時の埋土か)	21	7.5YR4/3	褐	シルト	細繊混、貝殻・陶磁器等含
2'層	2 2.5Y3/3	暗オリーブ褐	シルト	中～大繊混、貝殻・陶磁器等多量含、炭含	22	7.5YR4/6	褐	粘土シルト	7.5YR5/8明褐シルトブロック混 貝殻含、炭少量含
2層	3 2.5Y3/1	黒褐	シルト	細～中繊混、貝殻・陶磁器等・炭含	23	7.5YR5/6	明褐	粘土～シルト	
3' A層	4 10YR4/3	にぶい黄褐	シルト～極細砂	細～中繊混、貝殻含	24	5YR4/6	赤褐	粘土～シルト	
	5 2.5Y5/6	黄褐	極細～細砂		25	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト～極細砂	炭少量含
	6	褐	シルト～極細砂	細～中繊混、瓦等・炭含	26	10YR4/6	褐	シルト～極細砂	7.5YR5/8明褐シルトブロック混、炭少量含
	7 10YR4/3	にぶい黄褐	シルト～細砂	中繊混、瓦・貝殻等・炭含	27	10YR4/4	褐	シルト～極細砂	細繊混
	8 10YR4/3	にぶい黄褐	シルト～極細砂	細～中繊混、貝殻含	28	10YR3/4	暗褐	シルト	7.5YR5/8明褐シルトブロック混
	9 10YR4/4	褐	シルト	10YR5/6黄褐粘土ブロック・5Y5/2灰オリーブシルトブロック・中繊混、陶磁器等・炭含	29	7.5YR4/6	褐	粘土～シルト	細繊混
	10 10YR4/6	褐	シルト	7.5YR5/8明褐シルトブロック・中～大繊混	30	10YR3/4	暗褐	極細砂～シルト	7.5YR明褐シルトブロック混
	11 10YR3/4	暗褐	粘土～シルト	7.5YR5/8明褐シルトブロック・中～大繊混、炭含	31	10YR5/6	黄褐	シルト～細砂	細～中繊混
	12 10YR2/4	灰黄褐	粘土～シルト	7.5YR5/8明褐シルトブロック・中砂～細繊混、炭含	32	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	シルト～極細砂	細～大繊混、炭多量含
3' B層	13 10YR3/3	暗褐	粘土～シルト	7.5YR5/8明褐シルトブロック混、炭含	33	2.5Y2/1	墨	シルト	炭化物層、大～巨繊混
	14 2.5Y4/4	オリーブ褐	粘土～シルト	粗砂～中繊混	34	2.5Y5/6	黄褐	粘土～シルト	細～中繊混
	15 10YR4/4	褐	シルト	7.5YR5/8明褐シルトブロック混	35	2.5Y4/6	オリーブ褐	粘土～シルト	
	16 2.5Y4/4	オリーブ褐	粘土～シルト	7.5YR5/8明褐シルトブロック・5Y5/2灰オリーブシルトブロック・中～大繊混	36	10YR4/6	褐	粘土～シルト	細～中繊混(全体的に被熱の為か赤変)、上面は焼土面1
	17 10YR4/6	褐	シルト	10YR3/3暗褐シルト～細砂・細～中繊混、炭含	37	5Y5/2	灰オリーブ	シルト(クチャ)	中繊混
	18 10YR4/3	にぶい黄褐	粘土～シルト	5YR5/2灰オリーブシルトブロック・7.5YR5/8明褐シルトブロック・細～中繊混	38	2.5Y4/4	オリーブ褐	粘土～シルト	大～巨繊以上(50cm程度) 多量含
	19 2.5Y4/2	暗灰黄	粘土～シルト	細繊・7.5YR5/8明褐シルトブロック混、炭含	39	10YR2/1	墨	シルト～極細砂	炭化物層
	20 10YR4/4	褐	シルト		40	2.5Y6/6	明黄褐	中～粗砂	シルト・繩～中繊混
	10層	41 5Y5/2	灰オリーブ		41				クチャ層(地山)



第15図 北区区画石積み（石積7～10）平面・断面・立面図

石敷 1・集石 2 石積 7・8 と 9・10 の空間に位置するもので、後述するように本来は一体の遺構として機能していたものと考えられる。石敷 1 は、トレンチ 1 内の石積 8 よりに標高 122.6 m のレベルで、一辺 20 ~ 40 cm の平石が見られるもので、その上面は水平である。現状では西側には見られないが、それは 0.2 m ほど下がっているためとも考えられる。この西側は、概ね標高 122.4 m 前後で拳大の礫が集中しており、集石 2 と呼称した。この集石 2 は現状で掘り下げたトレンチ 2 に見られる。このような状況から、集石 2 は石敷 1 の下層に位置するもので、その支えのために置かれたものと考えられ、本来はこの範囲は石畳であったものと思われる。

門の可能性 石積 7・8 と 9・10 の両端であるが、前述した石積 10 の南端部が規格的な切石であること、また石積 9 でも原位置を離れるが同様な切石がある。つまり、南北の石積は独立して存在し、その両端が整形された切石で構成され、門の役割をもったと考えるのである。そして、この空間の床面は集石 2 と石敷 1 がセットとして機能した石畳となっていた可能性を指摘したい。なお、首里古地図（第 5 図）では、当該範囲にアーチ門が描かれ、横内図（第 3・4 図）でも、独立した南北の石積みの間に細線が描かれ、これらは門であった可能性を裏付けているものと考える。

構築時期 17 世紀と考えられる北区 3'・3 層の直上に構築され、近世の遺物を含む北区 2'・2 層が根石の部分を覆っていることから、近世の中でも 17 世紀に構築された可能性が高い。

廃絶時期 調査では石積み全体は、戦後以降の 1 層に覆われており特定はできないが、昭和初期の阪谷図（第 6 図）には表現がないので、この段階以前と考えられよう。

4. その他の石積・集石（石積み 5・6・11、集石 1）

現状では内郭城壁に接して存在する遺構である点は共通するが、その方向・位置にまとまりがないので、明確な関係は不明である。便宜上、本項にまとめたが、以下個別に記述する。



写真 30 石積 10



写真 31 石積 7（奥）、石積 8（手前）

石積5 (第16図、図版10-2・3) 南区G1で確認された南東に向けた石積で、内郭城壁である石積2とは40度の角度で接する。現状では、長さ1.5mを測るが、裏込めは調査区端まで見られ、少なくとも3mはあったと思われる。根石のみの1段が確認され、長さ40~40cm、高さ20cmの切石が平積みされている。クチャ層を0.1m掘り込み、その直上に置いている。裏込めは拳大の礫で構成され、石積みの面より1mの幅が見られるが、両面積みであったのかどうかは分からぬ。

石積6 (第15・16図、写真32、図版10-4) 北区F2で確認された内郭城壁の北面する石積2に沿って、幅2mの北面する石積である。長さは現状では2.5m、西側は調査区外となり、東端は完結しておらず後世の破壊にあったものと思われる。面石は高いところで3段確認でき、一辺30~40cmの不整な石でいかた積みもしくは野面積みされる。面石の南側は20~30cm程度の礫が充填された裏込めとなり、石積2に接することになる。

現状では北区7層上面である焼土面1の上に根石が置かれていることと、石積6の面石は3層で覆われていることから、15世紀代に構築されたものと思われる。廃絶時期については、検出時は1層が覆われていたため、特定はできない。

石積11 (第13・14図、写真33) 南区HE・GE4で確認された東面する石積で、南端は石積2と接している。南北方向に伸びる石積で、北側は調査区外であるが、現状の長さは1.2mを測る。クチャ層の直上に置かれ、一辺20~40cmの方形の石で1段分確認できる。内郭城壁である石積2よりは新しいもしくは同時に作られた可能性が考えられるが、別の古い石積の一部が残されたとも考えられる。

集石1 (第11図、図版10-5) 南区GE1・2で確認された2.5mの範囲に拳大の礫がクチャ層の直上に集中して見られる。調査区外に伸びる可能性もあるので全容は明確ではないが、何らかの石積みの裏込めや造成土の一部の可能性も考えられる。検出時には1層で覆われていたため時期は特定できない。

5. 焼土面(焼土面1・2)

焼土面としたものは、地面が赤変しており、火を受けたと考えられる地点で、2基確認した。

焼土面1 (第15図、図版9-4) 北区のF1・2で確認されたもので、現状では石積6の東側に径1.5mの範囲で見られる。トレント1断面の状況からみると、北東側に広がるものと思われる。北区7層上面で検出され、その標高は121.9mである。形成時期は、5・6層に覆われているため、15世紀代と考えられる。

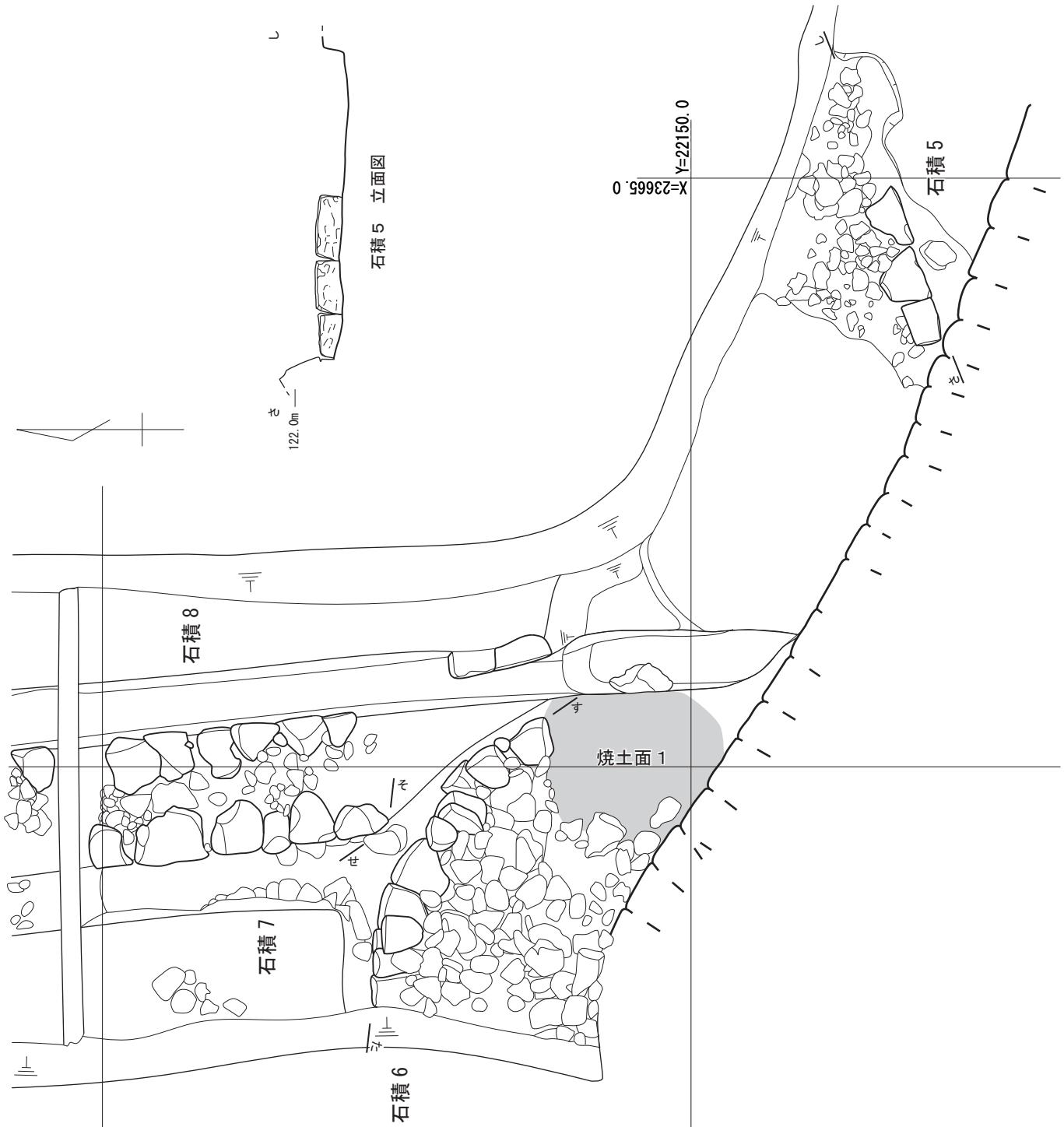
焼土面2 (第13・14図 図版7-2) 南区のGE3で確認されたもので、現状ではGE3南北畦の南北2m、東西1mの範囲に見られる。GE3南北畦の東西両側は1層が堆積しており、後世の破壊が及んでいるため、その全容は不明である。南区2層上面で検出され、その標高は123.0mである。形成時期は、1層に覆われているので特定できないが、焼土面1とその様相が類似しているので、同時期の可能性も考えられるが、隣接地区の状況も検討する必要があろう。



写真32 石積6



写真33 石積11



第16図 石積 5・6 平面・立面図

第4節 遺物

遺物の種類としては、中国・ベトナム・タイ・韓半島、本土産の各陶磁器、沖縄産陶器、近代陶磁器、土器、瓦、壇、金属・骨・貝・石の各製品、玉類、貝類遺体、脊椎動物遺体が出土している。破片数は7,996点の内、陶磁器類が6,702点、瓦が847点である（第57表）。

今回の調査区においては、戦後以降の堆積土である1層のみであった南区と、トレーナーにより層序で捉えられた北区に分けて報告する。そこで、各遺物の概要・分類を述べてから、各地区及び層序の様相を説明する。

1. 遺物の概要・分類

本項では、瓦・壇・ガラス玉・円盤状製品を除いた出土品について、その概要と分類について説明する。一方、これらは図・観察表などを一括にしたほうが説明しやすいため、便宜上、種類ごとに述べることとした。

①中国産陶磁器

中国産陶磁器には、主体的なものとして青磁・白磁・青花・褐釉陶器、少数なものとしては色絵・瑠璃釉などを見られる。以下、種類ごとに説明する。

1) 青磁

総破片274点を数える（第2表）。碗・皿については、分類記号を瀬戸・仁王・玉城・宮城・安座間・松原による沖縄出土分類（2007、以下2007分類）に基づいている。盤については、本資料で便宜的に分類を設けた。それ以外の器形については、個別に説明する。

碗 V～VII類が出土している。

V類 底部を釉剥ぎするものが主体で、底部は全体的に重厚で、釉が厚いことが特徴である。釉は緑色が強く、素地も白色で硬質である。外面文様で、0類（無文）、1類（蓮弁）、2類（横帯文）、3類（その他の文様）があり、IV類よりは有文が増えている。3類は今回見られなかった。

V-0類 今回は口縁が外反するもの（1）、直行するもの（236）がある。

V-1類 外面に蓮弁文を描くもの。花弁の幅が2～3cmの広いもの（3）それより小さいもの（233）がある。

V-2類 外面に横帯文を施すもの。今回は雷文で内面に草花文が施されるもの（235）がある。

VI類 底部は小型化する一方厚みが増すもので、高台の抉りが深いものである。釉はV類よりも薄く、蛇の目釉剥ぎも見られるが、高台途中までしか掛からないものなどが多くなる。外面文様は、0類（無文）、1類（蓮弁文）、2類（横帯文）で、0類と2類は今回は見られなかった。また内底面に印花文がみられるもの（7）が出土している。

VI-1類 いわゆる細蓮弁文を施すもので、今回は底部片のみが出土しており、底部を釉剥ぎするもの（5）、無釉のもの（6）がある

皿 V類が出土しており、釉・素地などは碗と同様の特徴を示しており、説明を略する。以下、分類ごとに器形や文様について説明する。

V-0類（241） 口折口縁で、被熱のためか釉調ははつきりとはしないが、厚く施釉される。内面は見込みの端に陵を持ち、草文が施される。

V-1類（240） 口折口縁で、外面に片彫りの連弁文が施される。外底面は蛇の目釉剥ぎがなされる。

盤（243）は鰐縁口縁で端部が上方に長く伸び、内面に幅2mm間隔の蓮弁状の凹みが施される。

（244）は鰐縁口縁で端部をわずかに上方に向け、稜花状となっている。内面口縁部下部に稜花に沿う三条沈線が施される。

（242）は直口口縁で、口縁部は肥厚し、内面に幅5mmの蓮弁状の櫛描文を施している。

底部は碁笥底のもの（9）と高台をもつもの（223）が出土している。

酒海壺（246）は身で、外面の口縁部下に唐草文風の横帶文を施す。

（221）は蓋で、碗のV類と特徴が類似する。外面に連弁状の櫛描文を施している。

その他 外面が無釉で腰折れの特徴からVI類と想定される香炉（239）、外面に窓上の文様を施す壺の胴部（245）がある。

第2表 中国産青磁集計表

合計／点数		地区／層序／グリッド																			
		南区				北区															
		1層			1層				2'層		2層		3'層								
器種	部位	IE3~5	IE5	G1	GE1	GE3	D1	D1·2	D2	E1	E2	F1	D·E·F1·2	F2	D1·2	D2	E2	D2	3'層	3'A層	3'B層
碗	口	36					1	3		1	1				2	5	2	1			
	胴	41			1	1	2	1	2	2	1	3		1	1	1	4	4	1		
	底	8		1	1						1				1			1			
皿	口～底																	1			
	口	5		2						1	1				1			1			
	胴	4	1	1						1					1		1				
	底		1												1						
盤	口	2		1							1	1			1		2		1		
	胴	1				3					1	1			1		1		1		
	底	5																			
	高台														1						
香炉	口	1																			
	底																	1			
壺	口														1						
	胴	5		1																	
酒会壺	口																				
瓶	口	2																			
	胴																	1			
蓋	口	1															1				
器台？	胴																	1			
不明	胴																				
	不明	1																			
小計		112	2	4	3	2	5	2	5	3	3	9	1	2	3	4	5	15	1	9	4
合計															7		5				

合計／点数		地区／層序／グリッド												不明	合計						
		北区								3層											
		3層	3層上			3層下			(1層+3層下+3層上)	3'層+3層下	3層+3層下	3層下+3層上	5層	6層							
器種	部位	F2	E1	F1	F2	F1	F2	E·F1	F1	D2+F1	F1·2	E·F1	E1	F1	F1						
碗	口	2	3	4		5	1	1	1								69				
	胴	1	5	6		3	1							2	1		1	87			
	底	2	1	1			1											18			
皿	口～底												1					2			
	口	2	1	1		3											18				
	胴			2														11			
	底																	1			
盤	口	1	1	1		1	2		2		1	2						17			
	胴		1	5	1	3									1			20			
	底			1			3											9			
香炉	口																	1			
	底																	1			
壺	口																	1			
酒会壺	口		1															7			
瓶	口			1														2			
	胴																	1			
蓋	口																	2			
器台？	胴																	1			
不明	胴					3												3			
	不明																	1			
小計		6	15	20	2	18	2	7	1	1	2	1	1	1	1	1	274				
合計						75							3	1	1	1	274				

2) 白磁

総破片 97 点を数える(第3表)。景德鎮窯系・福建産のものは、森田(森田 1982)、田中克子(2003)・新垣力(2005)、徳化窯系のものは陳(1999)の各研究を参考に分類を行った。以下、産地ごとに分類し、分類 2007 の分類記号があるものはこれを付した。

景德鎮窯系 碗・小碗・皿・壺・袋物が出土している。破片 21 点を数える。

磁器質で胎土には小さな間隙が見られ、釉調は青白色・灰白色のものが多い。

(15) は胎土・釉調から景德鎮窯系と考えられる壺で、釉調は青白色で、外面に陽刻の草花文を施す。

(16) は小碗で、腰折れ形である。

(17) は端反口縁の碗で、粗製でロクロ目が顕著となっている。

福建産 碗・皿、可能性があるものとしては瓶もある。破片 27 点を数える。

福建省各地で生産されたもので、田中の研究により各類の窯が明らかになっている。

C群 胎土は灰色で軟質のものが大半で、高台の抉りが浅く厚手の内湾する一群で、福建省閩江流域の閩清窯や南平茶窯などが産地とされている。碗・皿があるが今回は皿のみが出土している。3つに細分されているが、今回はそのうちC-3類群が出土している。

C-3群 内底面が平坦で、口縁を外反させるものである。今回は碗の底部が出土しており、内底面が平坦で、印花文が施される(10)。

D群 陶器質だが胎土のきめが細かく失透釉が施釉され、底部は厚いが高台は低く全体的に小型の一群である。

福建省閩江流域の邵部四都窯が生産地とされる。(249) は抉り高台の皿で、外面下半部分は露胎している。

D'群 胎土・釉調がD群と類似している一群だが、釉が全体に掛けられず露胎しているのが特徴である。器形には幾つかのタイプがあるが、今回出土したものは玉縁口縁となる鉢(12)、蛇の目釉剥ぎされる碗(14)があり、これらは釉調が緑色がかるものである。

その他 (250) は瓶で、胎土がD類またはD'類に類似していることから福建産とした。

徳化窯系 釉は白く精良な胎土をもつもので、清代に福建省徳化窯周辺で生産と考えられるものである。碗、小碗、皿(18)、レンゲ(19)がある。破片 49 点を数える。

第3表 中国産白磁集計表

合計／点数			地区／層度／グリッド																		合計	
			南区			北区												不明				
			1層			1層		2'層		2層		3'層		3' B層		3層上		3層下				
産地	器種	部位	IE3~5	H·IE5	G1	D1	D2	F1	D2	E1	E2	D2	D1·2	D2	E1	F1	F2	F1	F1	F1	1層	
景德鎮	碗	口	1																		1	
		胴	1																		1	
	小碗	口	1																		1	
		底	1																		1	
	皿	口	2			1			1												4	
		胴	2																		2	
	壺	胴																			10	
徳化	袋物	胴																			1	
	不明	胴																			1	
	碗	底	1																		1	
		口	17																		18	
	小碗	胴	10																		10	
		底	2			1															1	
	皿	口～底				1															4	
福建		口	2																		2	
		底	2																		2	
	レンゲ	胴	1																		1	
	不明	胴				2	5	1	1												10	
	碗	口	3																		3	
		胴	7						1												8	
		底	2		1																3	
	皿	口																			2	
		胴																			1	
		底	2																		3	
	小皿	胴	1																		1	
		底	1																		1	
	袋物	胴	1																		2	
	鉢	口	1																		1	
	瓶	底														1					1	
	不明	胴		1																	1	
	小計		61	1	2	2	7	2	1	1	1	1	3	1	2	3	3	1	2	1	97	
	合計		64			11			1	2			5				9		2	1	2	97

3) 青花

総破片 519 点を数える（第4表）。明代、清代に分け、更に細分した。

明代 碗・皿・瓶・盤が出土している。産地は大半が景德鎮窯だが、漳州窯系もある。

景德鎮窯系 碗・皿について、小野正敏（小野 1982）や柴田圭子（柴田 2011）や森隆（森 1995・2005）の研究を参考にして、時期的に I～III類の3つにまず分けた。その際、I・III類については、小野分類と該当させるには検討が必要と考えたので、個別には対照させていない。II類については、小野・森分類に該当するものについてはその記号を示した。該当しがたいものは、個別に特徴を示した。

碗・小碗 碗が破片数 75 点、小碗が破片数 3 点を数える。

I類 首里城跡京の内 SK01 や二階殿地区で出土した青花の一群で、小野分類では B 1 群やそれに文様構成が類したもの、柴田により明代早～中期に位置づけられたものとした。

I-1類 端反碗で、小野 B 1 群に含まれるものもある。文様は、外面に唐草文（247）、宝相華（248）、内面に四方櫻文（247）などがある。

II類 小野分類で C・D 群とされた明代中期の青花の一群で、本州地域で通例見られるものである。今回は、実測できる資料は見られなかった。

III類 いわゆるペンシルドローイング（細線描き）や細線内をダミ塗りする技法が用いられ、器壁は非常に薄いもので、碗だけでなく小杯（32・33）もある。口縁は端反に受けのあるもの（23）もある。文様は、外面に花鳥文（21）、芙蓉手（23）、草花文（32）などが描かれる。これらは、森の研究などで 16 世紀後半～17 世紀前半と考えられるものである。

皿 破片数は 14 点を数える。III類に相当するものは出土していない。

I類 碗と同様の特徴をもつ一群で、内底面に靈芝文が描かれる大型の端反皿（37）と外面に芭蕉文と思われる文様を描くもの（196）がある。

II類 小野分類の B 1 群と同様の特徴をもつ端反皿で、唐草文を描くもの（224）がある。

漳州窯系 福建省漳州窯周辺で生産されたと考えられる資料で、軟質で釉・呉須が鈍いものが多い（福建博物館 1997）。時期的には、明末清初とされ、16 世紀後半～17 世紀代とされている。破片で 16 点を数える。碗・皿・鉢・盤が確認され、碗は直口するもの（225）と見込みに花芯文を描く底部（31）もの、また盤は内面に牡丹唐草を描くもの（36）がある。

清代 德化窯系と窯は限定できないが福建・廣東系のものがあり（新垣 2003）、破片数 396 点を数える。

德化窯系 胎土は白磁と同様で白く精良で、透明釉で光沢が強いことが特徴である。碗には、大きく外反するもの（22）、外面に花唐草文を描くもの（29）などがある。小碗には外底面に「大明成化年製」の銘があるのも（35）がある。また皿には腰折皿（39）などがある。

福建・廣東系 胴部下半や底部が露胎する一群で、破片数 198 点を数える。碗は基本的に直口碗で、アラベスク風の文様を描くもの（27）などがある。底部では見込みが広く蛇の目釉剥ぎがされたものがある（28）。

第4表 中国産青花集計表

合計／点数			地区／層序／グリッド																	
			南区						北区											
			1層			1層+			1層						2'層					
			琉大石 垣裏込	石積1・2裏込	G1	GE1	GE3	IE3～5	C2	D1	D2	D1・2	E1	E2	F1	F2	F1・2	D・E・ F1・2		
产地	器種	部位	IE3～5	IE5	H・IE3 ～5			IE3～5									D2	D1・2		
景德鎮	碗	口	26						1			1					1	2	2	
		胴	24									1								
		底	12																	
	小碗	口										1								
		胴																		
	皿	口～底		1																
		口	1																1	
		胴	1																	
		底	2										1							
	盤	底																		
		壺																		
		瓶											1							
	小皿	口	1																	
		不明	口	1																
	徳化	口～底	1																	
		碗	65																	
		胴	72		1			2				2	1							
		底	18																	
		小碗	底	1																
		口～底	3																	
		皿	6			1														
		胴	2																	
		底	12		1			1												
		小皿	口	1																
		杯	口	1																
		小杯	底	1																
福建・廣東	碗	口～底	1																	
		口	86	1								1		1		2				
		胴	63									1	1		1	3				
		底	27																	
		鉢	胴	1																
漳州	碗	口	5																	
		胴	3																	
		底	1																	
		皿	口	2																
		鉢	胴	2																
不明	碗	口	1																	
		小杯	底	1																
小計			449	3	2	1	1	2	1	1	4	4	3	2	3	2	7	1	3	
合計				459									30				3			

合計／点数			地区／層序／グリッド																合計	
			北区																	
			2層			3'層			3層			3層上			3層下			5層	南区+ 北区	不明
			D1	D2	E1	E2	F2	D2	F2	E1	F1	F1	F1	IE3～5 +F1						
产地	器種	部位	口			1												35		
景德鎮	碗	胴																26		
		底					1											14		
		小碗	口															2		
	皿	口～底			1													1		
		口			1													4		
		胴																5		
		底																4		
	盤	底																1		
		壺																2		
		瓶																1		
徳化	碗	口～底																1		
		口																69		
		胴																78		
		底																1	19	
		小碗	底															3		
	皿	口～底																2		
		口																1	15	
		胴																1		
		底																1		
		小皿	口															1		
福建・廣東	碗	口～底																1		
		口	1															69		
		胴		1														71		
		底			1													29		
		鉢	胴															1		
漳州	碗	口																2		
		胴																1	1	
		底																1		
		皿	口															2		
		鉢	胴															1	1	
不明	碗	口																1		
		小杯	底															1		
小計			1	2	2	4	1	1	1	1	2	2	1	1	7	519				
合計				10			2			6			1	1	7	519				

4) 褐釉陶器

破片数 1,733 点を数え、そのほとんどが壺である（第 5 表）。分類は、形態よった分類 2007 に該当するものはその記号を使用し、該当しないものは個々に示した。

2類 玉縁状の口縁をもつ縦耳の大型壺で、直立氣味に立ち上がる頸部をもつ。（46）は口縁部端を折り返し玉縁状にしており、頸部はやや斜めに立ち上がる。

3類 玉縁状の口縁をもつ横耳の大型壺で、口縁部（45）と耳の部分（55）が出土している。また（54）は（55）と同じ特徴をもつことから 3 類とした。

5類 断面方形状の口縁部をもち（48・49・251）、大きく肩部が張り、下半は窄まり上げ底状の底部（50）の無耳の大型壺である。ロクロ目が顕著であること、胎土は精良で白色粒を含むことも大きな特徴である。釉薬は暗オリーブ色のものが多い。

その他 上記の分類に該当しないものを個別に述べる。

（44）は、薄胎施釉陶器の小壺で、茶入と考えられる。

（51・52）は、胴部に突帶または波状突帶を貼り付け、その下部に沈線文を施すものである。

（53）は、玉縁口縁をもつが耳を伴わないと 3 類と断定できなかった。

（56）は、外面に平行タタキがあるのが特徴である。

（58）は、比較的安定した底部片であるが、内・外底面が平坦となりしっかりとした高台をもつ器形から 6 類と断定できなかった。

5) その他の中中国産陶磁器

上記以外の中中国産陶磁器には、色絵・瑠璃釉・緑釉陶器などがある（第 6 表）。

色絵 碗、小碗、瓶の破片 5 点が出土している。（41）は赤で楓と思われる葉が描かれた小碗で、内面に鋭利な道具で「丹楓美落寒」と削り込まれている。

瑠璃釉 碗 5 点、小碗 2 点、瓶 1 点が出土している。（43）は外面が瑠璃釉の見込みの広い小碗である。

緑釉陶器 外面に七宝文を陽刻する緑釉陶器（197）が出土している。

第 5 表 中中国産褐釉陶器集計表

合計／点数		地区／層序／グリッド																							
		南区										北区													
		1層		1層								2' 層													
器種	部位	IE3～5	IE5	IE4	H・IE5	H・IE3	HE4・ ～5	HE5	GE1	GE2	G1	GE1	GE3	GE2	C2	D1	D2	D1・2	E1	E2	F1	F2	D+E・ F1・2	D2	D1・2
壺	口	31							1		1											1			
	胴	864	7	9	2	13	6	2	1	19	7	6	6	4	25	19	15	14	17	40	12	7	30	17	
	底	18				1				2													1		
	耳	1																							
	小壺	底	1																						
不明	胴	3																							
	小計	918	7	9	2	14	6	2	1	22	7	7	6	4	25	19	15	14	17	40	12	7	32	17	
合計		1001										153								49					

合計／点数		地区／層序／グリッド																								
		2層				3' 層			3層					4・5層				5層				6層	7層	D～F1	1層	
						3' 層	3' B層	3層	3層上	3層下	F1	F2	F1					F1	E1	E2	F1	E+F1	F1	F1		
壺	口	1	4	22	1	95	63	74	3	36	31	2	27	2	9	107	4	17	4	1	1	1	11	40	1658	
	胴					2		1						1											29	
	底																								1	
	耳																								1	
	小壺	底																							4	
	不明	胴	1																						1	
	小計	2	4	22	1	98	65	76	3	37	31	3	27	3	9	109	4	17	4	1	1	1	1	11	1733	
	合計	29				239				104				9				135				1	1	1	11	1733

②ベトナム産陶磁器

青花 3 点、白磁 1 点が出土している（第 8 表）。

青花 碗 1 点、鉢 1 点、袋物が 1 点出土している。

(227) は碗で、文様を青色と灰オリーブ色と異なる顔料を用いて描く。今回出土した破片の文様は確認できなかつた。

③タイ産陶磁器

褐釉陶器 436 点、鉄釉陶器 1 点、土器 6 点が出土している（第 8 表）。

褐釉陶器 褐釉陶器の器種は四耳壺と碗、鉢が出土している。産地・分類を向井分類（向井 2003・2012）に基づいて行い、これに当てはまらないものは類例や特徴からタイ産と判断した。

四耳壺 頸部の特徴からシーサッチャナライ窯とメナムノイ窯に分類し、さらにメナムノイ窯については胎土の特徴から細分した。433 点出土している。

シーサッチャナライ窯（59・60・63・252） 口縁端部は上下に肥厚し、頸部基部に最小径をもちラッパ状に大きく外反する長頸壺が主体である。胎土は粗く、赤褐色と白色粒を少量含む。釉は黒色～オリーブ黒色。
(63) は大型の底部で、内面にはヘラ削りが見られ、底面は平坦である。

メナムノイ窯 頸部中部に最小径をもち口縁部下で水平・斜め上方に外反する短頸壺と、頸部基部から内傾する短い頸部をもつ無頸壺が存在する。今回、無頸壺は確認されていない。短頸壺は胎土・混入物の特徴によって、2 タイプに分類されるが今回、I 類は確認されていない。また (64) は口縁が外反し、胴部上面に明確な稜をつくりその部に圈線を施している壺で、分類にはあてはまらなかつたが胎土の特徴からメナムノイ窯とした。

II 類（61・62・253） 胎土は粗く、断面は灰黒色や灰白色、灰赤色と様々である。胎土には褐色粒・赤褐色粒・白色粒を含んでおり、暗オリーブ色の釉が施釉される。

碗 2 点出土している。(59・60) は胎土が粗く灰色、白色粒を少量含み、釉はオリーブ黒色という特徴からシーサッチャナライ窯のものと推定される。(59) は外反口縁で釉はオリーブ黒色だが、内面口縁部下が無釉となっている。

(60) はハの字に開く高台で、全面に褐色の釉が施釉される。

鉢 1 点出土している。(266) は玉縁口縁となるもので、外面の施釉は露胎する部分が多く、縞模様となっている。

土器 6 点全てが半練土器で、1 点が壺の身で、それ以外は蓋となっている。(66) は薄く赤褐色で外面に多条の傾斜する沈線を施すものである。

④高麗青磁

小片のため、図を掲載していないが、高麗青磁の碗胴部片が 1 点出土している（第 9 表）。

⑤産地不明陶器

産地が特定できないがおそらく沖縄や本土産ではないもので、17 点を数える（第 7 表）。(67) は軟質な胎土の壺で、外面に白化粧を施釉し、青釉で花文を、緑釉で草文を施している。(68) は焼成が良好で胎土は灰黒色の壺で、内外面に褐色の釉が施釉され、口縁部は逆三角形状となっている。

第6表 中国産その他の陶磁器集計表

合計／点数		地区／層序／グリッド								合計	
		南区		北区							
		1層	GE2			2層	3層				
		琉大石 埋表込				3層上	5層				
種類	器種	部位	I-E3～5	D1	D2	D-E-F1・2	F2	E1	E1		
中国産絵磁器	碗	口	1							1	
	小碗	口～底	1							1	
		口	3							3	
中国産瑠璃釉磁器	碗	胴	3							3	
		底	2							2	
	小碗	底	2							2	
中国産翡翠釉磁器	瓶	胴	1							1	
		口	2							2	
		皿						1	1	3	
中国産天目	碗	口									
		胴	1	1	1			1		4	
中国産三彩陶器	不明	胴	1							1	
		袋物	胴				1			1	
中国産綠釉陶器	瓶	胴	1							1	
		口	1							1	
	不明	胴	5	1						6	
中国産無釉陶器	急須	胴	1							1	
		底	1							1	
		足	1							1	
小計			27	1	1	1	1	1	2	1	
合計			28	1	1	1	1	2	1	35	

第9表 高麗青磁集計表

地区／層面／グリッド	南区	合計
	1層	
合計／点数	琉大石 埴蔵込	
器種	部位	IIE3~5
碗	胴	1 1
合計		1 1

第7表 産地不明陶磁器集計表

合計／点数		地区／層序／グリッド									合計	
		南区		北区								
		1層	GE1	2' 層		2層	3' 層		3層			
		硫化石 埴込表					3' 層	3' B層	3層上	3層下		
器種	部位	IE3～5		D1	D1・2	D2	E2	D2	D2	E1	F1	
壺	口	1										1
	胴	1										1
	底	1										1
蓋	口		1									1
	胴	1		1	1	1	2	1	2	1	1	11
	不明	1							1			2
小計		5	1	1	1	1	2	1	3	1	1	17
合計		6		1	2		2	4		2		17

第8表 タイ・ベトナム・ミャンマー産陶磁器集計表

合計／点数			地区／層序／グリッド															
			南区								北区							
			1層								1層							
			琉大石 垣裏込				石積1・2裏込		集石1		G1	GE1	GE2	GE3	2'層			
種類	器種	部位	IE3～5	IE4	IE5	H・IE5	HE4・ IE5	GE2	D1	D2	D1・2	E1	E2	F1	F2	D・E・ F1・2	D2	D1・2
タイ産褐釉陶器	碗	口	1															
		底	1															
	壺	口	2								1							1
		胴	178	1		1	1	3	2	4		1	5	9	4	1	5	11
		底	4													1		4
タイ産鉄釉	鉢	口																
タイ産半練土器	合子?	胴	1															
ベトナム産白磁	壺	胴	2															
ベトナム産青花	蓋	口	1						1									
ミャンマー産褐釉陶器	碗	胴	1															
	鉢	胴																1
	袋物	胴					1											
	壺	胴																
	小計		191	1	1	2	1	3	2	5	1	1	5	9	4	1	5	13
	合計								208							47		18

⑥本土産陶磁器

本土産陶磁器は総点数 170 点を数え、そのほとんどは I E 3～5 旧琉球大学石垣裏込めより出土している（第 10 表）。そのうち、口縁、底部、口縁～底部、撮み部から集計した全 74 個体中で主要なものとして、26 個体の肥前系の施釉碗や 13 個体の同染付碗が挙げられる。なお薩摩の壺・甕は、点数上では最多の 63 点を数えるが、個体数は 6 個体のみである。他方、香炉や鉢・擂鉢・瓶は点数が少なく、器種組成上では碗・皿といった食膳器に偏る傾向が見出された。以下、図示した資料を中心に、産地ごとに傾向を概説する。

肥前系 (69～77・79・80・198・228・254)

総破片 81 点、54 個体を数える。『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会 2000）に依拠すると、概ねⅢ～Ⅳ期（17 世紀中葉から後葉）の肥前系製品が海外に搬出された最盛期の製品と（73～75、77・79・198・228・254）、Ⅴ期（18 世紀以降）の中でも近世後半にかかる資料（71・72・80）とに大別される。特に前者には、主要な輸出品として東南アジアの各地でも出土事例が報告されている見込荒磯文碗（79）と日字鳳凰文皿（198）をはじめ（大橋 2004）、内野山窯の銅緑釉碗（75・228）や現川窯の小杯（77）が認められる。また時期は判然としないが、青磁碗（69）や白磁碗（70）も得られている。

備前 (78)

擂鉢 1 点が確認された。口縁部外帶下方の垂下がそれほど目立たないが、灰色で石英等が多量に混じるいわゆる山土を胎土とする点から、乘岡編年における中世 5 期（15 世紀中葉から末）頃と推定される（乗岡 2005）。なお県内の類例として、天界寺跡や首里城御内原北地区などが挙げられ、年代的にも県内出土の備前焼の年代傾向とも概ね一致している（池田 2006）。

関西系 (81～84)

京焼を中心に畿内に産地が推定される一群で、総破片数 11 点、7 個体が得られている。時期は不明なものが多いが、京焼の色絵香炉（82）、信楽焼とみられる壺（81）、いわゆる赤土部が施釉される丹波焼の蓋（83）など多様な産地の製品が確認される。

薩摩 (85～88)

総破片数は 71 点に上るが大半は壺・甕の胴部片で、個体数は 10 個体を数える。器種組成は壺・甕に加えて鉢や水注、土瓶、蓋が得られているが、土瓶と壺・甕以外はいずれも 1 個体のみである。鉢は苗代川系に特徴的な、胴上部に搔き落としによる文様が描かれる資料（86・87）が得られている（鹿児島県埋文 2003）。

南九州産土師皿 (199)

粘土紐による積み上げでてづくね成形を行った広底の土器皿で、胎土が淡黄色で非常に精良であり沖縄のものではなく、本土産のものと考えられる。類似するものとして、首里城跡木曳門地区で出土した陶質土器に分類されたものにあり（県埋文 2001 b）、器形の特徴からは薩摩などの南九州産の土師皿と考えられる（瀬戸 2005）。

産地不明 (89)

宜興窯の製品に類似した無釉の急須（89）が得られているが、底部にロクロとみられる痕跡がみられることから本土産に含めた。

近代陶磁器 (161～165) 破片数 78 点を数え、碗・皿が圧倒的に多い（第 11 表）。残りが良いものについて写真を掲載した。染付碗（161）、色絵皿（162）、型紙刷りの皿（163）、銅版刷りの合子身（164）、小杯（165）がある。

第10表 本土産陶磁器集計表

合計／点数				地区／層序／グリッド												不明 合計					
				南区						北区											
				1層			石積1・2裏込			GE3			1層			2層					
				IE3～5	IE4	IE5	H・IE3 ～5			D1	D2	D1・2	E2	F1	F2	D・E・ F1・2	E1	E2	E1・2	F2	
肥前	青磁	碗	底	1															1		
		不明	胴	1															1		
	白磁	碗	胴	1															1		
		瓶	底																2		
	染付	碗	口～底	1															1		
			口	5								1							8		
			胴	5							1	1							9		
		皿	底	3									1						4		
			口	1								1							2		
			鉢	胴	2														2		
	色絵	瓶	胴	3															3		
		碗	口	1															1		
		小皿	胴	3															3		
		蓋	口	1															1		
		振み	1																1		
	施釉	碗	口～底	1															1		
			口	16								1					1		18		
			胴	1															2		
		小碗	底	9															9		
			口	1															1		
			皿	1															1		
		瓶	胴	1															2		
		蓋物蓋	口	1															1		
		小杯	底	1															1		
肥前(現川)	薩摩	陶器	鉢	口	1														1		
			壺	胴	1														1		
			壺	口	3														3		
			壺	口	1														1		
			壺・蓋	胴	55			1	1										57		
			急須	底	2														2		
			土瓶	口	1														1		
			蓋	口	3														3		
			振み	2															2		
備前	関西	施釉	無釉	擂鉢	口	1													1		
			碗	胴		1													1		
			皿	口	1														1		
			壺	口	1														1		
			香炉	口	1														1		
			急須	胴	1														1		
			蓋	口～振み	1														1		
			不眞	振み	1														1		
			信楽?	壺	胴	2													2		
			鉄絵	皿	口	1													1		
南九州産	土師器	皿	口～底													1					
			口	1															1		
			底	2															2		
九州	陶器	不明	胴	1															1		
不眞		急須	底	1															1		
小計				149	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1	2	1	1	2	170	
合計				153						10						4		1	2	170	

第11表 本土産近代陶磁器集計表

合計／点数		地区／層序／グリッド												不明 合計		
		南区						北区								
		1層			石積1・2裏込			GE1			GE2			GE3		
		IE3～5	IE4	H・IE5				D1	E1	F1	F2		D・E・ F1・2	E1		
碗	口～底	1													1	2
	口	9		2					1	1	2	1			2	18
	胴	7	1		1				2	1		4				16
	底	7					1									8
皿	口～底	2														2
	口	1														1
	底	3														4
碗・皿	底	2														2
蓋	口	2														2
	胴	2														2
	つまみ						1									1
小杯	口～底	1														1
壺	胴															1
鉢	口															1
合子	口	2														2
袋物	胴	1														1
不明	胴	10	2		1	1										14
小計		50	3	2	1	1	1	4	2	2	5	1	1	5	78	
合計		58						14						1	5	78

⑦沖縄産陶器・土器

沖縄産陶器・土器には、施釉陶器、無釉陶器、土器、陶質土器、瓦質土器がある。

1) 施釉陶器

方言では「上焼（ジョウヤチ）」と称され、施釉や絵付けを生地土に直接行うA類と、化粧土の上から行うB類で、前者が圧倒的に多い。器形には、碗・小碗・皿・鉢・鍋・火炉・火取・壺・急須・袋物・瓶・秉燭・香炉がある。破片数1720点を数え、碗、鍋が圧倒的に多い（第12表）。実測できたものについてその特徴を述べる。なお以下、注記しないものはA類である。

碗（90・91・200・201） 灰釉碗（91・200・201）、鉄絵碗（90）が見られる。

小碗（92）（92）は、白化粧されたB類の面取りされた小碗である。

皿（94）（94）は、白化粧されたB類の皿底部である。

鉢（98～101） 鉢には様々な形態があり、胴部が直線的に窄まるもの（98）、筒型のもの（100）、内湾するもの（101）がある。

鍋（102・103・111～113） 身は球形に近い胴部に外反する口縁に耳状の把手がつくものである。（102）はやや直線的な胴部で、（103）は丸みがあるものである。蓋は、頂部の把手が、円形の高台状のもの（111・112）、おそらく輪状に貼り付けたもの（113）がある。

火炉（97） 方言で「ヒールー」と称される、口縁内面に突起を設け、急須等に火をかけるいわゆる焜炉である。（97）は、直線的な筒型のものである。

火取（95・96） 方言で「ヒートウイ」と称される、筒型の高台付き杯で、いわゆる火入れである。（95）は内湾する口縁で斜格子が描かれるもの、（96）は直角に腰折れする器形の底部である。

急須（104～109） 注口をもつ楕円形の胴部をもつもの。短頸で広口のもの（104・106・107・108）と、細い頸部をもち内面にも厚く釉を掛けられたもの（105）があり、後者は酒器と考えられる。（109）は、短頸で広口のものの蓋である。

秉燭（114） 脚部付きの小杯で、受け部に円柱状の突起がつく秉燭が見られる。（114）は、秉燭の脚部である。

香炉（115）（115）は、黒釉が掛けられた筒型香炉である。

蓋（93・110） 対応する身が不明な蓋として、返しと撮みがつくもの（110）、つかないもの（93）がある。

2) 無釉陶器

方言では「荒焼（アラヤチ）」と称され、比較的高温で焼成された焼き締め陶器で、自然釉などが掛かるものもある。この内、通有のものより色調が鈍く硬質で自然釉などが掛かる一群が、近年首里城跡で一定量確認され始めている湧田古窯跡で生産されたと考えられている「初期無釉陶器」がやはり出土しており（県埋文2010、新垣2011）、A類とする。それ以外の通有の無釉陶器をB類とする。以下、A類とB類に分けて概要を説明する。

なお、両者合わせての破片数は975点を数え、鉢・擂鉢・壺・甕が主体である（第13表）。

A類 先述した「初期無釉陶器」と考えられる一群で、内外面の色調が灰・暗褐色で、自然釉・泥釉が掛かるものも見られる。器形の細部にはバリエーションが見られる。碗・鉢・擂鉢・壺・火取・火炉がある。

碗（116～118） 口縁がやや屈曲するもの（116・118）と、口縁が直口し大きく開くもの（117）がある。

鉢（119・120・122） 口縁上部に波状文が描かれ胴部が内湾するいわゆる水鉢形のもの（119・120）、口縁が直立するいわゆる洗い形のもの（122）がある。

擂鉢（121） 口縁が短くわずかに外反するタイプである（121）。

壺（123～130） 短頸形のもの（123・124）、胴部が球状に張る小形のもの（125）、玉縁口縁のもの（126）、肩部に縦耳を有するもの（127）、中国産褐釉陶器の角形口縁に類似無頸のもの（130）がある。（128・129）

第12表 沖縄産施釉陶器集計表

第13表 沖縄産無釉陶器集計表

合計／点数		地区／層序／グリッド																				
		南区						北区														
		1層		琉大石 垣裏込				石積1・2裏込		G1	GE1	GE2	GE3	琉裏込+石 積1・2裏込		1層						
器種	部位	IE3～5	IE4	IE5	H・IE5									IE3～5+ HE4・IE5	D1	D2	DI・2	E1	E2	F1	F2	D・E・ F1・2
碗	口～底	1		1																		
	口	13		1																		
	胴	4																				
	底	6																				
皿	口～底	3																				
	口	11																				
	底	3																				
鉢	口	65									1	1				1	1	1	2			
	胴	6														2	2	2	2	3	2	
	底	12																				1
鉢？	胴	74									1	1										
	口	44														1						1
	胴	64									1	1				1	3	1	1	4	2	1
擂鉢	底	14									1								1			1
	口～底	1																				
	口	23														1						
壺	胴	51		1												2	4	1	1	1	2	3
	底	22									1	1				2						
	耳	1																				
	胴	4														3	4	2	2	1	1	
壺・壺	胴	3									1					2						
	底	19																				
火炉	口	31																				
	胴	12																				
	底	2																				
	耳	1									1											
火取	口～底			1																		
	口	2																				
急須	口	7																				
	胴	2																				
	注口	1																				
	把手	4	1													2						
瓶	口	1																				
	胴			1																		
蓋	口～底	1																				
	口	2																				
不明	胴	122	1	1		1																
	小計	841	2	6	1	3	2	4	9	1	9	22	3	9	12	6	11	4				
合計		869												76								

合計／点数		地区／層序／グリッド												不明	合計		
		北区						3層									
		2' 層	2層		1層+ 2層	3' 層	3層		5層	1層							
器種	部位		D2	E1	E2	F2	D-1	D2	E1	F1	F1	E1					
碗	口～底													2			
	口													14			
	胴													4			
	底							1						7			
皿	口～底													3			
	口													11			
	底													4			
鉢	口													72			
	胴	2	4	1										1	27		
	底													1	16		
鉢？	胴													76			
	口													46			
	胴			2										1	82		
擂鉢	底													17			
	口～底													1			
	口													29			
壺	胴	1	1	2										1	69		
	底													1	28		
	耳													1			
	胴		2	1				1						20			
壺・壺	底							1						5			
	胴													216			
火炉	口													19			
	胴													32			
	底						1							13			
	耳													3			
火取	足													2			
	口～底													1			
急須	口													2			
	胴													2			
	注口			1										8			
	把手				1									1			
瓶	口													1			
	胴													1			
蓋	口～底													1			
	口													2			
不明	胴								1	1				128			
	小計	3	7	6	3	1	1	2	1	1	2	3	975				
合計		3		17		1		4			2	3	975				

は底部で、全形は不明だが胎土等よりA類と考えた。以上のように、器形の細部に様々なものがあり、定型化されていない印象を受ける。

火取 (131・132) 筒型のもので、胴部が長いもの (131) と短いもの (132) がある。

火炉 (133～135・229) 全て底部であるが、脚部をもち火取よりは大きいため、火炉とした。脚部の形態には、ベタ底のもの (133)、円柱状のもの (134・229)、台形状で大形のもの (135) がある。

B類 内外面が明褐色や赤褐色を呈する通有の無釉陶器である。主なものには、皿・鉢・擂鉢・火炉・壺・甕がある。

鉢 (137) 鎔縁口縁のものである。

皿 (138) 口縁に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと思われる。

蓋 (139) 口が狭く、合わせ口の蓋である。

甕 (140) 大形甕で、内面の縁2辺に漆喰が塗布されており、何らかの再利用を行ったものと思われる。

火炉 (141・146) 口縁内面に突起を有するもの (141)、方形の把手を有するもの (146) がある。

壺 (142) 小型の短頸壺である。

擂鉢 (143～145) 鎔縁口縁のもの (144)、底部 (143・145) がある。

3) 土器

土器は27点を数え、その内訳はグスク土器13点、パナリ焼4点、宮古式土器9点、不明1点となる(第14表)。その内、実測できたものについて説明する。

パナリ焼 (153・154) 鉢 (153) と、小形の壺 (154) がある。

宮古式土器 (156) 壺 (156) は、無頸のタイプである。

不明 (155) 胎土ではパナリ焼もしくは宮古式土器の可能性があるので、把手つきの皿と思われる。

4) 陶質土器

方言で「アカムヌー」又は「カマグアーヤチ」などと称される軟質焼成の土器群である。器形には碗・皿・鉢・鍋・焙烙などが出土している。破片数で571点を数える(第15表)。

碗 (147) 高台が細めの底部である。

皿 (148・150) 灯明皿として使用されているもの (148)、底部が糸切り調整のもの (150) がある。

鉢 (149) 底部である。

鍋 (151) 球状の器形と思われる。

焙烙 (152) 内湾する口縁で、内面には板ナデ痕が顕著である。

5) 瓦質土器

瓦に類した焼成をもつもので、破片数で21点を数える(第16表)。色調が灰色系 (157～159)、赤色系 (160) がある。

火炉 (157) 内面に突起を有し、内湾する器形で、小形のものと思われる。

植木鉢 (158) 繩目文を付し、スタンプによる草花文をもつもので、湧田古窯跡で生産されたものと思われる。

鉢 (159) 内湾する器形の胴部下半で、底面には脚部と穿孔部をもつもので、風炉とも考えられる。

厨子 (160) 繩目文と鋸歯文が施される脚部と底部のつけ根の部分で、家形厨子の一部と思われる。

第14表 土器集計表

合計／点数			地区／層序／グリッド								合計	
			南区		北区							
			1層	1層 GE1		3'層		3層				
			琉大石 垣裏込			3'層	3'B層	3層上				
材質／分類	器種	部位	IE3～5	D2	E2	D2	D2	D1・2	E1	F1		
グスク土器	不明	胴	1	1	2	1	1	1	4	1	13	
	壺	胴	1								1	
パナリ焼	鉢	口	1								1	
	不明	胴	2								2	
宮古式	壺	口	1								1	
	不明	胴	5				1				6	
パナリ・宮古式？	皿	口～底	1								1	
	不明	口	1								1	
産地不明	不明	胴	1								1	
	小計		14	1	2	1	1	2	1	4	1	
	合計		15		3		4		5		27	

第15表 陶質土器集計表

合計／点数			地区／層序／グリッド												合計			
			南区				北区											
			1層		琉大石 垣裏込		石積1・2裏込		G1	GE3	1層				不明			
			D1	D2	D1・2	E1	E2	F1	F2	E1	E2	D1・2	E1	3'層	3層			
器種	部位	IE3～5	IE4	IE5	H・IE5	HE4・ IE5	G1	GE3	D1	D2	D1・2	E1	E2	F1	F2	3'B層	3層上	
碗	口	7																8
	胴	2																2
	底	12	1		1													14
皿	口～底	1																1
	口	9																9
	底	1																1
鉢	口	19																19
	胴	1																2
	底	4																6
鍋	口	21					3											24
	胴						2											2
	底	2																2
	耳	6																6
鍋蓋	口	12																12
	撮み	4																4
急須	口	18																18
	胴	17																16
	耳	2																2
	注口	4																4
	把手	5																5
	蓋・急須	4																4
鍋・急須	胴	232	4	1		1												239
	口	16																17
火炉	胴	119				1		2										122
	耳	1																1
香炉？	底	1																1
焰烙	口	2																2
	壺	2																2
不明蓋	口	1																1
	撮み	2																2
不明	口	1																1
	胴	2					1		2	5	3	1	2	4	3	1	1	27
	底	4																4
	把手																	1
	不明	4																4
	小計	538	5	1	1	2	1	3	7	5	4	1	2	2	3	4	4	1
	合計																	587

第16表 瓦質土器集計表

合計／点数			地区／層序／グリッド								合計				
			南区				北区								
			1層		琉大石 垣裏込		1層 G1		2'層		2層		3'層	4・5層	
			D2	D1・2			E2	F2	D2	F1					
器種	部位	IE3～5	H・IE3 ～5	D2	D1・2	D2	E2	F2	D2	F1					
鉢	口	1													1
	胴	6													7
	底	1													1
火炉	口	1	1												3
	胴			1											1
植木鉢	口	1													1
家形厨子	胴		1				1				1				1
不明	胴	1					1				1				4
	不明				1		1								2
	小計	11	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	21	
	合計	14			1	2		2		1	1	1	1	21	

⑧金属製品・鍛冶関連製品

金属製品には、銅製品・鉄製品が 285 点（第 17 表）、鍛冶関連製品としてるつぼがある（第 18 表）。

銅製品（184～190・203～205・210・230・255～259）

銅製品には、甲冑立物・甲冑金物・鉢・釘・簪・薬莢・砲弾・記章のほか、用途不明のものが見られる。90 点のうち、鍍金されたものは 5 点見られる（187・203・230・258・259）。図化したものについて説明する。

甲冑立物（255） 鍔形台の破片で左右端が欠損している。

甲冑金物（256～258） 全て八双金物で、無文のもの（256）、魚々子が比較的密なもの（257）、鍍金され魚々子と線彫りで草木を描くもの（258）がある。

鉢（259） 鍍金された円頭形で、軸部は二叉に分れている。

釘（186） 平面が半円形の頭部をもつ角釘である。

簪（184） 女性用の側差である。

薬莢（188） 口径 15.6 cm（20 ゲージ）の散弾銃の薬莢底部で、その本体は紙製と思われる。

砲弾（189・190） ライフルマークが残存している砲弾の弾帯で、おそらく爆破した際の破片と思われる。

記章（210） 蔓草で囲まれた中に、縦書きにより「首一」と読める記章である。その字名からは、首里第一尋常高等小学校の校章と考えられる。同校名は、1923（大正 12）年 4 月 1 日から首里第一国民学校に改称される 1941（昭和 16）年 4 月 1 日まで称されていたものである（那覇市 2002）。

用途不明（185・187・203～205） 用途が不明なものを一括した。環頭部をもつもの（185）、把手状のもの（187）、何らかの飾金具と思われるもの（203・205）、環座状のもの（204）がある。

鉄製品（206～208・211～214・231・260～265・269～273）

鉄製品には、甲冑小札・刀子・釘・蝶番・弾丸のほか、用途不明のものがある。

甲冑小札（260・264） 共に孔列が 2 列のものである。

刀子（208・261・270） 基部が細いもの（208・261）、基部が短く孔を有し刃部が幅広のもの（270）がある。

釘（213・265・271～273） 大形の基部に近い部分のもの（213）、その他は長さ 4～8 cm 程度のもの（265・271～273）である。

蝶番（231） 長方形の板状部分に棒状部分が伸びるもので、蝶番などの可動部分と考えた。

弾丸（207） 球状の鉄弾である。

用途不明（206・211・212・214・269） 全て板状製品で、刀子の一部の可能性があるもの（211）、ヘラ状（214）、薄手のもの（212・269）がある。

鍛冶関連製品（191・262・263・268）

鉄滓となるつぼがある。

鉄滓（262・263） 共に碗形滓の一部と思われる。

るつぼ（191・268）（191）は、陶器製の非常に小形の碗状のもので、内面が赤変し銅滴が付着している。

（268）は、二次被熱のためか脆く全体的に白色を呈し、何らかの底部の一部である。外面に赤色の付着物も見られ、るつぼとして使用されたものと考えた。

第17表 金属製品集計表

合計／点数		地区／層序／グリッド																		
		南区			北区															
		1層		G1	GE1	GE3	1層													
材質／分類	器種	琉大石 垣裏込	石積1・ 2裏込				C2	D1	D2	D1・2	E1	E2	F1	F2	D・E・ F1・2	D2	E1	E2	D2	D2
IE3～5	HE4・ IE5																			
青銅製品	簪	2																		
	甲冑金物																			3
	甲冑立物																			
	覆輪							1			1									1
	釘	3																		1
	鉢										1									1
	記章																			
	砲弾	2																		
	砲弾片	11						1	3	1		1	1							
	薬莢	1																		
	不明	14	1	1	1	1	2	4	1	3	1	1	3	1	5		1	2		
鉄製品	甲冑小札																			1
	刀子							1												
	蝶番	1																		2
	釘	14	1	1	1			3	1		2	2	8				5	13		
	弾丸																			1
	鉄滓																			
	不明	12	3				1	16	1	1	2		1	1	1	1	1	5		
	小計	60	1	4	1	1	1	5	27	5	4	7	4	12	3	6	5	21	7	2
	合計		67						68							6	26			9

合計／点数		地区／層序／グリッド											合計	
		北区			3層								合計	
		3層		3層上		3層下		4・5層	5層	6層	1層	1層		
材質／分類	器種	D2	E1	F2	E1	F1	F1	E・F1	F1	E1	F1	F1		
青銅製品	簪												2	
	甲冑金物												3	
	甲冑立物	1											1	
	覆輪												3	
	釘												3	
	鉢				1								2	
	記章												1	
	砲弾												2	
	砲弾片												18	
	薬莢												1	
	不明	1	3	3		4	1					1	54	
鉄製品	甲冑小札	2				1	1	1					6	
	刀子			1									3	
	蝶番												3	
	釘	1	5	6	13	3	22	15		9		124		
	弾丸												1	
	鉄滓			1			1	4		1			2	
	不明		6										56	
	小計	4	1	6	16	4	14	9	28	15	2	9	1	285
	合計			54				28	17			9	1	285

第18表 るつば集計表

地区／層序／グリッド		南区		北区		合計
		1層	5層	1層	5層	
合計／点数						
器種	部位	IE3～5	E1			
不明	口		1		1	
	底			1	1	
	合計			1	1	2

⑨錢貨

中国錢 8 点、日本錢 4 点、産地不明 37 点の計 49 点出土している（第19表）。宮城の時期区分（宮城 2008）に依拠して年代的な傾向を検討すると、推定も含めた場合、IV期の後半（宋～元・金）3点、V期（明）4点、V - VI期（無文錢）24点、VI期（江戸・清朝～近代）4点、時期不明 14点となる。また総点数自体が少ないものの、出土地点では、無文錢や輪錢が1層やIE3～5旧琉球大学石垣裏込め内に、またF1グリット4・5層では明錢に限られる点が認められる。一方で溶着や被熱による変形も確認され、前者は5点、後者は7点を数える。

なお、内外縁がないものや極めて薄いもの、外形や孔形がいびつなものなど、模鋳錢の可能性があるものも見られる。

中国錢 (176・215)

北宋～南宋 北宋では初鑄 995 年の至道元寶（176）が確認される。また金で初鑄 1178 年の大定通寶は「定」の字形より推定（215）、同じく南宋で初鑄 1241 年の淳祐元寶は「元」字形から推定した。ただし後者は前述に挙げる模鋳錢とみられる。

明 初鑄 1368 年の洪武通寶と初鑄 1408 年の永樂通寶と推定される資料が得られている。

不明 具体的な錢種は不明だが、残存の文字より中国錢である錢貨が 1 点確認される。

日本錢 (177・216・217)

江戸時代 初鑄 1636 年の寛永通寶（177）が得られているが、残存部位の制約により新古を区別できる資料は確認できない。

第19表 錢貨集計表

合計／点数				地区／層序／グリッド												合計	
				南区			北区										
				1層		GE1	1層			3'層	3層			4・5層			
産地	時代	銭種	年度	IE3～5	IE4	IE5	C2	D1	E1	F1	D2	E1	F1	E・F1	F1	F1	
北宋	至道元寶	995年	1														1
金	大定通寶？	1178年							1								1
南宋	淳祐元寶？	1241年	1														1
明	洪武通寶	1368年								1							2
	洪武通寶？	1368年									1						1
	永樂通寶？	1408年															1
不明	大〇〇寶	不明	1														1
日本銭	江戸	寛永通寶	1636年	1					1			1					2
	明治	一錢															1
	昭和	一錢							1								1
不明	無文錢		9			1											10
	輪錢		13					2									15
	不明		1	1	1						2		2	1	1	3	12
	小計			27	1	1	1	2	1	1	1	2	2	3	1	1	5
	合計				30				5			2		7			49

近代 一銭硬貨が2点得られている。内訳は明治13年の紀年銘があるいわゆる龍一銭(216)、昭和4年の紀年銘がある一銭(217)となる。

産地不明(178～183・218)

無文錢 内外縁がなく薄く、形状もいびつなものが多い(178～180)。また溶着した資料(181)も確認される。

輪錢 複数枚が溶着する資料(183・218)や、鑄バリの残る資料(182)が確認される。

不明 残存部位が4分の1程度であったり、摩耗・変形により文字が解読できない資料が該当する。

⑩その他の製品

その他の製品には、骨製品・石製品・貝製品といった素材別で分けたもののほかに、碁石・煙管・ボタン・円盤状製品・ガラス玉といった形で分けたものを一括した。

骨製品(209)

ブラシ状に連続した切込みを施した骨製品が1点のみ得られている(第20表)。

石製品(193・267)

石球と硯が各1点確認された(第22表)。

石球(267) 細粒砂岩(ニービヌフニ)製で全周に敲打痕が残される。首里城跡御内原北地区や渡地村跡にはほぼ同じ大きさの石球が得られており(県埋文2007・2010)、これらはともに石弾と推定されている。

硯(193) 赤色頁岩製で硯背に崩れた「赤間」の一部が確認される。岩崎の分類に従うと、片切彫りによる文字及び字形の特徴から、幕末頃の赤間硯であると見出される(岩崎2005)。この時期の赤間硯は首里城跡より出土する硯のうちで最も多い傾向が認められている(大堀2013)。

貝製品(194・232)

最少個体数170点の巻貝が得られているが(第60表)、そのうち人為的加工が残るものとして2点が出土している(第21表)。

(194)は、有孔のヤコウガイ殻で、中央部の大きな穴と上部の小孔の2孔が設けられている。前者の鋭利な破碎面に対して後者は孔の破断面に丸みをもつことから、穿孔後も貝が生息していた可能性が挙げられる。これら特徴から、養殖および貝製品素材作出後の残核と推定される。首里城御跡内原北地区などに類例がある(県埋文2010)。

(232)は、ヤコウガイ蓋の下縁部に敲打により剥離面を整形したものである。

煙管 (166～175・202)

全 15 点が得られている（第 23 表）。本土では真鍮製品が主流だが、沖縄は陶器製品が主流という地域性があり、当地区においても同様の傾向にある。陶器製品は那覇市教育委員会（那覇市 2000 b）や石井の分類基準（石井 2011）を参考に煙管を材質や形状による分類案（第 17 図上）、また金属製品は古泉の編年観（第 17 図中）（江戸遺跡研究会 2001）を用い、各分類ごとに詳述する。

陶器製

雁首 I 類 穿孔途上の未成品（202）1 点のみが得られている。瓦質で、各面の風化度合の差から、何らかの

瓦質製品もしくは瓦片の再加工を意図したものと思われる。同様の未成品が浦添城跡で確認されている（浦添市教育委員会 1985）

雁首 II 類 多面体に面取り整形したもので、無釉のものが大半を占める。当地区では無釉の 4 点が得られている。面取りは 8 面のもの（169）と 10 面以上のもの（166～168）とに大別される。当地区では確認されないが、首里城御内原北地区をはじめ 6 面のものも多出する。

雁首 III 類 小形・丸形のパイプ型で施釉される特徴をもつ。当地区では 3 点が得られており、釉薬や胎土から中国産と想定される 1 点（171）と沖縄産の 2 点（170・172）とが確認される。

吸口 II 類 小口が肥大する形状を II 類とすると、当地区では II 類のみ 2 点（173・174）が認められる。

金属製

1 点のみ出土している（175）。長軸中央で大きく曲がっている上に火皿も欠損しているが、やや首が湾曲する形状から IV 期（18 世紀後半）とみられる。石井の集成、また管見の限りにおいても、沖縄では I 期（17 世紀前半）～II 期（17 世紀後半）までの資料は確認されておらず、III 期（18 世紀前半）以降のものが沖縄にもたらされるようである。

碁石（192・219）

全 2 点が得られている（第 22 表）。ガラス製（219）は上原分類（上原 2004）における鏡餅型、貝製（192）は同分類のレンズ型で貝殻の模様が磨き切らずに残される。

ボタン（220）

型造りにより 5 花弁を象った陶製のボタンが 1 点ある（第 24 表）。中城御殿跡で類例がある（県埋文 2011）。

円盤状製品（310～331）

陶磁器や瓦の破片を打ち欠き、円盤状となったもので、合計 22 点出土している（第 25・55 表）。素材別でみると、中国産白磁 1 点（310）、中国産褐釉陶器 8 点（312～319）、タイ産褐釉陶器 1 点（311）、沖縄産無釉陶器 4 点（320～323）、明朝系瓦 8 点（324～331）となる。

ガラス玉（332～338）

7 点出土している（第 26・56 表）。色調別では、水色 4 点（332・333・337・338）、緑色 3 点（334～336）となる。

第 20 表 骨製品集計表

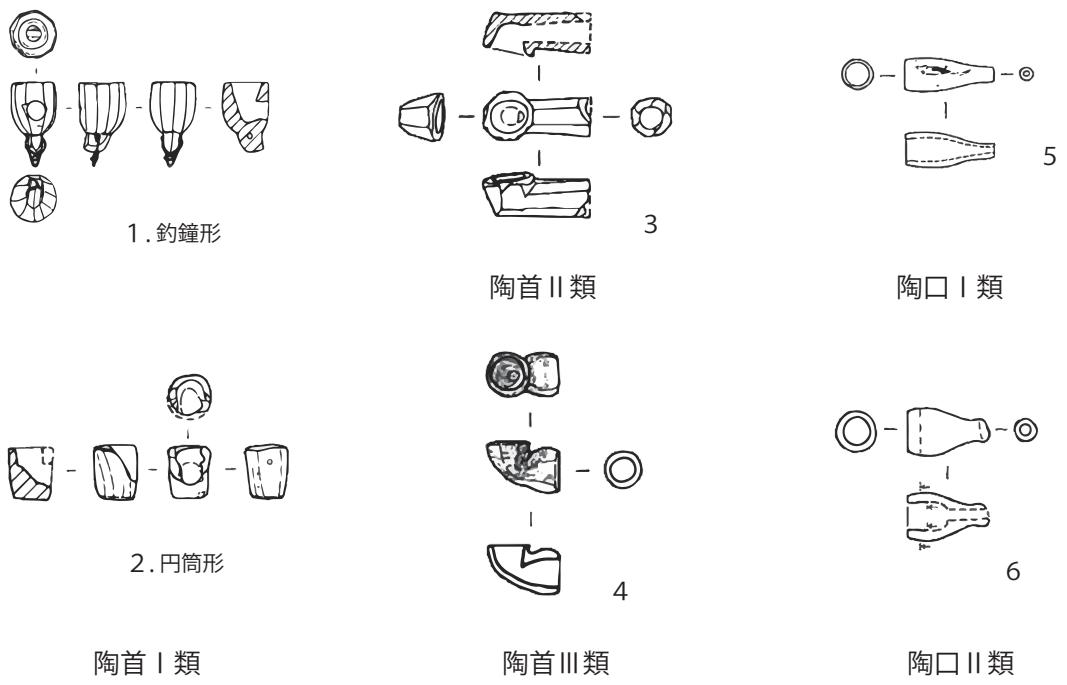
地区／層序／グリッド		北区	合計
合計／点数		1層	
種類	器種	D1	
骨製品	不明	1	1
合計		1	1

第 21 表 貝製品集計表

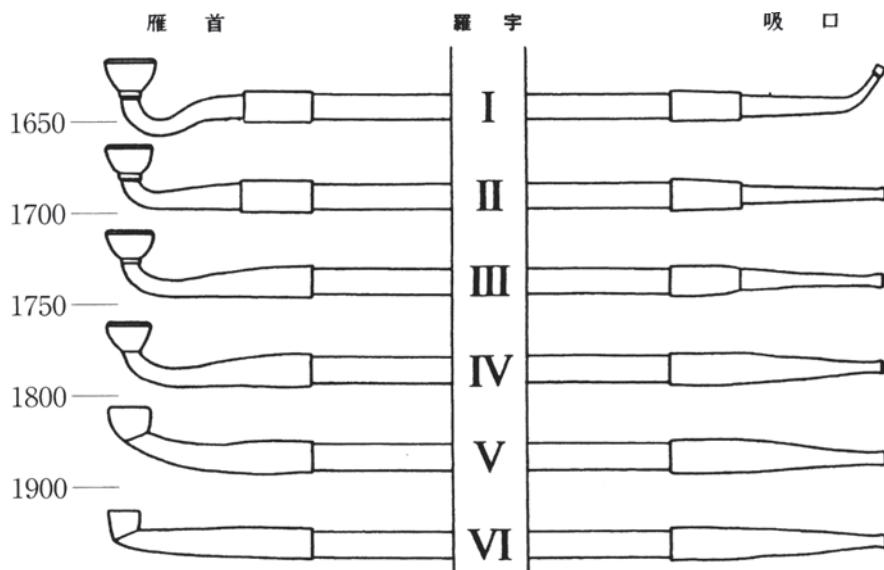
地区／層序／グリッド		南区	北区	合計
合計／点数		1層 琉大石 垣裏込	2'層	
種類	材質／分類	IE3～5	D2	
貝製品	ヤコウガイ	1		1
	ヤコウガイ蓋		1	1
合計		1	1	2

第 22 表 砥・碁石・石球集計表

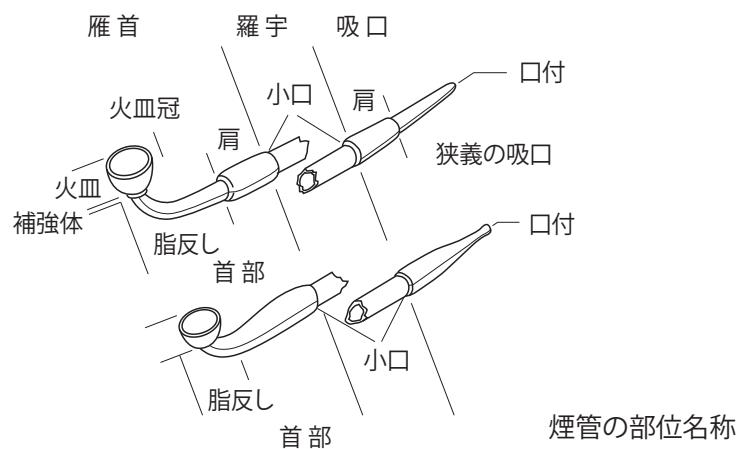
合計／点数		地区／層序／グリッド		合計
		南区	北区	
		1層 琉大石 垣裏込	1層 5層	
種類	材質／分類	IE3～5	F1	F1
硯	赤色頁岩製	1		1
硯	ガラス製		1	1
碁石	貝製	1		1
石球	細粒・砂岩製		1	1
合計		2	1	4



1:古我知原内古墓 2・4:渡地村跡 3:ナカンダカリヤマ古墓群 5:ヤツチのガマ 6:天界寺



江戸遺跡における金属製羅宇煙管の変遷観（江戸遺跡研究会 2001）



第17図 羅宇煙管の分類

第23表 煙管集計表

合計／点数		地区／層序／グリッド			合計
		南区		北区	
		1層	1層		
琉大石 垣裏込		GE3	D1・2	F2	
材質／器種	分類	IE3～5			
瓦質製雁首	I・2類			1	1
	II類	6	1	1	8
陶製雁首	III類	3			3
金属製雁首	一	1			1
陶製吸口	II類	2			2
小計		12	1	1	15
合計		13		2	15

第25表 円盤状製品集計表

合計／点数	地区／層序／グリッド							合計	
	南区	北区							
		1層	2層	3'層	3層	3' B層	3層上		
琉大石 垣裏込									
材質／分類	IE3～5	D1	D2	F2	E2	D2	E1	F1	
中国産白磁							1	1	
中国産褐釉陶器	1	1	1		2	2	1	8	
タイ産褐釉陶器								1	
沖縄産無釉陶器	3			1				4	
瓦	6		2					8	
小計	10	1	2	1	1	2	2	22	
合計	10		4		1	2	4	1	

第26表 ガラス玉集計表

第24表 ボタン集計表

地区／層序／グリッド		北区	合計
		1層	
種類	材質／分類	D2	
ボタン	陶製	1	1
合計		1	1

2. 南区出土遺物（第18～30図、図版11～22、第27～35表）

南区においては、全て1層より出土している。ただ、その中でもIE3～5に堆積した旧琉球大学石垣裏込めより多く出土している。以下、遺物の種類ごとに基本的に図化したものについてその様相を述べる。中国産の各種陶磁器については、「中国産」を省略する。

破片点数では、全てで5,611点、そのうち陶磁器類は5,141点である（第57表）。時代幅としては、14・15世紀の青磁・白磁も見られるが、近世の遺物が圧倒的に多い。ただ、近世の中でも青花では16世紀後半～17世紀前半、17世紀代の沖縄産初期無釉陶器、本土産陶磁器など、前半期のものが一定量見られるのが特徴である。

青磁（1～9） 碗がV類（1～3）・VI類（4～7）、皿（8）、盤（9）が出土している。

白磁（10～19） 福建産は、C3群碗（10）、D群小皿（11）、D'群が鉢（12）・碗（13・14）が出土している。

景德鎮窯系では、草花文が陽刻された壺（15）、碗（17）、小碗（16）がある。徳化窯系では、皿（18）、レンゲ（19）がある。

青花（20～40） 明代の景德鎮窯系は、碗III類（20・21・23）、小杯III類（32・33）、皿I類（37）、瓶（40）がある。漳州窯系は、碗（24・31）、盤（36）がある。明代のものは、（37）を除き、16世紀後半～17世紀前半のものである。清代のものは、景德鎮窯系の小杯（34）、徳化窯系の碗（25・29・30）・小碗（35）・皿（38・39）、福建・広東産の碗（22・26～28）がある。

色絵磁器（41） 德化窯系の小碗である。

瑠璃釉磁器（42・43） 共に徳化窯系の小碗である。

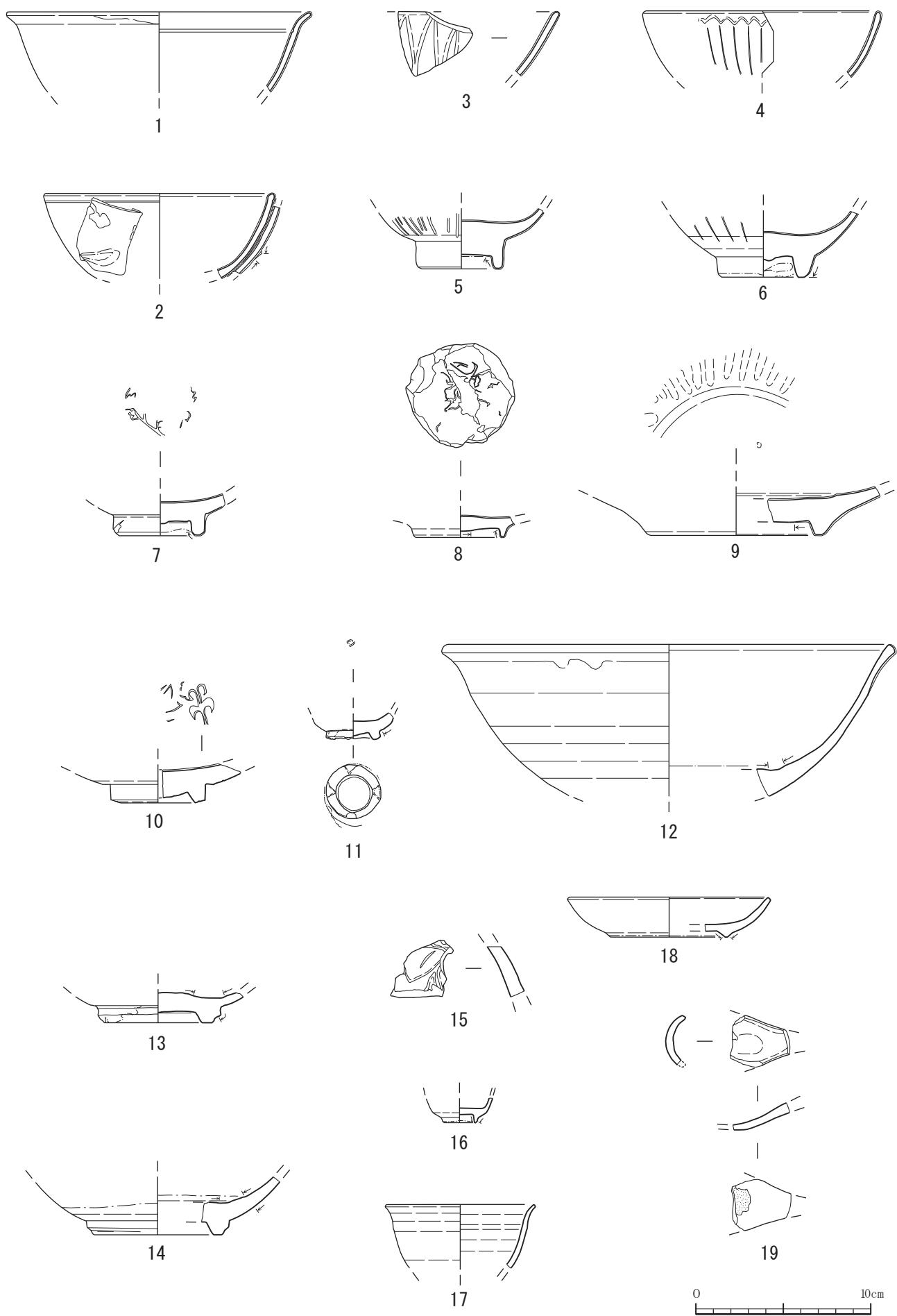
褐釉陶器（44～58） 壺が主体で、2類（46）、3類（45・54・55）、5類（48～50）、6類（47）、その他（51～53・56～58）がある。小壺（44）は、薄胎施釉陶器とも称されるもので、大きく肩を張る茶入とも思われる。

タイ産陶磁器（59～63・64・66） 褐釉陶器が多く、シーサッチャナライ窯系の碗（59・60）・壺（63）、メナムノイ窯系の壺（61・62）、胎土が類する胴部が大きく張る壺（64）、半練土器壺（66）がある。

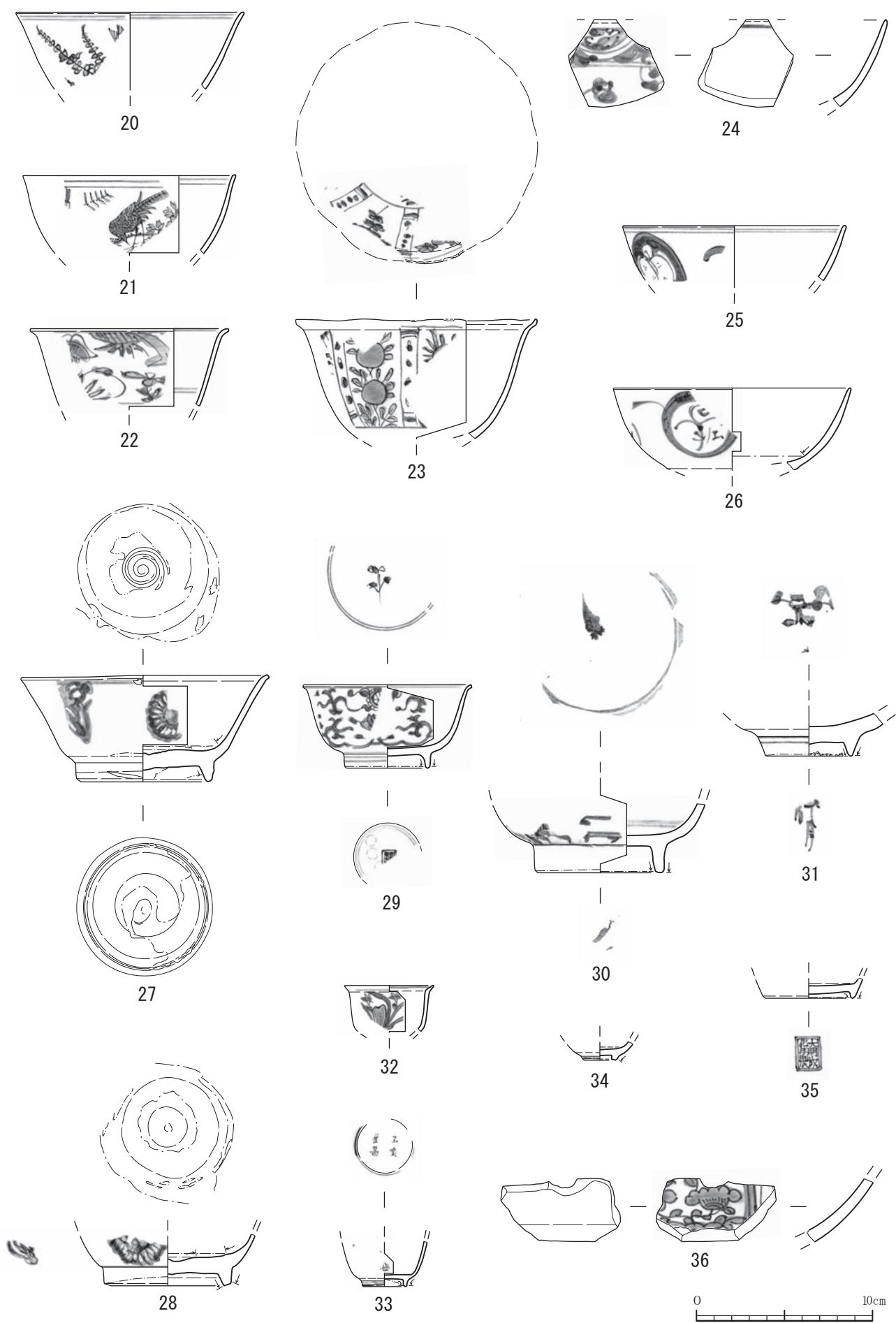
ミヤンマー産陶器（65） 壺の胴部破片である。

産地不明陶磁器（67・68） 軟質の胎土に青釉が掛けられる小壺（67）、口縁が直立する褐釉陶器の壺（68）がある。

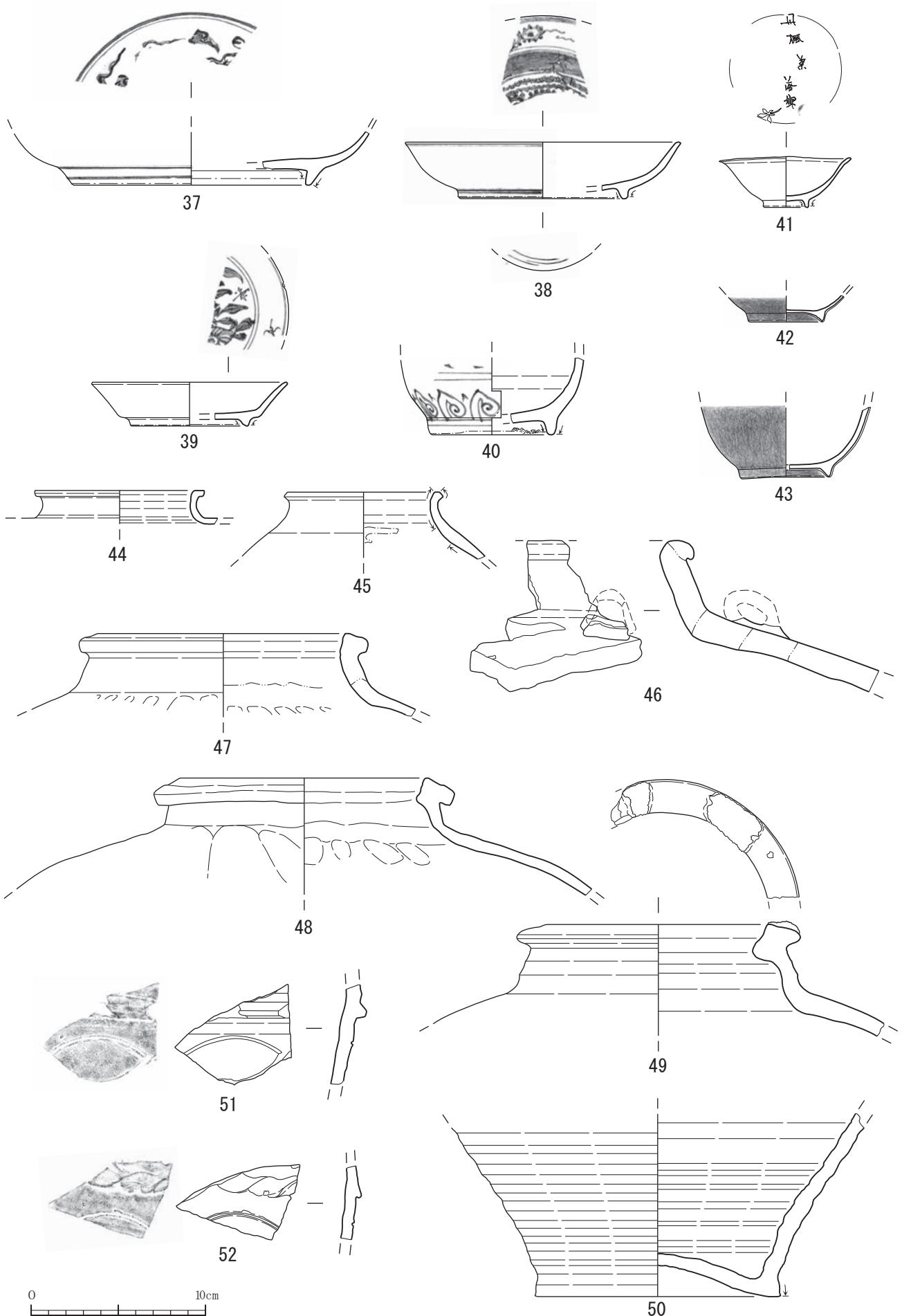
本土産陶磁器（69～89） 肥前系が多く、青磁碗（69）、白磁碗（70）、施釉陶器碗（72～76）・小杯（77）・蓋（71・80）、染付碗（79）があり、概ね17～18世紀代のものである。その他、備前擂鉢（78）、関西系の色絵陶器香炉（82）・施釉陶器蓋（83・84）、薩摩の急須（85）・鉢（86・87）・蓋（88）、産地不明の無釉陶器急須（89）がある。



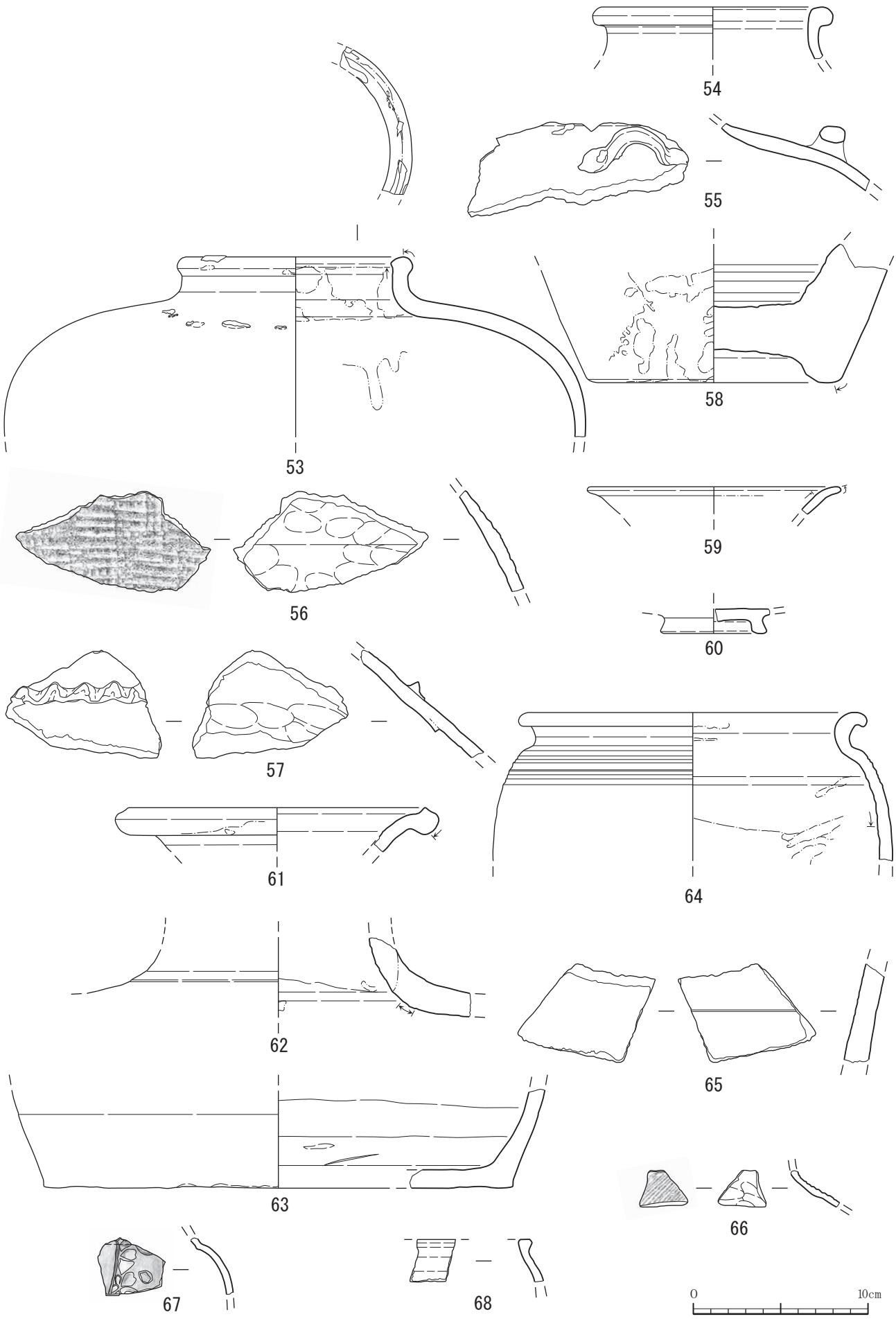
第18図 南区 1層出土遺物（1）



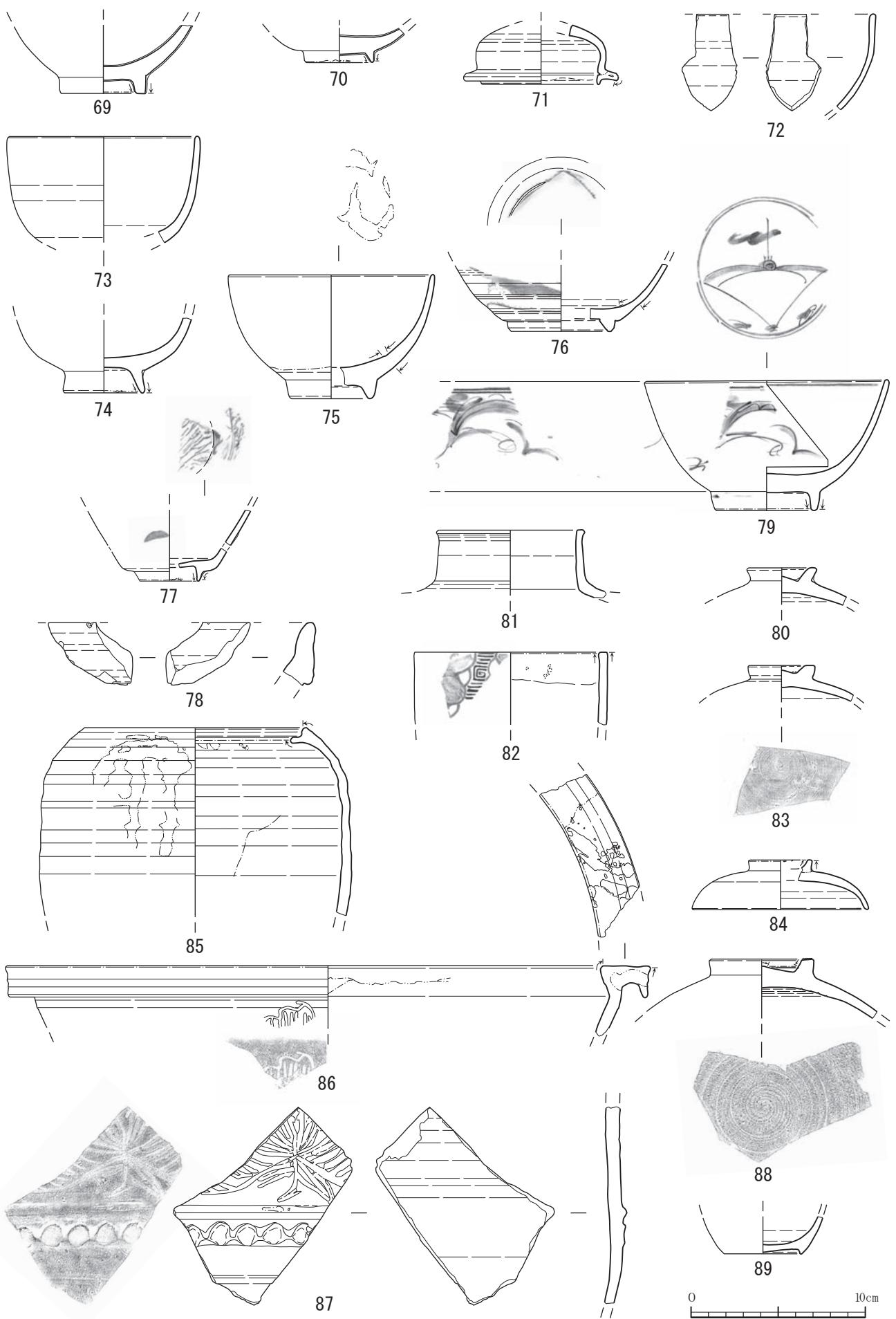
第19図 南区 1層出土遺物（2）※36は地区不明 1層



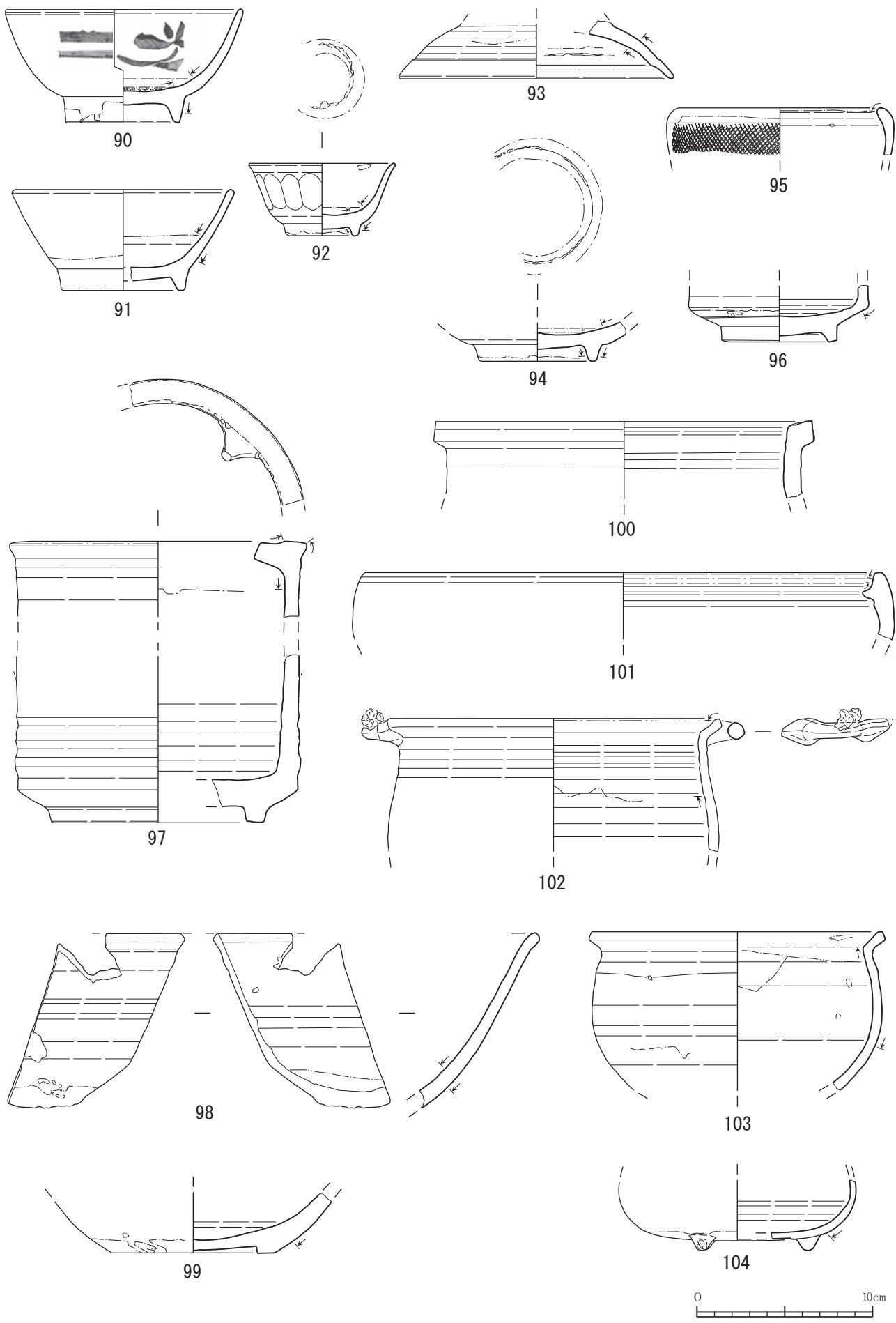
第20図 南区 1層出土遺物（3）



第21図 南区 1層出土遺物 (4)



第22図 南区 1層出土遺物 (5)



第23図 南区 1層出土遺物（6）

備前擂鉢（78）は16世紀代のものでやや古手だが、その他は18世紀以降のものが多い。

沖縄産施釉陶器（90～115） 碗（90・91）、皿（94）、火取（95・96）、火炉（97）、鉢（98～101）、鍋（102・103）、鍋蓋（111～113）、急須（104～108）、急須蓋（109）、秉燭（114）、香炉（115）、器種不明の蓋（93・110）がある。これらは、胎土に直接施釉するA類が大半であり、灰釉や褐釉が多く掛けられるが、少數なものとして鉄絵碗（90）もある。一方、化粧土の上から施釉するB類は少なく、皿（94）・急須（107）がある。

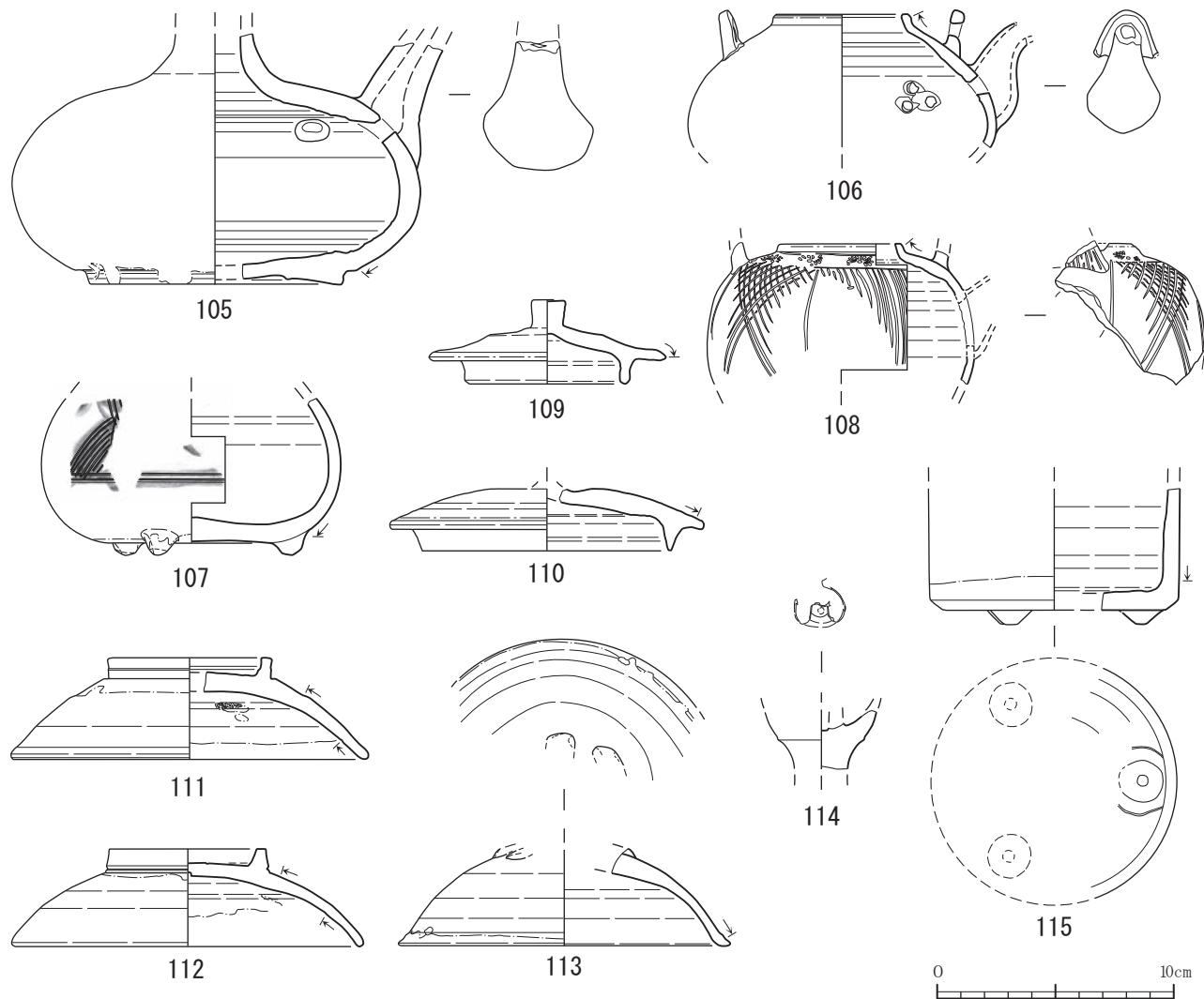
沖縄産無釉陶器（116～146） 今回A類とした「初期無釉陶器」が一定量出土しており、碗（116～118）、鉢（119・120・122）、擂鉢（121）、壺（123～130）、火取（131・132）、火炉（133～135）など、器形のバラエティが豊富である。通有のB類には、鉢（136・137）、皿（138）、器種不明の蓋（139）、大形甕（140）、火炉（141・146）、小形壺（142）、擂鉢（143～145）などが見られる。甕（140）は、破片の状態で内面に漆喰を塗布されており、何らかの再利用が考えられる。

陶質土器（147～152） 碗（147）、皿（148・150）、鉢（149）、鍋（151）、焙烙（152）がある。皿には、灯明皿として使用されたもの（148）もある。

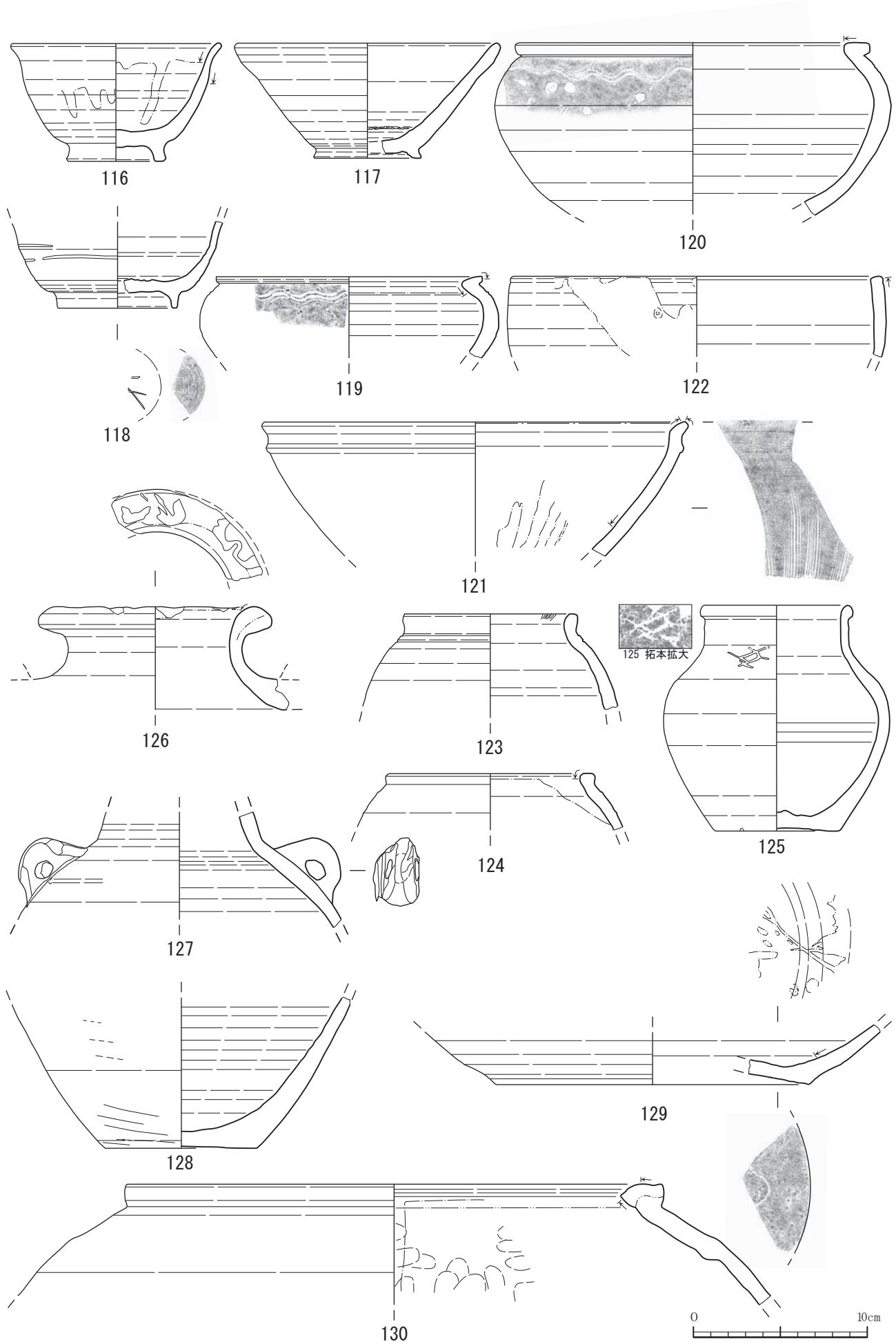
土器（153～156） パナリ焼の鉢（153）・小形壺（154）、宮古式土器の壺（156）があり、どちらかに確定できない把手付皿（155）がある。

瓦質土器（157～160） 火炉（157）、植木鉢（158）、鉢（159）、家形厨子（160）がある。

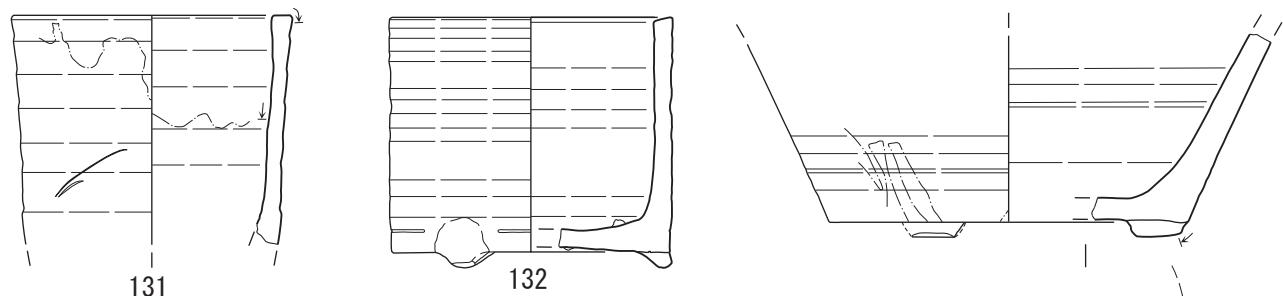
近代陶磁器（161～165） 残りが良いのものには、染付碗（161）、色絵皿（162）、砥部産型紙刷り皿（163）、銅版刷りの合子（164）・小杯（165）がある。



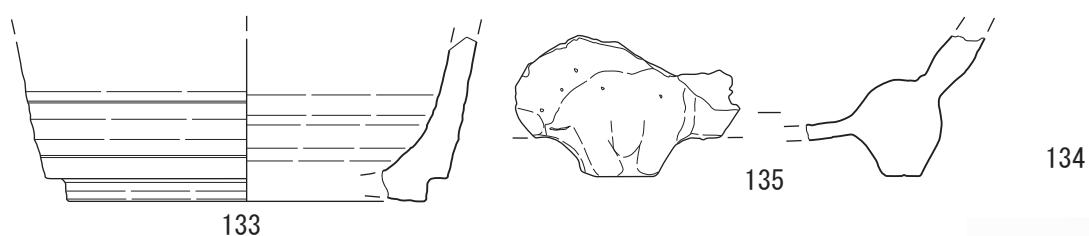
第24図 南区 1層出土遺物（7）



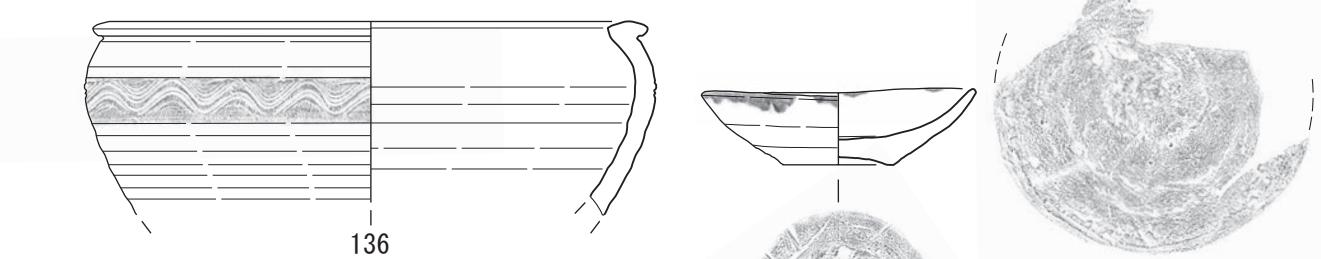
第25図 南区 1層出土遺物（8）



132

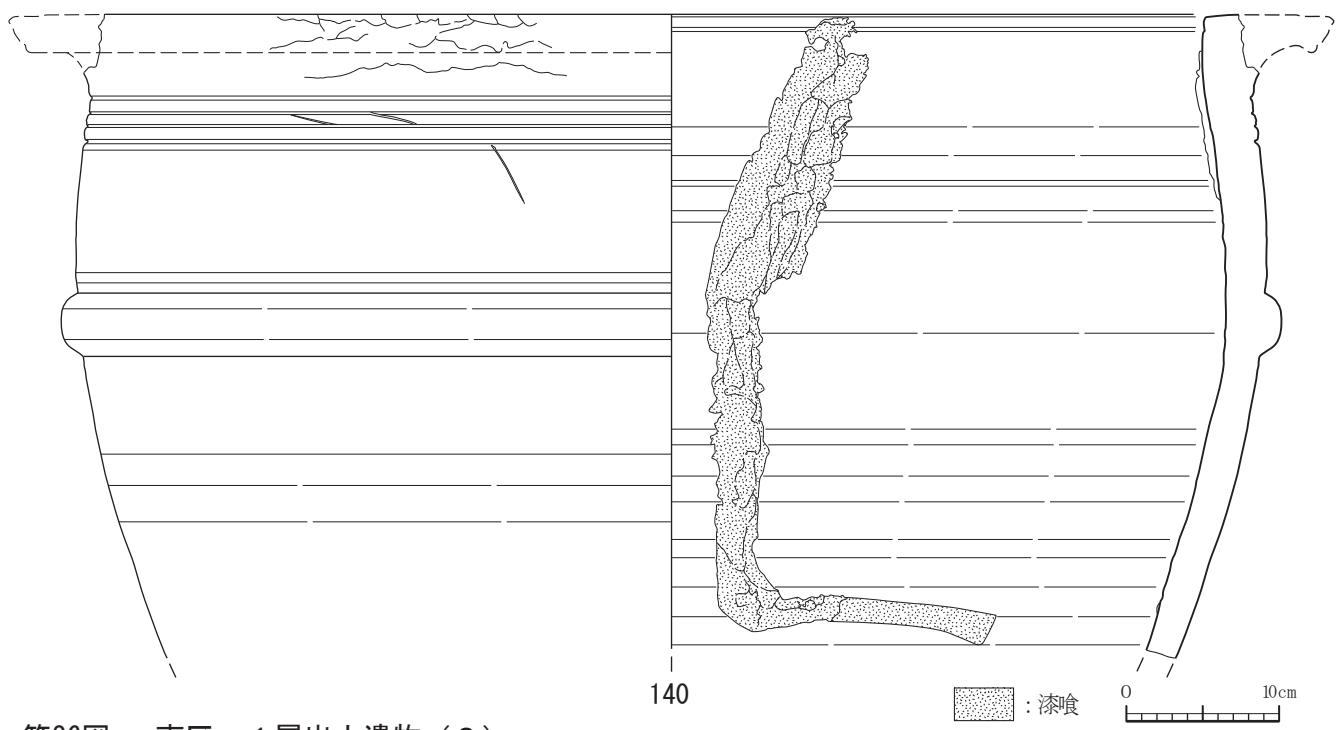


135



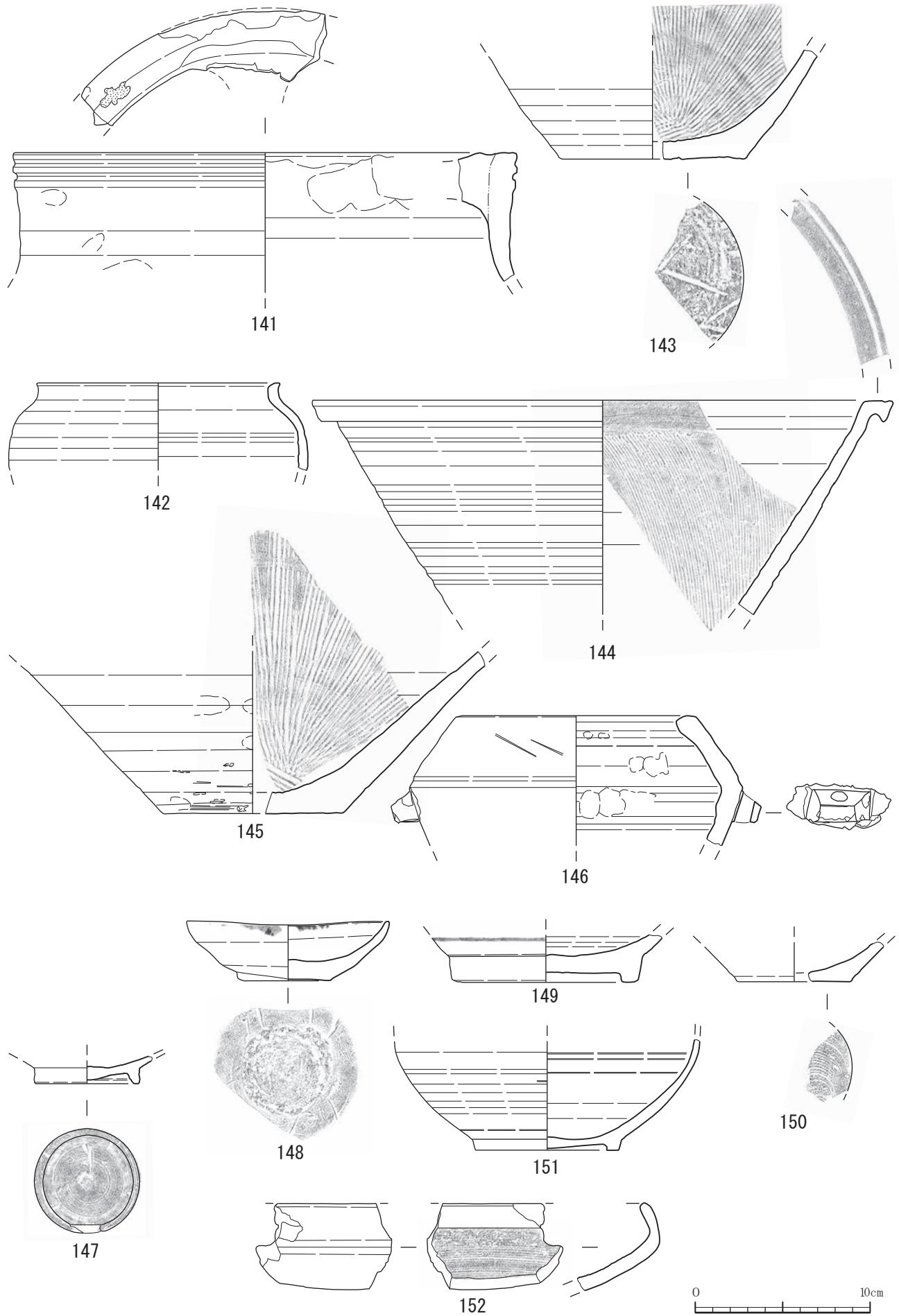
10cm

139

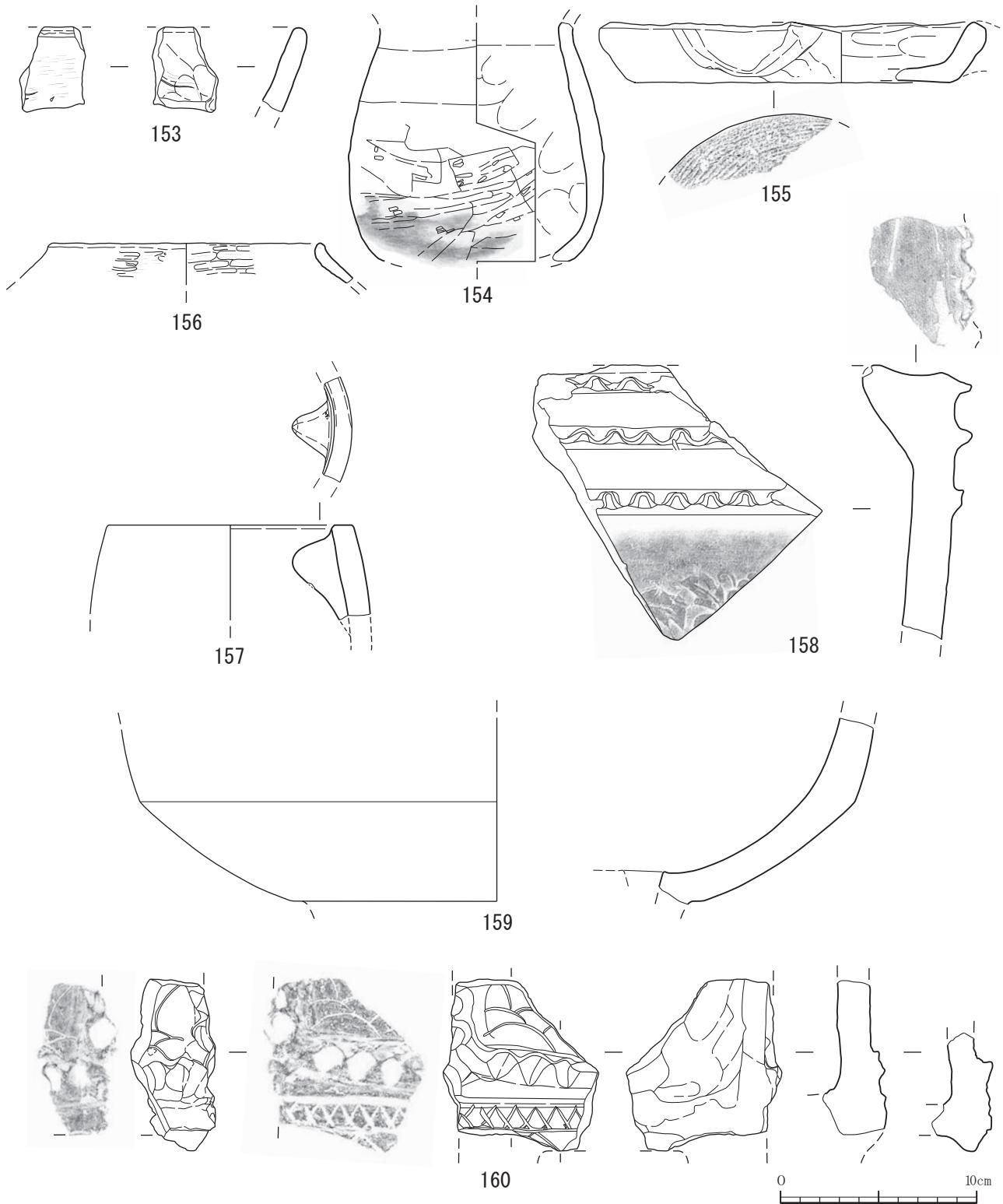


0 10cm

第26図 南区 1層出土遺物 (9)



第27図 南区 1層出土遺物 (10)



第28図 南区 1層出土遺物 (11)

煙管 (166～175) 陶製には、雁首 (166～172) と吸口 (173・174)、金属製には雁首 (175) が出土している。

錢貨 (176～183) 30点出土しており、その内訳は中国錢3点、日本錢1点、無文錢も含めた產地不明錢26点となっている。中国錢には、至道元寶 (176)、淳祐元寶の可能性があるもの、不明錢がある。その他は、日本錢の寛永通寶 (177)、產地不明の無文錢 (178～181)、輪錢 (182・183) がある。

金属製品 (184～190) 銅製品には、簪 (184)、釘 (186)、薬莢 (188)、砲弾 (189・190)、用途不明なもの (185・187) がある。(187) は、鍍金された把手状のものである。

るつぼ (191) 陶器製で非常に小形の碗状のもので、内面に銅滴が付着している。

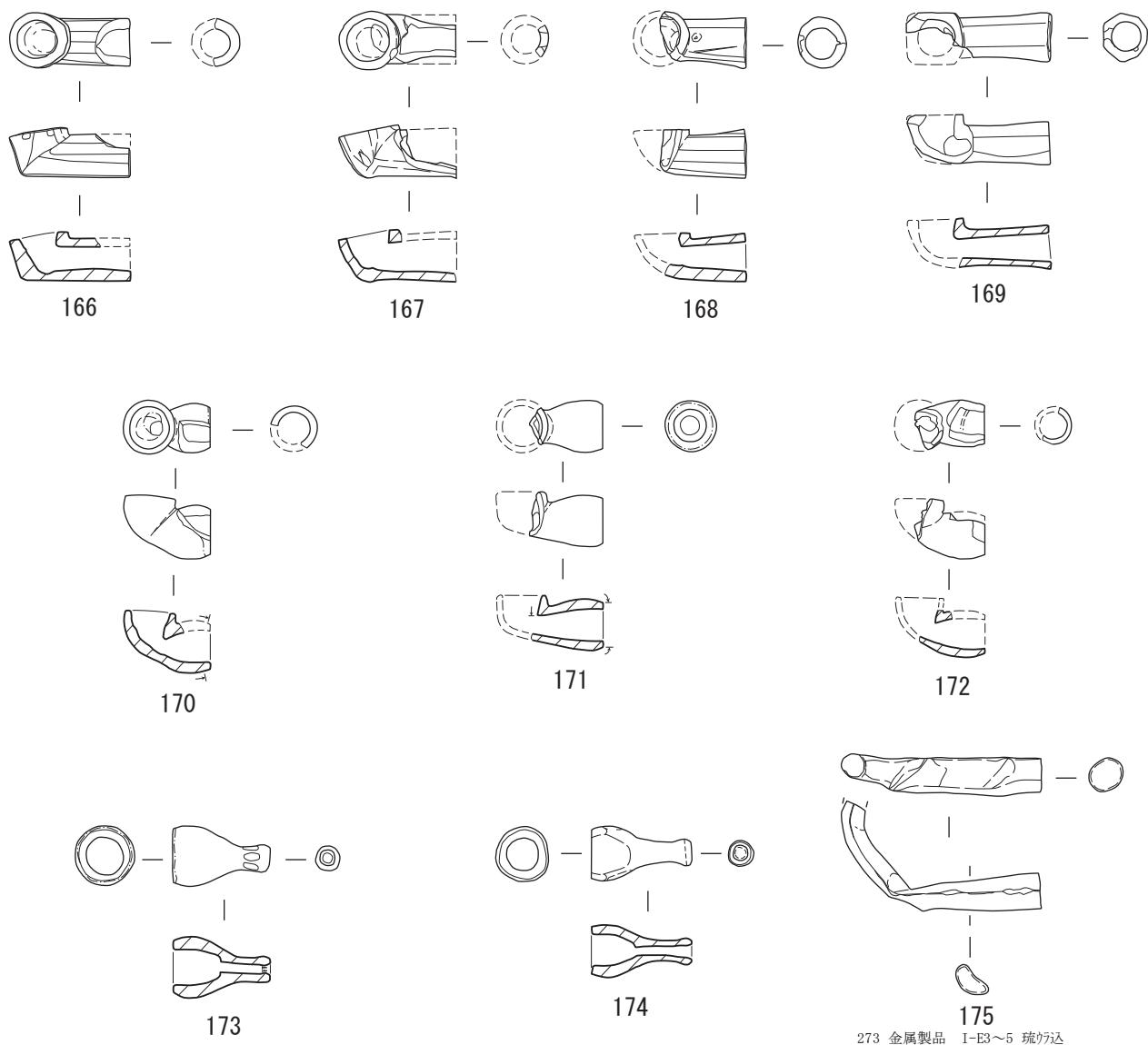
碁石 (192) 貝製の碁石でレンズ型を呈する。

硯 (193) 赤色頁岩製で、背面の刻文より赤間硯と考えられるものである。

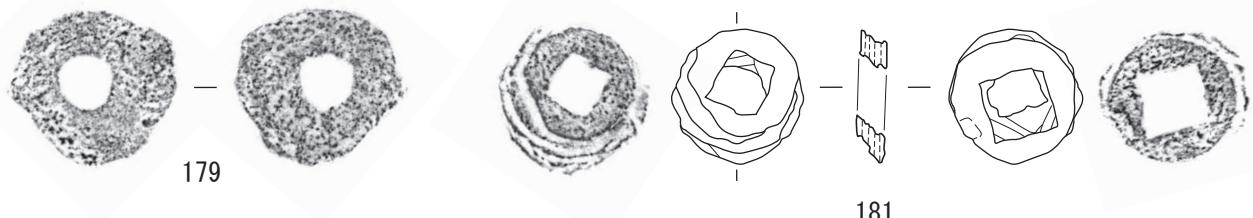
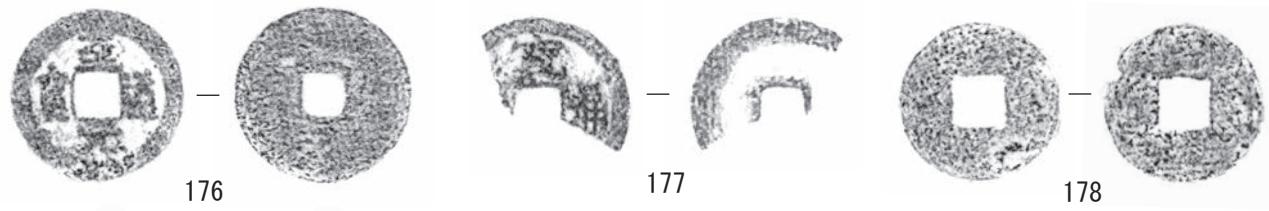
貝製品 (194) ヤコウガイの残核で小孔を有している。

円盤状製品 (314・320～322・324・326～329・331) 10点出土している。

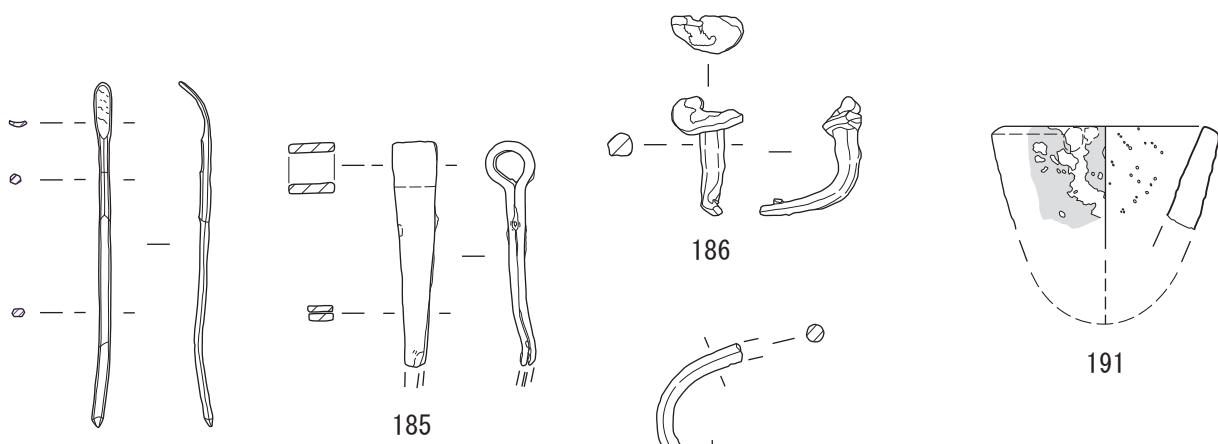
ガラス玉 (332・333・335・337・338) 5点出土している。



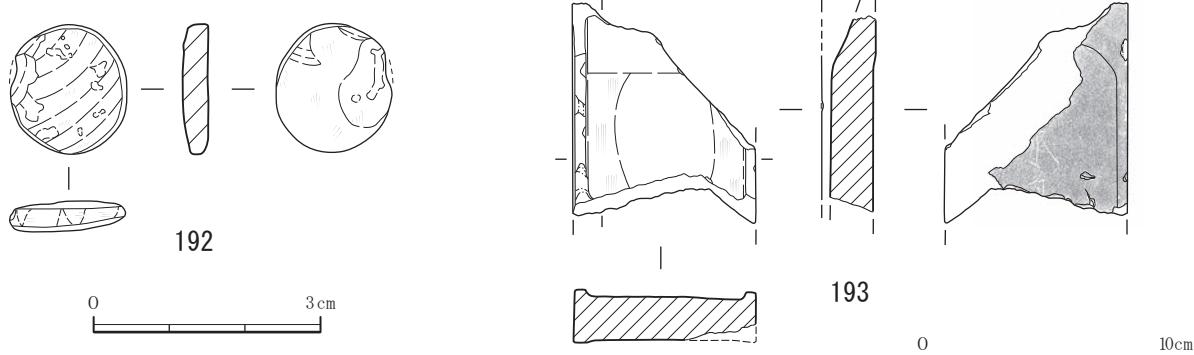
第29図 南区 1層出土遺物 (12)



0 3 cm

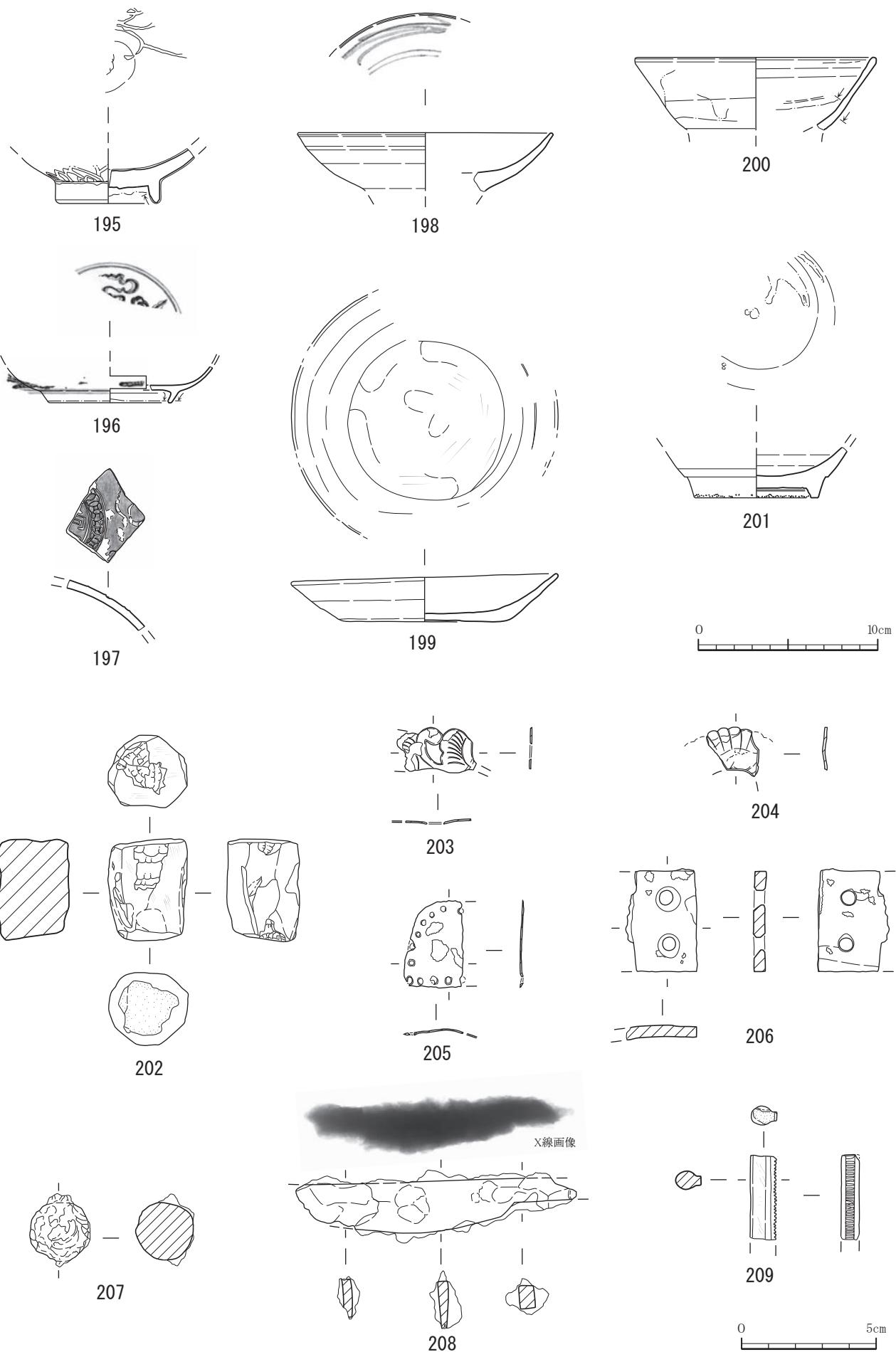


0 5 cm



0 10 cm

第30図 南区 1層出土遺物 (13)



第31図 北区 1層出土遺物（1）

3. 北区出土遺物 (第31～36図、図版23～26、第35～39表)

北区においては、遺構面の下層をトレンチ1・2を設定し掘削したため、大区分では1～10層に分けた。遺物は1～8層で出土しており、その内容のまとめにより、1層、2'・2層、3'・3層、4～6層に分けて説明する。なお、7層は青磁、8層は大和系瓦が各1点出土しているが、小片のため図は掲載していない。

① 1層出土遺物 (195～220)

1層出土遺物の845点で、その内瓦254点、陶磁器類497点出土している(第57表)。これらの時代幅は、グスク時代～近代である。

青磁 (195) 瓢V類である。

青花 (196) 明代景德鎮窯系I類の端反皿である。

緑釉陶器 (197) 七宝文が描かれた袋物である。

本土産陶磁器 (198・199) 肥前系染付皿 (198) と南九州産の可能性がある土師皿 (199) である。

沖縄産施釉陶器 (200・201) 灰釉碗である。

煙管 (202) 瓦質製雁首の未成品である。

金属製品 (203～208・210～214) 銅製品には、用途不明の飾金具 (203～205) がある。鉄製品には、弾丸 (207)、刀子 (208)、用途不明の有孔の板状製品 (206) がある。

骨製品 (209) 用途不明の一辺に連続切込みを施した棒状製品である。

銭貨 (215～218) 5点出土しており、その内訳は中国錢1点、日本錢2点、產地不明錢2点となっている。中国錢は大定通寶 (215)、日本錢は明治一錢 (216)・昭和一錢 (217)、產地不明錢は輪錢 (218) となっている。

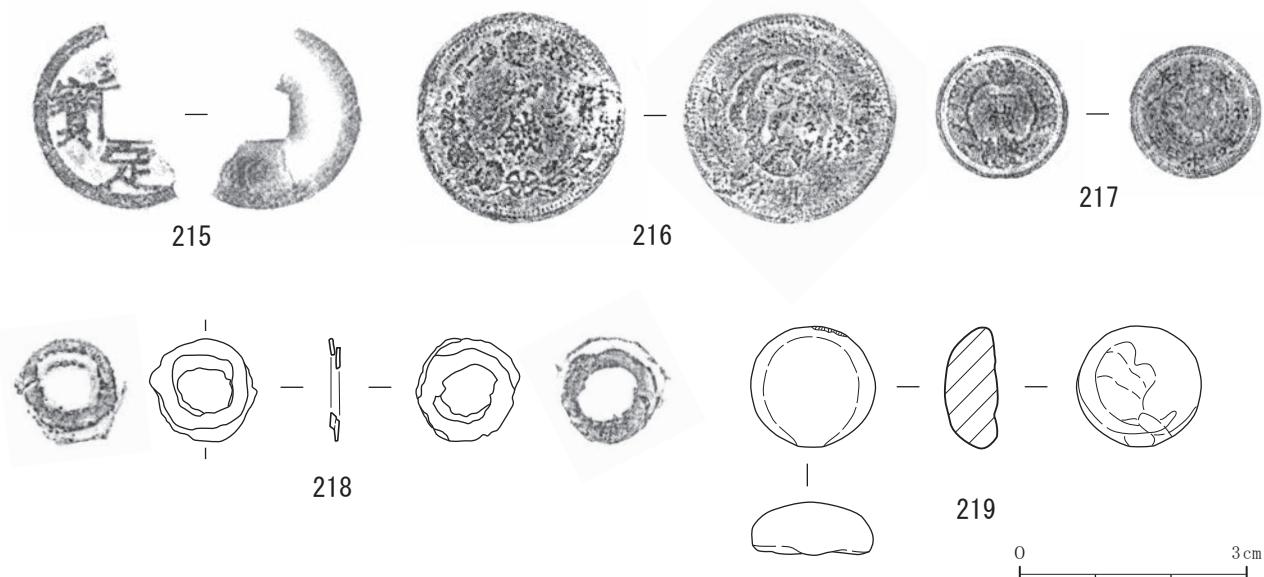
碁石 (219) ガラス製品である。

ボタン (220) 陶製で型造りにより五弁花が象られる。

円盤状製品 (312・316・325・330) 4点出土している。

② 2'・2層出土遺物 (221～232)

2'層は118点、2層は239点と、共に出土遺物が少ない(第57表)。近世の陶磁器・瓦が主体であり、時期的な差異は見られないことから、まとめて説明する。



第32図 北区 1層出土遺物 (2)

青磁 (221～223) 酒海壺 (221)、皿 (222)、盤 (223) である。

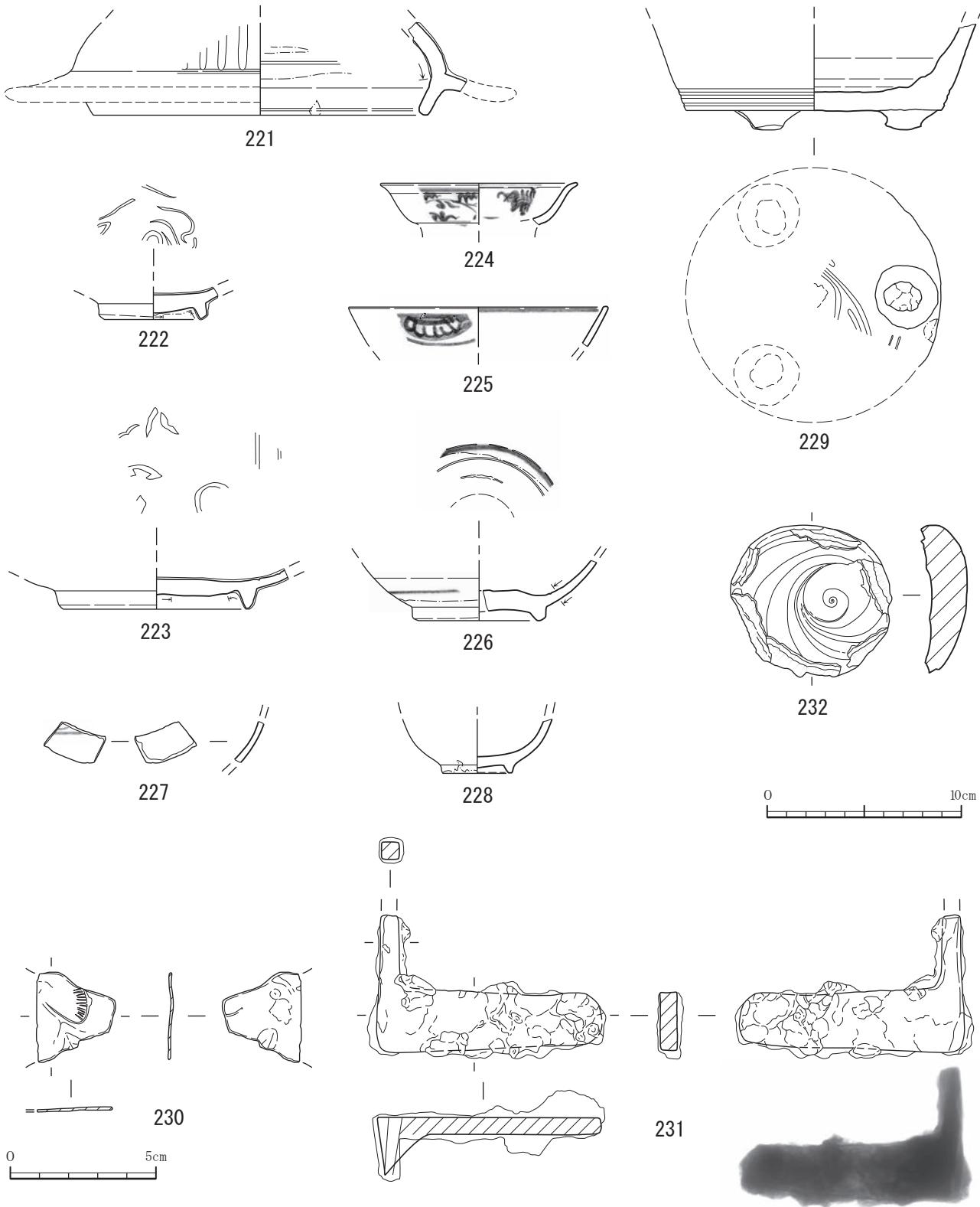
青花 (224～226) 明代景德鎮窯系II類の端反皿 (224)、漳州窯系碗 (225)、清代福建・廣東産碗 (226) である。

ベトナム産陶磁器 (227) 青花碗である。

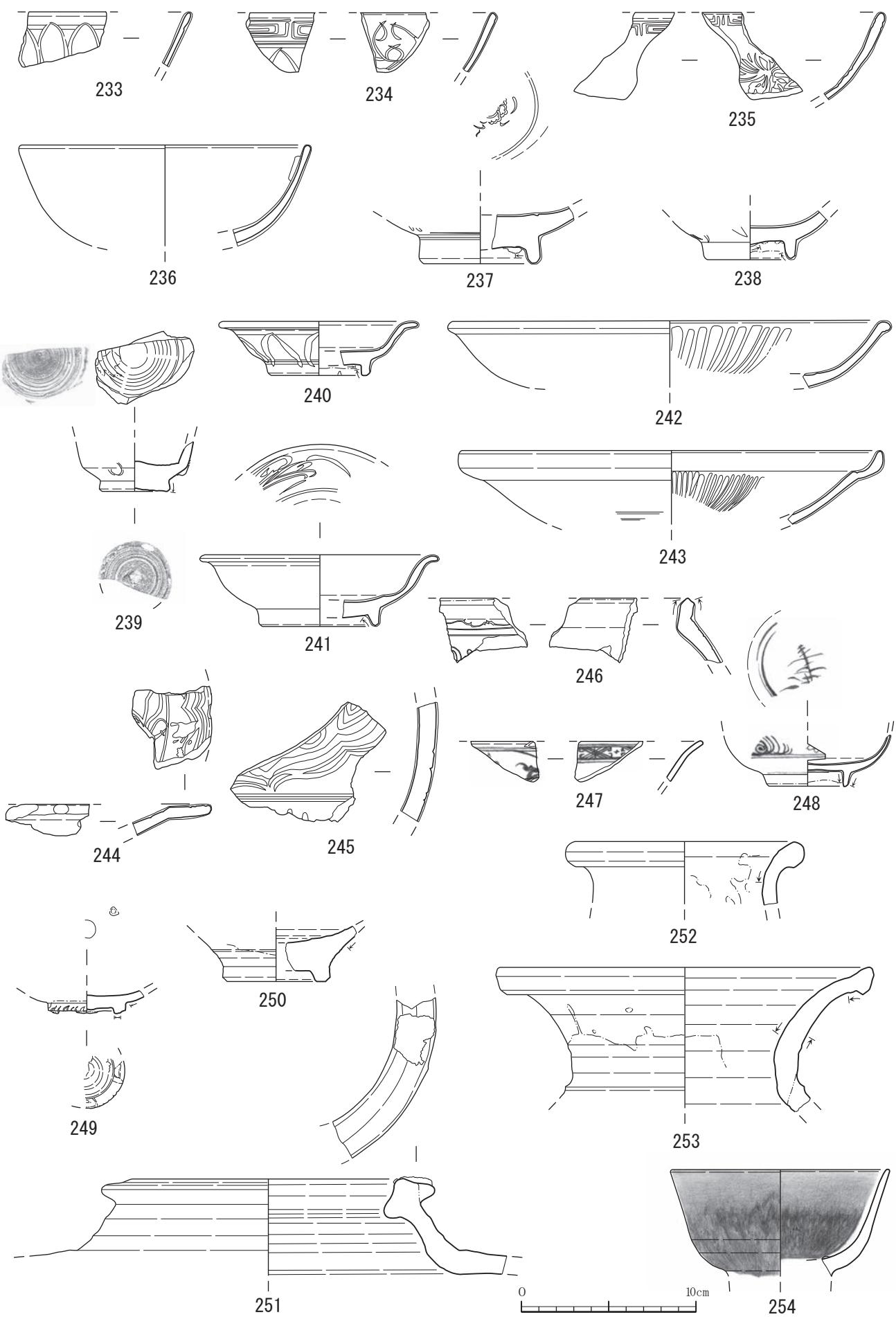
本土産陶磁器 (228) 肥前系施釉陶器の小碗である。

沖縄産無釉陶器 (229) A類火炉である。

金属製品 (230・231) 銅製品には用途不明の鍍金された板状製品 (230)、鉄製品には蝶番の一部と思われるも



第33図 北区 2層出土遺物



第34図 北区 3層出土遺物（1）

の（231）がある。

貝製品（232） ヤコウガイ蓋に敲打を施したものである。

円盤状製品（323） 1点出土している。

ガラス玉（334・336） 2点出土している。

③3'・3層出土遺物（233～263）

3'層は398点、3層は505点と、1層以外では最も出土遺物が多い（第57表）。その内容であるが、両者とも青磁・褐釉陶器などの15世紀と考えられる陶磁器が多いが、灰色系瓦を中心とした明朝系瓦が3'層で41点、3層で100点出土している。また、後述する肥前系施釉陶器（254）と合わせて考えると、遺物の時期幅の下限は17世紀と考えられる。

青磁（233～246） 碗（233～238）は全てV類で、そのうち（234・235）は雷文が描かれたV-2類である。その他、皿V類（240・241）、香炉（239）、盤（242～244）、壺（245）、酒海壺（246）がある。

青花（247・248） 共に明代景德鎮窯系のI-1類碗である。

白磁（249・250） 福建産D群の皿（249）、瓶（250）がある。

褐釉陶器（251） 壺5類である。

タイ産陶磁器（252・253） 褐釉陶器の壺で、シーサッチャナライ窯系（252）、メナムノイ窯系（253）である。

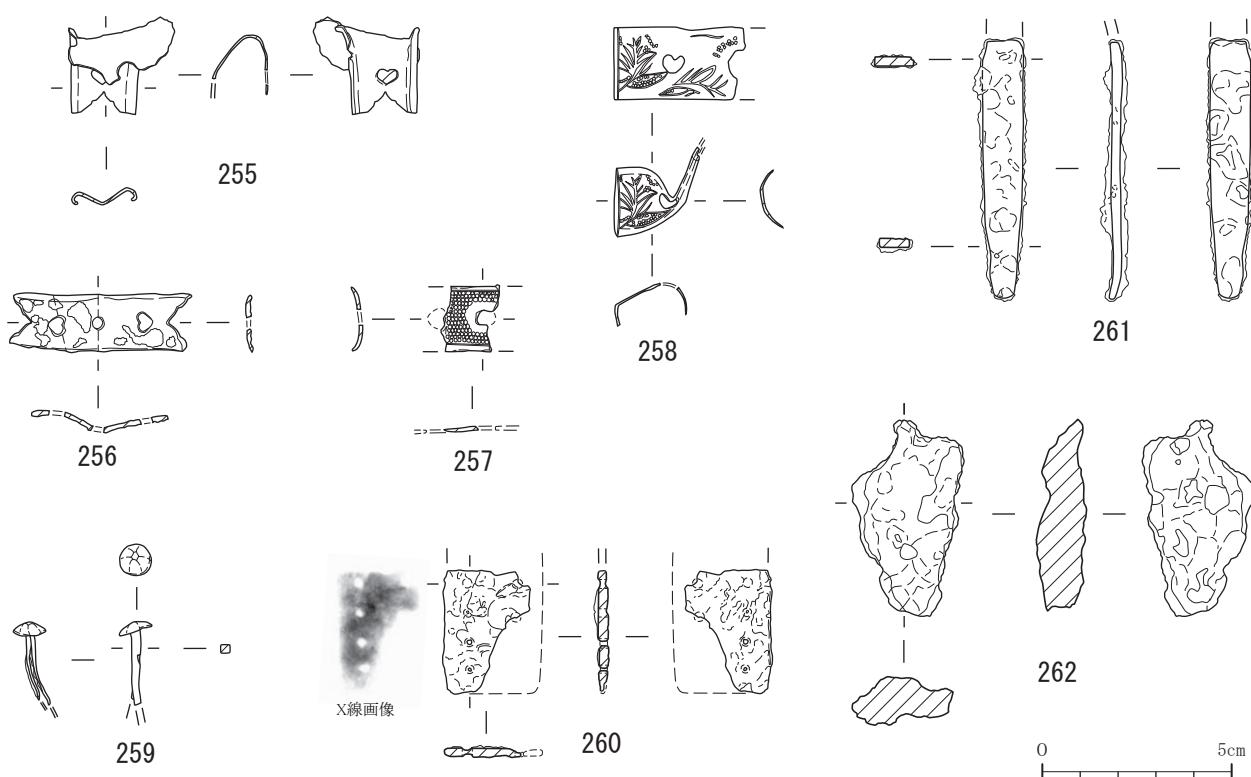
本土産陶磁器（254） 肥前系の施釉陶器碗で、概ね17世紀代のものである。

金属製品（255～263） 銅製品には、鍼形台（255）、八双金物（256～258）、軸部が二叉である鉢（259）があり、そのうち（258・259）は鍍金されている。鉄製品には、小札（260）、刀子（261）、鉄滓（262・263）がある。

円盤状製品（310・313・315・317～319） 6点出土している。

④4～6層出土遺物（264～273）

4～6層は出土遺物が少なく、特に4・5層は層厚も薄く一括で取り上げたものがある。本章第2節で既述し



第35図 北区 3層出土遺物（2）

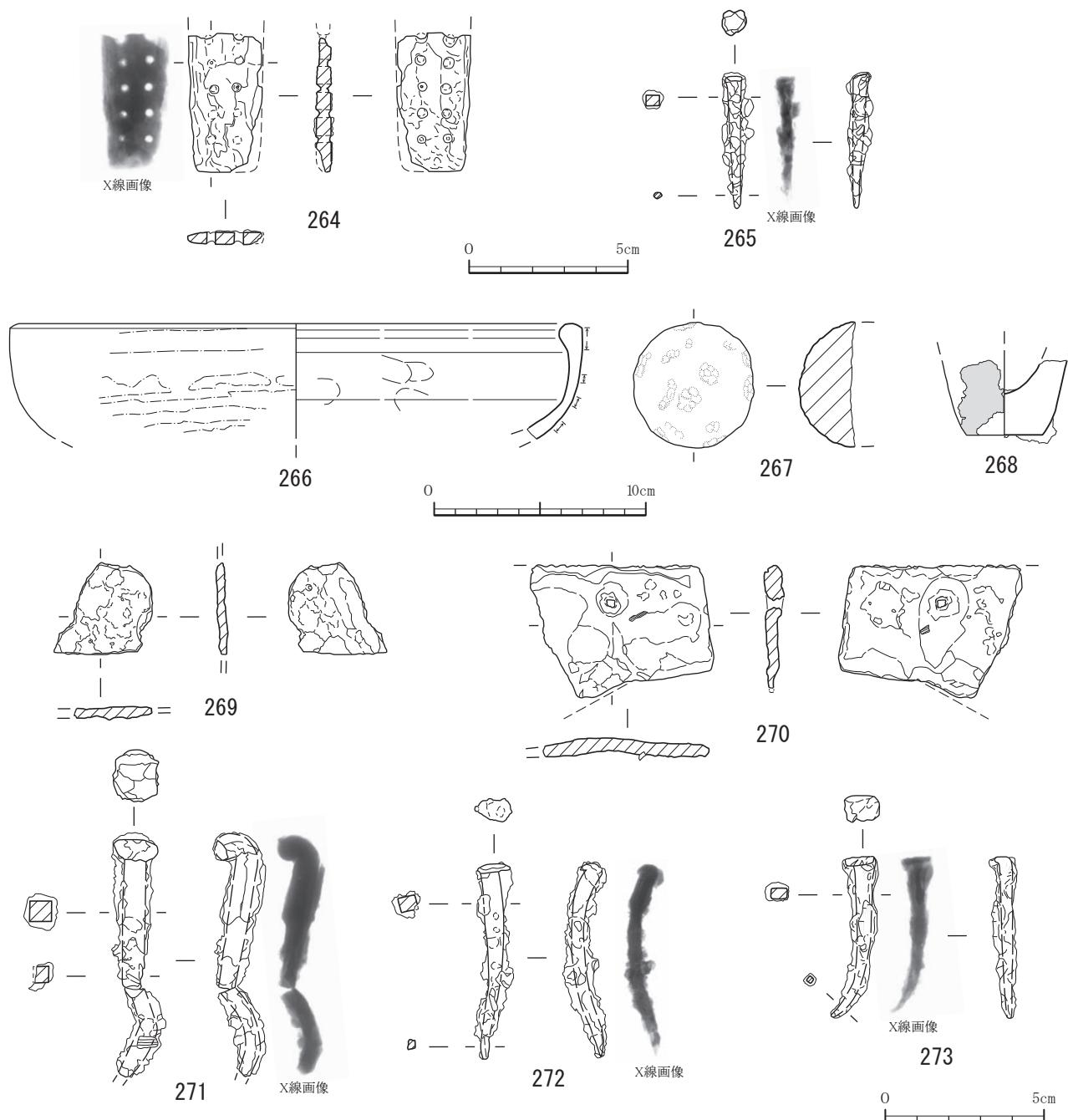
たように、4層は性格的には3層と共通するため、時期的にはそれに準ずるものと考えられる。一方、5～6層は、遺物取り上げ時に区別できなかつたところもあるので、まとめて説明する。最も多いのは、中国産褐釉陶器であるが胴部破片のため図化できなかつた。なお、これも小片のため図化していないが、青磁・白磁・青花も出土している。これらは、後述するタイ産褐釉陶器も踏まえると、概ね15世紀のものと考えられる。

タイ産褐釉陶器 (266) 褐釉陶器の内湾する鉢で、あまり類例が見られないが、メナムノイ産窯系の胎土であることから、15世紀とされる同タイプの壺と類する。

金属製品 (264・265・269～273) 鉄製品では、小札 (264)、釘 (265・271～273)、刀子 (270)、用途不明の板状製品 (269) がある。

石製品 (267) 細粒砂岩製の石球である。

るつぼ (268) 二次被熱のためか脆く全体的に白色を呈し、何らかの底部の一部である。外面に赤色の付着物も見られ、るつぼとして使用されたものと考えた。



第36図 北区 4～6層出土遺物

第27表 陶磁器・各種製品観察表(1)

遺物No.	種類	大分類(器形等)	細分類(材質等)	口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	地区	グリッド	遺構・層
1	中国産青磁	碗	V-O	17.2	—	—	胎土は白色。釉は厚いが、風化もしくは被熱のため変色している。外反口縁。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
2	中国産青磁	碗	V-O	13.0	—	—	被熱のため釉が変色し、別の破片が溶着している。胎土は灰色で、釉は厚い。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
3	中国産青磁	碗	V-1	—	—	—	胎土は白色で、緑色の釉が厚く施釉される。外面はヘラ描きの連弁文。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
4	中国産青磁	碗	VI-1	13.2	—	—	胎土は灰色で、軟質。釉は薄く貫入あり。外面は線刻連弁文。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
5	中国産青磁	碗	VI-1	—	4.5	—	焼成が悪く、胎土は赤色で釉は発色が鈍い。外底面と豊付け、高台内面を釉剥ぎする。見込みの一部が施釉されてない。外面は線刻連弁文。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
6	中国産青磁	碗	VI-1	—	4.7	—	胎土は灰色。釉は薄く、濃緑色。高台外面途中まで施釉。外面に線刻連弁文。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
7	中国産青磁	碗	VI	—	4.6	—	胎土は灰色。釉は薄く貫入あり。見込みに印花文。外底面は高台途中まで施釉。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
8	中国産青磁	皿	V	—	5.0	—	胎土は灰白色。釉は厚く、貫入あり。外底面は蛇の目釉剥ぎ。	南	G E 1	1層
9	中国産青磁	盤	—	—	9.6	—	焼成が悪く、釉は厚いが発色せず。外底面蛇の目釉剥ぎ。碁笥底。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
10	中国産白磁	碗	福建C-3	—	4.2	—	胎土は灰色。外面露胎。釉は厚く、少し青みがかる。見込みに草花文。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
11	中国産白磁	小皿	福建D	—	2.6	—	釉は乳白色で、外面下半露胎。抉り高台。見込みに重ね焼き痕1か所。腰折皿。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
12	中国産白磁	鉢	福建D'	25.2	—	—	釉は緑ががっており、厚く施釉。玉縁口縁。見込みは蛇の目釉剥ぎ。ロクロ目顕著。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
13	中国産白磁	碗	福建D'	—	6.2	—	釉は緑が強く、外面高台途中まで施釉。豊付けの幅は広く平坦。見込みは蛇の目釉剥ぎ。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
14	中国産白磁	碗	福建D'	—	7.2	—	釉は乳白色で、貫入が多い。外面下半露胎。見込み蛇の目釉剥ぎ。	南	G 1	1層
15	中国産白磁	壺	景德鎮	—	—	—	釉は青白色で、内面まで施釉。外面に陽刻の草花文。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
16	中国産白磁	小碗	景德鎮	—	1.8	—	釉は青白色で、高台内側途中まで施釉。腰折碗。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
17	中国産白磁	碗	景德鎮	8.4	—	—	釉は灰白色、アバタが目立つ。端反口縁。ロクロ目顕著。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
18	中国産白磁	皿	德化	11.3	6.6	2.3	釉は灰白色でガラス質。直口口縁。豊付けを釉剥ぎ。硬質。	南	G 1	1層
19	中国産白磁	レンゲ	德化	—	—	—	釉は灰白色で、貫入多い。底面に重ね焼きの痕あり。硬質。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
20	中国産青花	碗	明(景德鎮III)	12.8	—	—	外面に梅樹鳥文? 内外口縁部付近に二重の圈線。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
21	中国産青花	碗	明(景德鎮III)	12.0	—	—	直口口縁。外面に花鳥文。呉須にじむ。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
22	中国産青花	碗	清(德化)	11.0	—	—	端反口縁。光沢あり。呉須発色鈍く、にじむ。外面に松樹文。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
23	中国産青花	碗	明(景德鎮III)	13.6	—	—	端反口縁。外面と内面に区画し文様を施す、いわゆる芙蓉手。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)

第28表 陶磁器・各種製品観察表（2）

遺物 No.	種類	大分類 (器形等)	細分類 (材質等)	口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	地区	グリット*	遺構・層
24	中国産青花	碗	明(漳州)	—	—	—	外面に花唐草文。焼成が悪く胎土の一部赤色、気泡が目立つ。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
25	中国産青花	碗	清(德化)	12.5	—	—	釉青白色。光沢あり。外面に丸文と蝙蝠文？	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
26	中国産青花	碗	清(福建・廣東)	13.3	—	—	外面に円文。見込みを釉剥ぎ。呉須の発色が鈍い。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
27	中国産青花	碗	清(福建・廣東)	13.8	7.2	6.0	外面に円文と簡略化した草花・アラベスク文？見込み蛇の目釉剥ぎ。被熱を受けたのが釉の表面に気泡が目立つ。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
28	中国産青花	碗	清(福建・廣東)	—	6.4	—	見込みに蛇の目釉剥ぎ。外面に円文と簡略化した草花・アラベスク文？か。呉須の発色は鈍い。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
29	中国産青花	碗	清(德化)	9.4	4.6	4.7	端反口縁。外面に花唐草。見込みに草花文。外底面に銘あり。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
30	中国産青花	碗	清(德化)	—	7.1	—	釉青白色。光沢あり。呉須の発色鈍い。外面に二重圈線とその下に連弁文。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
31	中国産青花	碗	明(漳州)	—	4.8	—	釉灰オリーブ色。呉須発色鈍い。見込みに花芯文。外底面に銘(大明?)あり。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
32	中国産青花	小杯	明(景德鎮III)	5.0	—	—	端反口縁。外面に草花文。	南	I E 5	石積み1・2裏込め
33	中国産青花	小杯	明(景德鎮III)	—	2.4	—	外底面の一部露胎。見込みに「玉堂佳置(?)」。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
34	中国産青花	小杯	清(景德鎮)	—	1.8	—	外底面露胎。豊付けは広く内側に傾く。見込みは平坦で広い。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
35	中国産青花	小碗	清(德化)	—	4.9	—	見込みは平坦。豊付けを釉剥ぎ。外底面に「大明成化年製」。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
36	中国産青花	盤	明(漳州)	—	—	—	釉灰白色。呉須発色良好。内面に牡丹唐草文。	不明	不明	1層
37	中国産青花	皿	明(景德鎮I)	—	13.4	—	釉青白色。光沢あり。見込みに靈芝文。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
38	中国産青花	皿	清(德化)	15.8	9.5	3.2	釉青白色。光沢あり。豊付けを釉剥ぎ。内面に蛸唐草文。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
39	中国産青花	皿	清(德化)	11.0	6.6	2.5	釉青白色。光沢あり。腰折皿。豊付けを釉剥ぎ。呉須発色鈍い。見込みに菊花文。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
40	中国産青花	瓶	明(景德鎮)	—	6.8	—	外面底部付近に連弁文。呉須発色鈍い。豊付けを釉剥ぎし、高台内に重焼き痕。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
41	中国産色絵	小碗	徳化	7.5	2.5	2.9	内面に赤で着色。楓と思われる葉の文様。内面の口縁より下に「丹楓美落寒」の文字。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
42	瑠璃釉	小碗	徳化	—	4.1	—	外面瑠璃釉。釉は発色が鈍い。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
43	瑠璃釉	小碗	徳化	—	5.0	—	外面瑠璃釉。外底面は平坦。底部の一部が露胎し、粘土の付着やアバタがみられる。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
44	中国産褐釉陶器	小壺	—	9.6	—	—	薄胎施釉陶器。胎土褐色。白色粒少量含む。器厚薄く、焼き縮まる。釉は暗褐色。茶入。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
45	中国産褐釉陶器	壺	3類	8.6	—	—	胎土赤褐色。白色粒少量含む。釉は灰白色。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
46	中国産褐釉陶器	壺	2類	—	—	—	胎土赤褐色。白色粒多く、赤色粒を少量含む。釉は暗褐色。	南	G 1	1層

第29表 陶磁器・各種製品観察表（3）

遺物 No.	種類	大分類 (器形等)	細分類 (材質等)	口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	地区	グリッド*	遺構・層
47	中国産 褐釉陶器	壺	6類	14.3	—	—	胎土赤褐色。灰色粒と白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
48	中国産 褐釉陶器	壺	5類	14.1	—	—	胎土黒色。白色粒少量含む。薄い粘土を2枚重ねて形成しており、一部に割れが見られる。釉は暗オリーブ色で、口縁上部や内面の一部が赤褐色。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
49	中国産 褐釉陶器	壺	5類	12.8	—	—	胎土灰黒色。白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。口縁上部部に耐火土2か所。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
50	中国産 褐釉陶器	壺	5類	—	13.8	—	胎土暗褐色。白色粒少量含む。釉はオリーブ色。外底面と内底面の一部無釉。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
51	中国産 褐釉陶器	壺	—	—	—	—	胎土灰色。白色粒少量含む。釉はオリーブ色。内面部分的に露胎。胴部に波状突帯文を貼り付け、その下部に沈線。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
52	中国産 褐釉陶器	壺	—	—	—	—	胎土暗褐色。白色粒極少量含む。釉は灰オリーブ色。胴部に横帯文を貼り付け、その下部に沈線。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
53	中国産 褐釉陶器	壺	—	12.4	—	—	胎土灰色。黒色粒と灰色粒、赤色粒を少量含む。釉は灰オリーブ色。口縁部上部に1か所、肩部に2か所耐火土。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
54	中国産 褐釉陶器	壺	3類	12.6	—	—	胎土赤色。白色粒少量含む。釉は外面が暗オリーブ色（無釉？）で、内面は無釉。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
55	中国産 褐釉陶器	壺	3類	—	—	—	胎土赤色。白色粒少量含む。釉外面は灰オリーブ色で、内面は無釉。耳と胴部の一部に金属片が付着。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
56	中国産 褐釉陶器	壺	—	—	—	—	胎土暗褐色。白色粒多く含む。外面並行タタキ(4本/2cm)。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
57	中国産 褐釉陶器	壺	—	—	—	—	胎土灰色。白色粒多く含む。釉は暗オリーブ色。胴部に波状突帯文を張り付け。内側胴部に粘土が粘土の一部が剥落したと思われる割れ目あり。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
58	中国産 褐釉陶器	壺	—	—	13.6	—	胎土内側灰黒色、外部赤色。白色粒少量含む。釉は赤褐色。底部は畳付け内側途中まで施釉。器壁は厚く、内・外底面は平坦。	南	G 1	1層
59	タイ産 褐釉陶器	碗	シーサツ チャナライ 窯	13.8	—	—	胎土粗く、灰色。白色粒を少量含む。釉は外面が赤褐色、内面がオリーブ黒色。内面の口縁部より下部は無釉。外反口縁。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
60	タイ産 褐釉陶器	碗	シーサツ チャナライ 窯	—	5.6	—	胎土粗く、灰色。赤褐色粒と白色粒少量含む。釉は褐色。高台はハの字に開き、内・外底面は平坦。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
61	タイ産 褐釉陶器	壺	メナムノイ 窯II類	16.8	—	—	胎土やや精良で、灰黒色。赤褐色粒を少量含む。釉はオリーブ黒色。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
62	タイ産 褐釉陶器	壺	メナムノイ 窯II類	—	—	—	胎土粗く、外面灰黒色、内面灰赤色。赤褐色粒と白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。内面は無釉。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
63	タイ産 褐釉陶器	壺	シーサツ チャナライ 窯	—	26.2	—	胎土やや精良で赤褐色。赤褐色粒と白色粒を少量含む。釉はオリーブ黒色。内面にヘラ削り。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
64	タイ産 褐釉陶器	壺	メナムノイ 窯？	19.0	—	—	胎土粗く、赤色。赤褐色粒と白色粒少量含む。釉は褐色、内面胴部途中まで施釉。無頸壺。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
65	ミャンマー 産褐釉陶器	壺	—	—	—	—	胎土粗く、灰赤色。褐色と赤褐色粒を少量含む。釉は外面黒色、内面暗オリーブ色。内面の一部は透明釉がかからない。	南	I E 5	石積み1・2 裏込め
66	タイ産 半練土器	壺	—	—	—	—	胎土やや粗く、明赤褐色。焼成良好。赤褐色粒と白色粒を少量含む。外面に多条の傾斜する沈線。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
67	产地不明 陶器	壺	—	—	—	—	胎土粗く茶褐色。黒色粒を少量含む。外面に灰色の釉を施釉。青の釉で花文、緑釉で草文を施す。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）
68	产地不明 陶器	壺	—	—	—	—	胎土精良で灰黒色。赤褐色粒を少量含む。外面と内面に褐色の釉を施釉。	南	I E 3~5	1層（琉大石垣裏込め）

第30表 陶磁器・各種製品観察表(4)

遺物No.	種類	大分類(器形等)	細分類(材質等)	口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	地区	グリッド	遺構・層
69	本土産青磁	碗	肥前系	—	4.8	—	整形：輦轆、施釉：明灰色(10GY7/1)を畠付以外全面、胎土：黒色粒混じりの灰白色(5Y8/2)で緻密、その他：高台に指跡2か所、畠付に重ね焼き時の釉部分的に残、時期不明	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
70	本土産白磁	碗	肥前系	—	3.8	—	整形：輦轆、施釉：畠付以外全面、胎土：黒色粒混じりの灰白色(5Y7/1)で緻密、その他：見込にハマ痕と斑点状に綠釉残、畠付断面3角状、時期：不明	南	不明	1層
71	本土産施釉陶器	蓋物蓋	肥前系	8.8	6.6	—	整形：輦轆、口受け貼付、釉薬：透明釉、外面施釉、胎土：黒色粒混じり灰白色(8Y8/1)緻密、その他：口受けアルミナ砂塗布、斑点状に白色釉残、分類：京焼風、時期：『九州陶磁の編年』V期	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
72	本土産施釉陶器	碗	肥前系	—	—	—	形状：端反碗、中碗、整形：輦轆、施釉：透明釉、内外面、胎土：灰白色(2.5Y8/2)、分類：京焼風、時期：『九州陶磁の編年』IV期以降	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
73	本土産施釉陶器	碗	肥前系	10.8	—	—	形状：呉器手碗、整形：輦轆、施釉：透明釉、内外面、胎土：浅黄色(2.5Y7/3)、分類：京焼風、時期：『九州陶磁の編年』III期	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
74	本土産施釉陶器	碗	肥前系	—	4.5	—	形状：呉器手碗、中碗か、整形：輦轆、施釉：透明釉、内外面、胎土：灰白色(2.5Y8/2)、分類：京焼風、時期：『九州陶磁の編年』III期	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
75	本土産施釉陶器	碗	肥前系	11.7	4.5	7.1	形状：中碗、整形：輦轆、施釉：銅緑釉、内外面流し掛け、胎土：淡黄色(2.5Y8/3)、産地詳細：内野山窯、時期：『九州陶磁の編年』III期	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
76	本土産施釉陶器	碗	肥前系	—	5.6	—	形状：中碗、整形：輦轆、施釉：鉄釉、胎土：淡黄色(2.5Y8/3)、窯詰め痕跡：見込みに重ね焼き痕、装飾：施釉時に型紙、時期：『九州陶磁の編年』III期	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
77	本土産施釉陶器	小杯	肥前系	—	3.4	—	形状：筒形、整形：輨轆、施釉：透明釉、畠付除き全面、胎土：暗赤褐色(5Y3/3)、窯詰め痕跡：畠付に小砂付着、装飾：外面蠻手、内面打刷毛目、、その他：接合しないが2点同一個体、産地詳細：現川窯、時期：『九州陶磁の編年』IV期	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
78	本土産無釉陶器	擂鉢	備前	—	—	—	形状：口縁部外帯、端反、整形：輨轆、胎土：灰色(7.5Y5/1)、石英・砂岩(?)粒多量でやや粗粒(いわゆる山土)、乗岡編年中世5期	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
79	本土産染付	碗	肥前系	13.8	5.7	7.5	形状：中碗、整形：輨轆、施釉：透明釉、畠付除き全面、胎土：灰白色(5Y8/1)、黒色粒含む、装飾：外面に草花、見込に荒磯文、分類：見込荒磯文碗、時期：『九州陶磁の編年』III期	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
80	本土産施釉陶器	蓋	肥前系	—	3.8	—	整形：輨轆、施釉：青緑釉、摘中央のみ透明釉、胎土：灰白色(5Y8/2)、黒色粒含む、時期：『九州陶磁の編年』V期	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
81	本土産無釉陶器	壺	関西系	8.3	—	—	整形：輨轆、胎土：灰白色(5Y7/1)、黒色粒多量、産地：信楽か、時期：不明	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
82	本土産色絵陶器	香炉	関西系	10.9	—	—	整形：輨轆、施釉：透明釉、外面・内面口縁部、胎土：淡黄色(2.5Y8/3)、装飾：外面に金採、文様不明、時期：不明	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
83	本土産施釉陶器	蓋	関西系	—	3.6	—	整形：輨轆、施釉：褐釉(赤土部灰釉)、外面全面、胎土：灰白色(5Y7/1)、窯詰め痕跡：内底面に重ね焼き痕残、産地詳細：丹波、時期：不明	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
84	本土産施釉陶器	蓋	関西系	10.0	3.4	2.9	整形：輨轆、摘部貼付、施釉：透明釉、全面、胎土：灰白色(5Y7/1)、窯詰め痕跡：撮み部に砂付着、時期：不明	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
85	本土産施釉陶器	急須	薩摩	12.6	—	—	整形：輨轆、施釉：外面及び内面胴上部に鉄釉、胴上部に灰釉流し掛け、胎土：褐灰色(10Y6/1)、窯詰め痕跡：蓋受部目跡、時期：不明	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
86	本土産施釉陶器	鉢	薩摩	36.9	—	—	整形：輨轆、施釉：内外面に鉄釉、口唇部無釉、胎土：暗赤褐色(5YR3/4)、窯詰め痕跡：口唇部目跡、装飾：外面搔き落しによる草花文?、産地詳細：苗代川系、時期：不明	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)

第31表 陶磁器・各種製品観察表（5）

遺物No.	種類	大分類(器形等)	細分類(材質等)	口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	地区	グリッド	遺構・層
87	本土産施釉陶器	鉢	薩摩	—	—	—	整形：轆轤、施釉：外外面に鉄釉、胎土：暗赤褐色(5YR3/4)、装飾：外面搔き落としによる草花文？、产地詳細：苗代川系、時期：不明	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
88	本土産施釉陶器	蓋	薩摩	—	5.8	—	整形：轆轤、施釉：外面緑釉、撮み露胎、胎土：黄灰色(2.5Y6/1)、窯詰め痕跡：撮み部に砂付着、時期：不明	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
89	本土産無釉陶器	急須	不明	—	4.4	—	整形：轆轤、胎土：明赤褐色(2.5YR5/6)、時期：不明	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
90	沖縄産施釉陶器	碗	A	13.3	6.4	6.5	灰釉、外底無釉、見込み蛇の目釉剥ぎ。胎土は浅黄橙。鉄絵、外面圈線2条、内面略化した草花文。見込み灰被り。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
91	沖縄産施釉陶器	碗	A	12.2	6.8	5.7	灰釉、胴部上半のみ施釉。胎土は淡黄、やや間隙あり。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
92	沖縄産施釉陶器	小碗	B	8.2	3.8	4.1	白釉、見込み蛇の目釉剥ぎにアルミナ塗布、重ね焼き痕あり。胎土は浅黄。胴部は1cm幅の面取り。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
93	沖縄産施釉陶器	不明蓋	A	15.4	—	—	灰釉、下半のみ施釉。胎土は淡黄。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
94	沖縄産施釉陶器	皿	B	—	6.5	—	白釉、見込み蛇の目釉剥ぎにアルミナ塗布、重ね焼き痕あり。胎土は灰黄。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
95	沖縄産施釉陶器	火取	A	11.2	—	—	褐釉、口縁のみ施釉、胴部は別釉か？胎土は灰白。外面はへら描きによる密な斜格子。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
96	沖縄産施釉陶器	火取	A	—	5.8	—	褐釉、外底・内面無釉。見込み若干灰被り。胎土は灰白。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
97	沖縄産施釉陶器	火炉	A	15.0	11.8	推16	褐釉、口縁上面・内面下半・外底無釉。胎土は浅黄。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
98	沖縄産施釉陶器	鉢	A	—	—	—	褐釉、胴部上半のみ施釉。胎土は灰黄。ロクロ目が顕著。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
99	沖縄産施釉陶器	鉢	A	—	9.2	—	灰釉、外底無釉。胎土は淡黄、胴部下端は黄橙。碁笥底状。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
100	沖縄産施釉陶器	鉢	A	21.4	—	—	褐釉、外面に気泡。胎土は灰黄。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
101	沖縄産施釉陶器	鉢	A	29.4	—	—	黒釉。胎土は鈍黄橙。受口状口縁のため、有蓋鉢。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
102	沖縄産施釉陶器	鍋	A	18.8	—	—	褐釉、内面上半無釉、内外の釉色やや異なる。胎土は灰黄褐。把手に鉄片付着。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
103	沖縄産施釉陶器	鍋	A	16.4	—	—	褐釉、内面上半・外面下半無釉、内面は黒、薄緑色。胎土は鈍赤褐。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
104	沖縄産施釉陶器	急須	A	—	6.0	—	褐釉、外底無釉、内外の釉色やや異なる。胎土は灰黄。脚部推定3か所。胴径13.4cm。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
105	沖縄産施釉陶器	急須	A	—	10.6	—	黒釉、外底無釉。胎土は淡黄。胴径17.2cm。細長類形。内面のロクロ目顕著。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
106	沖縄産施釉陶器	急須	A	5.6	—	—	灰釉、部分的にコバルト色、内面無釉。胎土は灰白。短類形。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
107	沖縄産施釉陶器	急須	B	—	—	—	白釉、外底無釉。胎土は浅黄。へら描きによる斜格子文、青・緑色で絵付け。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)
108	沖縄産施釉陶器	急須	A	5.0	—	—	灰釉、内面無釉。胎土は灰黄。短類形。スタンプによる菊花、へら描きによる斜格子、鋸歯文を施し、白象嵌。	南	I E 3～5	1層(琉大石垣裏込め)

第32表 陶磁器・各種製品観察表(6)

遺物No.	種類	大分類 (器形等)	細分類 (材質等)	口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	地区	グリッド	遺構・層
109	沖縄産 施釉陶器	急須 蓋	A	6.5	底9.9	3.6	褐釉、内面無釉。胎土は軟質、淡黄。つまみは棒形。つまみ径1.4cm。短頸の急須の蓋。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
110	沖縄産 施釉陶器	不明蓋	A	10.4	底13.2	—	褐釉、内面無釉。胎土は粗粒、明褐。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
111	沖縄産 施釉陶器	鍋蓋	A	14.8	つまみ 6.4	4.3	褐釉、つまみ・内面上半無釉。胎土は粗粒、赤褐。つまみは高台形。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
112	沖縄産 施釉陶器	鍋蓋	A	14.5	つまみ 6.6	4.1	褐釉、つまみ・内面上半無釉。胎土は橙。つまみは高台形。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
113	沖縄産 施釉陶器	鍋蓋	A	13.6	—	—	緑釉、内面無釉。胎土は灰白。つまみは紐状か?	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
114	沖縄産 施釉陶器	未燭	A	—	—	—	秉燭形。褐釉。胎土は鈍黄橙。軸部径2.2cm。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
115	沖縄産 施釉陶器	香炉	A	—	9.4	—	黒釉で気泡が多く、外底・内面無釉。胎土は硬質、赤褐。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
116	沖縄産 無釉陶器	碗	A	11.8	5.4	6.8	色調は内・外一灰、断一赤褐。外面一部に自然釉(灰黄)。口縁端部丸い。高台やや八字状。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
117	沖縄産 無釉陶器	碗	A	14.8	6.0	6.6	色調は内一暗褐、外一明赤褐、断一暗赤褐。高台は抉りがやや浅く、八字状に開く。	南	I E 5	石積み1・2 裏込め
118	沖縄産 無釉陶器	碗	A	—	6.8	—	色調は内・断一暗赤褐、外一褐灰。高台やや細々。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
119	沖縄産 無釉陶器	鉢	A	15.2	—	—	色調は内・外一赤褐、断一両側が灰、中央が赤褐。波状文3条/0.5cm。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
120	沖縄産 無釉陶器	鉢	A	19.9	—	—	色調は鈍赤褐。外面全体に自然釉(黒褐)。波状文3条/0.8cm。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
121	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	A	24.2	—	—	色調は内一橙、外一褐灰、断一灰。内面一部泥釉?(鈍褐)。擂目7本/1.0cm。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
122	沖縄産 無釉陶器	鉢	A	21.0	—	—	色調は鈍赤褐。外面一部に黒釉。直線的な器形。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
123	沖縄産 無釉陶器	壺	A	9.8	—	—	色調は内・外一灰、断一赤褐。短頸。頸部に2条の沈線もしくは調整痕。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
124	沖縄産 無釉陶器	壺	A	11.5	—	—	色調は内一鈍黄橙、外一暗赤褐、断一両側が灰、中央が赤褐。短頸。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
125	沖縄産 無釉陶器	壺	A	8.3	7.1	12.9	色調は内・外一暗褐、断一赤褐。肩部、見込みに自然釉(灰綠)。口縁は直口し、端部丸縁。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
126	沖縄産 無釉陶器	壺	A	11.4	—	—	色調は内一橙、外一灰オーラブ、断一赤褐。外面自然釉。玉縁口縁。横耳付着痕あり。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
127	沖縄産 無釉陶器	壺	A	—	—	—	色調は内・外一暗褐、断一赤褐。頸部径9.4cm。縦耳あり。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
128	沖縄産 無釉陶器	壺	A?	—	8.7	—	色調は内一オーラブ黄、外一断一赤褐。外面は自然?透明釉。外底「一」ヘラ記号か?	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
129	沖縄産 無釉陶器	壺	A?	—	18.0	—	色調は内一鈍黄褐、断一赤褐。外面自然釉。外底ヘラ記号か?	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
130	沖縄産 無釉陶器	壺	A	30.8	—	—	色調は内・外一暗褐、断一外側が灰赤、内側が黄灰。口縁は幅広の角形。内面凹凸顕著。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
131	沖縄産 無釉陶器	火取	A	10.8	—	—	色調は内・外一黒褐、断一赤褐。全体的に自然釉。外面はロクロ目が6条以上の凹線となる。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)

第33表 陶磁器・各種製品観察表(7)

遺物No.	種類	大分類(器形等)	細分類(材質等)	口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	地区	ケリッド	遺構・層
132	沖縄産無釉陶器	火取	A	10.8	10.8	9.9	色調は内外一灰、断一赤褐。全体に自然釉、外底・見込みに粗い砂・土が付着。外面は8条の凹線。	南	I E 5	石積み1・2 裏込め
133	沖縄産無釉陶器	火炉	A	—	13.9	—	色調は内・断一橙、外一褐灰。胎土は間隙が見られる。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
134	沖縄産無釉陶器	火炉	A	—	14.0	—	色調は内・外一灰褐、断一鈍赤褐、灰白がマーブル状。外面は、自然釉か?	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
135	沖縄産無釉陶器	火炉	A	—	—	—	色調は内・外一褐灰、断一両側が赤褐、中央が灰褐。全体的に凹凸が激しく歪であり、二次焼成によるものか。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
136	沖縄産無釉陶器	鉢	B	20.6	—	—	色調は内・断一赤褐、外一鈍赤褐。波状文5条/1.0cm、上下横ナデ消し。内面に、石灰質薄膜付着。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
137	沖縄産無釉陶器	鉢	B	27.8	—	—	色調は内一橙、外一鈍赤褐、断一外側が橙、内側が灰。外面に泥釉か?	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
138	沖縄産無釉陶器	皿	B	10.4	4.3	2.9	色調は橙。口縁端部に煤付着。胴部下半から外底は未調整。灯明皿。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
139	沖縄産無釉陶器	蓋	B	7.6	底 12.4	4.9	色調は内・外一赤褐～鈍赤褐、断一赤褐。上面未調整。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
140	沖縄産無釉陶器	甕	B	推86.5	—	—	色調は内一鈍赤褐、外・断一赤褐。内面2辺に漆喰塗り固めており再利用か?口縁も打ち欠きか。胴径80.0cm。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
141	沖縄産無釉陶器	火炉	B	28.8	—	—	色調は内一鈍橙、外・断一黄橙。胎土は貝殻・赤色粒混入で軟質。漆喰が数か所付着。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
142	沖縄産無釉陶器	壺	B	13.6	—	—	色調は赤褐。短頸。丁寧な整形。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
143	沖縄産無釉陶器	擂鉢	B	—	10.4	—	色調は内・外一赤褐、断一暗赤褐。擂目は5本/1.2cm。外底にヘラ記号あり。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
144	沖縄産無釉陶器	擂鉢	B	33.1	—	—	色調は内・外一鈍褐、断一赤褐。外面のロクロ目顯著。擂目7本/1.0cm、上部横ナデ消し。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
145	沖縄産無釉陶器	擂鉢	B	—	10.2	—	色調は内一暗褐、外一鈍赤褐、断一暗赤褐。擂目6本/1.5cm、下半やや磨滅。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
146	沖縄産無釉陶器	火炉	B	13.7	—	—	色調は赤褐。把手は台形状で穿孔あり。胴部上半にヘラ記号「↖↖」。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
147	陶質土器	碗	—	—	5.8	—	色調は黄橙、部分的に鈍黄褐。やや焼成不良か。高台端に斜方向のケズリ痕。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
148	陶質土器	皿	—	11.4	4.8	3.3	色調は内・外一橙、断一鈍黄橙。口縁端部に煤付着。外底未調整。灯明皿。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
149	陶質土器	鉢	—	—	10.0	—	色調は橙。胎土は赤・白色粒等混入多い。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
150	陶質土器	皿	—	—	6.6	—	色調は内・外一橙、断一鈍黄橙。外底糸切り痕。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
151	陶質土器	鍋	—	—	8.2	—	色調は内・外一黄橙、断一鈍黄橙。胎土は赤・白色粒等の混入物はあるが、精良。丁寧な調整。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
152	陶質土器	焙烙	—	—	—	—	色調は黄橙。内面に板状工具(木目6本/1.0cm)による横ナデ。胎土は混入物がなく精良。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
153	沖縄産土器	鉢	パナリ焼	—	—	—	色調は内・外一明褐、断一鈍褐。胎土は貝殻等粗粒の混入物が多い。器面は非常に滑らか。外面丁寧な横ナデ。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
154	沖縄産土器	壺	パナリ焼	—	—	—	色調は内・外一明褐、断一鈍黄褐。胎土は貝殻等粗粒の混入物が多い。外面下半ケズリ、上半横ナデ。頸部径10.0cm。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)

第34表 陶磁器・各種製品観察表(8)

遺物No.	種類	大分類 (器形等)	細分類 (材質等)	口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	地区	グリッド	遺構・層
155	沖縄産土器	皿	パナリ焼か 宮古式	18.6	16.2	3.1	色調は内・外一橙、断一灰褐。胎土は貝殻・赤色粒等細粒で混入。把手等が欠損した可能性。外底系切痕。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
156	沖縄産土器	壺	宮古式	13.6	—	—	色調は内一黄橙、外一黒、断一褐灰。胎土は白色粒等微粒で混入。外面は横位のミガキ。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
157	瓦質土器	火炉	—	12.4	—	—	色調は内・断一灰、外一黄灰。焼成は良好。胎土も精良。	南	H・I E 3~5	石積み1・2 裏込め
158	瓦質土器	植木鉢	—	—	—	—	色調は内・外一鈍橙、断一橙。胎土は若干黒・赤色の粗粒混入。刻み目突帯3条。型押しによる草花文。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
159	瓦質土器	鉢	—	—	—	—	色調は内・外一灰黄、断一灰。胎土は精良。外面非常に平滑。胴部径36.6cm。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
160	瓦質土器	家形 厨子	—	—	—	—	色調は橙。胎土は赤・黒色粒多く混入。家形厨子の底部近くと思われる。	南	G 1	1層
161	本土産 近代陶磁器	碗	染付	10.0	3.8	5.5	口縁は直口。外面は大振りの花文、内面は不明の横帯文、見込みも不明文。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
162	本土産 近代陶磁器	皿	色絵	11.6	6.1	2.5	口縁は輪花。透明釉に赤・ピンク・青・緑による草花文の絵付け。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
163	本土産 近代陶磁器	皿	型紙刷り・ 砥部	—	8.0	—	蛇の目高台。内面・見込みは菊花・青海波等。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
164	本土産 近代陶磁器	合子	銅版刷り	11.3	10.2	2.1	外面に菊?花文。底部は浅い基筒底状。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
165	本土産 近代陶磁器	小杯	銅版刷り	6.0	3.6	6.9	外面は黒釉、内面に銅版刷りの風景画。外面胴部下半は凹状の面取り。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
166	煙管	雁首	陶首II類	3.5	1.5	0.3	火皿1.6cm、小口推定1.4cm、胎土：灰褐色(7.5YR5/2)で粗粒、施釉：無釉、整形：細かく面取り、分類：陶首II類、産地：沖縄産	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
167	煙管	雁首	陶首II類	3.4	1.5	0.3	火皿1.7cm、小口不明、胎土：明赤褐色(2.5YR5/6)で粗粒、施釉：無釉、整形：細かく面取り、その他：火皿口唇部に煤付着、分類：陶首II類、産地：沖縄産	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
168	煙管	雁首	陶首II類	—	1.4	0.3	火皿1.6cm、小口1.35cm、胎土：明赤褐色(2.5YR5/6)で粗粒、施釉：無釉、整形：細かく面取り、分類：陶首II類、産地：沖縄産	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
169	煙管	雁首	陶首II類	2.2	1.5	0.3	火皿不明、小口1.25cm、胎土：明赤褐色(2.5YR5/6)で粗粒、焼成により表面黒褐色化、施釉：無釉、整形：8面に面取り、分類：陶首II類、産地：沖縄産	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
170	煙管	雁首	陶首III類	2.5	1.8	0.3	火皿1.5cm、小口推定1.3cm、胎土：灰白色(5Y8/2)で細粒緻密、施釉：綠釉小口釉剥ぎ、分類：陶首III類、産地：沖縄産	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
171	煙管	雁首	陶首III類	—	1.6	0.3	火皿推定1.5cm、小口1.3cm、胎土：灰白色(5Y8/1)で細粒緻密、施釉：綠釉小口釉剥ぎ、分類：陶首III類、産地：中国産か	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
172	煙管	雁首	陶首III類	—	1.7	0.2	火皿推定1.5cm、小口1.1cm、胎土：灰白色(5Y8/2)で細粒、施釉：綠釉小口釉剥ぎ、分類：陶首III類、産地：沖縄産	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
173	煙管	吸口	陶口II類	2.8	1.5	0.4	小口1.5cm、口付0.7cm、胎土：灰白色(5Y8/1)で細粒緻密、施釉：透明釉、小口釉剥ぎ、その他：二次焼成、分類：陶口II類、産地：沖縄産	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
174	煙管	吸口	陶口II類	2.9	1.6	0.2	小口1.6cm、口付0.6cm、胎土：灰白色(5Y8/1)で細粒緻密、施釉：透明釉小口釉剥ぎ、整形：小口付近面取り、分類：陶口II類、産地：沖縄産	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
175	煙管	雁首	金首II類	5.8	1.0	0.1	素材：真鍮製、整形：鍛造、その他：中央部で変形、火皿部欠損、分類：金首II類(古泉編年IV期)、産地：本土産か	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)

第35表 陶磁器・各種製品観察表（9）

遺物No.	種類	大分類(器形等)	細分類(材質等)	口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	地区	グリッド	遺構・層
176	錢貨	中国	至道元寶	2.3	—	0.1	孔径：0.57cm、文字：真書体、その他：背面扁平化により内外縁とも不明瞭	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
177	錢貨	日本	寛永通寶	—	—	0.1	孔径：0.57cm、文字：真書体で「寛〇通〇」、その他：新古不明	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
178	錢貨	産地不明	無文錢	2.1	—	0.1	孔径：0.69cm、その他：内外とも縁なしで薄い、模鋳錢か	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
179	錢貨	産地不明	無文錢	2.2	—	0.1	孔径：0.73cm、その他：表裏とも内外縁不明瞭、形状いびつ、模鋳錢か	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
180	錢貨	産地不明	無文錢	1.8	—	0.1	孔径：0.81cm、その他：内外とも縁なし、孔形状いびつ	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
181	錢貨	産地不明	無文錢	1.63*	—	0.06*	無文錢5枚が溶着、孔径：0.78cm* ※最前面の資料を計測	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
182	錢貨	産地不明	輪錢	1.0	—	0.1	孔径：0.67cm、整形：片側側面に鋳バリ残	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
183	錢貨	産地不明	輪錢	1.5	—	0.1	無文錢12枚溶着、孔径：0.05cm* ※最前面の資料を計測	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
184	青銅製品	簪	側差	9.1	0.5	0.2	完形。竿部は長方形（幅0.3cm、厚0.2cm）。頭部は六角形（幅・厚0.25cm）。カブは厚さ0.1cm。	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
185	青銅製品	不明	環頭状	5.9+	1.3	0.2	板状金具を折り曲げ、径0.8cmの環頭部を作り、その下方は重ね合わせている。	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
186	青銅製品	釘	—	3.2	1.9	0.7	先端部は直角に折れ曲がるため、本来の長さは4.5cmぐらいか。頭部は平面が半円形で、前方に曲る。	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
187	青銅製品（鍍金）	不明	把手状	2.3+	3.4+	0.4	棒状金具を折り曲げて、C字状にした金具の一部。銅錫が薄い部分には鍍金部分が見える。	南	G E 1	1層
188	青銅製品	薬莢	—	1.9	0.9	0.1	口径15.6cm（20ゲージ）の散弾銃の薬莢底部と思われる。内部には紙片が残存し、薬莢本体が紙製と考えられる。	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
189	青銅製品	砲弾	弾帯	7.2+	4.6+	0.7	砲弾の弾帯の破片。ライフルマーク（幅0.8cm）の上に横方向の擦痕（幅0.2cm）2条あり。134g。	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
190	青銅製品	砲弾	弾帯	5.2+	5.0+	0.4	砲弾の弾帯の破片。ライフルマーク（幅0.5cm）あり。変形が激しい。81g。	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
191	るつぼ（鍛冶関連製品）	—	—	5.2+	—	(推5.0)	陶器製で碗状。専用・転用は不明。内面が赤変し、銅滴が付着。外面は白色部が多い。	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
192	碁石	—	貝製	1.7	1.5	0.4	形状：上原分類レンズ型、整形：全周研磨、その他：貝殻模様僅かに残	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
193	石製品	硯	赤色頁岩製	—	7.3	10.1	文字：硯背に「赤間」部分的に残、年代：幕末頃（岩崎2005）、産地：赤間硯	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
194	貝製品	残核	ヤコウガイ身	17.1	16.3	—	加工：中央部に10cm大と2.3cmの孔、小孔は破碎面に丸み帯びる。758.9g	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
195	中国産青磁	碗	V	—	5.4	—	胎土は灰白色で軟質。釉は高台内側途中まで施釉。外面底部上部に連弁文？、内面に草花文。	北	F 1	1層
196	中国産青花	皿	明（景德鎮I）	—	6.7	—	薄手。畳付けを釉剥ぎ。見込みにアラベスク文。外面芭蕉文？	北	E 1	1層
197	中国産緑釉陶器	袋物	—	—	—	—	胎土軟質、灰白色。赤褐色粒と黒色粒を少量含む。焼成良好。外面に緑釉を施釉し、二重圈線内に七宝文を陽刻する。	北	D E F 1・2	1層
198	本土産染付	皿	肥前系	14.1	—	0.2～1.0	接合しないが3点が同一個体と推定、整形：輻輳、胎土：灰白色（N8/）で緻密、装飾：日字鳳凰文、時期：『九州陶磁の編年』III期	北	D 2	1層

第36表 陶磁器・各種製品観察表(10)

遺物 No.	種類	大分類 (器形等)	細分類 (材質等)	口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	地区	グリッド	遺構・層
199	本土産土器 (土師器)	皿	南九州産?	14.7	8.4	2.7	色調は外・断一淡黄、内一鈍黄褐。胎土精良。てづくね成形。外面上半より内面ヨコナデ。見込みは指頭圧痕やや残り、一定方向のナデ。外底は未整形。内面は部分的に黒色の付着物あり。	北	D E F 1・2	1層
200	沖縄産 施釉陶器	碗	A	13.2	—	—	灰釉、胴部上半のみ施釉。胎土は灰白。	北	E 1	1層
201	沖縄産 施釉陶器	碗	A	—	6.8	—	底部は無釉だが、おそらく灰釉。胎土は灰。畳付にわずかに砂付着。	北	D 1	1層
202	煙管	円筒形	瓦質雁首	3.8	2.9	—	再生途上の陶首 I-2類未成品、胎土:灰色(N6')、整形:研磨による面取り、その他:底面の磨面のみ若干風化、上面に穿孔途上の凹み有	北	D 1・2	1トレンチ 1層
203	青銅製品 (鍍金)	不明	不明	2.9+	1.6	0.1	片面に鍍金された非常に薄い飾金具。鍍金面に線彫による施文あり。	北	C 2	1層
204	青銅製品	不明	環座	2.0+	1.6	0.1	端部を輪花状とし、直径約6cm、孔部が約3cmの環座状製品。	北	F 1	1層
205	青銅製品	不明	不明	2.2+	3.2	0.1	部分的であるが両面に鍍金が残る。平面はおそらく略台形。縁辺に径2.0cmの孔が0.3~0.5cm間隔で見られる。	北	F 2	1層
206	鉄製品	不明	—	2.6+	3.8	0.4	径0.6cmの孔が2つあり。	北	D 2	1層
207	鉄製品	弾丸	—	2.7	2.2	—	鉄鏽が付着しており、本来は径2.1cmの球状。	北	D E F 1・2	1層
208	鉄製品	刀子	—	10.3+	推1.5	推0.3	刀子の両端が欠損。茎部は幅0.9cm、厚0.5cm。刀部は半円形か。	北	D 1	1層
209	骨製品	不明	—	3.1	1.0	0.7	素材骨種:動物種・部位とも不明、加工痕:連続切込み、全面研磨、使用痕:なし	北	D 1	1層
210	青銅製品	記章	—	3.1+	2.7+	0.1	一部欠損しているが、縦書きで「首一」と読める。首里第一尋常高等小学校の校章と思われる。	北	D 1・2	1トレンチ 1層
211	鉄製品	不明	—	6.7+	2.5+	0.8	棒状もしくは板状製品。刀子か?	北	D 1	1層
212	鉄製品	不明	—	6.3+	2.5+	0.5	長方形の板状製品か?	北	D 1・2	1トレンチ 1層
213	鉄製品	釘	—	6.0+	2.5	1.8	大形の鉄釘の基部に近い部分か。	北	D 2	1トレンチ 1層
214	鉄製品	不明	—	13.0+	4.5	0.7	ヘラもしくは鎌の一部か?	北	E 1	1層
215	錢貨	中国	大定通寶 (?)	2.3	—	0.1	孔径:0.57cm、形状:被熱により変形、文字:真書体「大(?)定○寶」、「定」の字形より大定通寶か	北	F 1	1層
216	錢貨	日本	一錢	2.8	—	0.2	龍一錢、鑄造明治13年	北	E 1	1層
217	錢貨	日本	一錢	1.8	—	0.2	鑄造昭和4年	北	D 1	1層
218	錢貨	産地不明	輪錢	1.21*	—	—	輪錢2枚が溶着、孔径:0.078cm* *前面の資料を計測	北	C 2	1層
219	碁石	—	ガラス製	1.6	1.6	0.7	鏡餅型。形状やや歪、底面凹凸有	北	F 1	1層
220	ボタン	—	陶製	2.0	—	1.0	整形:型造り、施釉:透明釉、全面、類例:『中城御殿跡(2)』	北	D 2	1層

第37表 陶磁器・各種製品観察表(11)

遺物No.	種類	大分類(器形等)	細分類(材質等)	口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	地区	グリッド	遺構・層
221	中国産青磁	酒海壺	—	17.2	—	—	酒海壺の蓋。釉は外面に厚く、内面に薄く施釉。外面に幅0.3cmの連弁状の櫛描き文。	北	E 2	2トレンチ 2層
222	中国産青磁	皿	V	—	5.0	—	釉は高台内側途中まで施釉。外底面は蛇の目釉剥ぎ。見込みに草花文。	北	D 2	2トレンチ 2'層
223	中国産青磁	盤	—	—	9.6	—	外底面は蛇の目釉剥ぎ。見込みに草文。高台を持つ。	北	D 2	1トレンチ 2'層
224	中国産青花	皿	明(景德鎮II)	9.9	—	—	端反口縁。外面に唐草文。内面に簡略化したアラベスク文?	北	D 1+2	1トレンチ 2'層
225	中国産青花	碗	明(漳州)	13.2	—	—	釉は灰白色。呉須發色純い。外面に花唐草文。	北	D 2	2トレンチ 2層
226	中国産青花	碗	清(福建・廣東)	—	6.2	—	釉は灰白色。外面下半露胎。呉須發色純い。見込みと外面底部付近に圈線。見込みを蛇の目釉剥ぎ。	北	D 2	2トレンチ 2層
227	ベトナム産青花	碗	—	—	—	—	胎土軟質、灰白色。焼成良好。透明釉。外面に青色と灰オリーブ色の釉が施されるが詳細不明。	北	D 2	1トレンチ 2'層
228	本土産施釉陶器	小碗	肥前系	—	3.5	—	整形:輪轂、施釉:銅緑釉、高台外面、胎土:黒色粒混じりの灰白色(10Y8/1)で緻密、窓詰め痕跡:見込みにハマ痕残、產地詳細:内野山窯、時期:『九州陶磁の編年』III~IV期	北	E 1+2	1トレンチ 2層
229	沖縄産無釉陶器	火炉	A	—	13.0	—	色調は内一橙、外一胴部は灰黄褐、底部は明赤褐、断一暗赤褐。脚部端は未調整。	北	F 2	2トレンチ 2層
230	青銅製品(鍍金)	不明	板状	3.1+	2.7+	0.1	現状では台形状の板状製品。片面に線影による不明文様が表現され、金箔が残る。不明の飾金具。重量3.1g。	北	D 2	1トレンチ 2'層
231	鉄製品	蝶番	—	7.7	4.8+	0.6	板状部の幅は2.0cm。端部はU字形。棒状部は欠損。扉等の可動部分の蝶番の一部か?重量58.1g。	北	E 2	2トレンチ 2層
232	貝製品	—	ヤコウガイ蓋	8.2	7.7	1.9	下縁部に敲打により剥離面を作る。	北	D 2	1トレンチ 2'層
233	中国産青磁	碗	V-1	—	—	—	胎土は灰白色。外面に幅1cmほどのヘラ描きの連弁文。	北	E F 1	1トレンチ 3層下
234	中国産青磁	碗	V-2	—	—	—	釉はガラス質で貫入多い。外面に雷文とヘラ描きの連弁文。内面にヘラ描きの草花文。直口口縁。	北	D 2	1トレンチ 3'層
235	中国産青磁	碗	V-2	—	—	—	釉は被熱のため外面の一部が劣化している。外面に雷文。内面に雷文と胴部に花文。	北	F 1	1トレンチ 3層上
236	中国産青磁	碗	V-0	16.2	—	—	釉は被熱のためか劣化しており、内面に別個体の破片が溶着している。	北	F 1	1トレンチ 3層下
237	中国産青磁	碗	V	—	6.5	—	胎土は灰白色。見込みの圈線内に型押しの花文。外底面は蛇の目釉剥ぎされ、重ね焼きの痕あり。	北	E F 1	1トレンチ 3層下
238	中国産青磁	碗	V	—	4.8	—	釉は厚いが、内面が被熱を受けたのか劣化している。外底面と高台内側が釉剥ぎされる。外面に連弁文か。	北		1トレンチ 3'層
239	中国産青磁	香炉	—	—	3.7	—	胎土は白色で軟質。腰折。外面に貼付けの文様。外底面無釉。	北	D 2	1トレンチ 3'層
240	中国産青磁	皿	V-1	10.9	5.4	3.1	口縁部は口折。胎土は灰白色。外面に片彫りの連弁文。見込みに圈線。	北	D 2	1トレンチ 3'層
241	中国産青磁	皿	V-0	13.0	6.4	4.1	胎土は灰色だが一部が灰白色。釉は被熱のためか外面の表面に気泡が目立つ。内面に草文。	北	E F 1	1トレンチ 3層上+3層下
242	中国産青磁	盤	—	24.8	—	—	直口口縁。胎土は白色。口縁は肥厚。釉は内面に幅0.5cmの連弁状の櫛描文。	北	F 1+2	1トレンチ 3層下+3層
243	中国産青磁	盤	—	24.0	—	—	鈎縁口縁。胎土は灰白色。釉は風化のためか色調を失くす。内面に幅0.2cmの連弁状の櫛描文。外表面胴部に二重の圈線。	北	F 2	2トレンチ 3層

第38表 陶磁器・各種製品観察表(12)

遺物No.	種類	大分類 (器形等)	細分類 (材質等)	口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	地区	グリッド*	遺構・層
244	中国産青磁	盤	—	—	—	—	鋸縁口縁で稜花状となる。被熱のためか表面は粗い。胎土は白色。口縁は稜花に沿い三条沈線を巡らせ、その下部に唐草文。	北	F 1	1トレンチ 3層上
245	中国産青磁	壺	—	—	—	—	胎土は白色。外面に窓の一部と思われる文様あり。	北	E 1	1トレンチ 3層上
246	中国産青磁	酒海壺	—	—	—	—	釉は厚く、青緑色。酒海壺の口縁部。外面口縁部下に唐草文風の横帯文。	北	E 1	1トレンチ 3層上
247	中国産青花	碗	明 (景德鎮 I-1)	—	—	—	被熱を受けたのか表面光沢なし。外面に唐草文。内面に四方櫛文。	北	F 1	1トレンチ 3層上
248	中国産青花	碗	明 (景德鎮 I-1)	—	4.4	—	疊付け釉剥ぎ。貫入あり。見込みに草文。外面に宝相華文。	北	D 2	1トレンチ 3層
249	中国産白磁	皿	福建D	—	3.8	—	乳白色。外面下半露胎。軟質。抉り高台。見込み重ね焼き痕1か所。	北	D 1・2	1トレンチ 3' B層
250	中国産白磁	瓶	福建	—	5.6	—	乳白色。外面下半露胎。軟質。貫入多い。胎土はD類またはD'類に類似。	北	E 1	1トレンチ 3層上
251	中国産褐釉陶器	壺	5類	15.6	—	—	胎土灰色。白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。口縁上部に1か所耐火土。	北	D 2	1トレンチ 3' B層
252	タイ産褐釉陶器	壺	シーサッチャナライ窯	12.4	—	—	胎土粗く、灰黒色。赤褐色粒と白色粒を多く含む。釉はオリーブ黒色。表面は被熱を受けたのか釉がアバタ状となっている。	北	D 1・2	1トレンチ 3' B層
253	タイ産褐釉陶器	壺	メナムノイ窯II類	21.2	—	—	胎土やや粗く、灰黒色。赤色粒を多く、白色粒を少量含む。釉はオリーブ黒色で、外面口縁部下から頸部まで、内面頸部より下部が無釉。	北	F 2	2トレンチ 3層
254	本土産施釉陶器	碗	肥前系	12.2	—	—	施釉：内外面銅緑釉、胎土：灰黄色(2.5Y7/2)で粗粒、窯詰め痕跡：見込にハマ痕、産地詳細：内野山窯、時期：『九州陶磁器の編年』III～IV期	北	F 2	2トレンチ 3層
255	青銅製品	甲冑立物	鍔形台	2.8+	2.5+	0.1	変形しており、左右端が欠損。中央部幅1.7cm。鍔金の有無は不明。重量6.0g。	北	D 2	1トレンチ 3層
256	青銅製品	甲冑金物	八双金物	4.8	1.5	0.1	長軸がわずかに変形。無文。重量4.3g。	北	D 2	1トレンチ 3層
257	青銅製品	甲冑金物	八双金物	1.4+	1.7	0.1	両端欠損。魚々子(径0.1cm)が重なりがなく比較的整然とうたれる。重量1.6g。	北	D 2	1トレンチ 3層
258	青銅製品(鍔金)	甲冑金物	八双金物	2.3+	1.9	0.1	全体的に変形し、一端欠損。表面は鍔金。線彫と魚々子(径0.1cm)による草もしくは樹を表現する。重量3.2g。	北	D 2	1トレンチ 3層
259	青銅製品(鍔金)	鍔	—	2.2+	0.9	0.1	頭部は丸く、ドーム状、鍔金される。軸部は二叉。重量1.45g。	北	D 2	1トレンチ 3層
260	鉄製品	甲冑小札	—	3.3+	2.2+	0.2	孔径0.2cm、おそらく2列か。重量3.5g。	北	D 2	1トレンチ 3' B層
261	鉄製品	刀子	—	7.0+	1.4	0.2	刀子の基部。刀部は欠損。重量9.5g。	北	F 2	2トレンチ 3層
262	鉄製品(鍛冶関連製品)	鉄滓	—	5.2	2.9	1.4	不整な菱形状で、中央がわずかに壅んでおり、碗形滓か。重量58.9g。	北	D 2	1トレンチ 3' B層
263	鉄製品(鍛冶関連製品)	鉄滓	—	4.3+	5.2	—	台形状を呈しているが、一端が欠損。断面が凹状を呈し、碗形滓と思われる。凹部に木質付着。重量57.7g。	北	E 1	1トレンチ 3層上
264	鉄製品	甲冑小札	—	4.3+	2.2	0.5	孔径0.3cm、2列。重量10.4g。	北	F 1	1トレンチ 4'・5層

第39表 陶磁器・各種製品観察表(13)

遺物No.	種類	大分類(器形等)	細分類(材質等)	口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	地区	グリッド	遺構・層
265	鉄製品	釘	角釘	4.4	0.6	0.7	先端側に横方向の木目残る。頭部の突出部長0.1cm。重量2.6g。	北	F 1	1トレンチ4・5層
266	タイ産褐釉陶器	鉢	—	26.2	—	—	胎土粗く、灰黒色。黒色粒と白色粒を少量含む。釉は褐色で、外面はロクロ目に沿った縞模様に施釉される。口縁部の内側は玉縁となる。	北	E 1	1トレンチ5層
267	石製品	石球	細粒砂岩製	5.9	5.6	—	加工：全面に敲打痕残、重量：98.7g	北	F 1	1トレンチ5層
268	るっぽ(鍛冶関連製品)	—	—	—	3.6	3.5+	底部厚2.0cm、何らかの底部で、元来の姿かは不明。二次被熱のためか、全体的に白色で脆く、内面は赤灰色。外面に赤黒～赤の付着物。	北	F 1	1トレンチ5層
269	鉄製品	不明	—	2.9+	2.5+	0.3	不明の板状製品。表面が赤色を呈する部分があるが、鏽か。重量5.1g。	北	E 1	1トレンチ5層
270	鉄製品	刀子	—	5.8+	4.2+	0.4	幅広の刀子の可能性。軸部幅3.6cm。推定目釘孔径0.4cm。重量23.0g。	北	F 1	1トレンチ5層
271	鉄製品	釘	角釘	7.7+	0.7	0.7	先端部側で若干折れ曲り、先端は欠損。頭部長さ1.2cm、幅1.3cm。木目は下方に横方向。全体的に厚づくり。重量21.4g。	北	E 1	1トレンチ5層
272	鉄製品	釘	角釘	6.2+	0.7	0.5	先端わずかに欠損。頭部の突出部長さ0.1cm。木目は上方が横、下方が縦方向。重量7.4g。	北	E 1	1トレンチ5層
273	鉄製品	釘	角釘	5.1	0.5	0.3	先端が緩やかに曲がる。頭部幅0.9cm、突出部長0.1cm。木目は上方に縦方向。重量5.1g。	北	F 1	1トレンチ6層

4. 瓦

瓦は、グスク時代の「高麗系瓦」、「大和系瓦」、近世の「明朝系瓦」がある。種類別に内容を紹介するが、これら3瓦の分類概念・用語は原則的に大川清、上原静の研究に基づくものとする(大川1962、上原2013)。高麗系瓦については浦添ようどれ(浦添市教委2005、2007)、大和系瓦については崎山御嶽遺跡(那霸市教委2005)の両報告も適宜参考にした。

なお出土点数は高麗系瓦2点、大和系瓦32点、明朝系瓦813点であり、ほとんどが破片である。図を掲載したもののが々の特徴については観察表(第49～51表)に示す。

高麗系瓦(274)(第37図、第40・49表、図版27)

平瓦2点が出土しており、丸瓦等は見られない。

平瓦(274)

高麗系瓦特有の羽状打捺文が凸面に見られるが、文様が不鮮明である。2点とも破片のため銘文は不明。

大和系瓦(275)(第37図、第41・42・49表、図版27)

平瓦31点、丸瓦1点出土しており、他の種類の瓦は見られない。

平瓦(275)

文様は無文。側面の断面が2段になっており上原分類に基づくと側面Bタイプである。離れ砂が両面顕著にみられる。

第40表 高麗系瓦集計表

合計/点数	地区/層序/グリッド			合計	
	北区				
	3'層				
色調	種類	部位	3'B層	3層上	
灰色	平瓦	筒部	D1・2	E1	
			1	1	
		合計	1	1	
			2	2	

明朝系瓦(276～297)(第37～40図、第43～48・50・51表、図版27・28)

明朝系瓦は、まず色調で大きく灰色系、赤色系に分けられ、大まかに前者から後者に移行するとされており、

第 41 表 大和系瓦集計表

合計／点数				地区／層序／グリッド																合計			
				南区		北区																	
				1層		1層		3' 層		3層				4・5層		5層		6層					
				琉大石 垣裏込				3' 層		3' B層		3層上		3層下		4・5層		5層		6層			
種類	色調	部位	角	IE3～5	G1	F1	D2	D2	D2	D1・2	F1	E1	E・F1	F1	E・F1	F1	F1	E2	F1	F1	合計		
丸瓦	灰色	箇部	二																		1		
平瓦	灰色	広端部	角1つ																		1		
			一	1	2	2	1	2		1	1	3	1	4	1	1		1	3	1	25		
		狭端部	角1つ					1			1								1		3		
		なし							1		1										2		
		小計				1	2	2	1	3	1	1	3	3	2	4	1	1	1	1	4	1	32
		合計				3		3		5			13				1	2		4	1	32	

第 42 表 大和系平瓦厚さ集計表

合計／点数				地区／層序／グリッド																合計		
				南区		北区																
				1層		1層		3' 層		3層				4・5層		5層		6層				
				琉大石 垣裏込				3' 層		3' B層		3層上		3層下		4・5層		5層		6層		
色調	部位	厚さ	IE3～5	D2	F1	D2	D2	D2	D1・2	E1	F1	E・F1	F1	E・F1	F1	E2	F1	F1	F1	合計		
灰色	広端部	1.7~1.9																			1	
		~1.6	1			1	1	1		1	3				1				1	10		
		1.7~1.9	1	1	1	1						1	1	1				2		9		
灰色	簡部	2.0~2.2										1		1		1		1		4		
		2.3~	1						1				1						2			
		~1.6							1										1			
灰色	狭端部	2.0~2.2							1			2							3			
		2.3~																1		1		
		小計		1	2	1	2	3	1	1	3	3	2	4	1	1	1	4	1	31		
		合計		3		3			5			13				1	1	4	1	31		

その分類については後述する。総破片数は、813 点である（第 44 表）。一方、瓦当の分類は、上原靜（1994・2013）の研究を参考に分類したところ、その多くは該当するタイプであった。喜名窯系については出土数が少ないので述べないことにする。その他主張的なものについて説明していく。

色調 色調でみると灰色系、褐色系、赤色系の 3 つに分けられる。

灰色系 灰色のものである。

褐色系 灰色と赤色の中間的なもので、鈍いものは黄褐色、明るいものは黄橙色のものまで含む。

赤色系 赤色、橙色のものとした。なお、マンガン釉と呼ばれる黒色の薄い釉が掛けられるものもある。

軒丸瓦 (276 ~ 279)

瓦当文様は、上原分類で大別 3 タイプとなる。草花文側視 1 型、側視 2 型、正視型である。今回、正視型は出土していない。ただ、一部、該当しないもの、完全に同一とはいえないものや区別できないものもある。以下、分類及び細分類ごとに特徴を説明する。

側視 1 型 I B 式

側視 1 型の内、花柱を備え花弁が瓦当面全体に広がる I B 式とする。

[I B a 式]

文様の表現には具象的なものと抽象的なものがあり、花弁、茎、葉などの差異を通して細分類できる。

湧田 I B a 02 式 (276) 側面に花弁が三対、花芯の直下に一枚配する花文様である。弁先は三つ山状に分かれ、その花芯は鏡餅状で、刻みはあるものの、簡略化されている。本資料は花芯と葉の部分が残る程度である。

[I B b 式]

系列では最終段階の牡丹文様である。花芯上の花柱や、扇状に展開する花弁は大きく変容し、見方によってはハイビスカスに類似する。色調による灰色と赤色とを区別することが出来る。

内間 I B b 01 式 (277) 瓦当の器厚は厚手で、丸瓦との接合角度は（約 98 度）を呈する。（277）は、大部分が欠落する。

側視 2 型第 II 文様系

文様は全体に肉厚で、稜線が強調された花弁は花芯の直下が冠状で、花芯の直下は三つ又状を呈する。また、両側も同様の花弁を二重に重ねている。上下に配置された花芯は円く、表面に縦位の沈線 4 本を描く。珠文は大きく 9 個を備える。

円覚 II b 01 式 (278) 花芯がだるま状に丸が二つ上下に繋がり、花芯直下に展開する花弁が三枚それぞれ独立して表現されている。表面に四本前後のシャープな沈線を施す。(278) は、縁は欠落するが、文様の輪郭は鮮明に残る。

側視 2 型第 III 文様系

隅丸方形状の花芯は上下にあり、表面に縦位の 3 本の刻線を施す。花弁の展開は第 II 文様系に近いが、花芯頂部に僅かな余白部分が存在し異なる。花弁には多数の稜線が見られる。珠文は 9 個。

円覚 III a 01 式 (279) 花芯の刻みが 5 本前後のもので、瓦当及び頸部が薄い。(279) は、縁は欠落するが文様は鮮明である。整形はやや粗い。

軒平瓦

瓦当文様は上原分類の場合大別 4 タイプに分けられる。中でも草花文様は 7 文様系からなる主文様で、構図として側視 1 型が 4 種、側視 2 型が 3 種に大別される。今回出土したものは側視 1 型である。

第 I 文様系

本文様系は牡丹をモチーフにした文様で、花芯を中心にして花弁がおよそ上、中、下段に配置されている。文様は花芯、花弁、茎、葉など表現の違いから細分類出来る。いずれも還元炎焼成炎による灰色瓦群である。

首西 I A a 01 式 (280) 花芯は円く表面に格子状の刻みが入る。花弁は凹弁で弁先が三枚に円く割れて広がる。茎は二本線で表現され、右に湾曲する。葉の縁の切れ込みが三つで、葉脈は明瞭。平瓦部との接合角度は鈍角 (106 度) である。本資料は、縁の下部が欠落するがほぼ完形の製品。葉の一部に風化が見られるが、やや鮮明に文様が残る。

天界 I A a 03 式 (281) 花芯や花弁の造形、形状は上記と同じであるが、簡略化されており、特に弁先の形状に割れの輪郭がみいだしがたい。葉は直線構成で、葉の縁は途中でさきくれ立つ形となる。本資料は、文様は葉の部分に風化がみられるが他はやや鮮明に残る。凹部に「=」のヘラ記号が刻まれている。

第 III 文様系

本様式は I 期から IV 期まで変化を序列的に追うことができる。I 期の灰色瓦の段階は文様の類型から、A の具象的文様と、B の抽象的文様の 2 種類に大別される。とくに、後者の B は炎成技術と文様の変化が顕著にみられる。

首西 III A 01 式 (282) 花文は写実的でなしの花に類似する。花芯は小さい楕円形で細かい格子文が施され、その周囲に凹弁形の花弁を六枚配する。両側の葉は長く筒状に桴海切込みがある。茎には退化した様なヒゲが一対付されている。(282) の文様は風化で葉の部分がやや不鮮明である。

御茶 III B a 01 式 (283) 花芯の輪郭は楕円形で、刻みも含めて不鮮明。花芯の下の花弁は柿の種状を呈し、縦位の沈線が入る。葉は葉脈がシャープで外側に反り返るようにはみ出す。(283) は、半分以上が欠落し、文様はやや不鮮明である。

御茶 III B a 02 式 (284) 文様構成は上記と同じ。ただし、整形面に違いが認められ、木範の傷が横位にはしる。また、瓦当の厚みもやや不均等で特に頸部分では極端に薄い。(284) は、文様がやや不鮮明であり、調整も

粗い。

仮称・首淑東III B a 02式(285) 新出資料で上原分類に基づくと側視1型第III文様系に属すると思われる。

花芯を囲む花弁が離れた造形で、花弁を覆うように葉が伸びており、葉脈も認められる。文様は全体的に肉厚で鮮明である。瓦当は中厚手。

本資料を新出資料と捉えた特徴であるが、III B a01式に見られる花芯の頂部にある花弁が細い線状に近いが、花芯の直上に脈線が入り楕円形のような花弁が残る。葉の輪郭に関して、葉は外縁に沿って波状に成形されかつ葉脈ははみ出さない。III B a02式では花芯の頂部に独立した花弁は見られない。葉の輪郭も簡略化がなされ、葉脈が反り返るようにはみ出す。また、宮古島の住屋遺跡から出土した宮住I B 01式にもタイプが似ている。以上のことから、本資料は灰色瓦のIII B a01～赤色瓦のIII B a02式のバリエーションの1つと思われる。そこで、本資料を首淑東III B a 02式として仮称したい。

丸瓦(286～289)

丸瓦は全体で386点。灰色系199点、赤色110点、褐色系37点、赤褐色38点となる(第45～47表)。

整形・調整 砲弾形の模骨(カラバコ)に粘土を巻きつけて整形し、乾燥させた後2つに割って作られたとされる(上原1994)。凹面には粘土が張り付かないために模骨をまいた布(瓦衣・カラチン)の布目痕が残り、布目側端が縦方向で交差状にみられるものもある(286～289)。

玉縁 その形態を上原分類に基づき分類を行った。

平瓦(290～297)

平瓦は全386点で、灰色系199点、赤色系110点、褐色系37点、赤褐色38点、喜名系2点となる(第48表)。

整形・調整 桶巻状の模骨粘土を巻きつけて整形し、乾燥させた後4つに割って作られたとされる(上原1994)。桶板留紐圧痕と呼ばれる横長方向の凹みは広端部側に見られ、6ヶ所(294)、推定4ヶ所(290～292)、推定3ヶ所(295)、1か所(293)がある。凹面には布目痕が残り、布を継ぎ合わせた糸綴じ痕が狭端部側に見られるものもある。凸面は、縦方向のナデの痕、両端側に横ナデを行うのが基本と見られる(296)。うち1点マンガン釉が掛かるものも出土(297)。

第43表 明朝系軒丸・軒平瓦集計表

合計／点数			地区／層序／グリッド														合計			
種類	分類	色調	南区		北区															
			1層		1層				2'層		2層				3'層		3層			
			琉大石 垣裏込	GE1	D1	D2	D1・2	E1	E2	F2	D2	D1	E1	E2	F2	D2	3'層 3'層 3層	3層上 3' B層 3層	3層下	
			IE3～5													D1・2	F2	E1	F1	
軒丸瓦	御庭 I Ad01	灰色														1				1
	湧田 I Ba02	灰色	1																	1
	内間 I Bb01	褐色	1																	1
	円覚 I Bb01	灰色	1																	1
	御茶 I Bb01	褐色	1																	1
	円覚 II b01	赤色	1																	1
	円覚 III a01	赤色	4																	4
	内間 III a01	赤色	1																	1
	破片	灰色	4			1	1	1		2					1		1	1		12
		褐色	1																	4
		赤色	4	1											1			1		8
	瓦当なし	灰色			1															1
軒平瓦	首西 I Aa01	灰色													1					2
	首木 I Aa02	赤色	1																	1
	天界 I Aa03	灰色	1																	1
	首西 III A01	灰色	3																	3
	御茶 III Ba01	灰色	2																	3
	御茶 III Ba02	赤色	2																	2
	仮称1 首淑東III Bb02	赤色	1																	1
	破片	灰色	2		1	1		1							1	2			10	
		褐色	1			1													2	
		赤色	1			1		1	1										4	
	瓦当なし	灰色	2			1									1				2	
		赤色	2																3	
小計			36	1	2	5	1	3	1	4	1	1	3	5	2	1	1	1	72	
合計			37			16				1		11			2		5		72	

第44表 明朝系瓦全体集計表

合計／点数	地区／層序／グリッド																
	南区							北区									
	1層		2層					3層									
	琉大石 垣裏込	石積1・2裏込	集石1	G1	GE1	GE2	GE3	C2	D1	D2	D1・2	E1	E2	F1	F2		
種類	IE3～5	IE4	IE5	GE2											D・E・ F1・2		
丸瓦	36		1		3	1		1		9	13	3	4	14	3	1	1
平瓦	133		3		14	5	2		1	25	30	5	26	19	10	1	1
軒丸瓦	20					1				2	1	1					2
軒平瓦	16									2	3		2	1			2
不明	74	1		1	2		1		1	17	17	2	10	10	7	2	3
小計	279	1	4	1	19	7	3	1	2	53	65	11	43	44	20	8	5
合計					315												251

合計／点数	地区／層序／グリッド														合計			
	北区																	
	2'層		2層					3'層			3層							
	D2	D1・2	D1	D2	E1	E2	F2	D2	D2	D1・2	D2	F2	E1	F1	F2	F1		
丸瓦	3	3		5	3	9	2	1	1	1	1	3	7	8	1	1	139	
平瓦	9	5	1	4	8	9	6	12	7	5		6	19	14		6	386	
軒丸瓦			1		1	2	2	1		1		1				1	38	
軒平瓦	1				2	3						2					34	
不明	1	1		2	6	14	2	9		3		10	15	4			216	
小計	14	9	2	11	20	37	12	23	8	10	1	20	44	26	1	8	1	813
合計	23			82				41				100					1	813

第45表 明朝系丸瓦集計表

合計／点数	地区／層序／グリッド																	
	南区							北区										
	1層		2層					3層										
	琉大石 垣裏込	石積1・ 2裏込	G1	GE1	GE3			3'層	3' B層	3層	3層上	3層下						
色調	部位	角	IE3～5	IE5				D1	D2	D1・2	E1	E2	F1	F2	D2	D1・2		
灰色	玉縁部	玉縁のみ	4					2		1						1		
		角1つ	1						1	1							1	
		角2つ							1	1		1						
		なし	2															
		筒部	—	4		1			2	7	2		2			1	1	2
褐色	端部	角1つ	2		1			1			1							
		なし	3		1				1		1	2						1
			玉縁のみ															1
		玉縁部	角1つ	1							1	1						
		なし	2						1									3
赤色	筒部	—	3	1														
		なし	2		1				1	1			1					
		角1つ	—	2									5					
		端部	角1つ									2						
		筒部	—									1						1
小計			36	1	3	1	1	9	13	3	4	14	3	1	1	3	3	
合計					42						48						6	

合計／点数	地区／層序／グリッド															
	北区															
	2層		3'層			3層				3層上				3層下		
	D2	E1	E2	F2	D2	D2	D1・2	D2	F2	E1	F1	F2	D・E・ F1・2	D2	D1・2	
灰色	玉縁部	玉縁のみ	1				1								11	
		角1つ	1		1					1	1				8	
		角2つ	1												1	
		なし									4				9	
	筒部	—	2	1	5						1	4			35	
褐色	端部	角1つ													6	
		なし													13	
		玉縁のみ													1	
	玉縁部	角1つ	1												5	
	なし														3	
赤色	筒部	—		1	1	1				1	1		1		11	
		なし													14	
		角1つ													6	
		玉縁のみ													2	
		筒部	—		1	1									1	
小計			5	3	9	2	1	1	1	1	3	7	8	1	1	139
合計					19		3				21					139

第46表 明朝系丸瓦ヘラ記号集計表

合計／点数	斜線				横線			その他		合計
	色調	部位	/	(二本斜線)	\	(二本斜線)	二	三	>	
灰色	玉縁部			1					1	2
	筒部			1			1	1		3
褐色	玉縁部	1								1
	玉縁部	1		2	1					4
	筒部						1			1
赤色	玉縁部									
	筒部									
合計			2	2	2	1	2	1	1	11

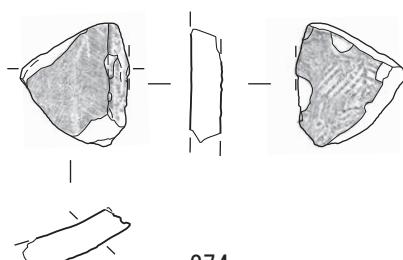
第47表 明朝系丸瓦玉縁集計表

合計／点数			地区／層序／グリッド														合計						
			南区		北区																		
			1層	1層						2' 層	2層		3' 層	3層									
			琉大石 垣裏込	GE1		D1 D2 D1・2		E1 E2 F1 F2	D2	D2 E2	D2	F2	E1 F1 F2	3層		3層上							
色調	玉縁部費さ	玉縁部 断面	IE3~5	GE1		D1	D2	D1・2	E1	E2	F1	F2	D2	D2	E1	F1	F2						
灰色	4~5cm		角形											1				1					
	4cm以下		斜め	1		1	2										1	5					
	5cm以上		角形	1														1					
	不明		斜め	1										1				1					
褐色	4~5cm		不明	3				1	1		2			1	2	1	1	4	1	17			
	4cm以下		斜め	1																1			
	不明		不明	2			1			1				1					2	6			
赤色	4~5cm		斜め	5										1						6			
	4cm以下		斜め											1						1			
	5cm以上		斜め	2										1						2			
	不明		不明	5	1	1	3													11			
小計				22	1	4	6	1	1	3	3	1	2	3	2	1	1	4	2	1	58		
合計				23					19				2	5	1		8				58		

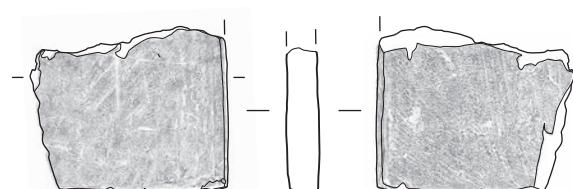
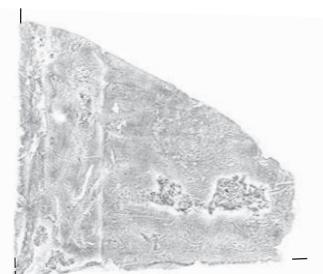
第48表 明朝系平瓦集計表

合計／点数			地区／層序／グリッド															合計		
			南区		北区															
			1層	1層						1層										
			琉大石 垣裏込	石積1・ 2表込	G1	GE1	GE2	C2	D1	D2	D1・2	E1	E2	F1	F2	D・E・ F1・2				
色調	部位	角	IE3~5	IE5																
灰色	広端部～ 狭端部		角2つ	2																
	広端部		角1つ	4											1					
	簡部		なし	7	1	1			1	4	1	3	2	1						
	狭端部		一	22		1	1		9	14	3	10	3	1						
褐色	広端部		角1つ	7	1				1	1		1								
	簡部		なし	10					3	1	1	2	1							
	角1つ																			
	角1つ																			
赤色	広端部		なし	3											2					
	簡部		一	4	1															
	角1つ		2												1					
	角1つ		なし	1											1	2				
赤褐色	広端部		角1つ	1											2					
	簡部		なし	33	12	3			7	4		4	5	3	1					
	角1つ		1			2									1					
	角1つ		なし	3					1			2	1	1						
喜名系	広端部		なし	1																
	簡部		一	1																
小計				133	3	14	5	2	1	25	30	5	26	19	10	1	1			
合計				157						118										

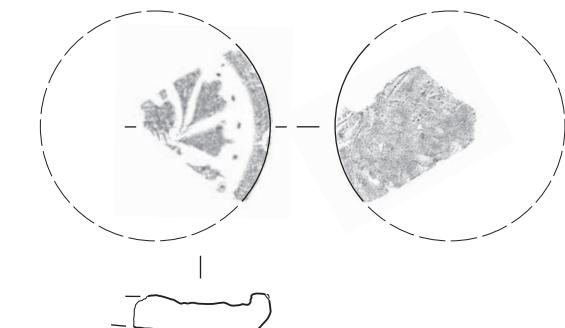
合計／点数			地区／層序／グリッド															合計		
			北区		2層						3' 層		3層							
			2' 層	2層						3' 層	3' B層	3層	3層上	3層下						
			D2	D1・2	D1	D2	E1	E2	F1	D2	D2	D1・2	F2	E1	F1	F1				
色調	部位	角	D2	D1・2	D1	D2	E1	E2	F1	D2	D2	D1・2	F2	E1	F1	F1				
灰色	広端部～ 狭端部		角2つ	1													3			
	広端部		角1つ	1		3	1	1					1	1			14			
	簡部		一	6	3		1	2	1	5	3	1	3	9	5	4	31			
	狭端部		なし	2			1	1	3	3				1	1	1	30			
褐色	広端部		角1つ	1											1		2			
	簡部		なし	1													6			
	角1つ		一			1	2	1			2	1	2	1			17			
	角1つ		なし						1		1	1	2				9			
赤色	広端部		角1つ			1									1		5			
	角2つ		なし														1			
	簡部		一			3	2	1						2			80			
	角1つ		なし											1			5			
赤褐色	広端部		なし														2			
	簡部		一			3	2	1									26			
	角1つ		なし														4			
	角1つ		なし											1			6			
喜名系	広端部		なし														1			
	簡部		一														1			
小計				9	5	1	4	8	9	6	12	7	5	6	19	14	6	386		
合計				14				28			24			45				386		



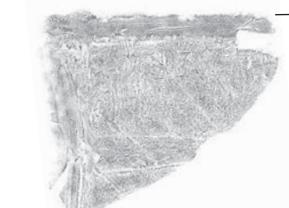
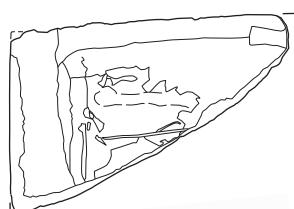
274
北区 D1・2 1トレンチ 3' B層



275
北区 F1 1トレンチ 3層上

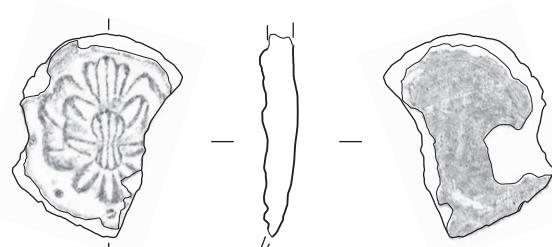


276
南区 IE3~5 1層 (琉大石垣裏込め)

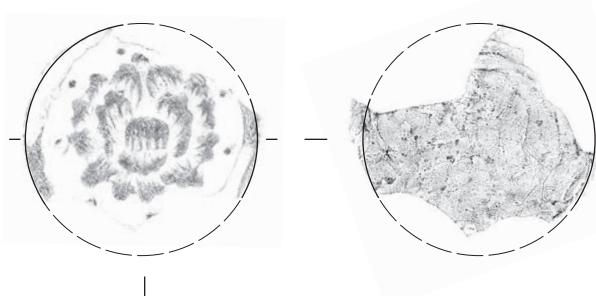


277
南区 IE3~5 1層 (琉大石垣裏込め)

: 漆喰



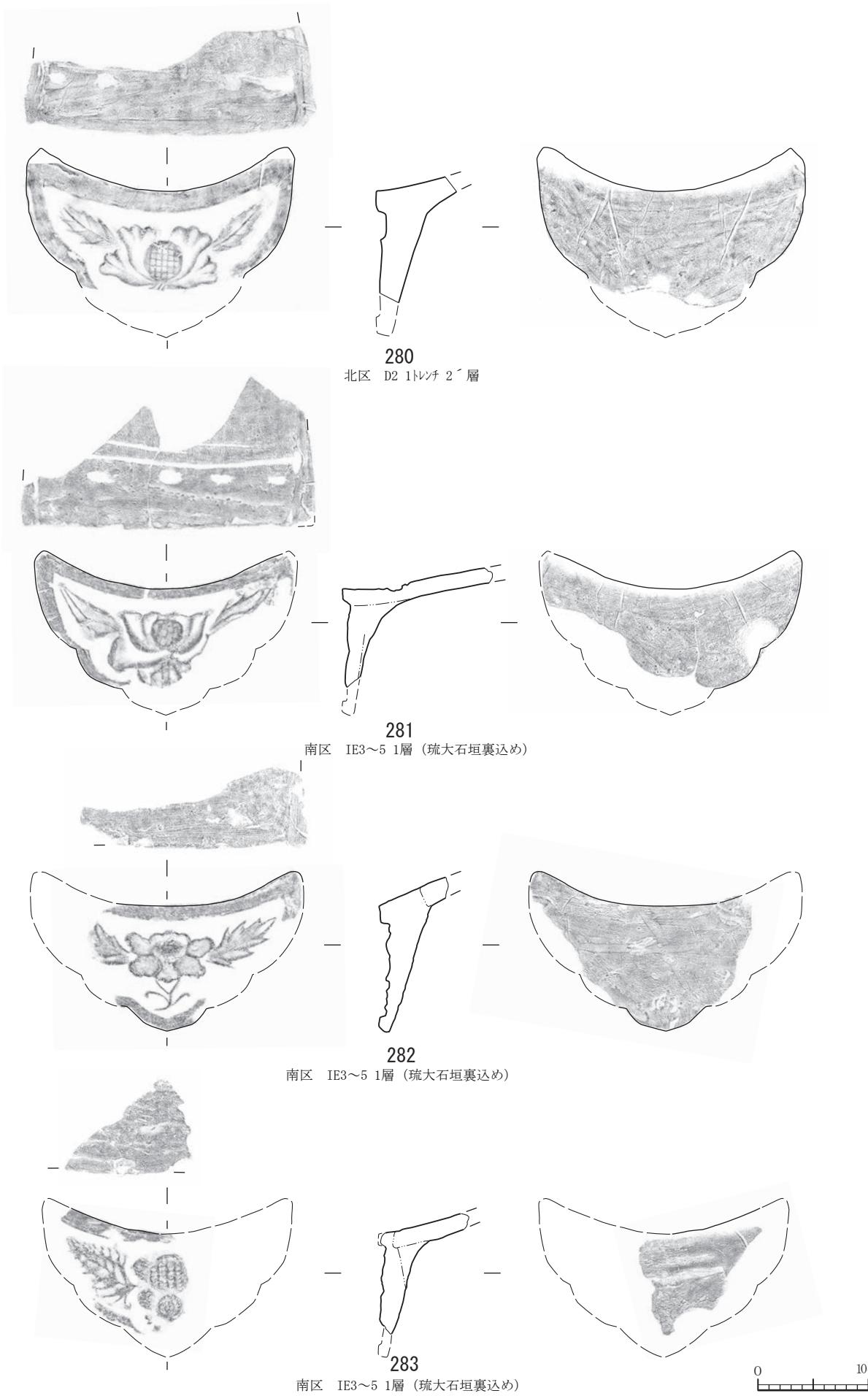
278
南区 IE3~5 1層 (琉大石垣裏込め)



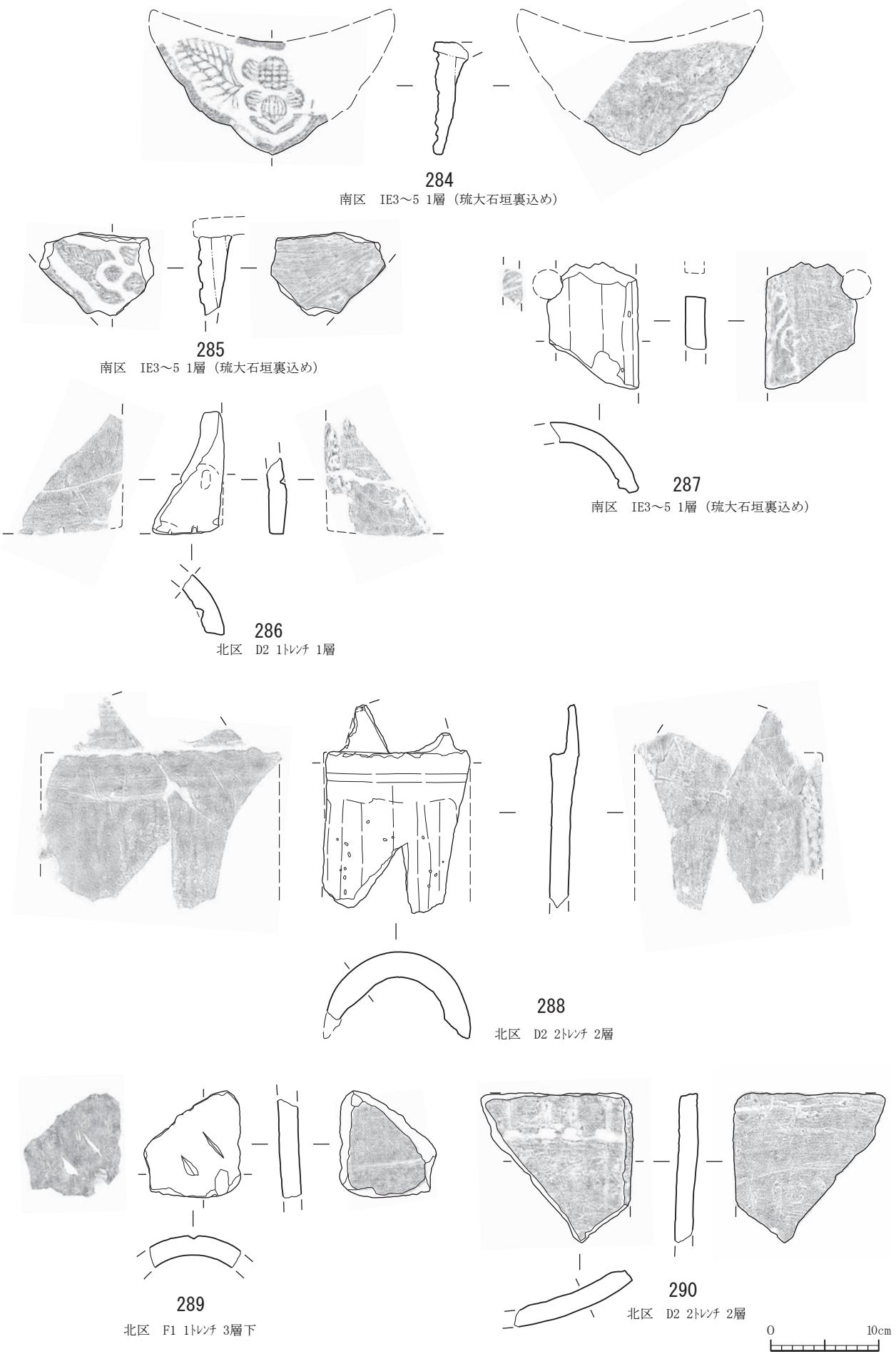
279
南区 IE3~5 1層 (琉大石垣裏込め)

0 10cm

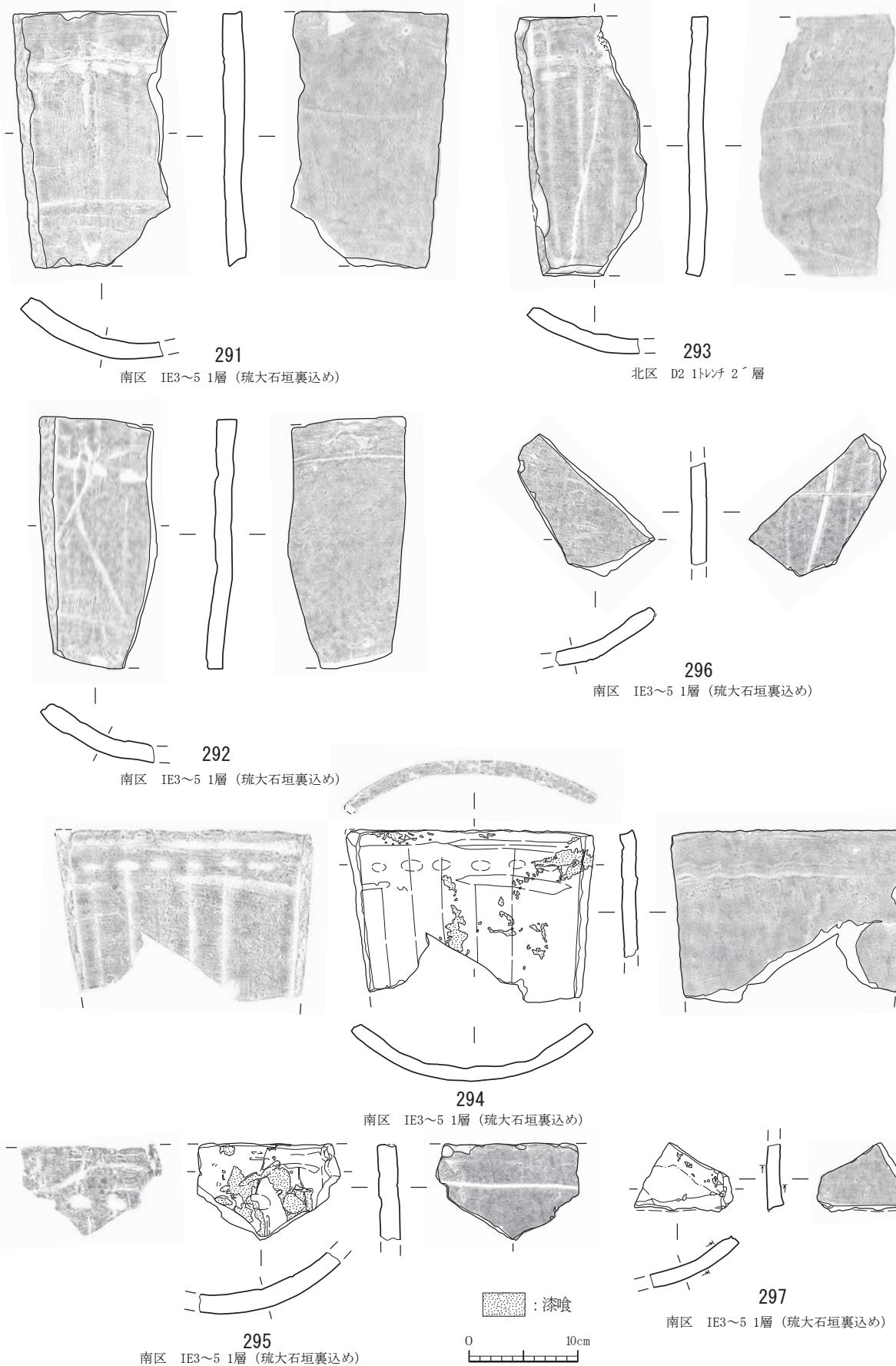
第37図 瓦 (1)



第38図 瓦 (2)



第39図 瓦 (3)



第40図 瓦 (4)

第49表 高麗系・大和系瓦観察表

遺物No.	種類		色調	部位	観察事項	地区	グリッド	遺構・層
274	高麗系	平瓦	灰色	筒部	平瓦の破片。器厚2.0cm。凸面羽状文(幅3.5cm)、凹面布目痕(幅0.1cm)、糸切り痕あり。重量123g。	北	D 1・2	1トレンチ 3' B層
275	大和系	平瓦	灰色	狭端部	側面Bタイプ、離れ砂両面顕著。器厚2.0cm、重量384.5g。	北	F 1	1トレンチ 3層上

第50表 明朝系軒丸・軒平瓦観察表

遺物No.	種類	色調	上原分類		観察事項	地区	グリッド	遺構・層
276	軒丸瓦	灰色	側視1型	湧田 I Ba02	瓦当の半分以上が欠落した製品。瓦当文様は花芯、葉の部分が残る。瓦当裏に少量の石灰が付着する。指ナデ調整痕(幅1.4cm)あり。器厚1.7cm。重量209.8g。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
277	軒丸瓦	灰色	側視1型	内間 I Bb01	丸瓦との接合部は残るが、半分以上欠落した製品。瓦当と丸瓦との接合部の指ナデ調整幅(4.0cm)。器厚2.3cm。丸瓦に漆喰が付着。重量778.9g。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
278	軒丸瓦	赤色	側視2型	円覚 II b01	瓦当外縁と丸瓦接合部が大きく欠落している製品。文様の輪郭は鮮明。器厚2.2cm、指ナデ調整痕(幅1.0cm)が認識できる。重量279.4g。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
279	軒丸瓦	赤色	側視2型	円覚 III a01	瓦当の外縁の一部と瓦当裏の丸瓦の接合部分が欠落した製品。全体的に文様は鮮明、しかし珠文が一部欠落している。瓦当裏のナデはやや粗く、指ナデ調整(幅2.0cm)が認識出来る。器厚1.7cm、重量407.9g。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
280	軒平瓦	灰色(褐)	側視1型	首西 I Aa01	瓦当外縁の下部が欠落している製品。文様の葉の部分が一部風化しているが全体的に認識できる。調整は良好。接合した平瓦の凹部に桶板留紐圧痕(幅1.5cm)4か所見られる。器厚3.5cm、重量1443.7g。	北	D 2	1トレンチ 2' 層
281	軒平瓦	灰色	側視1型	天界 I Aa03	瓦当の半分が欠落する製品。文様の葉の部分に風化がみられる。器厚2.5cm。瓦当の接合した平瓦に桶板留紐圧痕(幅2.0cm)推定5か所。重量1084.7g。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
282	軒平瓦	灰色(褐)	側視1型	首西 III A01	瓦当の左側外縁、平瓦の接合部分は欠落するが、残りの半分は認識できる。葉の文様部分は欠落と風化のためにやや不鮮明。器厚2.7cm。重量760.8g。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
283	軒平瓦	灰色	側視1型	御茶 III Ba01	瓦当の半分が欠落した製品。文様全体が不鮮明。瓦当裏に指ナデ痕(幅3.5cm)あり、器厚2.6cm。重量422.9g。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
284	軒平瓦	赤色	側視1型	御茶 III Ba02	瓦当と平瓦の接合部が欠落した製品。文様がやや不鮮明。調整が全体的に粗い。器厚2.2cm。重量256.3g。	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)
285	軒平瓦	赤色	側視1型	仮称 <首瀬東 III Ba02>	瓦当の左側の破片で接合部が欠落する製品。肉厚の文様。器厚2.5cm。重量190.4g	南	I E 3~5	1層(琉大石垣裏込め)

第51表 明朝系丸・平瓦観察表

遺物 No.	種類	色調	部位	観察事項	地区	グリッド	層
286	丸瓦	灰色	端部	下端面取り幅約5.0 cm。器厚1.4~2.0 cm重量153.0 g。	北	D 2	1トレチ 1層
287	丸瓦	灰色	筒部	器厚1.8 cm。漆喰なし。釘孔(約1.7 cm)あり。重量253.0 g	南	I E 3~5	1層(琉大石 垣裏込め)
288	丸瓦	灰色	玉縁部	玉縁の大部分が欠落。全長19.0 cm、幅13.3 cm。凹面に石灰が付着。上原分類による玉縁形態はbタイプ。器厚2.4 cm。重量629.9 g	北	D 2	2トレチ 2層
289	丸瓦	赤色	筒部	ヘラ記号凸部に斜め2本「\」あり。器厚1.7 cm。重量175.9 g	北	F 1	1トレチ 3層下
290	平瓦	灰色	広端部	下端部面取り幅4.0 cm、器厚1.75 cm、桶板留紐圧痕(1.5 cm)4か所残る。重量386.7 g。	北	D 2	2トレチ 2層
291	平瓦	灰色	広端部~ 狭端部	半分欠落。全長23.5 cm、器厚は広端部幅1.4 cm、狭端部1.7 cm、桶板留紐圧痕(幅2.0 cm)4か所。漆喰が所々付着。ヘラ記号凸部中央に横1本「-」あり。重量1001.6 g。	南	I E 3~5	1層(琉大石 垣裏込め)
292	平瓦	灰色	広端部~ 狭端部	半分欠落。全長22.2 cm、器厚は広端部に桶板留紐圧痕(幅1.5 cm)推定4か所。狭端部ナデ調整。凹面布両端が側端側に交差状に残る。ヘラ記号凸部広端側に横1本「-」あり。重量754.3 g	南	I E 3~5	1層(琉大石 垣裏込め)
293	平瓦	灰色	広端部~ 狭端部	半分欠落。全長24.0 cm器厚は広端部1.35 cm、狭端部1.2 cm。桶板留紐圧痕(幅1.5 cm)1か所確認。凹面布両端が側端側に交差状に残る。ヘラ記号凸部中央に横2本「=」あり。重量599 g	北	D 2	1トレチ 2層
294	平瓦	赤色	広端部	広端幅21.5 cm、器厚1.4 cm、桶板留紐圧痕(幅2.0 cm)6か所。広端面は不整形。漆喰付着。重量685 g。	南	I E 3~5	1層(琉大石 垣裏込め)
295	平瓦	灰色	広端部	器厚1.7 cm。桶板留紐圧痕(幅1.8 cm)3か所確認。凹部に漆喰が付着。ヘラ記号凸部広端側に横1本「-」あり。重量248.7 g	南	I E 3~5	1層(琉大石 垣裏込め)
296	平瓦	灰色	筒部	ヘラ記号凸部に縦1本「 」あり。器厚1.4 cm。重量185 g。	南	I E 3~5	1層(琉大石 垣裏込め)
297	平瓦	赤褐色	狭端部	中央部にマンガン釉、一部漆喰が付着する。重量105 g。	南	I E 3~5	1層(琉大石 垣裏込め)

5. 塚 (298 ~ 309) (第 41・42 図、第 52 ~ 54 表、図版 29・30)

塚は総破片数 59 点出土している。上原靜の分類 (2011) を参考にして、形態により 4 つに分けた。ヘラ記号があるものは 4 点見られ、全て記号にバラつきがある (第 53 表)。

方塚 (正方形) (298 ~ 301、303、304、307)

灰色系 18 点、赤色系 2 点出土している。長さは出土品で 298 の 1 点のみ確認でき、横軸一辺で 25.5 cm である。ヘラ記号は、側面に「×」(298) と「=」(307) が 1 点ずつ出土。

三角塚 (三角形) (302、306)

灰色系 2 点出土している。ヘラ記号は見られない。

条塚 (長方形) (308)

灰色系 9 点、赤色系 5 点出土している。ヘラ記号は赤色系で 1 点のみあり、表面に格子状のヘラ記号を確認。このヘラ記号は首里城跡南殿・北殿の報告書 (沖縄県教委 1995) に類似する資料を確認。

噛み合わせ式 (305)

灰色系 1 点のみ出土している。段部分が一部欠落する。

その他 (309) 全形は欠損しており、「大」の字のスタンプの一部分のみが残存したものである。

第 52 表 塚集計表

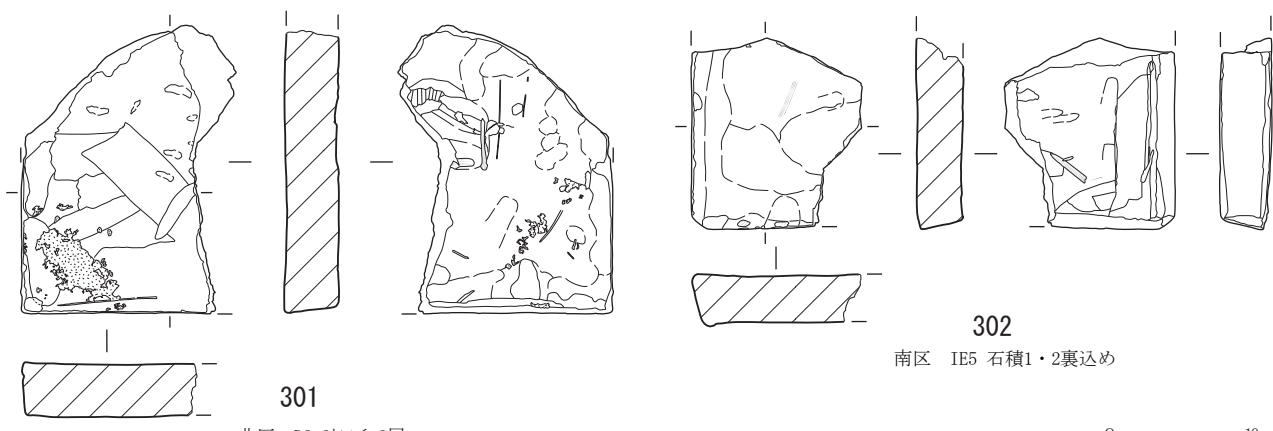
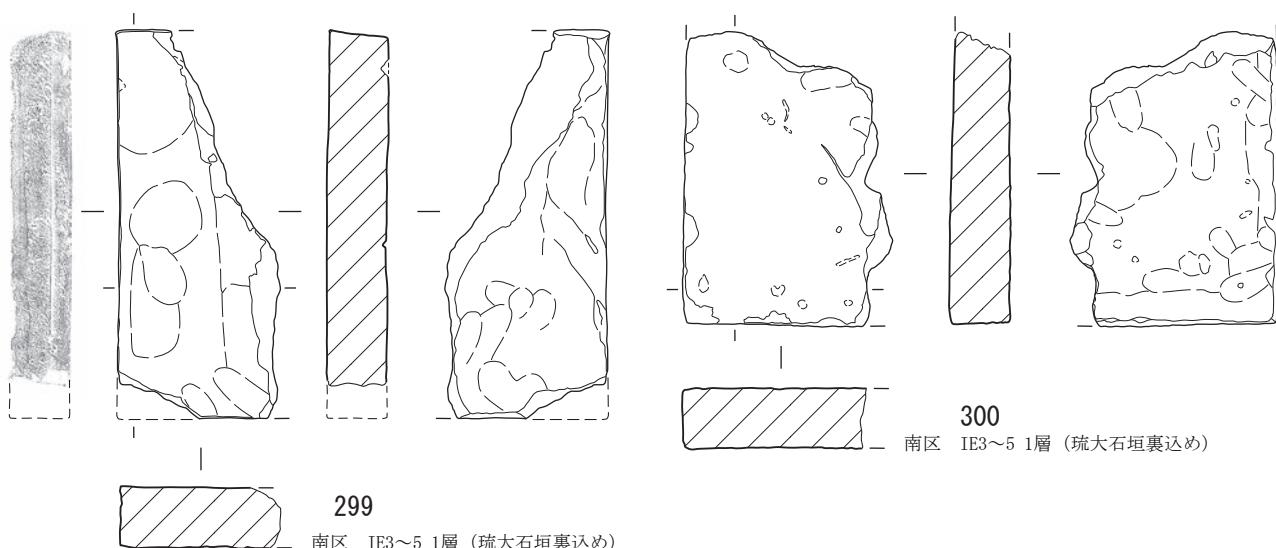
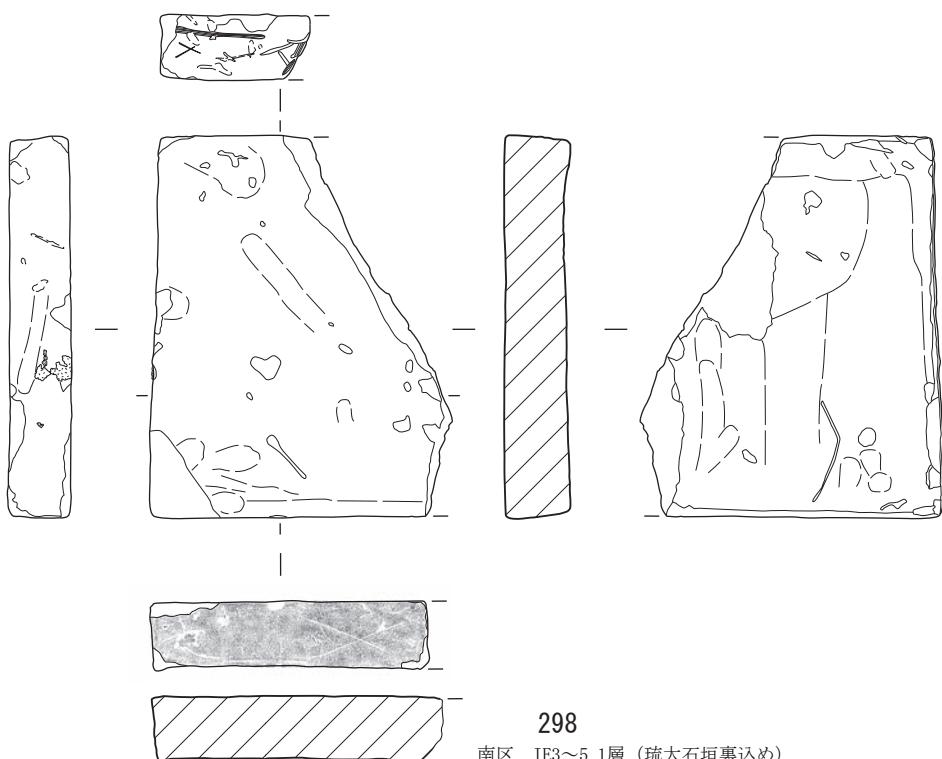
合計／点数						地区／層序／グリッド															合計			
						南区			北区															
						1層		G-1	1層						2' 層		2層			3層		5層		
色調	形状	厚さ	被熱	漆喰	角	I-E3~5	I-E5		D-1	D-1・2	D-2	E-1	E-2	F-1	F-2	D-1・2	D-2	E-2	F-2	F-2	E-1	E-1		
灰色 (褐色)	正方形	a	有	無		2	1																1	
			無			1																	2	
			無				1																1	
		b	有	有		2	1																1	
			無			1	3																4	
	長方形	a	無																					1
			有	有		1																		1
			無			1	1																	1
		b	無																					6
			無			1	2																	2
	三角形	a	有	無		無																		1
			有			1																		1
		b	無			1	1																	1
赤色	長方形	a	有			1	1																	1
			無			無																		1
			無			1	1																	1
		b	有			無																		1
			無			無																		1
	三角形	b	有	無		1																		2
		b	無			1	1																	1
		b	無			1																		1
	破片	a	有	無		1																		2
			無			1																		1
			無			無																		1
		b	無	有		無																		2
			無	有		無																		1
		b	無	無		7																		16
	正方形	b	無	有		1																		1
		b	無			1																		1
		a	有	無		1																		1
		a	無	有		無																		1
		b	有	無		1																		1
	破片	b	無	無		無																		1
		b	無	無		無																		2
小計						16	6	1	1	1	4	3	1	1	1	1	10	2	6	3	1	1	59	
合計						23					12					1	18			4	1	1	59	

第 53 表 塚ヘラ記号集計表

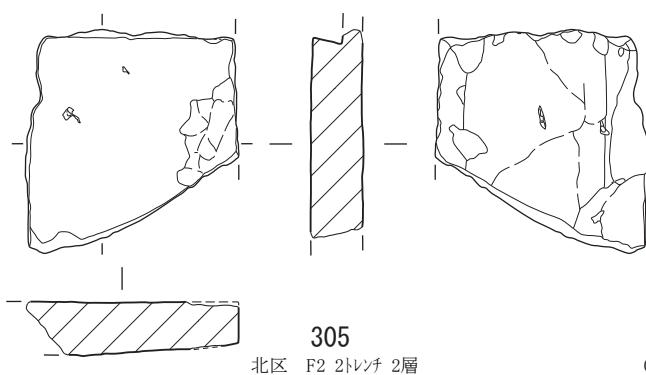
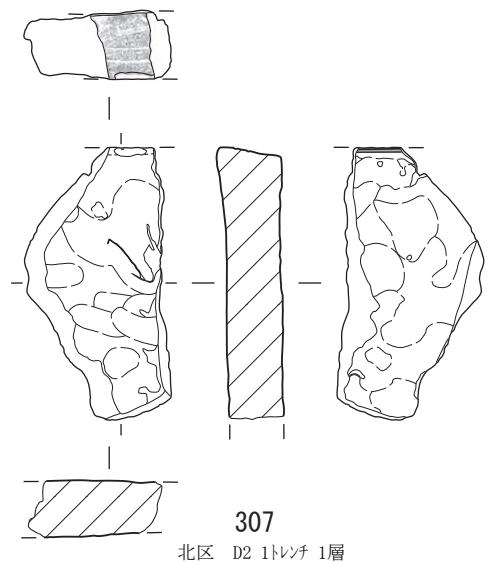
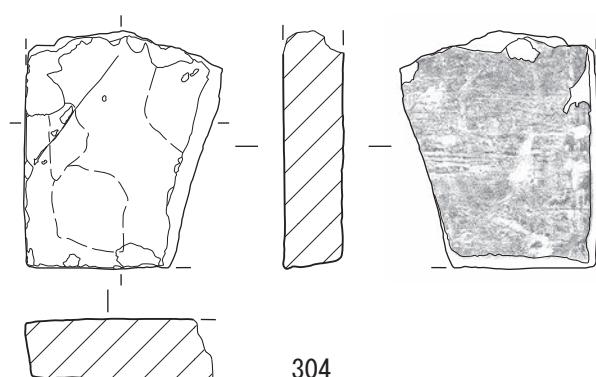
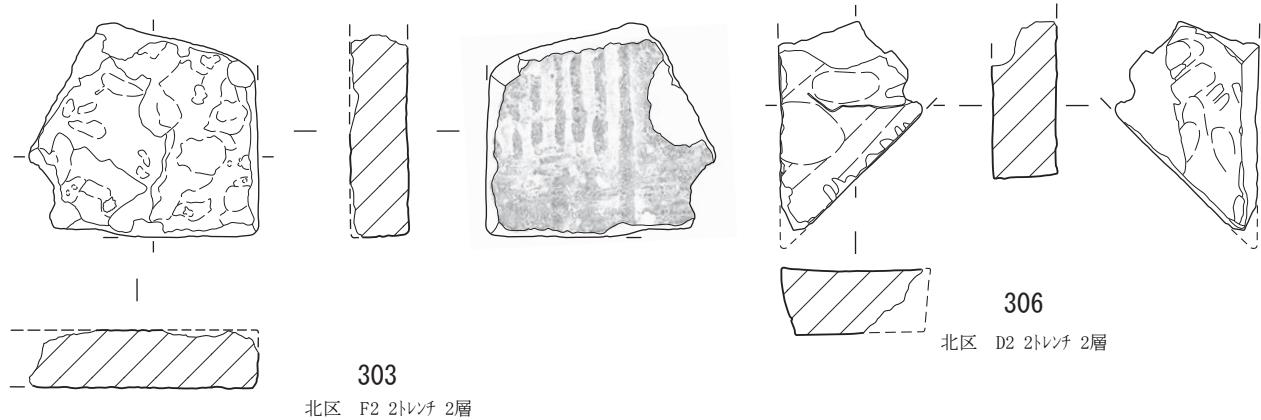
合計／点数				地区／層序／グリッド			合計	
刻印・記号	色調	形状	位置	南区		北区		
				1層	1層	2層		
				琉大石垣 裏込	I-E3～5	D-2	F-2	
=	灰色	正方形	側面		1		1	
×				1			1	
大	赤色	長方形	表		1		1	
#						1	1	
小計				1	2	1	4	
合計				1	2	1	4	

第 54 表 塚観察表

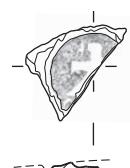
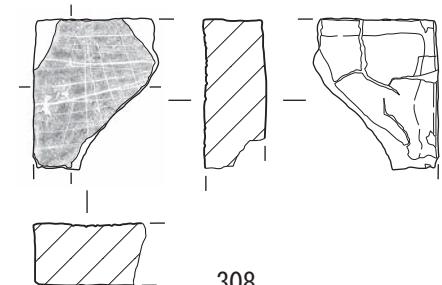
遺物 No.	形状	色調	観察事項	地区	グリッド	層
298	正方形	灰色	表面の調整はやや良好で、裏面はやや粗い。2つの角を残すが内1つは表面が僅かに欠ける。側面に僅かな漆喰と、ヘラ記号「×」が見られる。横軸25.5 cm。器厚4.1 cm。重量2809.9 g。	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
299	正方形	灰色	表面の調整はやや良好で、裏面は粗い。側面にヘラ調整の痕が見られる。器厚4.0 cm。重量1241.0 g。	南	I E 3～5	1層（琉大石垣裏込め）
300	正方形	灰色(褐)	表面・裏面ともに調整が粗く、焼成も悪い。裏面に制作時の指圧痕が見られる。器厚3.95 cm。重量1499.5 g。	南	I E 5	石積1・2裏込め
301	正方形	赤色	表面の調整は良好だが、裏面・側面の調整がやや粗い。裏面・側面に制作時の指圧痕が見られる。焼成は良好。器厚3.43 cm。重量1228.1 g。	北	D 2	2トレンチ2層
302	三角形	灰色	表面は滑らかに仕上げられるが、一部凹面する。裏面・側面の間が僅かに盛り上がる。裏面の調整は粗い。焼成は良好。器厚3.0 cm。重量592.1 cm。	南	I E 5	石積1・2裏込め
303	正方形	灰色(褐)	表面・裏面ともに調整が粗い。表面は所々欠けている。裏面に平行する凸線が認められる。器厚4.0 cm。重量980.3 g。	北	F 2	2トレンチ2層
304	正方形	灰色	表面は所々欠けているところがある。表面の調整は良好で、裏面・側面の調整が粗い。焼成は良好。器厚4.0 cm。重量1078.8 g。	北	D 2	2トレンチ2層
305	かみ合わせ式	灰色(褐)	表面は撫でて滑面だが、一部欠けているところがある。裏面はやや粗いが平坦面になる。長軸の大部分が欠落しているが、側面に組み合わせる段を見ることができる。器厚3.3 cm。重量790 g	北	F 2	2トレンチ2層
306	三角形	灰色	表面に撫で仕上げの際にいた指圧痕が見える。裏面・側面に調整が粗い。角が1つだが、先端部が僅かに欠ける。焼成はやや悪い。器厚3.7 cm。重量518.7 g。	北	D 2	2トレンチ2層
307	正方形	灰色(褐)	表面は撫で仕上げで、僅かに凹面がある。裏面の調整が粗い。側面に横位に平行する2本線「=」を印す。焼成は悪い。器厚4.2 cm。重量643.6 g	北	D 2	1トレンチ1層
308	長方形	赤色	表面に格子状のヘラ記号を確認「#」。表面の調整は良好だが、裏面・側面が僅かに粗い。焼成は悪い。器厚4.0 cm。重量420 g	北	F 2	2トレンチ2層
309	破片	灰色	丸団いに「大」の刻印の破片。重量15.3 g	北	D 2	1層



第41図 塼 (1)



0 10cm



309 北区 D2 1層

0 10cm

第42図 塚 (2)

第 55 表 円盤状製品観察表

遺物 No.	素材	縦	横	厚	重量 (g)	観察事項	地区	ケリット*	層
		(mm)	(mm)	(mm)					
310	中国産白磁	17.3	16.9	5.8	2.3	景德鎮産。両面施釉。一面にヘラ描きによる文様あり。	北	F 1	1トレチ 3層下
311	タイ産褐釉陶器	42.2	39.3	8.8	20.3	壺胴部片。	北	F 1	1トレチ 4・5層
312	中国産褐釉陶器	33.0	38.0	9.8	16.8	壺胴部片。	北	D 1	1層
313	中国産褐釉陶器	35.8	40.5	9.2	17.4	壺胴部片。	北	D 2	1トレチ 3' B層
314	中国産褐釉陶器	31.3	32.9	9.3	12.4	壺胴部片。	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)
315	中国産褐釉陶器	30.6	27.3	6.7	7.6	壺胴部片。	北	D 2	1トレチ 3' B層
316	中国産褐釉陶器	30.0	28.5	9.1	10.2	壺胴部片。	北	F 2	1層
317	中国産褐釉陶器	20.4	23.5	7.1	5.0	壺胴部片。丁寧に円形に整形。	北	F 1	1トレチ 3層下
318	中国産褐釉陶器	19.7	20.7	7.3	4.1	壺胴部片。	北	E 1	1トレチ 3層上
319	中国産褐釉陶器	18.1	18.7	6.2	2.8	壺胴部片。	北	E 1	1トレチ 3層上
320	沖縄産無釉陶器	75.2	75.5	16.6	129.0	壺胴部片。おそらく大型品。	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)
321	沖縄産無釉陶器	60.4	60.8	9.5	51.0	壺胴部片。	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)
322	沖縄産無釉陶器	49.2	50.0	12.9	43.6	壺胴部片。	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)
323	沖縄産無釉陶器	43.2	43.3	7.1	19.7	壺胴部片。	北	E 2	2トレチ 2層
324	明朝系瓦	75.4	80.5	18.4	132.4	灰色系瓦。丸瓦の可能性あり。	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)
325	明朝系瓦	60.4	64.2	16.3	69.7	灰色系瓦。	北	D 2	1層
326	明朝系瓦	54.5	53.3	16.9	50.6	灰色系瓦。	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)
327	明朝系瓦	59.2	59.2	13.5	51.5	赤色系瓦。	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)
328	明朝系瓦	51.2	47.5	15.5	38.2	灰色系瓦。	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)
329	明朝系瓦	42.9	42.7	15.1	28.9	灰色系瓦。縁辺が研磨もしく磨滅している。	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)
330	明朝系瓦	42.3	43.9	13.7	25.6	灰色系瓦。	北	D 2	1トレチ 1層
331	明朝系瓦	38.3	38.1	16.6	24.0	灰色系瓦。	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)

第 56 表 ガラス玉観察表

遺物 No.	色調	最大径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	観察事項	地区	ケリット*	層
332	水色	2.7	2.4	1.3	0.01	完形。側面が円柱状。側面に螺旋状痕が強く残り、枝分かれする部分がある。	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)
333	水色	3.3	1.8	1.6	0.02	完形。側面が楕円状	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)
334	緑色	4.0	3.6	1.3	0.09	完形。球状。	北	E 2	2トレチ 2層
335	緑色	4.4	2.2	1.4	0.07	完形。側面が楕円状。ややいびつ。側面に螺旋状痕残る。	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)
336	緑色	4.8	3.0	1.8	0.10	完形。側面が楕円状	北	E 2	2トレチ 2層
337	水色	6.5	5.8	1.5	0.42	完形。球状。側面に螺旋状痕がやや残る。	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)
338	水色	6.9	5.4	2.0	0.19	半分欠損。変形も見られ、二次被熱によるか。	南	I E 3~5	1層 (琉大石垣裏込め)

第57表 淑順門東地区出土遺物総合集計表

種類	出土地・層序	北区											南区+北区 1層+ 3層下	不明 1層	総計	重量(g)	
		1層	1層	2'層	2層	3'層	3層	4~5層	5層	6層	7層	8層					
中国産白磁		64	11	1	2	5	9	2	1					2	97	936.8	
中国産青磁		123	30	7	5	29	75		3	1				1	274	3557.7	
中国産褐釉陶器		1001	153	49	29	239	104	9	135	1	1		1	11	1733	39732.96	
中国産青花		459	30	3	10	2	6		1					1	7	519	3817.1
中国産色絵磁器		5													5	36.9	
中国産瑠璃釉磁器		8													8	71	
中国産翡翠釉磁器		2													2	3.5	
中国産天目		1	2		1		2		1						7	29.2	
中国産三彩陶器		1													1	13.9	
中国産綠釉陶器		8	1												9	38.7	
中国産無釉陶器		3													3	5.6	
高麗青磁		1													1	3.9	
タイ産褐釉陶器		200	47	17	17	46	101	2	2						4	436	13710.9
タイ産鉄釉		1														1	1.4
タイ産半線土器		4				1	1								6	63.5	
ベトナム産白磁		1														1	1.6
ベトナム産青花		1		1			1								3	14.1	
ミャンマー産褐釉陶器		1														1	67.3
本土産陶磁器		153	10		4		1								2	170	3234.7
本土産近代陶磁器		58	14		1										5	78	770.5
產地不明陶器		6	1	2	2	4	2									17	170.6
沖縄産施釉陶器		1591	94	2	12	5	9	1	2						3	1720	20803.8
沖縄産無釉陶器		869	76	3	17	1	4		2						3	975	48671
陶質土器		551	24		8	1	2								1	597	5707.6
瓦質土器		14	1	2	2	1		1								21	2844
土器		15	3			4	5									27	488.2
破片(陶磁器類)																	791.3
陶磁器小計		5141	497	87	110	338	322	15	147	2	1	0	2	1	39	6702	145587.76
金属製品		67	68	6	26	9	54	28	17	9					1	285	3279.67
銭貨		30	5			2	7	5								49	50.14
煙管		13	2													15	92
骨製品			1													1	1.6
貝製品		1		1												2	929.4
ボタン			1													1	3.3
硯			1													1	151.7
碁石			1	1												2	4
坩堝			1						1							2	102.4
石球									1							1	98.7
ガラス玉		5			2											7	0.9
円盤状製品		10	4		1	2	4	1								22	763.1
高麗系瓦						1	1									2	163
大和系瓦		3	3			5	13	1	2	4						32	3049.5
明朝系瓦		315	251	23	82	41	100			1						813	58185.9
埴		23	12	1	18		4		1							59	31242.9
石(重量のみ)																	3176.2
総計		5611	845	118	239	398	505	50	169	16	1	1	2	1	40	7996	246882.17

※接合資料は、下位の層序に入れた。

6. 貝類遺体 (第 58 ~ 61 表、写真 34)

貝類遺体は、調査現場において通常の遺物と共に取り上げたピックアップ資料である。貝類の同定は当センターの標本、出土資料により判断した。貝類の生息地の分類は黒住耐二の研究に基づいた (黒住 1987)。

巻貝 (腹足綱) は 15 種、二枚貝は 16 種が同定でき、最小固定数は各々 170 点、243 点であり、量的には少ない。貝種別では、アラスジマケンガイ、ヤコウガイ、マガキガイ、チョウセンサザエが多い。

第 58 表 出土貝類遺体種別一覧

軟体動物部門 Mollusca		
腹足綱 Gastropoda		生息地類型
ニシキウズ科 Trochidae		
サラサバティイ	Tectus niloticus	I-4-a
リュウテン科 Turbinidae		
ヤコウガイ	Turbo (Lunatica) marmoratus	I-4-a
ヤコウガイのフタ	T. (L.) marmoratus (operculum)	I-4-a
チョウセンサザエ	Turbo (Marmorostoma) argyrostomus	I-3-a
チョウセンサザエのフタ	T. (M.) argyrostomus (operculum)	I-3-a
カンギク	Lunella moniliformis	II-1-b
アマオブネ科 Neritidae		
アマオブネガイ	Nerita (Theliostyla) albicilla	II-1-b
オニノツノガイ科 Cerithiidae		
イワ(ウミナ)カニモリ	Clypeomorus batillariaeformis	II-1-b
クワノミカニモリ	Clypeomorus chemnitziiana	I-1-a
コゲツノブエ	Cerithium (s.s.) coralium	III-1-c
ウミニナ科 Batillariidae		
リュウキュウウミニナ	Batillaria flectosiphonata	II-1-c
スイショウガイ科 Strombidae		
オハグロガイ	Strombus (Can.) ureceus	II-2-c
マガキガイ	Strombus (Conomurex) luhuanus	I-2-c
クモガイ	Lambis lambis	I-2-c
タカラガイ科 Cypraeidae		
ハナビラダカラ	Cypraea (Erosaria) annulus	I-1-a
ハナマルユキ	Cypraea (Erosaria) caputserpentis	I-3-a
ツノレイシ	Mancinella tuberosa	I-3-a
フデガイ科		
イモフデガイ	Pterygia dactylus	I-1-b
二枚貝綱 Bivalvia		
ウグイスガイ科 Pteriidae		
ミドリアオリ	Pinctada maculata	I-1-a
イタボガキ科 Ostreidae		
マガキ	Crassostrea gigas	I-1
ツキガイ科 Lucinidae		
ウラキツキガイ	Codakia paytenorum	II-2-c
キクザル科 Chamidae		
キクザル科の一種	Chama sp.	VI
ザルガイ科 Cardiidae		
カワラガイ	Fragum unedo	II-2-c
シャコガイ科 Tridacnidae		
ヒレジャコ	Tridacna squamosa	I-2-c
チドリマスオ科 Mesodesmatidae		
イソハマグリ	Atactodea striata	I-1-c
シジミ科 Corbiculidae		
シレナシジミ	Geloina erosa	III-0-c
マルスダレガイ科 Veneridae		
ハマグリ類似種	Meretrix sp. cf. lusoria	II-2-c
ヌメガイ	Periglypta puerpera	II-2-c
アラスジケマンガイ	Gafrarium tumidum	III-1-c
ホソスジイナミガイ	Gafrarium pectinatum	II-1-c
イオウハマグリ	Pitar sulfureum Pilsbry, 1904	II-1-c
ユウカゲハマグリ	Pitar citrinus	II-2-c
スダレハマグリ	Katelysia japonica	II-1-c
ダテオキシジミ	Cyclina sp. cf. sinensis	III-1-c

第 59 表 貝生息地類型

大区分		底質等	
I	外洋 - サンゴ礁域	a	岩礁
II	内湾 - 転石域	b	転石
III	河口干潟 - マングローブ域	c	砂 / 泥
IV	淡水域	d	河川礫底
V	陸域	e	植物上
VI	その他	f	
小区分			
0	潮間帯上部	5	止水
	I-0 ノッチ	6	流水
	III-0 マングローブ	7	林内
1	潮間帯中・下部	8	林内・林縁部
2	亜潮間帯上縁部	9	林縁部
	I-2 イノ一内	10	海浜部
3	干瀬	11	打ち上げ物
4	礁斜面	12	化石

第60表 卷貝集計表

番号	科名	種名	地区／層字／グリッド											
			南区			北区			1層					
			生息場所	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N
1	ニシキウズ科	サラサハバテイ	I-4-a	1	1b							1	1f	
2	リュウテン科	ヤコウガイ	I-4-a	3	3,3f									
3	リュウテン科	ヤコウガイの鱗	I-4-a	13	13a,f	1	1a	1	2f					
4	リュウテン科	チョウセンサンザエ	I-3-a	14	12a,2u	1	1u	1	1u	1	1f			
5	リュウテン科	カニギク	I-3-a	3	3a									
6	アマオブネ科	アマオブネガイ	II-1-b											
7	オニノツカイ科	イワ(ウミコロ)カニモイ	II-1-b											
8	オニノツカイ科	クワノミカニモイ	I-1-a											
9	オニノツカイ科	コケツノブエ	III-1-c											
10	オニノツカイ科	リュウキユウクミニナ	II-1-c	1	1u									
11	ウミニナ科	オノヅクロガイ	II-2-c	2	2a									
12	スイショウガ科	スイショウガイ	I-2-c											
13	タカラガニ科	マガキガイ	I-2-c											
14	スイショウガ科	クモガイ	I-2-c											
15	タカラガニ科	ハナビラカラ	I-1-a											
16	タカラガニ科	ハナビラユキ	I-3-a											
17	アッキガイ科	ソレイシ	I-3-a											
18	フデガイ科	イモフデガイ	I-1-b											
	小計			37	1	2	1	1	1	4	1	1	1	1
	合計			41										23
														7

番号	科名	種名	地区／層字／グリッド												
			北区			2層			3層			3'層			
			生息場所	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	個体数合計
1	ニシキウズ科	サラサハバテイ	I-4-a	1	3f				F2	D2	D1・2	E1	F1	E2	F1
2	リュウテン科	ヤコウガイ	I-4-a	16	13,3u	1	1u	1	1f	2	2u	1	2f	1	1f
3	リュウテン科	チョウセンサンザエ	I-3-a	1	1u	1	1u	1	1a	1	1u	1	1a	1	1u
4	リュウテン科	カニギク	I-3-a			2	2a	1	1a			1	1a	6	4a,2u
5	リュウテン科	アマオブネガイ	II-1-b											3	3a
6	リュウテン科	ソレイシ	I-1-b									2	2a	4	4a
7	アマオブネ科	リュウキユウクミニナ	II-1-b									2	2u		
8	オニノツカイ科	クワノミカニモイ	I-1-a									1	1a	2	1a,lu
9	オニノツカイ科	コケツノブエ	III-1-c												2
10	オニノツカイ科	リュウキユウクミニナ	II-1-c												1
11	ウミニナ科	オノヅクロガイ	II-1-c									1	1a		
12	スイショウガ科	オノヅクロガイ	II-2-c									2	2u		
13	スイショウガ科	マガキガイ	I-2-c									1	1a	13	8a,4u
14	スイショウガ科	クモガイ	I-2-c												34
15	タカラガニ科	ハナビラカラ	I-3-a												1
16	タカラガニ科	ハナビラユキ	I-3-a												2
17	アッキガイ科	ソレイシ	I-3-a												1
18	フデガイ科	イモフデガイ	I-1-b												1
	小計			18	1	4	3	13	9	6	2	7	1	1	23
	合計					26									11
															33

Nは最少個体数、a:完形、u:殻頂、f:殻片、b:体層、dL:背面のみ

第 61 表 二枚貝集計表

地区／層序／グリッド									
南区									
番号	科名	種名	生息場所			1層			2'層
			IE3～5	IE4	IE5	石積1'2'裏込	集石!	G1	
			N	N	N	N	N	C2	
1	ウダイスガイ科	ミドリアオリ	I-1-o						
2	イタボガキ科	マガキ	I-1						
3	ツキガイ科	ウラキツキガイ	II-2-c						
4	キクザルガイ科	キクザルガイ科の一種	VI			1 /1a			
5	サルガイ科	カワラガイ	II-2-c						
6	シャコガ本科	ヒレジャコ	I-2-c	2	1a./1u/				
7	チドリマスオ科	インハマグリ	I-1-c						1 /1f
8	シジミ科	シレナージシミ	III-0-c						
9	マルスダレガイ科	ハマグリ類似種	II-2-c	2	2a./1u				
10	マルスダレガイ科	ヌノマグイ	II-2-c	1	/1a				
11	マルスダレガイ科	アラシケマンガイ	III-1-c	2	1a./1u/1a				
12	マルスダレガイ科	ホンシイナミガイ	II-1-c						
13	マルスダレガイ科	イオウノマグリ	II-1-c						
14	マルスダレガイ科	ユウラクノマグリ	II-2-c						
15	マルスダレガイ科	スダレハマグリ	II-1-c						
16	マルスダレガイ科	タテオキシシミ	III-1-c	1	1a./				
	小計		8	1	1	1	5	1	2
	合計		16				8		2
									9

地区／層序／グリッド									
北区									
番号	科名	種名	生息場所			3'層			9'層
			D2	D2	D1・2	F1	3'層上	3'層下	
			N	N	N	N	N	N	
1	ウダイスガイ科	ミドリアオリ	I-1-o						
2	イタボガキ科	マガキ	I-1						
3	ツキガイ科	ウラキツキガイ	II-2-c	1	1a./	1			
4	キクザルガイ科	キクザルガイ科の一種	VI						
5	サルガイ科	カワラガイ	II-2-c						
6	シャコガ本科	ヒレジャコ	I-2-c						
7	チドリマスオ科	インハマグリ	I-1-c	1	1a./				
8	シジミ科	シレナージシミ	III-0-c						
9	マルスダレガイ科	ハマグリ類似種	II-2-c	1	1a./1a				
10	マルスダレガイ科	ヌノマグイ	II-2-c						
11	マルスダレガイ科	アラシケマンガイ	III-1-c	6	6a./5a./f	8	5a./8a.	1	
12	マルスダレガイ科	ホンシイナミガイ	II-1-c						
13	マルスダレガイ科	イオウノマグリ	II-1-c						
14	マルスダレガイ科	ユウラクノマグリ	II-2-c						
15	マルスダレガイ科	スダレハマグリ	II-1-c						
16	マルスダレガイ科	タテオキシシミ	III-1-c	1	1a./				
	小計		9	11	17	3	10	3	1
	合計		37			17			151
									243

Nは最少個体数、a:完形、u:綻貝、f:破片、b:体層、dc:背面部のみ

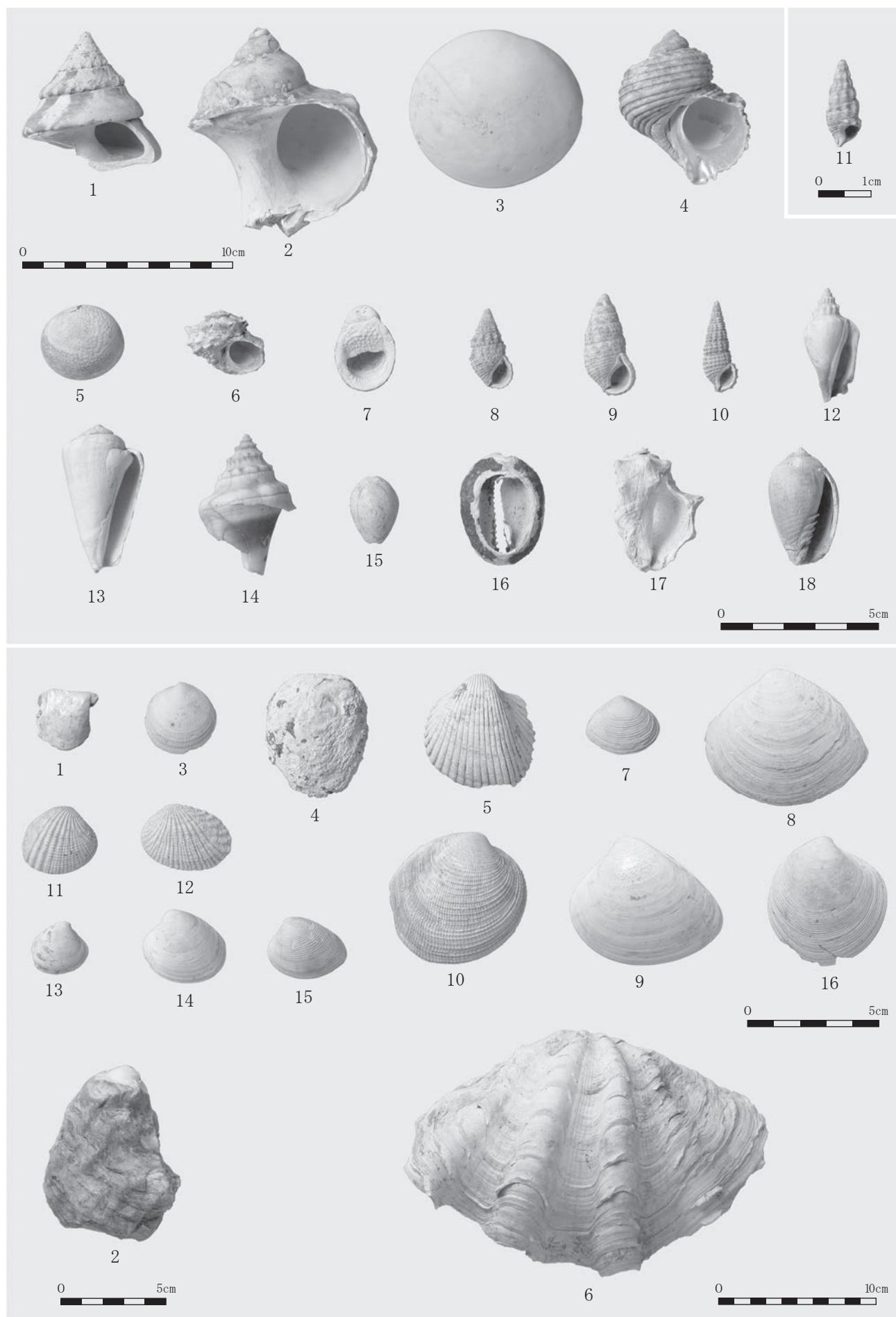


写真34 貝類遺体 (番号は第60・61表と一致)

7. 脊椎動物遺体（第 62～65 表、写真 35～37）

脊椎動物遺体も貝類遺体と同様にピックアップ資料である。種の同定は当センター所蔵の現生標本と県内出土資料の比較により行った。種名については、樋泉岳二（県埋文 2013 a）のものを基本とし、菅原広史（県埋文 2013 b）、金子浩昌（県埋文 2005 a）などを参考にした。

魚類は軟骨魚綱 1 分類群、硬骨魚綱 18 分類群、爬虫類 1 分類群、鳥類 1 分類群、哺乳類 4 分類群、合計 25 分類群が同定できた。同定できた最小個体数は 342 点で、魚類、イノシシ／ブタが多い。

第 62 表 出土脊椎動物遺体種別一覧

軟骨魚綱	CHONDICHTHYES
サメ類	Lamniformes
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES
ダツ科	Belonidae
ハタ科	Family Serranidae
ハタ科マハタ型	<i>Serranidae cf. Epinephelus</i>
アジ科	Family Carangidae
フエダイ科	Kyphosidae
ヘダイ	<i>Sparus sarba</i>
クロダイ属	<i>Acanrhpagrus</i>
タイ科	Sparidae
ヨコシマクロダイ	<i>Monotaxis grandoculis</i>
フエフキダイ科	Family Lethrinidae
フエフキダイ属（ハマフエフキ型）	<i>Lethrinus cf. L.. nebulosus</i>
ベラ科（シロクラベラ型）	Labridae cf. "Cherodon shoenleinii"
ベラ科 A	Labridae A
ベラ科	Labridae
コブダイ	<i>Semicossyphus reticulatus</i>
ブダイ科	Family Scarus
イロブダイ属	<i>Bolbometopon</i>
アオブダイ属	<i>Scarus</i>
爬虫綱	RRPTILIA
アオウミガメ	<i>Chelonia mydas</i>
鳥綱	AVES
ニワトリ	<i>Gallus galus</i>
哺乳綱	MAMMALIA
ウマ	<i>Equus feres</i>
イノシシ／ブタ	<i>Sus scrofa</i>
ヤギ	<i>Capra hircus</i>
ウシ	<i>Bos taurus</i>

第63表 脊椎動物遺体集計表（1）

分類群	部位	保存位置	地区／層字／グリッド												総計								
			南区			北区																	
			IE3～5	IE4	IE5	G1	GE3	小計	C2	D2	E2	F2	D2	D1・2	E1	F1	F1	E1	E2	F1	F1	F1	F1
サメ類	椎骨	1				1									/ 1						1	1	2
サメ科	前上頸骨 主上頸骨	1 /				1 / 0									/ 1						0 / 1	0 / 1	0 / 1
	園骨					0 / 1															1 / 2	1 / 2	2
魚骨	方骨																				1 / 0	1 / 1	1
ハタ科	舌頭骨																				1 / 2	1 / 2	2
	前鰓蓋骨					1 / 0															2 / 0	2 / 0	0
ハタ科マハタ型	腹椎骨	2																			0 / 2	1 / 2	2
アジ科	腹椎骨 尾椎骨					0 / 1															1	1	3
フエダイ科	前上頸骨 主上頸骨	1 /																			8	8	8
	頭骨																				3	3	3
ヘダイ	前上頸骨																				1 / 0	1 / 0	0
	頭骨																				1 / 0	1 / 0	0
クロダイ属	主上頸骨																				0 / 1	0 / 1	1
ダイ科	前上頸骨 尾椎骨	1 /																			1 / 1	1 / 1	2
ヨコノヘフロダイ	前上頸骨																				1 / 2	1 / 2	2
フエフキダイ科	腹椎骨					0 / 0															21	21	21
	主上頸骨					1 / 0															12	12	12
	前上頸骨																				3 / 3	3 / 3	3
フエフキダイ属 (ハマエフキ型)	頭骨																				3 / 5	4 / 6	6
	角骨																				4 / 5	6 / 5	5
	方骨																				5 / 2	5 / 2	2
	口蓋骨					0 / 1															0 / 2	0 / 3	3
	舌頭骨																				5 / 1	5 / 1	1
	前鰓蓋骨																				1 / 6	1 / 6	6
	前鰓蓋骨																				1 / 2	1 / 2	4
ベラ科シロカラゴ型	上咽頭骨																				1 / 0	1 / 0	0
ベラ科	下咽頭骨																				2	2	2
	齒骨																				0 / 1	0 / 1	1
コノダイ	腹椎骨																				3	4	4
	前上頸骨					0 / 1															1 / 0	1 / 0	1
コノダイ	頭骨																				2 / 0	2 / 1	1
ブダイ科	主上頸骨					0 / 1														1 / 0	1 / 0	0	
	尾椎骨																				10	10	10
イロダイ属	頭骨																				1 / 1	1 / 1	1
オオノダイ属	前上頸骨					1 / 1														1 / 2	3 / 2	2	
	頭骨																				1 / 6	1 / 6	6
	主上頸骨																				1	1	2
種不明	椎骨																				26	31	31
	骨髓附着骨																				1	1	1
	鰓鰭骨																				2	2	2
	鰓鰭骨附着骨																				3	3	3
	下尾骨																				1	1	1

第 64 表 脊椎動物遺体集計表 (2)

分類群	部位	残存位置	地区/層序/グリッド												地区/層序/グリッド														
			南区				北区				南区				北区				南区				北区						
			1層		2層		1層		2層		3'層		3'層		3層		4-5層		5層		6層		7層		8層		9層		小計
アオウミガメ	肋骨板	tr	1				1																					1	2
	黒口骨	P	/					0 / 1																			1 / 0	1 / 0	
	上腕骨	m	/ 1																									0 / 1	0 / 1
	桡骨	P	/																									0 / 1	0 / 1
	大腿骨	P	1 /																									1 / 0	1 / 0
ニワトリ	大腿骨	m	1 /																									1 / 0	1 / 0
	脛骨	m	2 /																									2 / 0	2 / 0
	中足骨	d	/ 1																									1 / 0	1 / 0
	側頭骨披裂室部																											0 / 1	0 / 1
	上腕骨	d																										0 / 1	0 / 1
ウマ	中間手根骨	<d->																										1 / 0	1 / 0
	中腿骨	P																										0 / 1	0 / 1
	中心足根骨																											1 / 0	1 / 0
	末節骨																											1 / 0	1 / 0
	岩縫部		/ 1																									2	2
サル	M2																											0 / 1	0 / 1
	上頸	M3	1 /																									0 / 1	0 / 1
	I1																											0 / 1	0 / 1
	下頸角	tr	/ 1																									1 / 0	1 / 0
	P3																											1 / 0	1 / 0
イノシシ/ブタ	下頸	M3	/ 1																									0 / 1	0 / 1
	腰椎																											1	1
	肋骨	P	4																									4	5
	上腕骨	tr	8	1																								6	6
	(P)																											1 /	1 /
ヒツジ	(P-d)	1 /																										1 / 0	1 / 0
	(P-d)-d	1 /																										1 / 0	1 / 0
	d	1 /																										1 / 0	1 / 0
	P																											1 / 1	1 / 1
	P-(d)	/ 1																										0 / -1	0 / -1
ウサギ	(P-d)	/ 1																										1 / 0	1 / 0
	上腕骨	tr	1 /																									1 /	1 /
	m	/ 1																										1 /	1 /
	尺骨	tr																										2 /	2 /
	第2中手骨																											3 / 0	3 / 1
ラクダ	P-(d)	1 /																										1 / 0	1 / 0
	第3中手骨	P-(d)	1 /																									1 / 0	1 / 0
	第4中手骨	W																										0 / 1	0 / 1
	第5中手骨	P-(d)	1 /																									1 /	1 /
																												0 / 2	0 / 2

第65表 骨椎動物遺体集計表（3）

分類群	部位	残存位置 塊大石 埴葉込 IE3~5	地区／層序／グリッド												北区						南区											
			1層			石積・2底込 IE4			G1 IE5			小計 GE3			1層			2層			3'層			3' B層			3層上			3層下		
			C2	D2	E2	F2	D2	E2	D1	E1	D2	E2	D1	E1	D2	E2	D1	E1	D2	E2	D1	E1	D2	E2	D1	E1	D2	E2	D1	E1		
	臼																															
	脛骨																															
	脛骨～臼																															
(P)																																
<P>→m																																
(P→)→d→>																																
m																																
(d)	/ 1																															
tr	1 /																															
(P)																																
(P→)→m																																
脛骨																																
m	2 /																															
m→(+)																																
m	/ 1																															
腓骨																																
距骨																																
蹠骨																																
第3足根骨																																
W																																
P-(a-)																																
P-m																																
W																																
中手・中足骨 (d-)	1																															
ヤギ																																
M2																																
M3																																
臼																																
上頸																																
P2	1 /																															
M3	1 / 1																															
下頸																																
胸椎																																
棘突起	1																															
肩甲骨																																
m-d																																
m																																
中手骨																																
中足骨																																
(P)																																
踵骨																																
P	1																															
tr	2																															
ウシ/ウマ																																
小計	66	3	1	2	2	1	1	4	1	1	1	1	1	3	9	9	14	3	1	3	1	208	4	1	1	1	1	1	1			
総計															75	7	1	4	32	7	1	212	4	1	1	1	1	1	1	267		

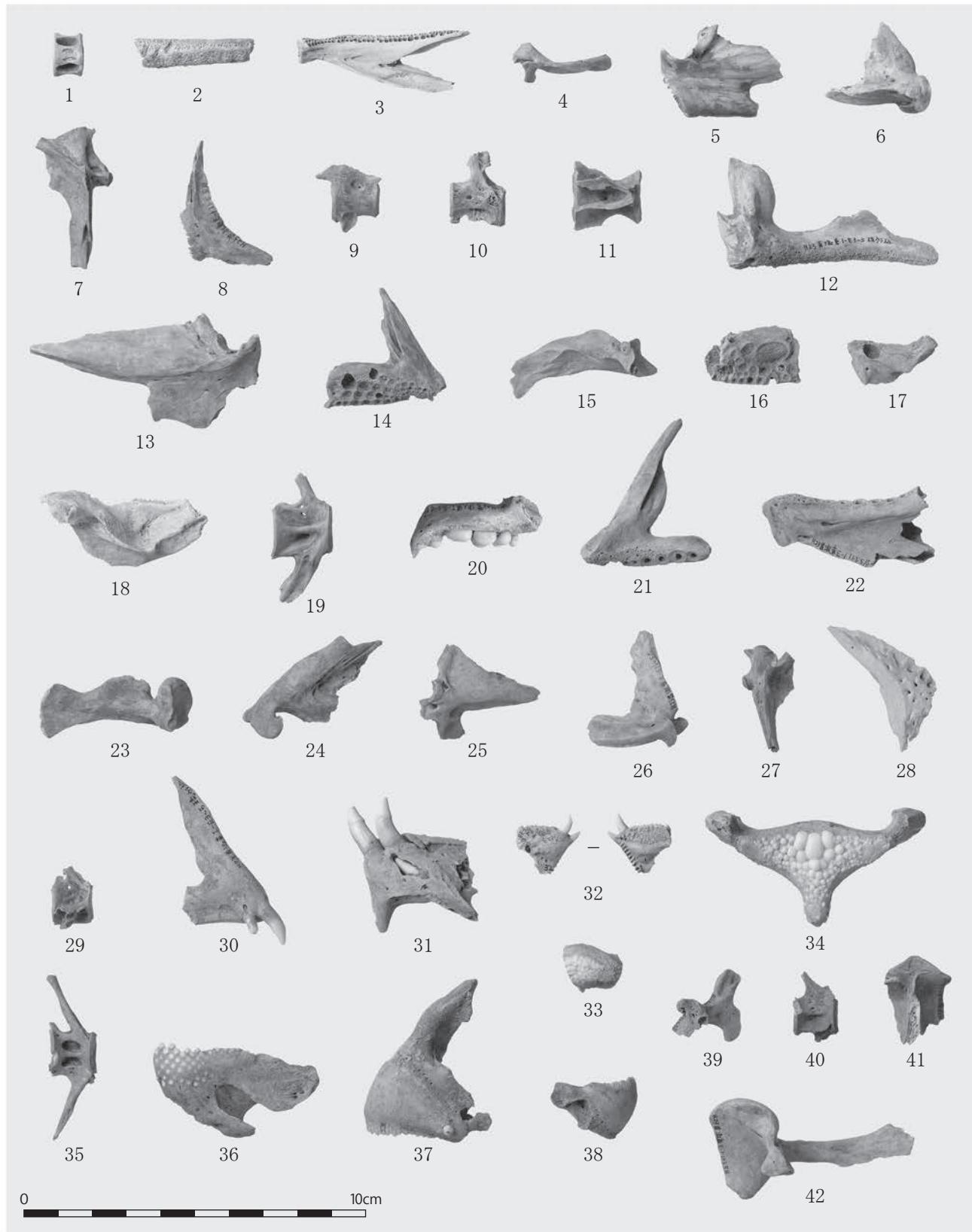


写真35 脊椎動物遺体 1

サメ類 1. 椎骨 ダツ科 2. 右前上顎骨 ハタ科 3. 右歯骨 4. 右主上顎骨 5. 右角骨 6. 右方骨 7. 左舌顎骨
8. 右前鰓蓋骨 ハタ科マハタ型 9. 腹椎骨 アジ科 10. 腹椎骨 11. 尾椎骨 フエダイ科 12. 右前上顎骨 13. 左角骨
クロダイ属 14. 左前上顎骨 15. 左主上顎骨 ヘダイ 16. 右前上顎骨 17. 右歯骨 18. 左主上顎骨 タイ科 19. 尾椎骨
ヨコシマクロダイ 20. 左前上顎骨 フエフキダイ属 (ハマフエフキ型) 21. 右前上顎骨 22. 右歯骨 23. 左主上顎骨 24. 左口蓋骨
25. 右角骨 26. 右方骨 27. 右舌顎骨 28. 右前鰓蓋骨 フエフキダイ科 29. 腹椎骨 コブダイ 30. 右前上顎骨 31. 左歯骨
ベラ科 32. 右歯骨 ベラ科 (シロクラベラ) 33. 左上咽頭骨 ベラ科 (A) 34. 下咽頭骨 ベラ科 35. 腹椎骨 イロブダイ属
36. 右歯骨 アオブダイ属 37. 左前上顎骨 38. 右歯骨 ブダイ科 39. 左主上顎骨 40. 尾椎骨 種不明 41. 鋤骨 42. 右主上顎骨

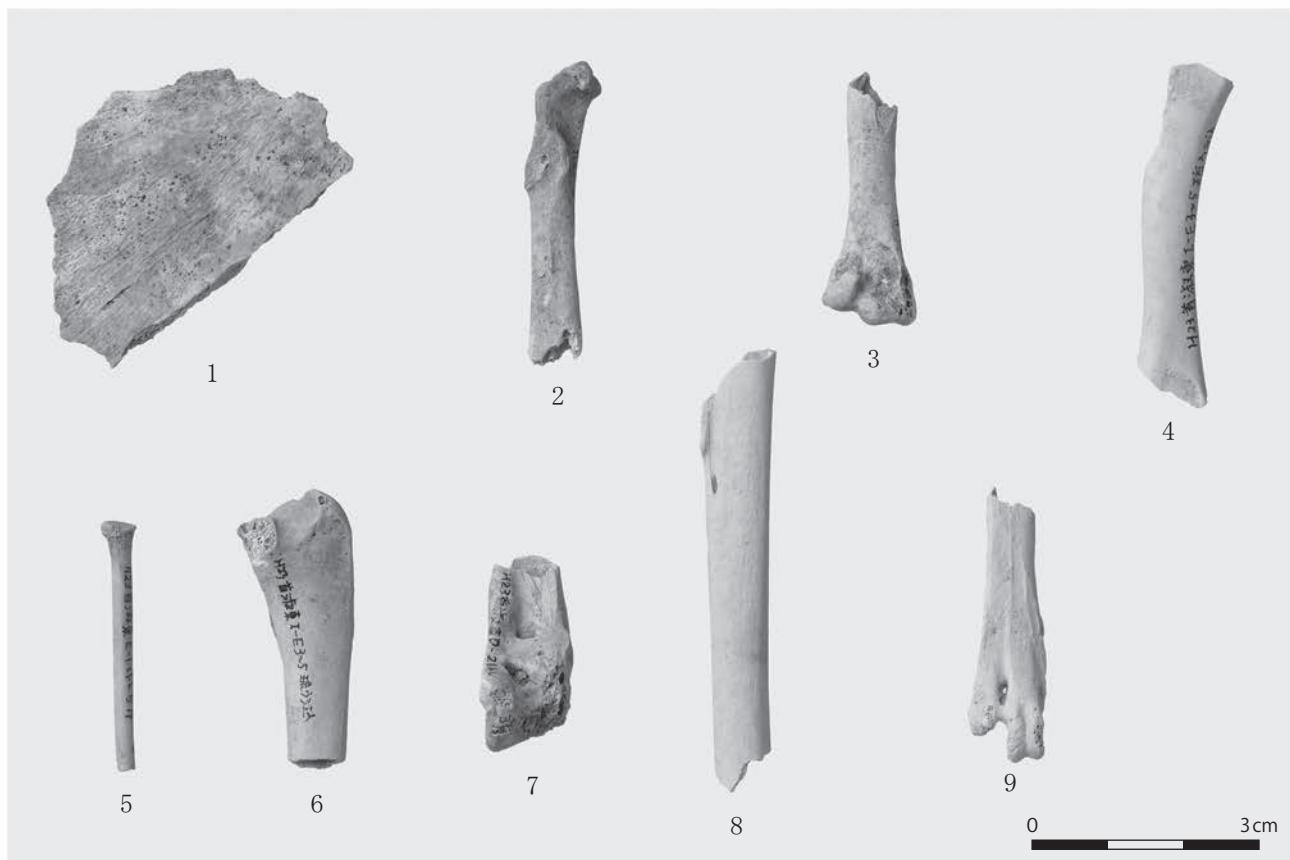


写真36 脊椎動物遺体2

アオウミガメ 1. 肋骨板 ニワトリ 2. 左鳥口骨 3. 右上腕骨 4. 右上腕骨
5. 右橈骨 6. 左大腿骨 7. 左脛骨
8. 左脛骨 9. 右中足骨 ウマ 10. 左上腕骨 11. 右中間手根骨 12. 左大腿骨
13. 左中心足根骨 14. 末節骨

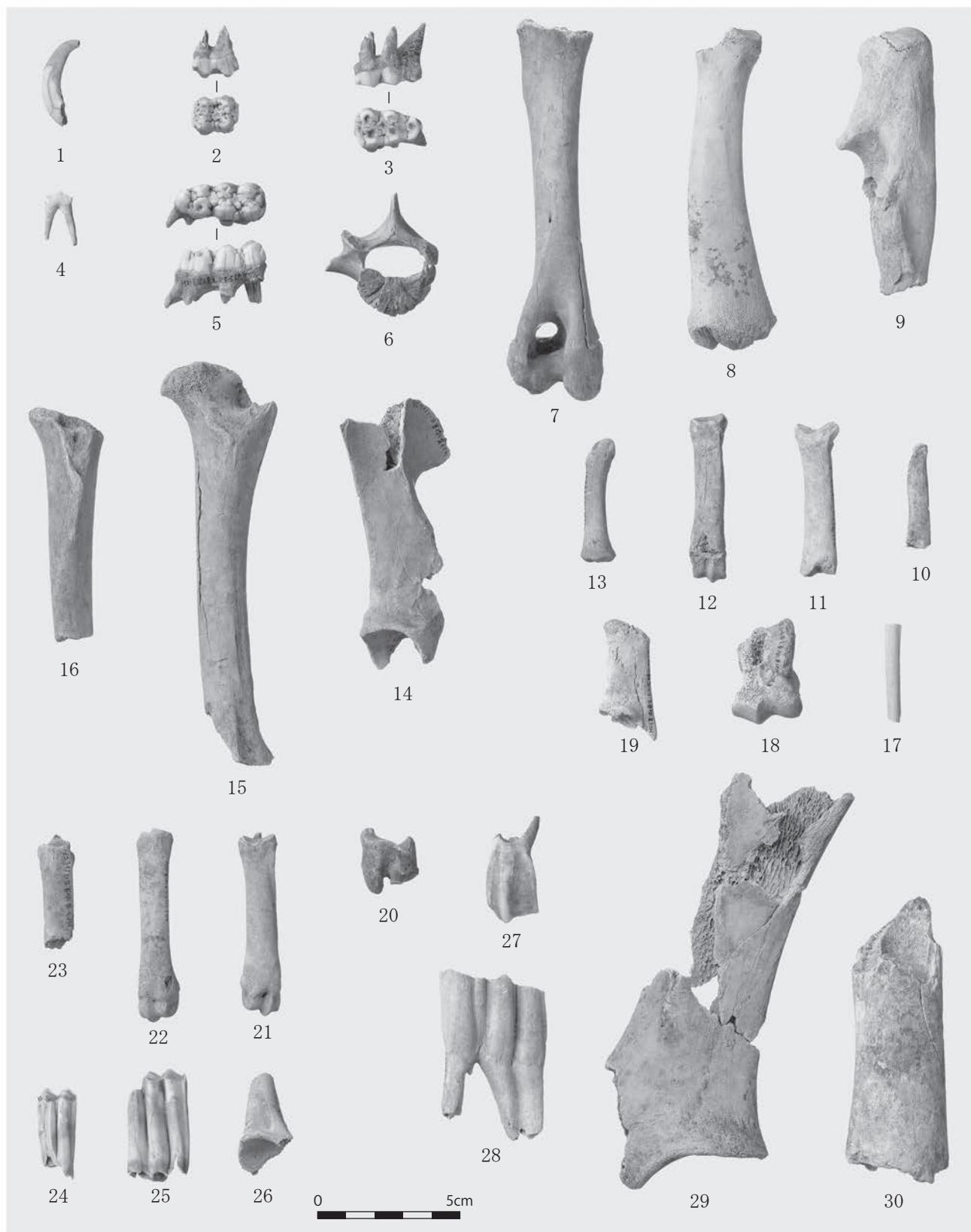


写真37 脊椎動物遺体3

イノシシ／ブタ 1. 左上顎 I¹ 2. 右上顎 M² 3. 左上顎 M³ 4. 左下顎 P₃ 5. 右下顎 M₃ 6. 腰椎 7. 左上腕骨 8. 右橈骨
9. 左尺骨 10. 左第2中手骨 11. 左第3中手骨 12. 右第4中手骨 13. 左第5中手骨 14. 左寛骨 15. 右大腿骨 16. 左脛骨
17. 右腓骨 18. 右距骨 19. 右踵骨 20. 右第4足根骨 21. 左第3中足骨 22. 左第4中足骨 23. 右第4中足骨
ヤギ 24. 左下顎 M₂ 25. 右下顎 M₃ 26. 右寛骨 ウシ 27. 左上顎 P² 28. 左上顎 M³ 29. 左肩甲骨 30. 左橈骨

第4章 総括

これまで、淑順門東地区の調査成果について遺構・遺物を個別に説明してきたわけであるが、時期ごとにその様相を整理することで、総括としたい。なお、第43図は本地区と近接する淑順門地区（県埋文2006a）、御内原北地区1（県埋文2010）、同2（県埋文2013b）の遺構平面図を合成したもので、参照していただきたい。

15世紀 層序としては北区5～9層が、遺物からは概ね15世紀代と考えている。土層の性格としては、炭化物層（5層）、造成土1（6層）、造成土2（7～9層）と分けられる。造成土1と2の間に焼土面1が形成されているが、周辺の石積などにその痕跡は見られない。なお、炭化物層は造成土1の上に粉末状の炭が北区南半に広がっているものと見られるが、先述の焼土面1との関係は不明である。

これらの土層に埋もれている遺構としては、内郭城壁（石積1～4）、これに接する石積6があるので、その時期は15世紀以前であることは確かである。その他、南区2～4層はその上面に焼土面2が見られることと土質の特徴より、北区造成土2（7～9層）と類していることから、これも当該期と考えた。ただ、前述したように、この土層は遺物がなく、上層は1層に覆われていることから、例えば沖縄戦時の被災面とする見解も可能性としてはあり得る。

また、内郭城壁の石積1に接する石積5・11、集石1なども1層に覆われていたため時期は確定できないが、クチャ面での構築であるため、当該期以前の可能性も考えられる。

さて、内郭城壁及びそれに接する遺構は15世紀以前であるのは確かであるが、厳密な意味では上限は確定できない。ただ、先述の土層はクチャ面に直接堆積しているため、それより古い層が全く見られず、遺物もないことから、基本的に15世紀代の構築と考えたい。しかしながら、石積5は内郭城壁に対して西に35°振っており、その関連性が不明であることから、古い遺構が残存したものとも考えられる。つまり、今回検出した内郭城壁とは全く異なる古い遺構が存在していた可能性も考え得る。

ちなみに、内郭城壁は南面を石積み1、北面を石積2とし、今回の調査区の南端において、長さ31m検出されており、東西に続くものである。この城壁幅は南区の根石において、5.2mを測る。南区の東側では裏込め部分も確認しており、その内部に北面する石積3・4が見られる。これらは、裏込めの一部分なのか、全く別の石積みなのかは今回の調査では確定できなかった。

15世紀代の遺物は、北区5～6層よりも、下限としては近世の層序である北区3'・3層から多く得られているが、中国産青磁・青花・褐釉陶器、タイ産陶器、甲冑小札・立物・金物、鉄釘などが見られる。さらなるつぼ（268）や鉄滓などの鍛冶関連遺物も見つかっており、この内郭城壁の北側つまり外郭に鍛冶関連の遺構が存在した可能性もある。なお、炭化物層である北区5層より獸魚骨・貝類が多く出土しているが、陶磁器自体はそれほど多くないので、どのような性格が考えられるのか今後の検討が必要である。

近世 層序としては北区2'・2層、3'・3・4層が出土遺物より当該期に相当する。この内3'・3・4層は、区画石積（石積7～10、石敷1、集石1）を構築するための造成土と考えられる。時期的には、確かに15世紀代の遺物も多いが、肥前系施釉陶器碗（254）や、灰色系瓦を中心とした明朝系瓦が多く出土していることから、近世でも17世紀代を下限とした構築を考えている。なお、2'・2層は区画石積構築後の堆積層である。

さて、この区画石積の性格であるが、先述したように南北方向に伸びる両面石積みで、その中央部は途切れたり幅2mの空間があり、その床面が石敷きとなっており小規模な門であったと考えられる。つまり、外郭北東部を区切る石積であったと考えられる。これについては、18世紀頃の首里古地図（第5図）でも門と石積の表

現が明確にあり、明治期以前の横内図（第3・4図）でも途切れがある石積みが表現されている。

近世の遺物の中でも、その初期である17世紀前後の遺物が目に留まる。16世紀後半～17世紀初頭の青花明III類（20～23）、概ね17世紀前半と考えられている隣接する御内原北地区でも多く出土している沖縄産無釉陶器A類（初期無釉陶器）などである。また、南九州産と考えられる土師皿も類例資料より概ね16～17世紀と考えられる。つまり、16～17世紀の遺物がこの地区ではかなり多い印象を受ける。ただ、通有出土する概ね18～19世紀と考えられる沖縄産施釉陶器・無釉陶器B類、本土産陶磁器も出土する。

本地区は内郭城壁が構築された15世紀以降の遺物が継続して見られ、その中でも16～17世紀代の遺物が比較的多いという特徴が見られる。層序より17世紀の構築と考えた区画石積みが、この地区的利用に大きく関わった遺構と思われる。

近代 当該期に構築した遺構はないが、先述の区画石積は昭和初期の阪谷図（第6図）には描かれていないため、明治期以前には廃絶した可能性が考えられる。一方、内郭城壁は存在していたものと思われるが、それに接する石積5・6・11は、1層が直接覆っていたため廃絶時期は不明だが、やはり阪谷図では表現されていない。

この時期の遺物としては、赤間硯（193）、陶製ボタン（220）、首里第一尋常高等小学校章（210）が見られる。また、沖縄戦に伴う遺物としては、砲弾の弾帶片（189・190）や、戦後の可能性もあるが20ゲージの散弾銃の薬莢（188）がある。

現代 旧琉球大学の石垣が相当する。内郭城壁を利用して造られた東西方向の石垣で、位置的には旧農学校舎に当たるので、その基壇と考えられる。

今回の淑順門東地区は、これまであまり調査がなされていない外郭北東部の報告である。17世紀代に区画石積が構築されたことや、るっぽなどの鍛冶関連遺物が得られたことなどにより、この場所の空間利用の一端が窺えることとなり、今後の調査報告につなげていく必要がある。

参考・引用文献

- 新垣力 2003 「沖縄出土の清朝陶磁」『紀要沖縄埋文研究』第1号 沖縄県埋蔵文化財センター
2005 「沖縄における14世紀～16世紀の中国白磁の再整理」『紀要沖縄埋文研究』第3号 沖縄県埋蔵文化財センター
2011 「無釉陶器の成立と展開」『琉球陶器の成立と展開』沖縄県立博物館・美術館、那覇市立壺屋焼物博物館
- 池田榮史 2006 「沖縄出土の備前焼」『備前焼・海の道・夢フォーラム2006～備前焼の歴史と未来像をもとめて～』備前市歴史民俗資料館紀要8 p.5-18 備前市教育委員会・備前市歴史民俗資料館
- 石井龍太 2011 「琉球諸島出土キセルの基礎的研究～琉球喫煙文化の研究～」『東京大学考古学研究室紀要』第25号
- 岩崎仁志 2005 「近世赤間硯の銘について」『山口考古』第25号 山口考古学会
- 上原靜 1994 「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』第14号
1996 「首里城跡の高麗系瓦と大和系瓦－西のアザナ地区の資料一」『紀要』第12号
2000 「沖縄諸島出土の古瓦と造瓦技術の伝播」『アジアの中の沖縄』
- 2004 「考古学からみた沖縄諸島の遊戯史」『グスク文化を考える』今帰仁村教育委員会・新人物往来社
- 2008 「沖縄諸島における琉球瓦の再編都市」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第11巻第2号
- 2009 「首里城西のアザナ跡鍛冶・鋳造工房」『紀要沖縄埋文研究』第6号 沖縄県立埋蔵文化財センター



第43図 淑順門東地区周辺遺構平面合成図（淑順門地区・県埋文2006 b、御内原北地区・県埋文2010・2013 b）

- 2011 「琉球の壇と煉瓦」『南島考古』第30号
- 2013 『琉球古瓦の研究』
- 浦添市教育委員会 1985 『浦添城跡発掘調査報告書』
- 2005 『浦添ようどれⅡ 瓦溜り遺構編－史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査報告－』
- 2007 『浦添ようどれⅢ 金属工房跡編－史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査報告－』
- 江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
- 大川 清 1962 「琉球古瓦調査抄報」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会（沖縄県教育委員会 1978 『沖縄文化財調報告』那覇出版社に再録）
- 大橋康二 2004 『世界をリードした磁器窯・肥前窯』シリーズ遺跡を学ぶ005 新泉社
- 大堀皓平 2013 「沖縄の遺跡から出土する石製硯について－沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵資料より－」『南島考古』第32号 沖縄考古学会
- 沖縄県教育委員会 1988 『首里城跡 歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』沖縄県文化財調査報告書第88集
- 1995 『首里城跡 南殿・北殿跡の遺構調査報告』沖縄県文化財調査報告書第120集
- 1998 『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（I）』沖縄県文化財調査報告書第132集
- 2010 『沖縄県史 各論編3 古琉球』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a 『天界寺跡（I）－首里杜館地下駐車場入口親切工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書（以下、略）第2集
- 2001b 『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書』第3集
- 2002a 『天界寺跡（II）－首里城公園管理新棟建設工事に伴う緊急発掘調査－』第8集
- 2002b 『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』第10集
- 2003a 『綾門大道跡－首里城守礼門周辺地区発掘調査報告書－』第13集
- 2003b 『首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－』第14集
- 2003c 『御茶屋御殿跡－遺構確認調査報告－』第17集
- 2004 『首里城跡－城郭南側下地区発掘調査報告書－』第19集
- 2005a 『首里城跡－書院・鎖之間地区発掘調査報告書－』第28集
- 2005b 『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』第29集
- 2006a 『首里城跡－淑順門地区発掘調査報告書－』第33集
- 2006b 『御茶屋御殿跡－平成15・16・17年度遺構確認調査報告書－』第33集
- 2007 『渡地村跡－臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告－』第46集
- 2008 『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（III）－』第48集
- 2010 『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（I）－』沖第54集
- 2011 『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（2）－』第58集
- 2012 『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（IV）－』第62集
- 2013a 『首里城跡－淑順門西地区・奉神門埋甕地区発掘調査報告書－』第68集
- 2013b 『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（2）－』第69集
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 亀井明徳ほか 2002 『明代前半期白瓷研究』亞州古陶瓷学会
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』
- 古泉弘 1983 『江戸を掘る－近世都市考古学への招待－』柏書房

- 柴田圭子 2011 「今帰仁城跡出土明代青化瓷の研究（1）」『今帰仁城跡発掘調査報告書V』今帰仁村文化財調査報告書第29集 今帰仁村教育委員会
- 首里城研究グループ 1997 『首里城入門 その建築と歴史』ひるぎ社
- 新宿区内藤町遺跡調査会 1992 『内藤町遺跡 一放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－第II分冊〈遺物編〉』東京都建設局
- 瀬戸哲也 2005 「首里城跡木曳門地区出土の土師器と思われる土器皿」『紀要沖縄埋文研究』第3号 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 瀬戸哲也 2010 「沖縄における12～16世紀の貿易陶磁－中国産陶磁を中心とした様相と組成－」『貿易陶磁研究』第30号 日本貿易陶磁研究会
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007 「沖縄における貿易 陶磁研究-14～16世紀を中心に」『紀要沖縄埋文紀要』第5号 沖縄県埋蔵文化財センター
- 田中克子 2003 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その3）宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第11号
- 陳建中 1999 「徳化民窯青花」
- 当真嗣一・上原靜 1987 「首里城正殿跡の調査」『紀要』第4号 沖縄県教育庁文化課
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）1997年度』東京大学構内遺跡調査研究年報2冊
- 永井久美男 編 1994 『中世の出土錢』兵庫埋蔵錢調査会
- 那覇市教育委員会 1983 『崇元寺跡－範囲確認発掘調査概報－』那覇市文化財調査報告書第9集
- 1995 『牧志御願東方遺跡－モノレール関連街路事業（崇元寺姫百合線）に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市文化財調査報告書（以下、略）第28集
- 1997 『敷名シーマ御嶽遺跡－真地配水池建設事業に伴う緊急発掘調査報告－』第34集
- 1999a 『ハナグスク－波上宮御復興造営事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査－』第41集
- 1999b 『天界寺跡－首里城線街路改良工事事業に伴う緊急発掘調査報告－』第42集
- 2000a 『天界寺跡－首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告－』第43集
- 2000b 『ナーチューモ古墓群 那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書』第44集
- 2001 『敷名原遺跡－敷名上間線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告－』第49集
- 2002 『那覇市教育史 通史編』
- 2005 『崎山御嶽遺跡－首里崎山公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』第67集
- 2012 『渡地村跡－臨港道路那覇1号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告－』第91集
- 新島奈津子 2005 「古琉球における那覇港湾機能－国の港としての那覇港－」『専修史学』第39号 専修大学
- 乗岡 実 2005 「備前」「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会編『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』資料集 p 121-142
- 福建博物館 1997 「漳州窯－福建漳州地区明清窯址発掘調査報告之一」福建人民社
- 文化庁文化財部記念物課 2010 『発掘調査のてびき』
- 宮城弘樹 2008 「琉球出土錢貨の研究」『出土錢貨』第28号
- 宮城弘樹・具志堅亮 2007 「中世並行期における南西諸島の在地土器の様相」『廣友会誌』第3号
- 向井瓦 2003 「タイ黒褐釉四耳壺の分類と年代」『貿易陶磁研究』第23号 日本貿易陶磁研究会
- 2012 「タイ陶磁器の編年研究」『金沢大学 文化資源学研究』第5号
- 森毅 1995 「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通－大坂の資料を中心に－」『ヒストリア』第149号
- 2005 「中世後期輸入陶磁器の分類と変化」『中世窯業の諸様～生産技術の展開と編年～』資料集第3分冊
- 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会



図版1 首里城跡周辺空中写真(国土地理院 2010年撮影)



1. 調査地より南側



2. 調査地より北側



3. 調査地より西側

図版2 調査地周辺・遠景



1. 北より



2. 東より

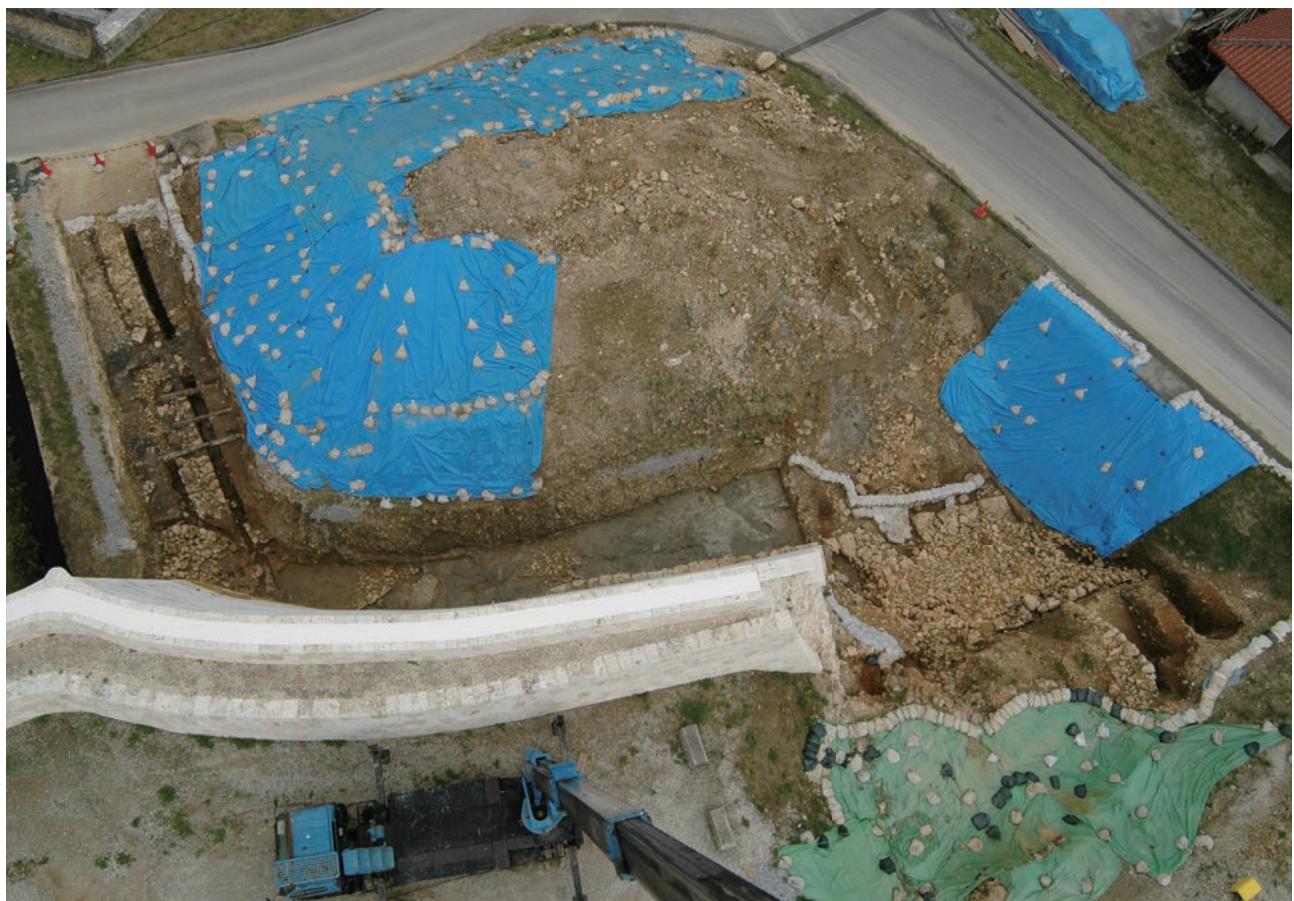


3. 旧琉球大学石垣
断ち割り状況

図版3 調査前状況



図版4 調査区全景(1)



1. 南より



2. 北より

図版5 調査区全景(2)



1. 内郭城壁(石積1・2)全景(西より)



2. 内郭城壁(石積1・2)全景(北より)

図版6 遺構(1)



1. 内郭城壁(石積1・2)
裏込め内(東より)



2. 焼土面2(東より)



3. G-E3南北アゼ断面

図版7 遺構(2)



1. 区画石積(石積7～10)全景(東より)



2. 石積7(奥)、8(手前)



3. 石積9(奥)、10(手前)



4. 区画石積北側



5. 石積7・8(奥)、石積9・10(手前)

図版8 遺構(3)



1. トレンチ 1 北側堆積状況(西より)



2. トレンチ 1 南側 E 1 付近堆積状況(西より)



3. トレンチ 1 南側 F 1 付近東壁



4. トレンチ 1 焼土面 1(左)・クチャ層(右)

図版9 遺構(4)



1. 北区全景(南より)



2. 石積5(東より)



3. 石積5(北より)



4. 石積6(西より)

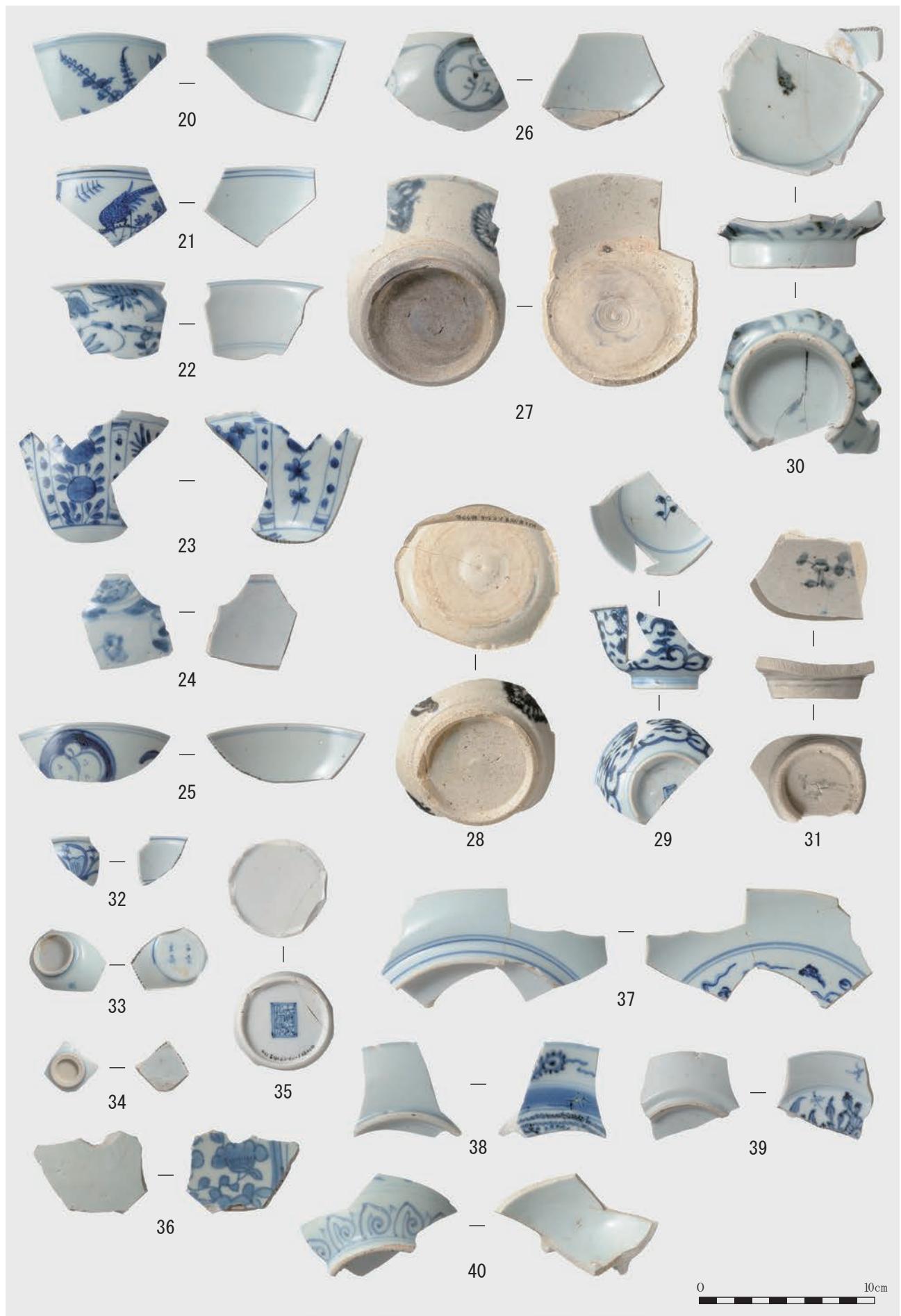


5. 集石1(北より)

図版10 遺構(5)



図版 11 南区 1層出土遺物(1)



図版 12 南区 1層出土遺物(2) ※36は地区不明 1層



図版 13 南区 1層出土遺物(3)



図版14 南区 1層出土遺物(4)



図版 15 南区 1層出土遺物(5)



図版 16 南区 1層出土遺物(6)



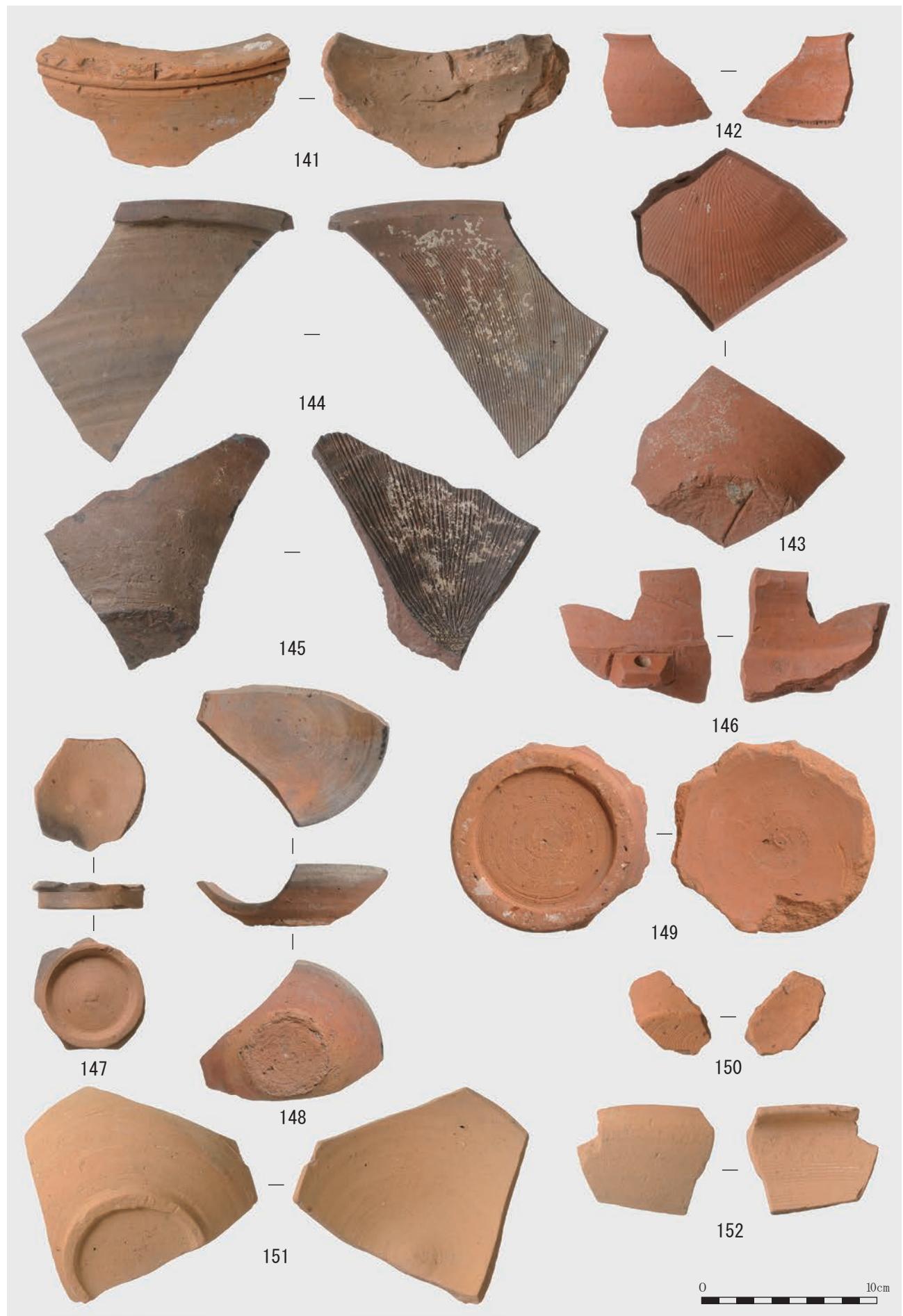
図版 17 南区 1層出土遺物(7)



図版 18 南区 1層出土遺物(8)



図版 19 南区 1層出土遺物(9)



図版 20 南区 1層出土遺物(10)



図版 21 南区 1層出土遺物(11)



図版 22 南区 1層出土遺物(12)



図版23 北区 1層出土遺物(1)



図版 24 北区 1層(2)・2層出土遺物



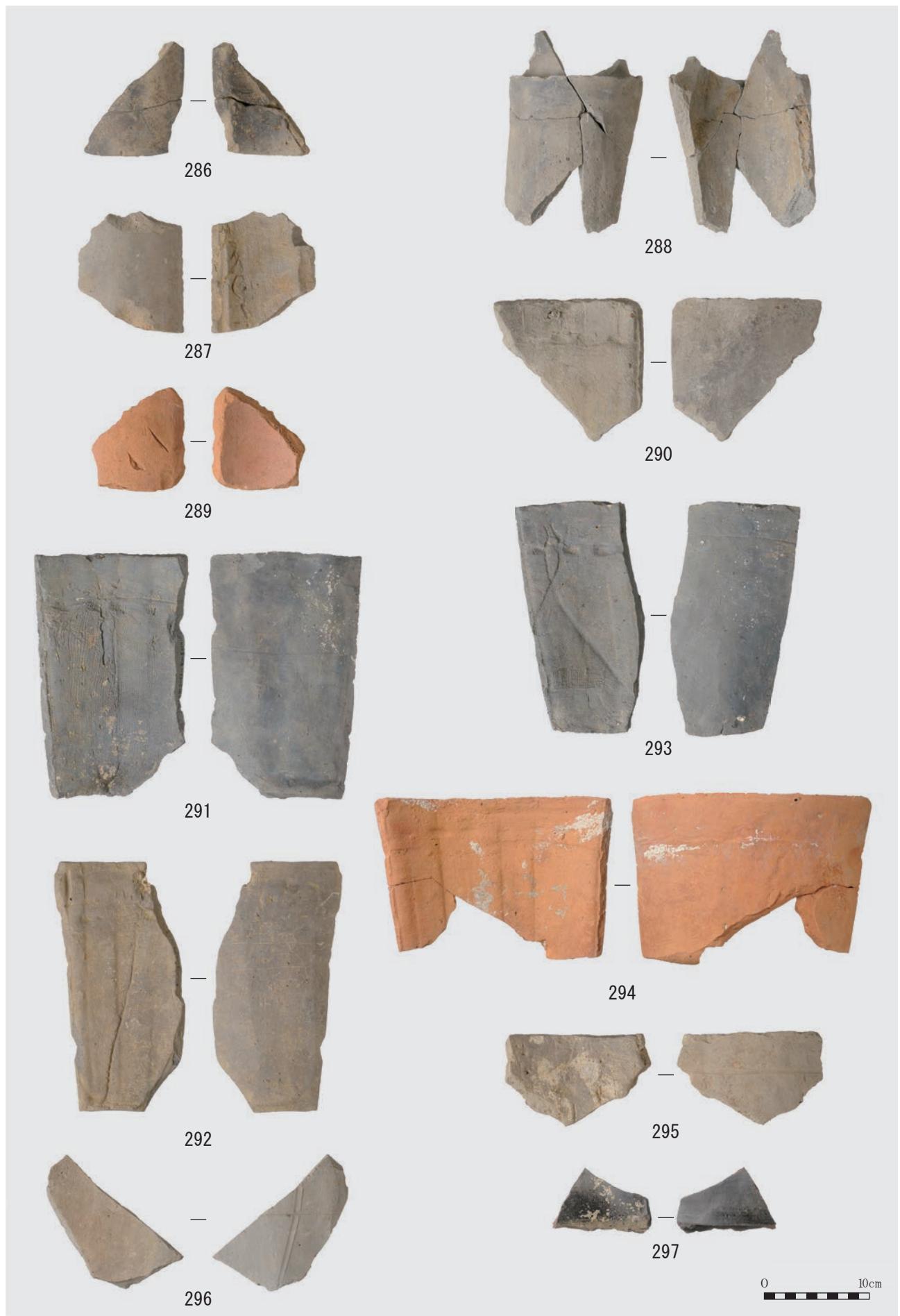
図版 25 北区 3層出土遺物(1)



図版 26 北区 3層(2)・4~6層出土遺物



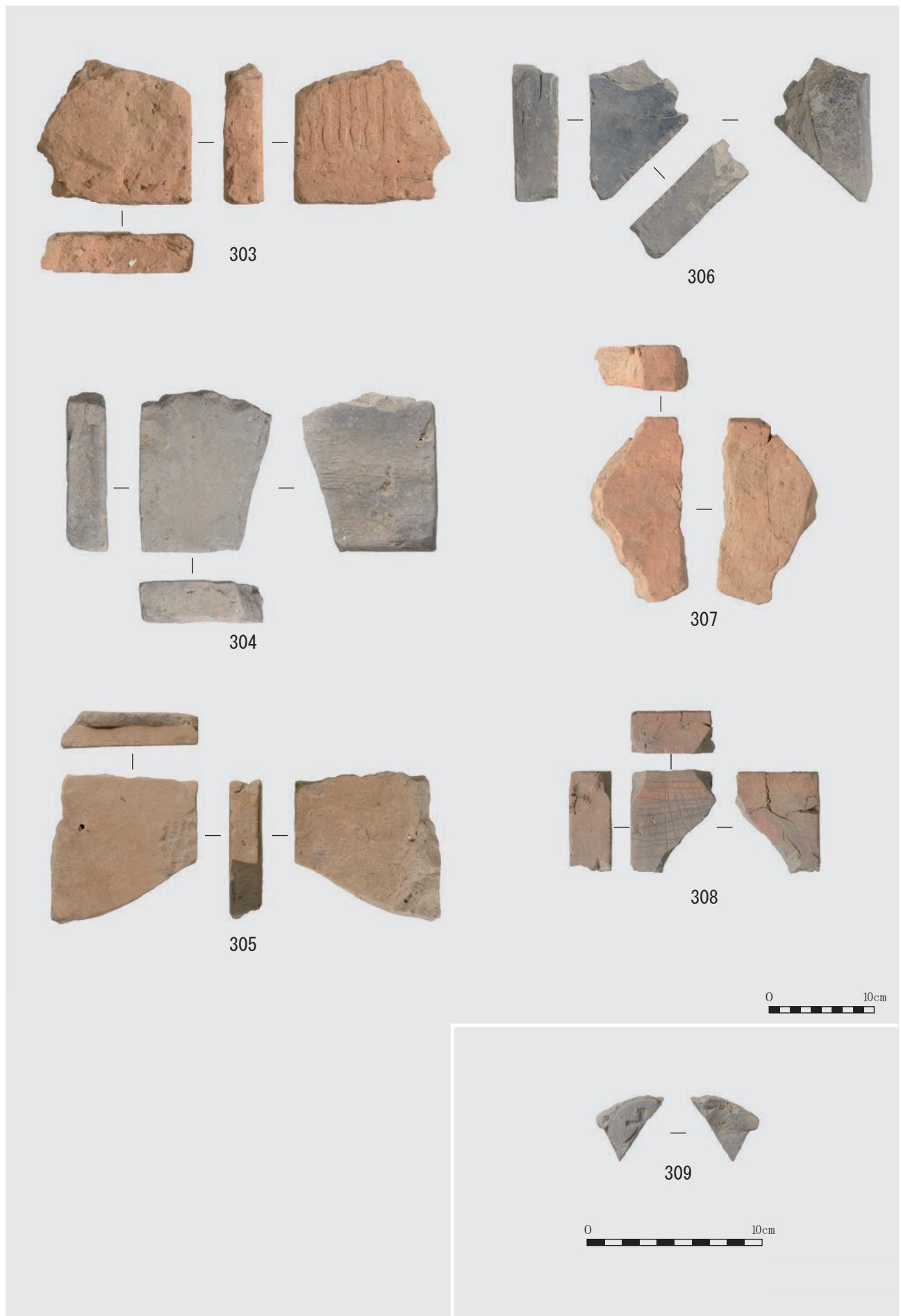
図版 27 瓦(1)



図版 28 瓦(2)



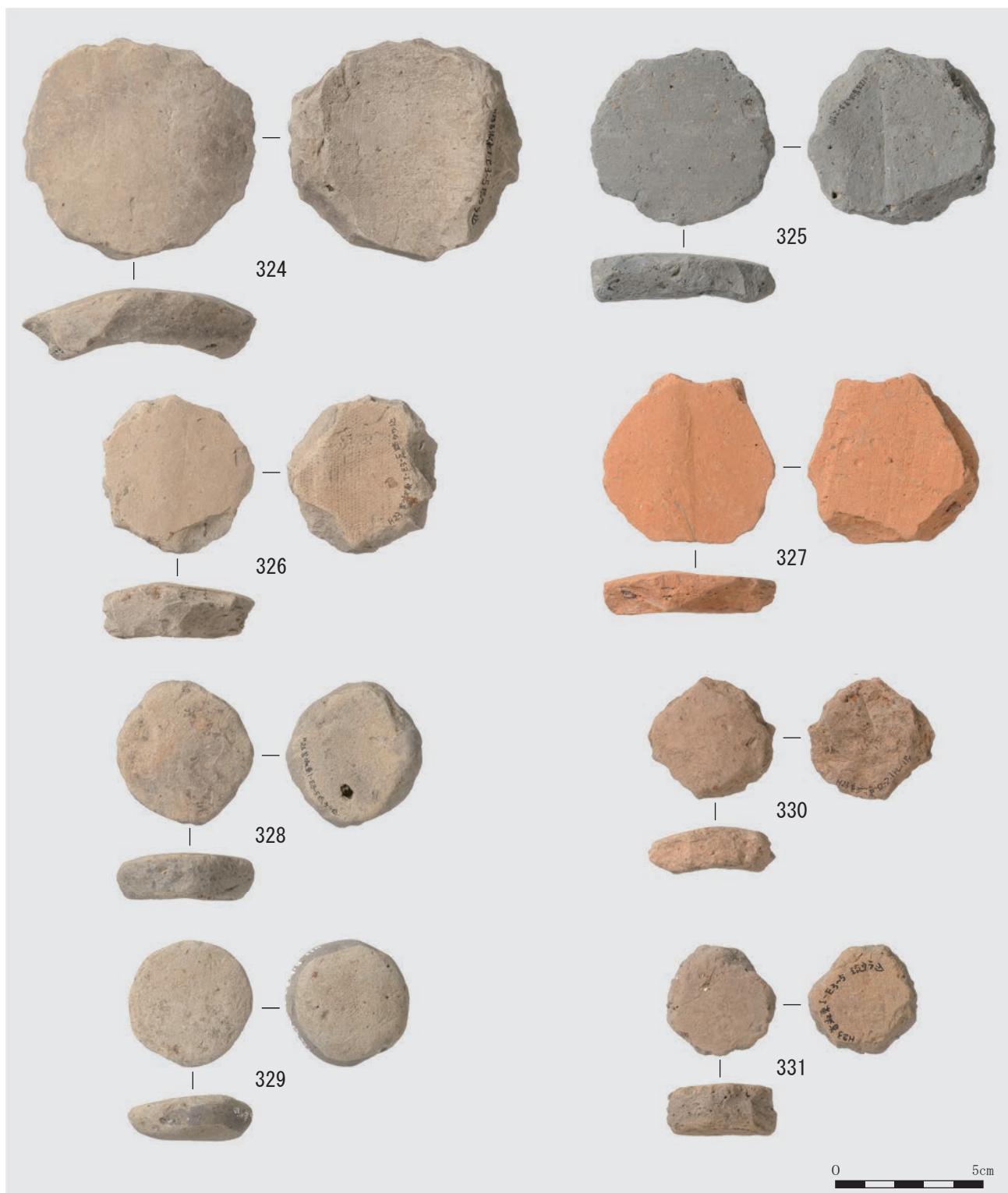
図版 29 塚(1)



図版 30 塚(2)



図版 31 円盤状製品(1)



図版32 円盤状製品（2）・ガラス玉

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しゅりじょうあと							
書 名	首里城跡							
副 書 名	淑順門東地区発掘調査報告書							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第72集							
編著者名	瀬戸哲也・大堀皓平・宮城淳一・新垣有一郎							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町上原193-7 TEL 098-835-8752 FAX 098-835-8754							
発行年月日	2014年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
首里城跡 淑順門東地区	沖縄県 那覇市 首里当蔵町 3丁目1番	47201		26° 13' 2"	127° 43' 11"	20111031 ～ 20120327	188 m ²	国営沖縄記念公園(首里城地区)整備に伴う 遺構確認調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
首里城跡 淑順門東地区	城跡	グスク時代 ～近代	石積12、石敷1、 集石2、焼土面2、 造成土	中国産・ベトナム産・タイ産・ ミャンマー産・韓半島産・本土産陶 磁器、土器、沖縄産陶器、金属製 品、鍛冶関連遺物(るっぽ・鉄滓)、 銭貨、骨製品、石製品、円盤状製 品、ガラス玉、瓦(明朝系・大和系・ 高麗系)、埴				
要 約	<p>淑順門東地区では、戦前まで存在していた内郭城壁の根石及び裏込めを確認できた。また、外郭北東部の東西を区画する石積も確認でき、近世及び明治期以前の古図に描かれているものと考えた。その他、15世紀及び近世の造成土や焼土面を確認し、この地区の造成及び利用の開始時期の一端が抑えられた。</p> <p>出土遺物としては、類例が少ない九州南部産と考えられる土師皿や、るっぽ・鉄滓などの鍛冶関連遺物が注目される。</p>							

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第72集

首里城跡

— 淑順門東地区発掘調査報告書 —

発行日 平成26(2014)年3月31日

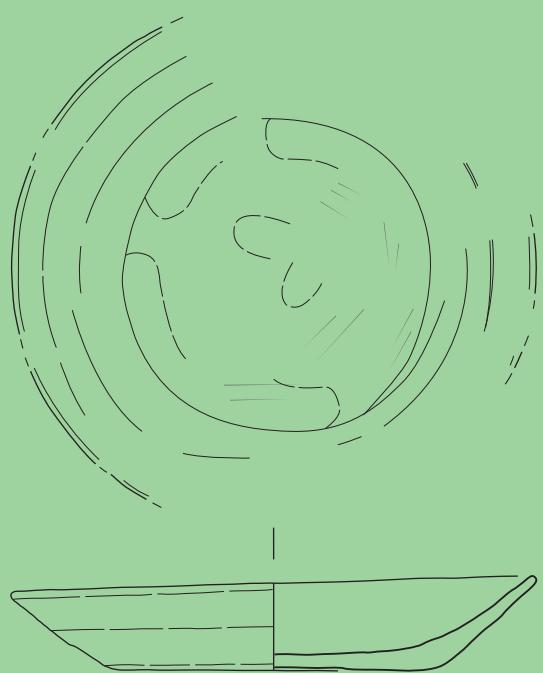
発行・編集 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

TEL:098-835-8751・8752

印 刷 有限会社 金城印刷

〒901-0306 糸満市西崎町5-9-16



沖縄県立埋蔵文化財センター